ISSN 2423-9151

明治大学平和教育登戸研究所資料館　館報

第８号　2022年度

目次

特別寄稿
日中戦争期における日本陸軍の謀略―影佐禎昭の対中思想を中心に―
……齋藤　夏歩　1

第11回企画展「極秘機関『陸軍登戸研究所』はこうして明らかになった―登戸研究所掘り起こし運動30年のあゆみ―」記録
講演会②「資料館開館にむけての明治大学の取り組み」
……山田　朗　25

第12回企画展「参謀本部と登戸研究所による対中国謀略―アジア太平洋戦争開戦80年―」記録
展示パネル解説……椎名　真帆　53
講演会「参謀本部と登戸研究所による対中国謀略」……山田　朗　89

イベントの記録
オンライン講演会「帝銀事件と日本の秘密戦―捜査過程で判明した日本軍の実態―」
講演１「帝銀事件と日本の秘密戦―捜査過程で判明した日本軍の実態―」
……山田　朗　117
講演２「帝銀事件 再審請求の進捗状況についての報告」
……渡邉　良平　146

2021年度年次報告……161

明治大学平和教育登戸研究所資料館

ISSN 2423-9151

The Defunct Imperial Japanese Army Noborito Laboratory Museum for Education in Peace, Meiji University
Museum Review

No.8 2022

Contents

Special Thesis
Conspiracy of the Japanese Army in the Second Sino-Japanese War Period:
Focusing on Sadaaki Kagesa's Thoughts on China ……SAITOH Natsuho 1

The 11th Exhibition 'How the Imperial Japanese Army's Top Secret Noborito Laboratory was Uncovered: A 30-Year Research Project by Local Citizens, High School Students, and Former Employees'
Lecture
'Meiji University's Approach to the Opening of the Museum'
…… YAMADA Akira 25

The 12th Exhibition 'The General Staff Headquarters and Noborito Laboratory's Conspiracy against China: 80 Years since the Outbreak of the Asia-Pacific War'
Exhibition …… SHIINA Maho 53
Lecture
'The General Staff Headquarters and Noborito Laboratory's Conspiracy against China'
…… YAMADA Akira 89

Event
On-line Lecture '*Teigin Jiken* and Japan's Clandestine Warfare:
The Facts of the Defunct Imperial Japanese Army Revealed during the Investigation'
Lecture1 '*Teigin Jiken* and Japan's Clandestine Warfare:
The Facts of the Defunct Imperial Japanese Army Revealed during the Investigation'
…… YAMADA Akira 117
Lecture2 'Report on the progress of the petition for retrial' …… WATANABE Ryohei 146

FY2021 Annual Report …… 161

The Defunct Imperial Japanese Army Noborito Laboratory Museum for Education in Peace, Meiji University

明治大学平和教育登戸研究所資料館　館報
第８号　2022 年度
1 － 23 頁，2022 年 9 月

特別寄稿

日中戦争期における日本陸軍の謀略　―影佐禎昭の対中思想を中心に―

齋藤　夏歩
明治大学文学部史学地理学科日本史専攻４年[1]

序章

第１節　課題設定の理由

筆者は昭和期の日本陸軍の情報活動について興味関心を抱き，研究を行ってきた。研究を進めるにつれ，いわゆる情報参謀と呼ばれるような参謀本部第２部，通称情報部で情報活動に従事した軍人による回想録に触れた。具体的な例としては，杉田一次『情報なき戦争指導：大本営情報参謀の回想』（原書房, 1987 年）や堀栄三『大本営参謀の情報戦記:情報なき国家の悲劇』（文藝春秋，1989 年）である。杉田や堀は一様に，陸軍内及び参謀本部内で情報部の立場が作戦部と比較した場合に低かったことや情報部の取得した情報が作戦部等に適切に使用されなかったこと，情報関係のプロフェッショナルを育成するために適当な人員配置がなされなかったことなどを挙げ，情報部員の不遇を綴っている。杉田や堀の主張は，1941 年 12 月以降のアジア太平洋戦争期についての記述が主となっている[(1)]。

一方，アジア太平洋戦争以前の満州事変や日中戦争期にはやや風向きが変わる。防諜･諜報･謀略・宣伝に大別される情報活動の中でも，特に謀略がこの時期重用された。関東軍が主導した張作霖爆殺事件や満州事変は著名な例ではあるが，そのほかにも汪兆銘を重慶政府から引き出した汪兆銘工作や重慶政府との和平交渉の１つである桐工作なども陸軍が行った謀略である。これらの謀略活動では, 陸軍の中でも「支那通」と呼ばれた将校の活動が目立つ。「支那通」とは, 当時陸軍内で中国についての知見を持っていたとされる軍人である。彼らは多くの場合, 参謀本部支那課への所属経験や中国での駐在武官経験を有していた。

以上のような満州事変・日中戦争とアジア太平洋戦争における情報活動および参謀本部情報部の違いが，何に基因していたのか。そして，その中で陸軍が力を入れていたと考えられる謀略はどのような思想の下に実施されたのか。本論文では，この点について言及していく。

そのために本論文では,「支那通」と呼ばれた陸軍将校の１人である影佐禎昭に着目する。影佐の詳細については第１章第３節に譲るが，影佐は参謀本部第８課，通称謀略課（以下謀略

1　執筆当時。

課という呼称に統一する）の初代課長であり，汪兆銘工作に従事した人物である。以上の理由から日中戦争と謀略に関する検証で取り上げる人物としてふさわしいと判断した。

最後に「支那通」という言葉の使用についてだが，現代における支那という文言の使用は適切であるとは言い難い。しかし，本論文では同時代の価値観や当時使用された「支那通」という言葉のニュアンスを優先させるために使用している。ご了承いただきたい。

第２節　研究史の整理

情報活動に関しては，その名の通り陸軍内でも情報が秘匿されたことや終戦時に焼却された資料が多いこと，また当事者も自らが関わった事物について沈黙する傾向があることから，軍事史の中でも研究が活発であるとは言い難い分野である。

その中でも当事者によるものとしては，中野校友会『陸軍中野学校』（原書房，1978 年）が大規模なものとして著名である。また，謀略工作当事者の回想録としては，影佐禎昭「曽走路我記」（人間・影佐禎昭世話人会編『人間影佐禎昭』所収，人間・影佐禎昭世話人会，1980 年）や今井武夫著，高橋久志・今井貞夫監修『日中和平工作：回想と証言 1937-1947』（みすず書房，2009 年），山本憲蔵『陸軍贋幣作戦：計画・実行者が明かす日中戦秘話』（徳間書店，1984 年），伴繁雄『陸軍登戸研究所の真実』（芙蓉書房出版，2001 年）が主なものである。これらの回想録は影佐の「曽走路我記」を除いて戦後に書かれたものであるために，研究上留意する必要があると言える。

研究者による陸軍の情報組織全般に関する研究の先駆けは，有賀傳による『日本陸海軍の情報機構とその活動』（近代文芸社，1995 年）であろう。その後の全般的な情報活動研究は，日本軍の情報活動全般を対象とした小谷賢の『日本軍のインテリジェンス：なぜ情報が活かされないのか』（講談社，2007 年）が存在する。本論文第１章第１節も，小谷の研究に一部依拠している。ほかには特定の情報活動関係機関に関する研究もある。陸軍中野学校に関しては，山本武利『陸軍中野学校：「秘密工作員」養成機関の実像』（筑摩書房，2017 年）や斎藤充功『陸軍中野学校全史』（論創社，2021 年）の２大研究が挙げられる。中野学校と同様に情報活動に関与した陸軍登戸研究所に関しても，海野福寿ほか編『陸軍登戸研究所：隠蔽された謀略秘密兵器開発』（青木書店，2003 年）や松野誠也「日本陸軍の情報活動器材：防諜器材・諜報器材・謀略器材・宣伝器材の実体」（『明治大学平和教育登戸研究所資料館館報』第６巻，明治大学平和教育登戸研究所資料館，2020 年９月）によって研究が進められている。上記の研究における主体はそれぞれの機関が“どのように情報活動に貢献したか，貢献できなかったか”であり，具体的な活動内容には深く触れられない場合が多い。また，中野学校研究においては，陸軍の主たる仮想敵国がソ連であったことやアジア太平洋戦争末期に中野学校がゲリラ戦要員を養成する必要があったことから，対ソや南方における対英工作（インド工作等）に偏りがちである

ことは指摘しておきたい。

中国大陸における情報活動研究は全般的なものとしての，小谷賢「日中戦争における日本軍のインテリジェンス」（軍事史学会編『日中戦争再論』，錦正社，2008 年）。個別具体的な事例に関しては, 劉傑『日中戦争下の外交』（吉川弘文館, 1995 年）や戸部良一『戦争のなかの日本』（千倉書房，2020 年），島田俊彦の桐工作と松岡・銭永銘工作に関する論文等がある。しかし，各工作を統括した研究や本論文で取り上げる謀略全般についての研究は筆者の把握している限り存在しない。

前節でも触れた「支那通」に着目した研究は, 北岡伸一『官僚制としての日本陸軍』（筑摩書房，2012 年）や佐々木到一に焦点を当てた戸部良一『日本陸軍と中国：「支那通」にみる夢と蹉跌』（筑摩書房，2016 年）が詳しい。しかし，これらの「支那通」研究は日中戦争開戦以前の時代を対象とした研究であり，日中戦争以降の「支那通」研究は多くない。また，本論文で焦点を当てる「支那通」の１人である影佐禎昭を対象とした研究も確認できていない。

以上のように，先行研究の中で空白となっている“日中戦争期の「支那通」が行った謀略”を本論文では主題とすることで，研究史の不足を微々たるものでも補うことを目的としたい。

第３節　問題の限定

本論文では主な対象とする時期を，1937 年７月の日中戦争開戦から 1940 年までとする。この期間設定は，日中戦争終結のために行われた和平工作である汪兆銘工作と桐工作が，それぞれ政権樹立と工作打ち切りとして結果が出た時期が共に 1940 年であるからである。

第１節でも触れたが，本論文の中心人物は影佐禎昭である。影佐は情報活動に関わった軍人としては珍しく，終戦前の 1943 年に任地ラバウルにて回想録「曽走路我記」を残している [(2)]。本論文ではこの回想録を中心に汪兆銘工作を分析することで，影佐の謀略に対する思想を紐解いていく。同時に，影佐が上海に設立した梅機関でともに活動した犬養健 [(3)]，塚本誠 [(4)] らの回想録を用いることで,「曽走路我記」には記されなかった影佐の汪工作に対する期待や諦念を明らかにする。

第１章では影佐の謀略に対する思想だけでなく，陸軍首脳部の謀略への姿勢も分析する。この両者の思想の違いが，第２章で取り上げる汪兆銘工作と桐工作の違いに反映されたのではないだろうか。日中戦争の終わりが見えない中で，両者が何を考え何を優先したのかを明らかにしたい。

〔注〕

（1）杉田は日中戦争時からこれらの主張を行っている。しかし, 杉田の専門が対アメリカ情報活動であったことから,

その主張は日中戦争期からより対英米情報及びこの担当者を増やすべきであったという趣旨に終始する。これはアジア太平洋戦争を踏まえての主張であると筆者は認識する。それゆえ本文の表記に至った。

（２）影佐禎昭「曽走路我記」（人間・影佐禎昭世話人会編『人間影佐禎昭』所収，人間・影佐禎昭世話人会，1980 年）２頁。

（３）犬養健『揚子江は今も流れている』（文藝春秋新社，1960 年）

（４）塚本誠『ある情報将校の記録』（芙蓉書房，1979 年）

第１章　日本陸軍と対中国謀略

本章では中国に対する情報活動の傾向を整理し，謀略に傾注するに至った思想や背景について検討したい。この検討において，特に中国での謀略活動に携わった影佐禎昭を中心とする。「支那通」の１人であった影佐禎昭は，対中国謀略についてどう考えていたのか。また，陸軍上層部全体としては謀略をどう捉えていたのだろうか。

第１節　陸軍の対中国情報活動

対中国戦略では公文書の段階で〈謀略〉という文言が登場する。これは対米英では見られない特徴であるといえる。大本営陸軍部が 1937 年 12 月に作成した「時局に応する対支謀略に関する指示（写）」では，「帝国か蔣介石政権を否認せる場合に於て之か壊滅を速なかしむる目的を以て施策すへき軍対支謀略計画の要綱別紙の如し」として，次のように記述されている。

別紙　長期抵抗に応する対支謀略計画要綱

方針

１，左記に依り抗日政権の壊滅を速ならしむ

（イ）作戦の遂行と連繋し抗日政権に対し諸外国よりする補給を妨害遮断す

（ロ）我占拠地域内に抗日政権倒滅の鞏固なる組織結成を策しこれを支援推進し地域外全支の軍隊民衆の反抗日政権行動を助成す

（ハ）赤白両勢力，反日，親日両勢力等の存在利用し抗日政権内部の抗争を激化し之を自壊に導く

（ニ）抗日政権の金融を崩壊すへき特殊の施策を行ふ [(1)]

（イ）は援蔣ルートの遮断，（ロ）・（ハ）は汪兆銘工作に連なる内部工作，（ニ）は偽札謀略を示すと考えられる。この文書が作成された時期が具体的に 12 月のいつ頃なのかは判断できないが，日本陸軍は同月から首都南京攻略戦を開始・占領していることから，南京攻略戦と同

時並行的に謀略工作が検討されていた可能性が高い。よって，この計画を軸にその後の謀略活動が行われたと考えられるのである。そして公文書の記載事項として謀略という手段が選択されるということは，すなわち日中戦争終結のために謀略に頼らざるをえなかったという陸軍の状況，及び謀略が威力を発揮すると首脳部が考えていたことを示すものである。

上記のように中国への情報活動では，汪兆銘工作を代表とする各種交渉活動を成功させるための謀略や偽札謀略が横行していた。防諜・諜報・謀略・宣伝に大別される情報活動であるが，中国国内では「支那通」らによる謀略活動が盛んであったと言える。一方，同じ敵国であったソ連やアメリカに対して日本が主に実施していた情報活動は諜報である。この違いは日本からの距離という地理上の問題によるものだとみられる。

謀略以外の情報活動としては，米英ソと比較して強度が低かった暗号解読に成功している[(2)]。陸軍では1930年7月には参謀本部第2部第5課に暗号業務が移行された。この第5課は中国課であったことから，宮杉浩泰は暗号業務の対象3ヵ国（アメリカ・ソ連・中国）の中で対中暗号解読が主力であったと指摘している[(3)]。ただし，中国共産党の暗号は頻繁に変更されたため解読は断続的であった。

防諜に関しては大陸に派遣された外地憲兵が担当し，各派遣軍の機密保全を最重要任務としていた[(4)]。一部の憲兵は防諜だけではなく，藍衣社（らんいしゃ）・CC団対策としてテロ工作を行う機関ジェスフィールド76号に協力するなど，謀略にも間接的に関与したことも付記しておきたい。

また，「支那通」は情報収集も行ったが，彼らは特定地域の詳細な情報をもたらすのみであった。小谷賢は，情報部等においてこれらの詳細な情報を統合して精査し，中国全体の情勢を把握することはできなかったと指摘している[(5)]。

残りの秘密戦を構成する要素である宣伝は，汪兆銘工作の主たる工作機関であった梅機関に所属する新聞関係者の手で行われた。彼らは梅機関長である影佐禎昭の指示の元，汪兆銘政権樹立を狙った偏向報道を行っていた[(6)]。

第２節　参謀本部支那課と謀略課

前節では中国に対する情報活動の概要を確認したが，本節では直接情報業務に当たった参謀本部の課を詳しくみていくこととする。対中国謀略に関わった陸軍の組織として，参謀本部第２部（通称情報部）第７課（通称支那課）と同第８課（通称謀略課）が存在する。この両課はどのような組織であったのか。

支那課が課として独立したのは，1916年（大正５年）のことである。当時第２部の編制は，中国以外の外国情報を担当する第５課と第６課（支那課）の２つに分かれていた。情報部の内部編制は時期により課・班の変動が激しいが，支那課は設立から終戦まで一貫して存続していた[(7)]。

序章でも既述のように，「支那通」と呼ばれた中国専門の軍人はこの支那課での勤務経験を有する。彼ら「支那通」の中国認識は必ずしも正しいとは言い難いものであった。「支那通」の多くは対中強硬派であり，武藤章らと共に日中戦争開始後「対支一撃論」を唱え短期戦を予想していた。ここに代表される「支那通」の一人が，酒井隆である。酒井は1937年にペンネームで記した著書の中で「支那は１つの社会ではあるが，国家ではない」として，「匪賊の社会である」[8] とまで評している。しかし，少数派ではあるものの，「支那通」にも対中和平派がいた。この代表が本論文で取り上げる影佐禎昭や桐工作に携わった今井武夫である。このような軍人は当時の「支那通」としては珍しかった。

対する謀略課は1937年11月に影佐禎昭を課長に迎える形で新設された[9]。謀略課設立以前は，情報部第４班が参謀本部全体の宣伝業務及び全体情報の判断を行っていた。この第４班が格上げされる形で課となったのが，謀略課である。

情報部欧米課に所属した杉田一次は謀略課について，「元来は第二部の取りまとめ的な情報宣伝，情勢判断，施策等を担当すべきであったが，謀略課と命名されたためか，その名に溺れて謀略方面に多大の努力が注がれることになった」[10] と指摘している。杉田は同時に「謀略課は全般の情勢判断を取りまとめる立場にあったが，指導的地位にあった課長，高級幕僚は英米に関心がなく，多くの参謀は反米英感情に支配されていた。彼らは英米関係者を親英米すぎるとして疑惑の目を放っていた」[11] とも指摘する。

謀略課の業務が謀略に傾注し過ぎた，また英米に関心のない参謀が多かったという杉田の指摘は，前章でみたように主に中国に対して謀略工作を実施していたことであろう。ただし，ソ連やポーランドに詳しい臼井茂樹が謀略課長となった1939年以降は日独伊三国同盟の成立に注力しており，杉田の指摘はこちらにも該当すると考えられる。

第３節　影佐禎昭と謀略

第１項　影佐禎昭の半生

序章第１節でも触れたが，まずは影佐禎昭という軍人について簡単に説明したい。影佐は1893年（明治26年）生まれの陸軍砲兵将校である。陸軍大学校を優等で卒業し，参謀本部作戦課に配属された。1929年から２年間北支にて中国問題の研究にあたったことを契機に中国問題に興味関心を持ち，影佐の「支那通」としての経歴が始まった。帰国後は参謀本部支那課所属。1937年支那課長・謀略課長を歴任し，汪兆銘工作に梅機関長として携わり，汪兆銘率いる南京政府樹立後は最高軍事顧問を務めた。1943年に第38師団長としてラバウルへ転任。影佐の回想録「曽走路我記」が記されたのはこの時期である。終戦及び復員後は肺疾患を患い1948年に死去した[12]。

影佐の経歴で特徴的な点は，参謀本部作戦課に配属経験があることである。情報部所属で所

謂情報畑にいるような将校の多くは，作戦部及び作戦課に属した経験を有していない。特に陸軍大学校卒業直後に作戦部に配属される人材は，慣例として陸軍大学校で成績優秀者と認められた者のみで数にして卒業生のうち上位１割程度だった[13]。北岡伸一の研究によれば，1908年から1937年までに支那課長を務めた16人のうち，陸軍省や参謀本部の他の部・課に所属経験があるのは影佐を含む２人のみである[14]。この傾向からも，影佐の経歴が情報活動に従事した軍人の中でも異色であることがわかる[15]。

作戦課への配属経験が，果たして影佐の思想に影響を及ぼしたのか。筆者の私見では定かではない。しかし，影佐が陸軍大学校で優秀な成績を収めたことは，その後陸軍の要となるポストである陸軍省軍務課長就任を可能にした。汪兆銘工作の開始に寄与した西義顕は，影佐が陸軍中央の要職にあったことを評価し，逆に梅機関長として現地に転じたことは汪兆銘工作にとって悪影響だったと指摘している[16]。西の指摘の通りこれらの条件は，影佐による謀略工作を時に加速し時に減速させたのではないだろうか。ただし，現時点では一概に評価することは難しいと考えている。

影佐にとって重要なターニングポイントだと考えられるのは，石原莞爾の影響を受けて早期和平・非戦論者となったことである。本章第２節で触れたように，支那課に属する多くの軍人は対中強硬論者であり，影佐も例に漏れずそのひとりであった。上海にて大使館付武官補佐官として勤務していた当時の影佐を知る西義顕曰く，影佐には「陸軍伝統の，対華強硬政策の代表選手の感」[17]があったという。だが，影佐は支那課長就任時に作戦部長であった「石原〔莞爾〕少将の徹底した中国に対する非戦論の棍棒で容赦なくたたかれて，はじめて雲水坊主のように迷いの眼を開いてもらった」[18]という。多くの「支那通」が強硬論・中国膺懲（ようちょう）論を唱える中で，影佐が早期和平論者として和平工作に携わることは困難を極めた。汪兆銘工作が開始された1938年夏に影佐が語った内容を，犬養健は以下のように記憶している。

> 実は私は陸軍のなかでは統制派というものに属しているのです。この一派は中国膺懲論で，つまり事変拡大派なのです。ところがその派のなかの私が和平運動の責任者のひとりのような形になって来ているので，部内でも私に対する風当りは人一倍強いわけです。〔中略〕――しかし今ではわしらの中国政策が１番正しいと信じています。中国人の愛国心を尊重する事が，新しい第一歩ですな。見ていて下さい。いろいろの障害があっても，やる事だけは全力を挙げてやりますよ。そしてこの和平工作を必ず内閣の五相会議の決定事項まで持って行きますよ[19]。

影佐の口から直接陸軍の中での風当たりの強さが語られており，その難易度の高さが窺える。影佐はその優秀さから陸軍内で要職を経験するものの，その立場は軍内部では少数派という複

雑な状況に置かれていたことがわかる。なお，影佐が1943年にラバウルに第38師団長として転任した事情を踏まえると，より影佐の陸軍内での立ち位置がみえてくる。第38師団は影佐の着任前の1942年にガダルカナル島に派遣されるも，輸送時に受けた攻撃やガ島上陸後の飢餓や病気によって兵力・物資を失った[20]。ガ島撤退後，第38師団はニューブリテン島への移動を経て，ラバウルにて再建された。このように戦力としてお粗末な状況である第38師団に影佐が送られた人事は，影佐の能力を肯定的に評価したものであるとは考えにくい。また，遅々として進まない汪兆銘政権による日中和平に苛立ちを覚えた東条英機によるものであるとの推測もあるが，現時点においては既存の研究による言及を見つけることができなかった。この点に関しては今後更に状況を分析することが必要である。

以上の状況を踏まえて，影佐が謀略にどう携わったのか分析していきたい。

第２項　影佐禎昭と「曽走路我記」

序章第２節でも触れたように，影佐は回想録である「曽走路我記」を1943年に口述したものを部下に書き取らせる形で残している。これは当事者の回想録の多くが，戦後に著されたものである中で珍しいと言える。戦中に書かれた回想録は，戦後に書かれた回想録と比較するとバイアスがかかりにくく，当時の価値観が反映されやすいと考えられる。

戸部良一は汪兆銘工作について言及する材料として「曽走路我記」を挙げ，以下のように述べている。

> 工作当時者の回想録の基礎となっているのは，影佐の回想録である。したがって，影佐が回想録の中で偽りを述べ，それが他の人々の回想録にも影響を及ぼしたという可能性があるかもしれない。しかし，影佐の回想録は，大東亜戦争中にラバウルで記憶のままに部下に口述筆記させたものであり，公表を意図してはいなかった。公表を意図しないものに故意に偽りを書くことは，あり得ないことではないがないが，常識的には考えられない[21]。

確かに影佐は公表を意図していない。「曽走路我記」によれば，記述の目的は「従来家庭の父として尽くす可くして得なかった罪滅ぼしとして『大陸で何をして居た乎』と謂ふ事を書き遺すこと」であり，「他の閲覧に供せむとするものではない」[22]という。

しかし，公表を意図していない回想録が，正直に記憶を綴ったものであることは必ずしも意味しない。山田朗によれば，戦争の記憶は〈表の記憶〉と〈裏の記憶〉の２種類があるという。〈表の記憶〉とは，〈栄光〉と〈被害〉についての記憶を指し，これらは一般的に記憶が語り継がれやすい。しかし，〈裏の記憶〉が指すのは〈秘匿〉と〈加害〉であり，記憶が継承されにくい分野である。山田は具体的なものとして，以下のように述べている。

戦争の〈秘匿〉すべき部分，たとえばスパイ行為の〈記憶〉，戦争の〈加害〉の部分，たとえば，戦地や占領地での残虐行為や違法行為の〈記憶〉は，家族の中で親から子へ，孫へとはほとんど語りつがれないものである。すなわち，〈戦争の記憶〉の私的継承が断絶する要因としては，その〈記憶〉が，家族（とりわけ子ども）に話せないこと（残虐行為など）である場合，社会的な圧力（有形･無形の）によって話せない場合（天皇･〈秘密戦〉など）があるといえる。〈秘匿〉と〈加害〉が同時にかかわるような問題（組織的な残虐行為・性暴力・謀略など）は，私的継承がなされないだけはなく，そのような〈記憶〉を抹消しようとするベクトル（発言者への暴力・圧力）さえ働くことがしばしばある[23]。

影佐が行ってきたことはまぎれもなく〈裏の記憶〉にあたる部分であり，〈秘匿〉と〈加害〉にあたる謀略行為である。それ以外にも，影佐が石原莞爾の影響を受ける以前に対中国強硬論者であったことは，「曽走路我記」に記されていない[24]。これらの情報を加味すれば，戸部のように一概に「曽走路我記」を信用することには慎重であるべきだと言えるだろう。この点を意識した上で，次項以降「曽走路我記」を用いて影佐の認識について分析したい。

第３項　影佐禎昭と和平工作

そもそも影佐自身は和平工作を謀略と捉えていたのだろうか。戸部良一はこの理由について，以下のように言及している。

のちに汪工作に発展する動きに影佐が関与するのは，彼が謀略課長のときであった。それゆえ，この工作は本来的に，国民政府から要人を離反させる謀略として始まったと見られることが多い。影佐も，この工作の推進を上部に説明する時には，謀略としての側面を強調して了解を得ようとした形跡がある。だが，彼自身は，汪兆銘による和平実現に本気で賭けていた[25]。

謀略課という名称がもたらした功罪について杉田の言を借りて本章第２節でも触れたが，影佐自身もこの名称を利用して陸軍上層部の説得に当たったことがわかる。実際にこの説得があったとみられる 1939 年１月に行われた非公式軍事参議官会議に出席していた畑俊六はその日記に，「汪兆銘謀略に関する説明あり」[26] と記録していることからも確かであると言える。影佐によって謀略であると伝えられた和平工作の情報は，さらに昭和天皇にも謀略として伝わっていたという[27]。影佐と共に汪兆銘工作に携わった犬養健は，昭和天皇が和平工作を謀略として忌避していたことが，和平条件の起案に関わった興亜院の態度に影響を及ぼしたと認識していた[28]。

ここからわかることは，謀略に対する陸軍と昭和天皇・興亜院の認識に違いが生じていることである。影佐が謀略の面を強調して陸軍上層部の了解を取り付けた事実からは，陸軍は謀略を効果的な施策だと捉えていたことがわかる。これには，満洲事変や満洲国建国で，謀略の味を占めた成功体験が影響していると考えられる。反対に，昭和天皇は「謀略などというものは，うまく行かないのが普通なのだ。成功したら却っておかしいのだ」(29) と考え，謀略の成功率の低さを認識していた。両者のスタンスの違いを前提とした陸軍の謀略については，次節で更に言及することとする。

また影佐の対中思想が石原莞爾の影響を受けて変化したことについては，本節第１項でも触れた。ならば変化後の対中思想はどのようなものであったのか。次は影佐の記した「曽走路我記」から，明らかにしたい。

影佐が日中関係について記述する中で特徴的であると言えるのが，「日本及日本人は先づ支那及支那人に対する優越感を払拭するを必要とする」(30) の文言である。本章第２節で引用した酒井隆の中国論に示されるような，当時の情況を客観的に理解し的を得た考えであると言える。

その影佐の対中思想に関する複数の記述の中で特段目を引くのは，〈熱心さに感動した〉という趣旨のものである。具体的には「先づ単身敵地に乗り込んだ董〔道寧〕氏の熱情と勇気とに対し感を打たれた」(31) や「汪氏の心境を聴くに及び自分は痛く感動させられた」(32) という記述に代表される。その多くは和平工作に参加した中国人に対して向けられた賞賛の言葉である。影佐はこれらの言葉によって和平工作への協力を決断し，和平工作に関わり続ける意欲を得ているように見受けられる。

しかし，その後に続くのは〈この情熱があれば和平工作が成功する〉という類の結論である。影佐のこの帰結に至る思考回路は，ただの感情論に過ぎず非論理的なものであると言える。特にこの思想が顕著に表れている文書が，影佐が1938年２月に蔣介石の補佐役である何応欽・張群の両氏に当てて書いたという手紙である。この手紙について影佐自身は以下の意味を込めて認めたと振り返っている。

> 日支事変の解決は条件の取引と言ふような方法で根本的解決がつくべきものではない，日本も支那も互ひに裸で抱合はねばならん。今迄のことは水に流し誠意を披瀝して裸になつて日本と抱き合ふと云ふ気持になつて貫へれば，武士道国日本は本当に裸になつて手を握る位の意気は持合はして居ると確信する (33)。

重慶政府側がこの手紙を文字通り受け取ったとしても，簡単に過去を水に流すと同意できるとは言えないだろう。それでも，同年１月に「国民政府を対手とせず」と述べた近衛声明を出した日本側からの手紙としては重大な意味を持ち，日本が中国へ歩み寄る気概は伝わったので

はないだろうか。

しかし，この手紙を書いた当時の考えについて，影佐は以下のように振り返っている。

> 条件に依る和平交渉を不可なりとしたのは条件となれば支那側は日本に七・七事件以前の状態に復することを主張するに相違なく日本側は当時軍官民共に強硬で右条件で応諾するが如き事は夢想だも出来なかつた状況であるので，条件の交渉では結局労して効無き結果を見る事明瞭である。互に無条件に和平をやらう，裸で抱き合はうと云ふ気持を持つ事が先決でこの気持さへ出来れば条件の如きはどうにでもなると考へたのである[34]。

南京陥落後である当該時期において，日中双方で和平条件を擦り合わせることの難しさは影佐が指摘する通りだろう。だが，その状況を理解していながら，〈和平を求める気持ちがあればどうにかなる〉という発想だけで和平工作に取り組む様子には些か軽率であると言わざるを得ない。合理的な判断というよりも，どこか楽観論に類される判断のように見受けられる。

同時に，影佐は汪兆銘の信念に深く尊敬の念を抱いていた。戸部はこの影佐の様子を「汪の人間性に惚れ込んだ」[35]と表現する。影佐は大使館附武官補佐官であった頃には「自分は汪氏の信念に対し深甚なる尊敬の念を抱くに至った」[36]とし，ハノイから上海に向かう船上で汪兆銘の話を聞いた後には「汪氏の行動は一に支那を愛し東亜を愛する赤誠に出でたるものに非ずして何であらう。其の崇高なる精神，高潔なる人格は鬼神をして泣かしむるものがある。真に敬服感佩〔かんぱい〕の外ない」[37]と感動している。しかし，この影佐の汪兆銘に対する信頼がほかの陸軍参謀との間で共有されることはなく，その反応に温度差が生じていた。これについては第２章第１節にて，再度言及することとする。

第４節　陸軍首脳部と謀略

前節第３項にて，謀略を効果的であると見なす陸軍上層部と謀略を忌避する天皇・興亜院のスタンスの違いが明らかとなった。本節では陸軍全体が和平工作に対して，どのように向き合ったのかという観点から分析する。また，本論文の主題として影佐禎昭を扱っていることから，本節においても汪兆銘工作に対する陸軍首脳部の動きを中心とする。

日中戦争勃発後，陸軍は複数のルートを用いて和平交渉を行おうと動いた[38]。具体例としては，盧溝橋事件勃発直後の船津工作やドイツを仲介相手としたトラウトマン工作，1938 年５月の宇垣一成外相就任を契機とする宇垣・孔工作，影佐が携わった汪兆銘工作，重慶政府との直接交渉を図った桐工作，桐工作と同時期に松岡洋右外相を中心とした銭永銘工作が挙げられる。前述以外にも複数のルートでの和平交渉が図られた。しかし，これらの工作は和平条件の不一致などの理由で，全て実を結ぶことがなかった。

汪兆銘工作における和平条件の擦り合わせも例に漏れず難航した。特に近衛声明を具体化する目的で1939年夏頃から作成された内約交渉原案をめぐっては，原案作成機関である興亜院と影佐率いる梅機関の間で折衝が繰り返された。

影佐は内約原案について，1938年末に決定した日支新関係調整方針に“戦時下の過渡的弁法”を加える程度のものとして予想していた[39]。しかし，内約原案は影佐の期待を裏切り，海南島に関する権益の設定等を条件に含んだことで近衛声明の内容を逸脱するものであった。影佐は起案担当者であった陸軍の堀場一雄中佐との折衝を数回行っている。

対する堀場は影佐及び梅機関について，「既に調整方針に関し深入り」[40]していると指摘した上で，以下のように述べている。

> 梅機関は支那側の弱者としての立場よりする細部追究に押されて細目に深入りし，又之に応ずるための興亜院案事務折衝は各方面の権益思想を再燃したる結果となり，更に其の現場取扱に於ては之が説明乃至打診資料たるの域を脱し，梅機関は不用意に全面展開して支那側に決定的要求条件たるの印象を附与しは重ね重ねの失策なり[41]。

影佐の思惑とは裏腹に，梅機関の態度は堀場にとって厄介なものであったことがわかる。当時，興亜院は中国に関する外交すべてを司る機関であった。興亜院に陸海軍や各省からの人員が集まった結果，各々が権益の確保を図るようになったことも和平合意が困難な条件となり果てたことに関係しているだろう。

1939年10月30日に陸軍で決定された新中央政府樹立を中心とする事変処理最高指導方針は，以下のように和平工作について語っている。

> 第一　要旨
>
> 新国際情勢に善処し汪工作を強化推進しつゝ内外の施策を統合集中し支那新中央政府樹立の前後を機とし速に事変一応の解決に努力す其成らざるに方(あた)りては断乎大持久戦に移行す〔中略〕
>
> 第二　要領
>
> 一，強力なる新中央政府を樹立し以て事変を解決に導くことを以て根本となし万般の措置を之に統合す
>
> 之が為特に汪工作を強化推進しつゝ対重慶工作を併進せしめ之が停戦条件に関しては戦争指導方針に拠る[42]

汪兆銘重慶脱出後1年近く経った1939年10月末の段階においても，陸軍は汪兆銘工作が軸

となる和平工作であると捉えていたことがわかる。同時に陸軍は重慶政府との直接交渉及び汪・蔣合作を目論んでいた。ただし，この事変処理最高指導方針成立と同時期に就任した参謀次長沢田茂も，汪政権は「支那政府として時局処理を担当する実力なきこと」(43) を確認している。この沢田の様子と併せて鑑みると，汪兆銘工作を軸に据えてはいるものの，陸軍首脳部全体としては工作開始当初よりも期待が下がっていたと考える方が妥当である。

陸軍の謀略が成功しなかった原因としてよく挙げられるのは，日中戦争における目的意識の欠如と首脳部の交代劇である。前者に関して戸部は「和平条件の一貫性のなさに最もはっきりと表れている」(44) として，条件とされた蔣介石下野や華北への保障駐兵が変更されたことに触れている。首脳部の交代については，汪兆銘工作に梅機関員として関与した犬養健自身も，「開戦の頃には参謀本部には立派な国策があった。ところがその後幹部が次ぎ次ぎに転任してしまって，今では陸軍省の一大佐の影佐が和平問題の全責任者という有様だ」(45) と指摘している。特に 1939 年末に行われた人事異動はノモンハン事件の責任問題に深く関連していたため，それまでの陣容から大きく変化したと言える。このいわゆる〈ノモンハン人事〉では，中島鉄藏参謀次長や橋本群作戦部長が更迭され，後任として沢田茂参謀次長や富永恭次（きょうじ）作戦部長が着任した (46)。彼らは汪政権への信頼が希薄であったため，前任者たちによって構想されていた段階的な自主撤兵案から小規模な段階的撤兵案を練ることとなった (47)。堀場一雄は「ノモンハン人事の衝撃は，事変解決のための中枢陣容を崩壊」させたと指摘し，更に「戦争当局の努力せし思想統一は此（ここ）に敗れ」(48) たと，この異動による影響の大きさを物語っている。

また，陸軍の謀略に対する姿勢は，秘密戦資材研究のための機関である登戸研究所からも読み取ることができる。秘密戦のための人員育成を行っていた陸軍中野学校と登戸研究所は，共に陸軍の秘密戦を担う機関であった。特に登戸研究所所長である篠田鐐が掲げた，秘密戦兵器の研究方針と研究計画としての基本的理念として，「満州事変以来，秘密戦機関の技術研究は，防諜→諜報→謀略→宣伝の順序として体系化するが，諜報→謀略をプライオリティとせよ」(49) との項目があったという。同時に中野学校及び登戸研究所が設立・拡張された時期は日中戦争開始後というタイミングであり，両機関ともに中国における偽札謀略に偽造紙幣の作製及び運搬という形で関与している。このことからも日中戦争解決のために秘密戦への注力が行われたことも明らかである。

まとめ

本章では対中国謀略について，また影佐及び陸軍首脳部を中心に検討してきた。

中国に対する情報活動は，対米ソと比較しても謀略が重用された点が特徴である。その謀略に関わった陸軍組織としては，参謀本部支那課だけでなく謀略課が挙げられた。特に支那課にはその名の通り「支那通」と呼ばれた中国専門の軍人がおり，彼らの中心は対中強硬派であっ

た。影佐も当初は強硬派の１人であったが，石原莞爾の影響を受け早期和平派へ転向している。

影佐個人としては謀略の中でも汪兆銘工作を主に担当し，当該案件を謀略として陸軍首脳部に提案・説得していた。また，影佐は，ほかの「支那通」や軍人たちと比較して中国人の価値観や意見を取り入れようとしたと見られる。しかし，和平工作における影佐の行動原理には感情論が多く見られ，非合理的かつ軽率であると言わざるを得ない。

対する陸軍首脳部は満洲事変や満洲国建国の経験を経て，謀略によって結果を出すことに慣れたため，天皇や興亜院と異なり謀略を歓迎した。そのため，戦争指導方針においても謀略を軸とし，明文化する動きがあった。しかし，その時々により目的意識が欠如し，和平条件が一貫しないという欠点があった。また，ノモンハン事件の責任問題から行われた人事異動によって，共通認識がより崩れやすくなり事変解決が困難になった。

次章では，この認識を踏まえて謀略の具体的事例について見ていくこととする。

〔注〕

（１）大本営陸軍部「昭和 12 年 12 月　時局に応する対支謀略に関する指示（写）」（1937 年 12 月）（JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C12120350900，防衛省防衛研究所）。本史料における旧字及びカタカナは，筆者がそれぞれ新字及び平仮名に改めた。

（２）小谷賢「日中戦争における日本軍のインテリジェンス」，軍事史学会編『日中戦争再論』（錦正社，2008 年）334 頁。

（３）宮杉浩泰「戦前期日本の暗号解読情報の伝達ルート」，『日本歴史』第 703 号（吉川弘文館，2006 年 12 月）

（４）小谷賢『日本軍のインテリジェンス：なぜ情報が活かされないのか』（講談社，2007 年）67 頁。

（５）同前，60 頁。

（６）小俣行男『〔現代のドキュメント〕侵掠――中国戦線従軍記者の証言』（徳間書店，1982 年）148 頁。

（７）有賀傳『日本陸海軍の情報機構とその活動』（近代文芸社，1995 年）49 頁。

（８）笠井孝『裏から見た支那人』（高山書院，1937 年）２頁。

（９）前掲『日本陸海軍の情報機構とその活動』55 頁。

（10）杉田一次『情報なき戦争指導　大本営情報参謀の回想』（原書房，1987 年）101 頁。

（11）同前，145 頁。

（12）本段落は，影佐禎昭「曽走路我記」（人間・影佐禎昭世話人会編『人間影佐禎昭』人間・影佐禎昭世話人会，1980 年）と『国史大辞典』（Japan Knowledge による）に依拠した。

（13）保阪正康『昭和陸軍の研究』下（朝日新聞出版，2018 年）13 頁。

（14）北岡伸一『官僚制としての日本陸軍』（筑摩書房，2012 年）113 頁。

（15）影佐以外で陸軍大学校卒業直後に作戦部へ配属された経験を持つ情報将校としては，情報部長や戦後有末機関長を務めた著名な有末精三がいる。彼も陸軍大学校卒業時，成績優秀者である。有末精三『有末精三回顧録』（芙蓉書房，1974 年）10 頁。

（16）西義顕『悲劇の証人：日華和平工作秘史』（文献社，1962 年）193 頁。

（17）同前，102 頁。

（18）犬養健『揚子江は今も流れている』（文藝春秋新社，1960 年）67 頁。

（19）同前，67 頁。

（20）近現代史編纂会編『陸軍師団総覧』（新人物往来社，2000 年）171 頁。

（21）戸部良一『戦争のなかの日本』（千倉書房，2020 年）280 ～ 281 頁。

（22）前掲「曽走路我記」，１頁。

(23) 山田朗『兵士たちの戦場：体験と記憶の歴史化』（岩波書店，2015 年） 3 頁。
(24)「曽走路我記」における和平工作以前の影佐の中国観は，一般大衆の総意の形や“日中問題を解決したい”という影佐の意志の形をとって記されたものである。
(25) 戸部良一『日本陸軍と中国：「支那通」にみる夢と蹉跌』（筑摩書房，2016 年）251 頁。
(26) 畑俊六「畑俊六日誌」（伊藤隆ほか編『続・現代史資料』第 4 巻〈畑俊六日誌〉，みすず書房，1983 年）184 頁。
(27) 前掲『揚子江は今も流れている』217 頁。
(28) 同前，218 ～ 219 頁。
(29) 同前，218 頁。
(30) 前掲「曽走路我記」13 頁。
(31) 同前，17 頁。
(32) 同前，49 頁。
(33) 同前，27 ～ 28 頁。
(34) 同前，28 頁。
(35) 前掲『日本陸軍と中国：「支那通」にみる夢と蹉跌』252 頁。
(36) 前掲「曽走路我記」15 頁。
(37) 同前，49 頁。
(38) 本段落は，秦郁彦『日中戦争史』〈復刻新版〉（河出書房新社，2011 年）146 ～ 159 頁に依拠した。
(39) 前掲「曽走路我記」72 頁。
(40) 堀場一雄『支那事変戦争指導史』（原書房，1973 年）319 頁。
(41) 同前，318 頁。
(42) 同前，309 頁。
(43) 森松俊夫編『参謀次長沢田茂回想録』（芙蓉書房，1982 年）169 頁。
(44) 前掲『戦争のなかの日本』263 ～ 264 頁。
(45) 前掲『揚子江は今も流れている』190 頁。
(46) 小林道彦『近代日本と軍部：1868 － 1945』（講談社，2020 年）489 頁。
(47) 波多野澄雄『幕僚たちの真珠湾』（吉川弘文館，2013 年）37 頁。
(48) 前掲『支那事変戦争指導史』318 頁。
(49) 伴繁雄『陸軍登戸研究所の真実』（芙蓉書房出版，2001 年）24 頁。

第 2 章　日本陸軍が行った謀略

本章では第 1 章で取り上げた影佐禎昭や陸軍の対中謀略思想を前提として，実例である謀略工作についてみていくこととする。実例として挙げる謀略は汪兆銘工作と桐工作である。これらの謀略でみられる対中謀略思想を確認しながら，前章で基礎とした「曽走路我記」以外の文献も参考として影佐の思想をより深掘りしていく。

第 1 節　政治謀略（1）～汪兆銘工作～

本節では汪兆銘工作のポイントを追いながら，各段階における影佐の考えを検討していきたい。同時に影佐の心情についても，犬養健の著書『揚子江は今も流れている』を中心とした影佐の周囲の人々の記録から確認していくこととする。

汪兆銘工作の発端は，1938 年２月に董道寧が来日したことである。来日した董と会談した影佐は,「自分は先づ単身敵地に乗り込んだ董氏の熱情と勇気とに対し感を打たれた」(1) として，和平の実現へ賛同を示した。第１章でも触れたように，この段階において影佐は「互に無条件で和平をやらう〔中略〕と云ふ気持を持つ事が先決でこの気持さへ出来れば条件の如きはどうにでもなると考へたのである」(2) と，感情的楽観論を持っていた。

同年６・７月に亜洲局長であった高宗武が来日し，和平実現のためには汪兆銘を首班とすることを主張した。影佐は，和平の実現のために必要なこととして以下のように考えていたという。

> 日本が軍事的には勿論のこと政治，経済的の侵略を支那に企図してゐるのではなく又支那に於て生々発展する民族主義を否認するものでもなく，狭量排他的なる思想から脱却せる穏健なる民族主義の発展に関しては十分の理解と同情とを以て之に協力することを事実を以て示さねばならない。〔中略〕日本の此大乗的態度なくしては高氏の意見も砂上楼閣を描くに等しいであらう。茲（ここ）に於てか高氏の計画遂行を援助する為には日本は前途非常の努力を以て支那に対し大乗的態度を以て臨むべきことを国策として決定の要あることを痛感した次第である (3)。

当時の影佐が，日本の中国に対する優越的態度を懸念していたことが読み取れる。しかし，この影佐の懸念は汪兆銘工作実施期間を通じてのものとなってしまう。

また，同時期の影佐は日中戦争について予定外であると認識し，中国に派遣している兵力を「もっと意味のある事柄のために保存」(4) しておかなければならないと主張している。この〈意味のある事柄〉とは，石原莞爾に影響を受けた影佐の発言であることから，対中国ではなく対ソ連のための兵員とすることを指していると思われる。影佐の日中戦争観として貴重な発言である。

1938 年 11 月に宣言された第２次近衛声明は，影佐の期待を裏切るものであった。その原因は前月に行われた重光堂会談にて，中国側から主張のあった中国大陸からの撤兵条項が削除されたことにある。近衛声明の妥協案作成に携わった影佐は，その出来上がりを待っていた犬養健に対して「どうも君にあまりいい土産はないよ」(5),「君にはどうも読ませたくない書類なんだ」(6) と言い近衛声明の全文が書かれた印刷物を手渡したという。

さらに近衛声明公表の記者会見終了後の影佐は，犬養との会話で「あああ。こんな事では前途遼遠だね」,「あああ。嘘が万事のはじまりか」(7) ともらしている。特に後者の一言は様々な解釈が考えられる。しかし，当時影佐が直接中国側と折衝を重ねていたことや中国側と相反する意見を日本側が強硬に主張していたことを鑑みれば，中国側と約束した諸条件を叶えるこ

とが将来的にも困難な状況であることを自覚した上で，今後も中国側に対し叶わない甘言を用い続けなければならないことを指しているのだと考えられる。佐々木到一ら「支那通」に対するものではあるが，戸部良一は以下のように指摘している。

> 中国の現状についての理解が深まれば深まるほど，彼らは，日本の権益保持・増進という自らの任務と，中国の目指す方向との矛盾に気づかなければならなかったのである[(8)]。

戸部の指摘は「嘘が万事のはじまりか」ともらした影佐にも該当すると言えるのではないだろうか。影佐は中国側と折衝を重ね，尊敬する汪兆銘らの要求に対して「理解が深ま」っていた。しかし，内地に帰国して参加した会議では「権益保持・増進」など中国に対する強硬な姿勢を近衛声明という政府の公式見解として示す日本側の状況において，己の任務が持つの矛盾を改めて自覚したのではないだろうか。

影佐が中国側に対する理解を深めていたことは，堀場一雄の記述からも読み取れる。前章で引用した堀場の「梅機関は支那側の弱者の立場より」[(9)] 言及しているというものである。この時期は 1939 年のことであったが，この時期から影佐が中国側との和平条件を擦り合わせるために尽力したことが窺える。影佐はこの後も中国側の要望を否定し，自国の利益のみを追求する日本側との板挟みになりながらも汪兆銘工作の出口を模索していた。

しかし，その影佐も一度汪兆銘工作の中止を検討していた。それは 1939 年 11 月頃で，影佐は「汪精衛氏と相談の上已〔や〕むを得ざれば政府樹立に依る方法を中止するの他あるまいと覚悟した」が，同月 16 日に「畑〔俊六〕陸軍大臣は自分に何処までも交渉を妥結に導くやう努力せよと命ぜられた」[(10)] という。しかし，畑の日記における同月 13 日の項には，「先般参謀本部より臼井〔茂樹〕大佐，堀場〔一雄〕大佐上海に至り汪側とも交渉したるも，中々かれこれと注文をつけてあまり楽観を許さずとのことなり」[(11)] と記録されている。臼井・堀場の報告により汪兆銘工作が順調とは言い難い状況であることを理解していたはずの畑が，なぜ影佐に対して汪兆銘工作の継続を伝えたのかは疑問が残るが，これは今後の課題としたい。

1939 年 5 月，汪兆銘一派が上海に到着した翌日に影佐の挨拶回りに同行した憲兵の塚本誠は，影佐の「塚本，仕事というものは，やりだしたら，ぜひやりとげねばならぬ。その出来上りは，よし最低六十点でもなあ」[(12)] という発言を記憶していた。この時期は影佐はハノイから上海へ汪兆銘を安全に移送するという任務を達成した直後である。しかし，この移送期間には汪兆銘の口から新政権樹立が提案されたこともあり，当初の予定から外れる可能性を影佐は検討していたのであろう。それゆえに影佐の“やりとげなくてはならない”という発言であろうと推測される。

そしてこの影佐の発言は，この後も形を変え紆余曲折を経る汪兆銘工作を続けていく中での

軸となるものではないかと考える。汪兆銘工作は政権樹立という形式となり，影佐が望んでいた近衛声明の実現も遠のく中で，それでも影佐が汪兆銘工作を続けた背景にはこの考えが中心にあったように考えられるのである。

また，前章でも取り上げたこの影佐から汪兆銘への尊敬も，汪兆銘工作を継続した理由の一つではないか。前述のように，影佐の汪兆銘への尊敬の念はほかの参謀と共有及び共感されることはなかった。一般的に汪兆銘工作の肝は，重慶を脱出した汪兆銘の呼びかけによってどれだけ有力な人物を和平への協力者として重慶から引き出せるかにあった[13]。しかし，陸軍の期待とは程遠く，有力人物が動くことはなく失敗に終わった。本来であれば，この段階で汪兆銘を和平交渉の相手として切り捨てることも視野に入れる必要があっただろう。それでも影佐ら梅機関は汪兆銘を代表に据えた和平交渉を継続した要因には，汪兆銘への強い信頼が影佐以外の参謀や政府関係者にもあると影佐が考えていた可能性があるのではないか。汪兆銘への強すぎる尊敬や感銘の念が影佐の目を曇らせたのではないか。

第２節　政治謀略（２）～桐工作～

桐工作は宋子良を通じて重慶政府との直接交渉を画策した謀略である。

しかし，この工作は汪兆銘工作より後に開始され，同時並行で進められたものであることは前章で触れた通りである。当時陸軍省軍務局軍事課高級課員であった西浦進は，桐工作が成功すれば重慶政府との直接交渉であることから，汪兆銘新政権の樹立を妨げる動きをしていたことを以下のように語っている。

> 石井〔秋穂〕が私に申しましたのは，「会議に出たら，お前は汪精衛工作になんでもいいからケチをつけてくれ」というので，それはまあ実際には２人で相談をして「それではやろう」と言って，表面から言えないものですから，「ここの点をもっと確かめてみる必要がある」とか，「これでは国内のあそこのところにまだ話が詰めてない」とか，随分苦労したんですが，石井とは馴れ合いで出来るだけ延ばして行ったわけです[14]。

西浦の言からは，当時陸軍省軍務局軍務課員であった石井秋穂と結託して汪兆銘工作の引き延ばしを行っていたことがわかる。このような行動をとった理由について西浦は，前述の理由以外にも以下のように語っている。

> もし汪精衛を立てると汪精衛には立つ前に重々言ってあるんだとは言いましても，汪精衛が立つというと和平をなかなか困難にしてしまうから，「汪精衛工作は和平の政府だ」と，汪精衛自身も，「自分はいよいよ和平が出来れば自分の地位なんかどうでもいいんだ」と

口では言っておりますが，立てれば必ず我が儘になる[15]。

西浦や石井は汪兆銘工作が成功すれば，汪兆銘の立場が問題になると考えていたことが明らかである。この点は，前章で述べたように影佐が汪兆銘の信念に惚れ込んでいたことと対照的であると言える。この相違は，汪兆銘工作に対する影佐及び梅機関と陸軍首脳部との温度差につながっているのではないか。

一方影佐は，桐工作を含む重慶直接交渉工作が「重慶政府と汪政府との合体を急速に促進せむとする」[16] ものであると捉えてはいるものの，「未だ実施には時期尚早の憾がある」[17] と考えていた。その理由として挙げられているのは，相手にしないと宣言した重慶政府を相手にしていること，第三者からは汪兆銘工作との二股に見えることへの懸念，近衛声明を実行せずに重慶政府は和平に応じないという点である[18]。また，影佐は宋子良の存在と彼が携えた手紙を怪しみ，周仏海にこの真偽を確かめさせていた。周仏海の判断は両方が贋物であるとのことであり，影佐はしばらく傍観することを選択していた[19]。このように影佐が桐工作を失敗すると踏んでいたことは，影佐にとって重慶・汪合体路線ではなく汪政権樹立路線を推し進める材料となった可能性もあるのではないだろうか。

しかし，結果として桐工作は1940年9月末に打ち切られるまで続けられた。その後日華基本条約の調印が行われ，日本は汪政権を承認し汪兆銘工作も幕を閉じた。

まとめ

本章では汪兆銘工作及び桐工作の各具体事例から，影佐及び陸軍首脳部の対中謀略思想を検討してきた。

まず影佐の思想に関しては前章で見たように「支那通」内でも少数派であっただけでなく，内約交渉の場等において汪兆銘側と日本側の板挟みになっていた様子が読み取れた。特に，汪兆銘工作初期から行動を共にしてきた犬養に対して，弱音を吐く姿も見受けられた。同時に“やりはじめたからにはやりとげなければならない”という影佐の謀略における軸と思しき信念も明らかとなった。

次に桐工作では，並行して進められていた汪兆銘工作の新政権樹立を妨害する動きがあったことが挙げられる。この原因としては，桐工作に期待をかけていた陸軍全体と長らく汪兆銘工作を続けていた影佐らとの間で，認識の擦り合わせができていなかった可能性がある。宋子良という人物をめぐる真偽における見識が一致しなかったことは，認識のズレが生じた１つの要因ではないだろうか。

中国戦線が拡大し，新たな要所を占領しても戦争終結が見通せない中で，日本軍が謀略という手段を取らざるを得なかったことも確かである。その状況で謀略への期待が高まったことは，

至極当然のように思われる。しかし，陸軍首脳部と工作当事者である影佐の間で汪兆銘への信頼に温度差があったことは，和平工作の失敗に影響を及ぼしたといえるだろう。

〔注〕

（1）影佐禎昭「曽走路我記」（人間・影佐禎昭世話人会編『人間影佐禎昭』所収，人間・影佐禎昭世話人会，1980 年）27 頁。
（2）同前，28 頁。
（3）同前，30 ～ 31 頁。
（4）犬養健『揚子江は今も流れている』（文藝春秋新社，1960 年）62 頁。
（5）同前，102 頁。
（6）同前，103 頁。
（7）同前，104 頁。
（8）戸部良一『日本陸軍と中国：「支那通」にみる夢と蹉跌』（講談社，1999 年）224 頁。
（9）堀場一雄『支那事変戦争指導史』（原書房，1973 年）318 頁。
（10）前掲「曽走路我記」78 頁。
（11）畑俊六「畑俊六日誌」（伊藤隆ほか編『続・現代史資料』第 4 巻〈畑俊六日誌〉，みすず書房，1983 年）236 頁。
（12）塚本誠『ある情報将校の記録』（芙蓉書房，1979 年）231 頁。
（13）川田稔『昭和陸軍の軌跡』（中央公論新社，2011 年）183 ～ 184 頁。
（14）西浦進『昭和陸軍秘録』（日本経済新聞出版社，2014 年）227 頁。
（15）同前，226 ～ 227 頁。
（16）前掲「曽走路我記」84 頁。
（17）同前，85 頁。
（18）同前，85 頁。
（19）前掲『揚子江は今も流れている』313 頁。

終章

第 1 節　結論

本論文では対中国謀略について，影佐禎昭と陸軍首脳部の思想について検討してきた。その結論を整理していきたい。

まず第 1 章でみたように，日本陸軍が展開した対中国秘密戦は，謀略が対米ソと比較して積極的に行われた。また第 1 章で主に検討した影佐の謀略への思想には，感情的楽観論や汪兆銘個人に対する強い信頼，中国側の意向を重視したことを確認した。しかし，影佐のこの考えは，他の陸軍参謀である堀場や西から賛同を得られず，参謀本部内で認識に温度差が生じたと見られる。影佐がこの状況を自覚していたかは定かではないが，この認識の相違は汪兆銘工作において大きく影響したのではないだろうか。また影佐の印象的な発言である「やりだしたら，ぜひやりとげねばならぬ」(1) は，どこか走り始めたからには最後までやり遂げるというニュア

ンスを持ち，アジア太平洋戦争末期に本土決戦を強く主張した陸軍首脳部を連想させる。関連があると断じることはできないが，どこか共通性を感じることは指摘しておきたい。

現在，影佐は特務工作を含む謀略に従事したことから，その人間性を冷徹と研究者から称されてもいる[(2)]。同時に陸軍大学校優等卒業であることから，エリート将校という認識がある。筆者も本論文執筆以前はそのイメージを抱いていたのだが，調査研究の過程でこの認識が誤りであることがわかった。あくまで冷徹さやエリート将校というのは影佐の一面に過ぎず，他方では感情に左右され，和平交渉では中間管理職さながらの板挟みに苦しんでいた。

陸軍の謀略に関して本論文では詳しく触れることができなかったが，登戸研究所・中野学校の設立・拡張及び謀略課の課への独立等日中戦争開始後に体制を整える動きが見られた。これは陸軍が秘密戦，ひいては謀略の重視と言える。また，偽札謀略のように明文化された謀略もあれば，そうではない場合もあることが確認できる。複数のルートが乱立した和平工作では，明文化されたもの・そうでないものが入り乱れ指示系統が明確でなかったのではないかと筆者は推測する。そうでなければ，各工作従事者間の認識が統一される必要があったのではないか。ただし，謀略という観点では機密保持を要するため，やはり困難だったのではないか。

認識の統一という面では，陸軍内のみならず陸軍と天皇・興亜院との間で謀略に対する考えが異なったことも忘れてはならない。すなわち，陸軍と天皇・興亜院では謀略の有効性についての認識が異なり，陸軍首脳部と影佐の間では中国認識及び汪兆銘への信頼度が異なったのである。この状況で影佐が汪兆銘工作を行うことの難しさは言うまでもない。

最後に，本論文序章にて既述である情報将校の間でも英米ソ専門家と「支那通」の間で，戦後の主張が異なることについて言及したい。概略を説明すると，英米ソ専門の情報将校は，戦後に〈自らの意見が取り入れられなかった〉，〈情報部が作戦部よりも軽視されていた〉と主張している。それに対し，「支那通」からは同様の主張があまりなされないという現象についてである。これは，対英米ソへの陸軍の注力が専門家の期待ほどなされず，彼らの主張も採用されにくかった状況があったと思われる。それに対し，「支那通」の多くは対中国強硬派であり，同時に対中国強硬派は陸軍内での多数派であった。ゆえに「支那通」は主張が採用されないという感覚を抱きにくかったのであろう。また，影佐のような早期和平派は少数派ではあったものの，彼らは自ら和平工作に関与した。この体験を特に対英米専門将校は経験していないため，これが戦後の主張に反映されたと考えられる。

第２節　残された課題

本論文では影佐禎昭と謀略について検討してきたが，残された課題は大きく分けて３つある。

第１には，影佐の思想分析に用いる史料である。本論文では影佐の記した「曽走路我記」と犬養健の『揚子江は今も流れている』を中心としたが，この両者への依存傾向が強い。秘密戦

全般については一次史料，回想録を含む二次史料ともに豊富であるとは言えないが，それでも現代に残された史料が存在しないわけではない。今回活かしきれなかったものも多く，特に中国側の史料に関しては時間と言語の都合上，ほぼ触れることができなかった。これらの史料を用いていれば，より客観的な状況分析ができたと反省している。

第２は，分析対象範囲である。今回は，影佐と陸軍の一部という極めて狭い範囲のみを分析対象とした。その分，ほかの「支那通」や陸軍全体，また天皇・政府に関する調査研究は浅いものとなった。特に秘密戦全般に関与した登戸研究所や中野学校に関しては，元来筆者の興味関心があった分野であることから，より活かせる方法があったのではないかと反省している。その結果としてやや客観性に欠けた研究であることを自覚している。分析対象を広げることで，より包括的な研究が見込まれる。

最後に，思想を主題とすることに関してである。本論文では影佐禎昭という１人の軍人の思想をテーマとしたが，思想は時代や時期と共に移り変わっていくものであり，かつすべてが記録や発言の形で表に現れるわけではない思想を主題とすることは予想以上に難易度が高いものであった。石原莞爾とのエピソード等影佐の人生で大きなターニングポイントとなったポイントは抑えられたと考えているが，細かい考えの揺らぎやひとえに肯定しているといってもグラデーションのように程度が異なることへの対応までは行き届かなかった。その思想を各人で比較することもまた難しく，この方法論を取ることが最適であったと自信を持って言い難い。

本論文に関しては反省点ばかりではあるが，この反省を今後の糧としたい。最後ではあるが，論文執筆にあたってご指導いただいた山田朗先生，支えてくれた両親，そして友人各位にこの場を借りて感謝の意を示して締めくくりたい。

〔注〕

（１）塚本誠『ある情報将校の記録』（芙蓉書房，1979 年）231 頁。

（２）山本武利『朝日新聞の中国侵略』（文藝春秋，2011 年）149 頁。

〔参考文献一覧〕（編著者五十音，刊行年順）

有賀傳『日本陸海軍の情報機構とその活動』（近代文芸社，1995 年）

有末精三『有末精三回顧録』（芙蓉書房，1974 年）

今井武夫著，高橋久志・今井貞夫監修『日中和平工作：回想と証言 1937-1947』（みすず書房，2009 年）

犬養健『揚子江は今も流れている』（文藝春秋新社，1960 年）

海野福寿ほか編『陸軍登戸研究所：隠蔽された謀略秘密兵器開発』（青木書店，2003 年）

小俣行男『〔現代のドキュメント〕侵掠――中国戦線従軍記者の証言』（徳間書店，1982 年）

影佐禎昭「曽走路我記」（人間・影佐禎昭世話人会編『人間影佐禎昭』所収，人間・影佐禎昭世話人会，1980 年）

笠井孝『裏から見た支那人』（高山書院，1937 年）

北岡伸一『官僚制としての日本陸軍』（筑摩書房，2012 年）
小谷賢『日本軍のインテリジェンス：なぜ情報が活かされないのか』（講談社，2007 年）
小谷賢「日中戦争における日本軍のインテリジェンス」（軍事史学会編『日中戦争再論』，錦正社，2008 年）
斎藤充功『陸軍中野学校全史』（論創社，2021 年）
島田俊彦「日華事変における和平工作――とくに『桐工作』及び『松岡・銭永銘工作』について」上（『武蔵大学人文学会雑誌』第３巻第１号，武蔵大学人文学会，1971 年６月）
島田俊彦「日華事変における和平工作――とくに『桐工作』及び『松岡・銭永銘工作』について」下（『武蔵大学人文学会雑誌』第３巻第２号，武蔵大学人文学会，1971 年 10 月）
杉田一次『情報なき戦争指導：大本営情報参謀の回想』（原書房，1987 年）
大本営陸軍部「昭和 12 年 12 月　時局に応する対支謀略に関する指示（写）」（1937 年 12 月）（JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C12120350900，防衛省防衛研究所）
塚本誠『ある情報将校の記録』（芙蓉書房，1979 年）
戸部良一『日本陸軍と中国：「支那通」にみる夢と蹉跌』（筑摩書房，2016 年）
戸部良一『戦争のなかの日本』（千倉書房，2020 年）
中野校友会『陸軍中野学校』（原書房，1978 年），非売品
西義顕『悲劇の証人：日華和平工作秘史』（文献社，1962 年）
西浦進『昭和陸軍秘録』（日本経済新聞出版社，2014 年）
秦郁彦『日中戦争史』〈復刻新版〉（河出書房新社，2011 年）
畑俊六「畑俊六日誌」（伊藤隆ほか編『続・現代史資料』第４巻〈畑俊六日誌〉，みすず書房，1983 年）
伴繁雄『陸軍登戸研究所の真実』（芙蓉書房出版，2001 年）
保阪正康『昭和陸軍の研究』下（朝日新聞出版，2018 年）
堀栄三『大本営参謀の情報戦記：情報なき国家の悲劇』（文藝春秋，1989 年）
堀場一雄『支那事変戦争指導史』（原書房，1973 年）
松野誠也「日本陸軍の情報活動器材：防諜器材・諜報器材・謀略器材・宣伝器材の実体」（『明治大学平和教育登戸研究所資料館館報』第６号，明治大学平和教育登戸研究所資料館，2020 年９月）
宮杉浩泰「戦前期日本の暗号解読情報の伝達ルート」（『日本歴史』第 703 号，吉川弘文館，2006 年 12 月）
森松俊夫編『参謀次長沢田茂回想録』（芙蓉書房，1982 年）
山田朗『兵士たちの戦場：体験と記憶の歴史化』（岩波書店，2015 年）
山本憲蔵『陸軍贋幣作戦：計画・実行者が明かす日中戦秘話』（徳間書店，1984 年）
山本武利『朝日新聞の中国侵略』（文藝春秋，2011 年）
山本武利『陸軍中野学校：「秘密工作員」養成機関の実像』（筑摩書房，2017 年）
劉傑『日中戦争下の外交』（吉川弘文館，1995 年）

明治大学平和教育登戸研究所資料館　館報
第８号　2022 年度
25 － 51 頁，2022 年９月

第 11 回企画展「極秘機関『陸軍登戸研究所』はこうして明らかになった」記録
オンライン講演会②「資料館開館にむけての明治大学の取り組み」

山田　　朗
明治大学平和教育登戸研究所資料館長

はじめに

今日は，第 11 回企画展記念オンライン講演会の２回目です。３月に第１回目として渡辺賢二先生に，この資料館のできるに至った経緯，特に市民運動や，高校生たちとの関わり，それから登研会の皆さんとの関係について詳しくお話いただきました〔渡辺賢二「講演会　登戸研究所掘り起こし運動 30 年のあゆみ」『明治大学平和教育登戸研究所資料館館報』第７号所収〕。今日は，私，山田が，資料館開館にむけての明治大学の取り組みについてお話いたします。明治大学の取り組みといっても，市民運動があり，そして明治大学の取り組みがありましたので，それを順番にご説明します。

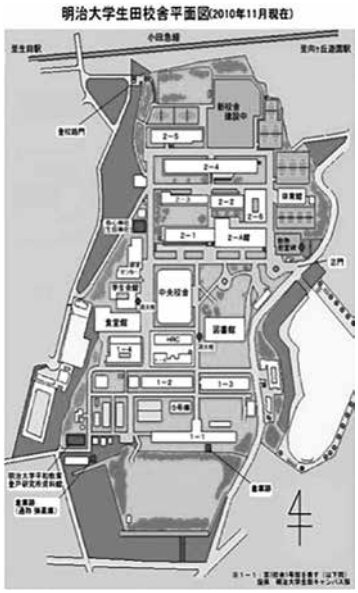
明治大学の平和教育登戸研究所資料館が開館したのは，今から 11 年前，2010 年３月 29 日です。今日は，１番目に，その開館に至る大学内での混乱，紆余曲折と，その間になされた，どのような資料館を作るのかという議論についてご紹介します。

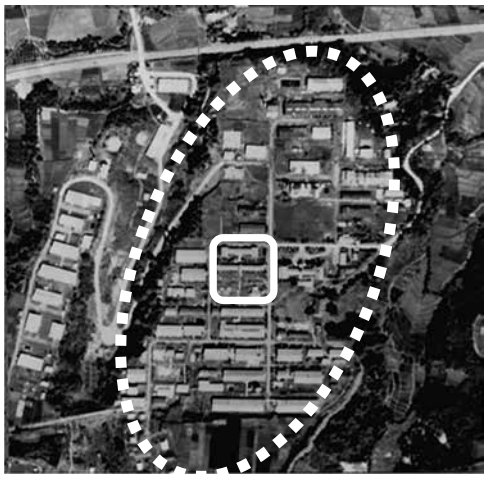
２番目には，やはり大学だけで作ったのではないこと，つまり，川崎市の行政があり，市民運動があり，そして遺跡の所有者としての明治大学，それに加えて，遺跡の関係者･登研会〔資料館註･元登戸研究所勤務員有志で結成された親睦団体〕など登戸研究所に勤めていらっしゃった方々の四者が連携し，戦争遺跡の保存・活用を模索した結果，この資料館があるのだということをお話します。

１　明治大学による用地・建物の取得

現在の生田キャンパスは**第１図左**のようなものですけれども，かつて終戦直後の登戸研究所は**第１図右**のような感じでした。**第１図右**点線枠内が現在の明治大学のキャンパスになっています。中央校舎が今ある場所はこの辺り〔**第１図右**四角枠内〕です。この付近に，登戸研究所の本部・本館があり，その前にヒマラヤ杉。これは航空写真にも写っています。戦後も登戸研

究所の建物はほとんど残っていました〔**第２図**〕。例えば，こちらの方は，現在西三田団地や生田中学校になっているところですけれども，この〔**第２図**点線〕辺りを境に，明治大学です。ここ〔**第２図**矢印先〕に写っているのが現在の資料館です。

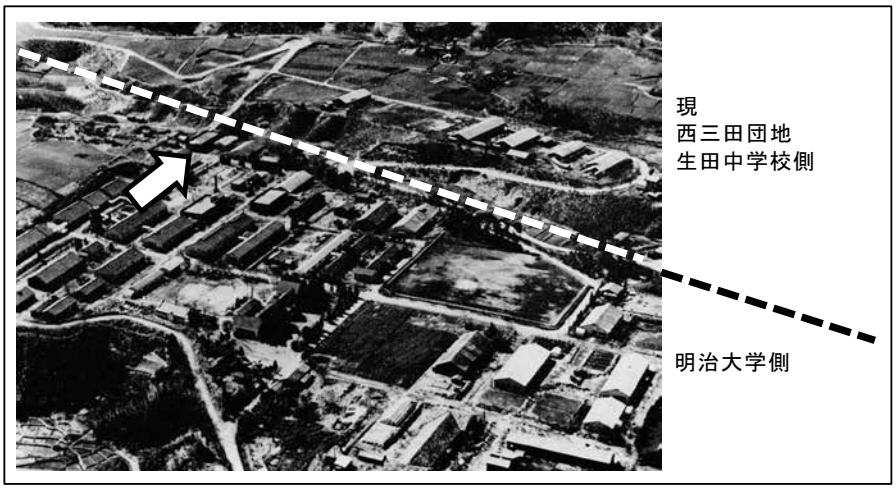




1947 年　GHQ 撮影　航空写真
（国土地理院所蔵，資料館加筆）

第１図　現在の生田キャンパス（左），終戦後の登戸研究所（右）

このように，戦後も登戸研究所の建物というのは，そっくりそのまま残っていました。これは 1960 年代に撮られたキャンパス内の写真です〔**第３図**〕。ここに写っている建物は，全て登戸研究所時代に建てられたものでした。現在すべての建物が老朽化のために取り壊されて新しい建物になっていますけれども，面影があるのは，ここにあるヒマラヤ杉です〔**第３図**点線内〕。ですから，これは南の方から北に向けて撮っていますが，その前にある建物というのは，登戸研究所の本部・本館だった建物で，戦後は明治大学の図書館として使われていました。ここに写っている建物は全てが木造平屋建てです。これは登戸研究所時代の建物の一つの特徴です。コンクリート造りの建物も７棟ばかりありました。



第２図　1954 年に撮影された生田キャンパスの木造建物群
（明治大学所蔵，撮影者不詳，資料館加筆）

第３図　1960 年代生田キャンパスの木造建物群
（吉崎一郎氏撮影，資料館加筆）

その内一つが現在の資料館になっている建物です。

これは今, 少し説明した, 明治大学では図書館として使われていた建物ですけれど〔**第４図**〕, 後ろにヒマラヤ杉が見えます。元々この建物は，日本高等拓植学校時代の学校の本部で，それがのちに，登戸研究所の本部・本館となりました。ですから，この建物は，拓植学校，登戸研究所，それからその次に慶應義塾大学，そしてさらに明治大学というように，ずっと使われ続けてきたということになります。

明治大学が，この用地を取得したのは 1950 年です。終戦からそれまでの間は，この土地は

第４図　1966 年に撮影された図書館　日本高等拓植学校の本部，のちに登戸研究所本部本館として使用された建物
（吉崎一郎氏撮影）

慶應義塾大学, あるいは北里研究所, 巴川製紙などが利用していました。元々陸軍の施設があったところなので国有地でした。そこを借用する形で，こういう学校や機関がしばらく使っていました。そしてその国有地を，明治大学が払い下げてもらったのが 1950 年。そして 1951 年度より，農学部のキャンパスとして使用が始まりました。元々，明治大学は農学部のキャンパスを探していました。戦争中に，農学部の前身である農業専門学校というものがあったのですけれど，それは千葉県の誉田（ほんだ）というところにありました。それを，現在の生田の地に移して，本格的な農業研究，新制大学になってからは，農業専門学校が農学部となって，この農学部の新しいキャンパスとして，生田が使われるようになりました。当初，明治大学が取得した土地には，建物が 89 棟，そして土地はおよそ３万坪ありました。現在，明治大学生田キャンパスは５万坪ぐらいありますので，その後少しずつ，買い足していったということです。

1970 年代になりますと，キャンパス整備のために，古い登戸研究所時代の建物が次々と取り壊されていきます。そして 1990 年代半ばには，元々，登戸研究所の第三科，偽札関係の建物だった５号棟，26 号棟といった木造の建物２棟，それから第二科，毒物・薬物などをやっていた 36 号棟，44 号棟という鉄筋の建物が２棟。そして弥心神社，動物慰霊碑，消火栓，それから弾薬庫といわれる倉庫，これらを残すのみとなりました。現在では，登戸研究所時代の建物は，明治大学時代から 36 号棟と呼ばれる，現在の資料館のみとなっています。

2　登戸研究所に関する調査・研究

登戸研究所に関する調査・研究というのは，例えば，戦後にジャーナリストによる調査や，登戸研究所に勤めていた旧軍人の方による回想や証言というものが，主に1980年代になると行われます。これは第11回企画展のパネルをご覧になると分かるかと思いますが，米軍による占領が終わると，関係者も少しずつ証言するようになります。最初は風船爆弾を中心にした証言が出ました。そして偽札の証言。そして最後に，第二科です。第二科に対する証言が遅くなったのは，やはり戦争中に人体実験という，非常に暗い歴史があったからだと考えられます。しかし80年代になると，元所員たちも集うようになりまして，彼らの中で「登研会（とけんかい）」という組織，親睦団体を結成します。それが1982年のことです。

それと前後して，川崎の市民や高校の先生，あるいは登戸研究所が敗戦直前に移転した長野県の伊那の人たちによる調査が始まります。ここで非常に重要なのは，1989年という年です。この年は平成元年です。昭和が終わって，平成に変わった年に，こういう市民運動や高校生たちの調査の結果，元所員である伴繁雄さんたちの証言がここで引き出されます。それから，川崎では第二科の元タイピストの方が所持していた書類の綴り『雑書綴』が発見されて，ここから登戸研究所の実態研究，調査というのは飛躍的に進歩していくわけです。

こうした中での市民と大学関係者との連携ということですが，端的にいうと明治大学の中にある建物の取り壊しをめぐって，大学と市民との間でいろいろ話し合いが行われるという流れになります。1994年に，明治大学は登戸研究所の建物であった第三科が使っていた偽札の倉庫と思われる26号棟という建物の取り壊しを決定します。それに対して，明治大学の中でも，学生や教職員の有志が「旧陸軍登戸研究所の解体に反対し保存を求める会」を結成して，その共同代表に文学部の海野福寿教授，それから経営学部の森恒夫教授が就任しました。これは保存運動中では大きな事件で，それまで行政，市民，それから登研会という形で進んでいた保存運動が，学内，大学の中からも，発信されるようになったということです。この海野先生や森先生たちは早速，95年に明治大学内において調査研究を本格的にやろうと大学から研究費をもらって，調査研究チームを結成します。「旧陸軍登戸研究所の総合的研究：十五年戦争におけるその意義」というテーマで３年にわたって研究を行います。

【資料１】〔本稿 p.49〕が，３年間にわたる研究成果の主なものです。元々，登戸研究所時代にあったものがどんどんなくなっていくので記録を残しました。

〔１〕登戸研究所が敗戦間際に分散疎開しました。その各地に分散した建物が，まだこの頃では残っているところがありまして，そういう物の記録・保存をしました。それから，第二科が人体実験をやった南京病院，偽札を散布した上海の阪田機関本部，こういうところを取材し，スライド記録を作成しました。

〔2〕元所員の方の証言を基に第三科の疎開先を調査しました。偽札は最後まで生田・登戸で作ってはいましたが，福井県の武生（たけふ）や粟田部（あわたべ）などにも疎開準備をしていました。ここでは「北陸分廠」として製紙工場を接収したりしています。疎開との関連で第三科がどのようになっていったのかということを調査しています。

〔3〕「関西分廠」，これは兵庫県の小川村です。これを調査いたしました。

〔4〕元所員の証言を基に，この登戸研究所で保管されていた書籍が静岡大学工学部（浜松市）にあるとわかり，その調査をしました。「登戸研究所」という蔵書印がある書籍が約 1,000 冊発見されました。何故，静岡大学工学部に寄贈されたのかというと，これは伴繁雄さん（元第二科第一班長）の出身校だったという縁があるようです。

〔5〕現在第三展示室に展示している『雑書綴』です。第二科の元タイピストだった方が，非常に大切に保管されていたこの『雑書綴』を，全文コピーし製本して中を確認できるようにして，資料館になってから，誰でも閲覧できるようにしました。

〔6〕これらの様々な多岐にわたる研究成果をまとめた『陸軍登戸研究所：隠蔽された謀略秘密兵器開発』という本を，2003 年に青木書店から刊行いたしました。それまでに，登戸研究所に関しては関係者の回想や，ジャーナリストによる研究もありましたが，総合的な学術研究という点では，青木書店から出たこの本が最初だろうと思います。もちろんその前に，木下健蔵先生のご本（『消された秘密戦研究所』（1994 年））も出ているわけですけれども，そういう研究成果を踏まえて，当時の最新の研究成果を盛り込んだ物になりました。

3　明治大学における登戸研究所保存・活用の取り組み

90 年代の終わりから 2000 年代初めにかけて，まだ建物がいくつか残っていました。**第５図**が先程，94 年に解体することが一旦決定された 26 号棟です。これは 2007 年の撮影ですが，相当老朽化していることが分かります。最終的にこの建物は 2009 年に解体されましたが，一部の部材が保存されています。この建物は，登戸研究所の第三科，偽札を製造していたセクションで，出荷前の偽札を蓄えておく倉庫だったといわれています。**第６図**は５号棟です。このアングルの写真は，随分いろんなパンフレットなどにも使

第５図　26 号棟（2007 年５月撮影）
偽札を出荷するための倉庫（2009 年老朽化のため解体）。

われて，非常に有名になった建物ですが，偽札の印刷工場だった建物で，西洋トラス構造といい，中に柱がなくて，非常に広く使える空間ができるという構造の建物でした。中がいくつかに仕切られて，印刷機が置かれていました。残念ながら資料館ができた後，この建物も，2011年２月に老朽化のため解体されています。**第７図**も５号棟を，北東側から撮った写真で，このように草が生えてしまっていて，中は相当痛みがひどい状態でした。この写真の右下は防火水槽で，ここからたくさん草が生えているという状態でした。実際建物の中は，ほとんどは物置のようになっていましたが一部は研究にも使っていました。実際に老朽化したとはいっても，比較的物のある，戦争中でも太平洋戦争以前，多分太平洋戦争に踏み込む以前に建てられた建物だと推定されていて，かなり丈夫な造りになっています。

第６図　５号棟（2007年５月撮影）

第７図　北東側から見た５号棟
５号棟は偽札が印刷された工場と推定されている
（2010年撮影，2011年２月老朽化のために解体）。

第８図は弾薬庫といわれる施設で，２か所あります。資料館のすぐ裏手にもありますが，こちらは普段目に付かない農学部の１号館の裏にある弾薬庫です。「○○同好会」という字が見えますけど，なんとこういうところをクラブに割り振って，学生に使わせていた時代がありました。これは現在でも残っています。

第８図　農学部１号館裏の「弾薬庫」（2007年５月撮影）

第９図は，どこの建物かと思われるかもしれませんけれども，現在の資料館（36号棟）です。第二科の生物兵器の研究棟で，明治大学になってから白い塗装がされていました。内部は**第10図**のような感じで，これは現在の第一展示室です。流しが現在でも残っていますけれども，実際，現役の実験室・研究施設として使われておりました。**第11図**のように，びっしり，いろいろな実験機材が入っていて，壁面がタイル張りになっているのがわかります。これは元々

タイル張りになっていたわけではなくて，明治大学が使用するようになってから，おそらくいろいろな薬品が飛んだりするという関係もあったのでしょう，タイル張りの壁面になっていました。資料館に改装する時に，このタイルの部分は取って，実際の壁面を出しています。

第９図　36 号棟：第二科生物化学兵器研究棟
（2007 年 5 月撮影，現在の平和教育登戸研究所資料館）

次に資料館を作るに至る経緯について説明します。明治大学による保存･活用方針は，正式には 1998 年に決定されました。94 年，95 年と保存を求める会ができたり，総合研究が始まったりしましたが，大学自体の動きとしては，98 年に，当時の戸沢充則学長が登戸研究所跡地の保存・活用方針を打ち出します。これが大学としての最初の大きな動きといえます。この戸沢先生は文学部の考古学専攻の先生で，戦争遺跡の保存についても関心をお持ちでした。そして，この学長方針に基づき，98 年の 2 月 14 日付で学長室が出した文書「旧登戸研究所の保存・活用について」が残っています。これは大学の意思決定としては一番古いものと考えられています。この学長室の方針によると，記念碑を設置した小広場を作るということと，生田キャンパス内施設に資料室を設置するということ。しかし老朽化のため 26 号棟は解体，とある意味セットという形で，登戸研究所の遺跡を，何らかの形で後世に伝えていくということを，この時大学として初めて方針を打ち出しました。

第 10 図　36 号棟の内部
（2007 年撮影，現在の資料館第一展示室）

第 11 図　36 号棟の内部
（2007 年 5 月撮影）

そして，翌年，99 年にこれが動き出します。当時の農学部長が委員長となり「登戸研究所跡地の保存及び活用に関する検討委員会」が設置されました。何故，農学部長が委員長になるかというと，この登戸研究所関係の遺跡の多くが，農学部のエリアにあったからです。この当時，既に生田キャンパスは北

半分が理工学部，南半分が農学部という使い分けになっていて，その南半分に登戸研究所関係の遺跡がかなり多くありました。それから，残された建物のすべてが農学部のエリアにあったので，この検討委員会ができました。そして，コンクリート製の44号棟の取り壊しが進められましたが，それ以外の残存している建物の保存・活用を検討しました。

ここで初めて，「平和資料館」という名前が出てきます。つまり平和教育の場として先程の木造の5号棟，あるいは36号棟，現在の資料館を活用すべきだと，ようやく大学としても平和教育の場として，この登戸研究所の遺跡を保存し，活用していこうということが99年段階で明確に打ち出されるようになります。そしてこの委員会では，明治大学創立120周年にあたる2001年に展示施設をつくる，それからモニュメントをつくる，ということを決定しました。この検討委員会で，結局結論に至らなかったのは，「平和資料館」にするのは5号棟なのか36号棟なのか，それとも両方なのかという争点。両方の場合どう使い分けるのかなどの点で結局結論が出せないまま，次の事態が起こってきます。しかし，ここで重要なのは，この時点で登戸研究所の遺跡を平和教育の場として活用していこうという基本方針ができたということです。ですが，その場所をどうするかということが最終的になかなか決まりませんでした。

ところが，この後事態は紛糾，2000年に明治大学の学生自治会と生協と，大学との間で，対立が非常に激化するという事件が起きます。当時は各キャンパスごとに大学祭が行われていて，大学側での学生関係の所管が学生部でした。この部署がこれら学生運動とこじれた関係になったので，大学祭の中止が決定されました。それに伴い，学生関係の所管責任者である学生部長が，何者かによって襲撃され重傷を負うという，大変な事件が勃発しました。実際そういう暴力事件が起き，当時の山田雄一学長（経営学部教授）は「学内正常化」が優先だとのことで，登戸の保存活動を一旦凍結します。

というのは，この学生運動，自治会とか生協の人たちも，非常に熱心に登戸保存運動をやっていました。「学内正常化」とは要するに，ここでいう学生自治会とか生協との関係を一旦清算するという考えです。ですから，彼らのやっている全ての運動をバックアップしないということになり，登戸保存活動というのは大学の営みとしては凍結されることになりました。

それに対して，学生教職員，学生自治会や生協なども加わっていた「保存を求める会」ですが，生田の生協が中心となり，5号棟内に，「登戸研究所ミニ展示室」を独自に設置して，元勤務員を講師に迎えた講演会などを開催し，大学とは別に，保存運動を継続していくことになりました。ですから，登戸保存運動が決して火種ではないものの，たまたまそれに当っていた人たちと，全員ではありませんが，その保存運動を行っていた自治会や生田生協の人たちと，大学との関係が極めて険悪な状態になってしまったために，この保存活動は完全に凍結されることになりました。これは明治大学にとっても，非常に不幸な時代であるといえます。

それが変わったのが，2004年です。学長が変わりました。学長が変わる前に，「学内正常化」

といいましょうか，大学は，それまでの学生自治会や生協と絶縁しました。そういう新しい関係になり，今度は登戸の問題を別個に考えられるようになりました。法学部出身の納谷廣美学長が 2004 年に就任して，登戸研究所跡地の保存活用方針というのを再度表明します。ですから戸沢学長が進めた路線を継承する形になりました。そして，非常に大事なのは，この 2005 年に，登戸研究所に勤めていた元勤務員の方々が作っている登研会の会長の山田愿蔵さんから，学長宛に「施設保存・資料館開設」を求める手紙が届いたことです。これは，事前に登研会の事務局長，それから渡辺賢二先生，明治大学の海野教授や森教授らが懇談して，関係者の高齢化などによって保存・活用の具体化を急ぐ必要があるということを，皆さんで確認をし，その結果，この山田愿蔵会長からの学長宛の手紙となったわけです。

それがこの手紙〔**【資料２】**，本稿 p.49〕です。「戦後六〇年たった今日，あの戦争の風化現象が進んでいます。私たちが行っていた研究や製造した兵器について何一つ明らかにされないまま埋もれようとしています。私たちの歴史そのものが消し去られようとしています。私たちは，例え，当時は秘密の研究所であっても事実は事実として残し，歴史の審判を受けるべきだと考えています。そこで，以下の点をご要請します」ということで，「１，陸軍登戸研究所当時の戦跡をできるだけ保存していただきたい」。「２，陸軍登戸研究所当時の資料を展示・公開することができる資料館をつくっていただきたい。なお，この点に関しては私たちは当時の資料の提供など，ご協力いたします」。こういう手紙が学長宛に届けられました。2005 年 10 月のことです。これが一つの大きな弾みとなって，ここに書いてあるような資料館を作っていこうという流れができあがりました。

この手紙の翌年，いよいよ具体的に明治大学では，「登戸研究所明治大学展示資料館（仮称）の設置に関する検討委員会」が設置されました。委員長は坂本恒夫教務部長。こういう資料館は，どちらかというと博物館の系統ですから，本来は教務部長が担当することではないのですが，この展示資料館は平和教育を行う為の教育施設なのだという位置づけで，教務部長の管轄になりました。そして「展示資料館」は 2009 年度までに設置することを決定します。

ここで，この検討委員会でも議論となったのは，明治大学が設置すべきものなのかの是非，が一つです。つまり，登戸研究所というのは旧陸軍のものですから，別に明治大学ではなく国がやるべきことではないかと。それはもっともな話ですが，おそらくこれは国に任せておいても実現性はないということで，やはり所有者である明治大学がやるしかないのではないかというところに落ち着きました。

それから，設置理念をどうするかということ。登戸研究所というのは，秘密戦のための機関ですから，人道上，あるいは国際法規上，やはりいろいろと問題もあります。それを，顕彰することではないだろう，ということです。科学技術が戦争に利用された時に，得てして歯止めがなくなってしまうことを自戒するような場として位置付けるべきではないかと。登戸研究所

の技術はこれ程高かった，という話ではなく，戦争との関係でどんどん人間性を失ってしまうということを，展示の，資料館設置の基本理念にしたらどうか，というようなことです。

実は，意外に強く議論されたのは，こういった資料館は「需要」があるのだろうか，ということです。私もこの仕事に関わっていて，どちらかというと表向きの会議の場ではないところではひそひそと，「こんなものを作っても誰も見に来ないのではないか」という話があちこちで聞かれました。凄く印象に残っているのは，「作っても，何年かすると廃墟になってしまうのではないか」というような声がささやかれていたということです。余りに特殊な資料館ですから，そんなものを作っても，誰も見に来ないのではないか。正直な話，見に来ない物を作っても結局役に立たず次第に廃れてしまうのではないか，という見方をする雰囲気もありました。

しかし，資料館を作るという方針は決定されて，それをどんどん具体化していこうと，2007年の３月に，先程の「検討委員会」のもとに，「登戸研究所明治大学展示資料館（仮称）展示専門委員会」が設置されました。私が委員長になり，具体的に展示を考えていくことになりました。そして同年６月に，「展示専門委員会」は中間報告で，資料館の基本コンセプトを示しました。以下の３点です。

① 36号棟を展示資料館として保存し，登戸研究所の全貌を伝える歴史教育・平和教育・科学教育にふさわしい施設とすること。

②登戸研究所に関する資料・文献・証言を収集すること。つまり登戸研究所がどういうものであったのかということを展示するだけではなく，今後も登戸研究所に関する資料や証言を収集する，そうした調査研究機能を，この資料館に持たせるということ。

③平和教育の発信地として，明治大学における研究・教育に役立てるとともに一般に公開すること。明治大学の中の研究教育に役立てるということは勿論ですけれども，広く一般に公開して，戦争と科学技術の関係を訴える場，発信地とするということ。

こういった基本理念を作って，学内でまず同意を得なければいけないので，この６月に「展示専門委員会」は，生田キャンパスで実際にその遺跡を見る現地見学会と，こういったものを作りたいんだ，ということを説明する講演会・展示資料館説明会を開催しました。生田キャンパスは当事者ですし，実際に建物を使っている先生方もいらっしゃったので詳しく説明しました。例えば36号棟を使っている先生方は，一時そこから研究機材を引き上げて，別に移さないといけません。そういう点でやはり理解を得なければならず，説明会が行われました。

そして，2008年，この年に学長選挙がありまして，異例なことですが，納谷学長は「登戸研究所問題の解決」を選挙公約にしました。そして再選し，「登戸研究所問題の解決」として，基本的には登戸研究所に関する遺跡の保存活用というようなこと，同時に，残された建物，36号棟は資料館としていく，という流れに加え，他の５号棟や26号棟などの処遇も自分の代で解決するのだ，という意向を示しました。そして直ちに，「登戸研究所展示資料館（仮称）」を，

生田キャンパス内の旧登戸研究所施設である36号棟を改装して開館するということが正式決定されて，2008年6月，展示資料館（仮称）設置の学内調整ワーキンググループが作られました。これは大学の中のいろいろなセクションが共同しないとできないので，こういう物を作りました。元々は，単に博物館の分館のような形であるならば，博物館と建物を管理する施設課だけで良かったのです。しかし，平和教育の理念を実現するための機関ということで，大学の教務の中心の部署である教務事務室，建物づくりの施設課，資料館作りのノウハウを持つ博物館，新たに設置される設立準備室でワーキンググループを構成し，毎週のように会議を開いて，「ここまでできた」「もっとこれをやらなきゃだめだ」ということを，お互いに確認をする作業が行われていきます。

そして，同年7月，登戸研究所明治大学展示資料館（仮称）の設置準備室が，駿河台の研究棟に設置されました。基本的に展示の内容については，この準備室がアイデアを出すことになりました。資料館にする36号棟の改装は施設課が担当し，展示企画は準備室が行い，展示施工は博物館展示の専門業者の乃村工藝社にお願いをして，こうした連携のもとにやっていくわけです。準備室は**【資料３】**〔本稿pp.49-50〕のような陣容でした。準備室長を私がやりまして，展示の総監督といいましょうか，別に総監督という名前が付いていたわけではないですが，渡辺賢二先生に全体を監督していただきました。そしてその補佐が，渡辺先生の教え子で，当時兼任講師だった齋藤一晴さん。齋藤さんは高校時代に渡辺先生の下で登戸の調査もやった経験があり，大学院から私のゼミに参加をした人でしたので，渡辺先生を補佐する形で齋藤さんにやってもらうことになりました。そして準備室の学芸員として，都合4名の方にお願いし，この方々には準備室の事務的なことや資料の管理を担当していただきました。

そして，展示制作の担当責任者をそれぞれ割り振りました。レストスペースは，今入るとすぐにモニターなどが置いてある場所で，時代背景を説明する場所です。実はこれ，当初，案にはありませんでした。しかし，施設課の方から，いきなり秘密戦のことを説明するといっても分かり難いだろうから，時代背景を説明する場所がいるのではないかという提案がありました。もっともなことなので，そこでは明治大学の写真を使ったり，川崎の写真を使ったりして時代背景を説明するという場所を作って，学芸員の森麻弥さんに担当していただきました。

資料館に，全部で五つ展示室があるのは36号棟の元の部屋割りを生かしたものです。登戸研究所時代の間取りに復元をしました。実は明治大学は，ひとつの部屋に間仕切りを置いて，ふたつに分けて使っていたのですが，間仕切りは全部取り払い，元々の登戸研究所時代の部屋を再現して，５つの展示室にしました。

第一展示室では登戸研究所の全容，歴史についてです。ここは山本智之講師にお願いをしました。第二展示室，これは風船爆弾を中心とした第一科です。担当は小山亮さん。当時博士課程後期の大学院生でした。第三展示室が吉葉愛さん。第二科です。毒物・薬物。第四展示室が

偽札関係，第三科です。担当は酒井晃さん。そして第五展示室，大戦末期と戦後が本庄十喜さん。こういう方に担当していただいて，その他，当時，私のゼミの大学院生だった方々にも参加していただきました。こういうチームの下に展示の案を作り，そして具体的にどのようにパネルを作るかというのは，プロの乃村工藝社にお任せをしました。仮に作ってディスカッションをし，また改善する，ということをやりました。これが結構大変で時間もかかりました。

少し前に戻りますが，作業にあたってはいろいろと問題点がありました。というのは，登戸研究所に関して共通認識がないということです。そもそも「登戸研究所とは何か」ということについて，詳しい知識がある人はほとんどいませんでした。ですから，展示をするにあたって，何をポイントにしたらよいのかというのは，渡辺賢二先生に教えを乞いながらやっていくということになります。準備室の中でもそうですから，そのほかの教務課とか，施設課とか，他部署の人たちは全然分からないわけです。ましてや乃村工藝社も，登戸研究所については全く予備知識がないということで，ディスカッションをしながら共通認識を作ってやっていきました。しかし，そうはいっても，わからないことがたくさんあるわけです。ですから，調査研究をしながら展示を作成しました。今になってみるといろいろと分かってきたこともありますけれども，当時はまだまだ分からないことがたくさんありました。展示をするというのは具体的に見せないといけないわけです。ですから，言葉で書くことはできても，具体的にどのようなものだったのかというイメージを喚起することが非常に難しいわけです。展示物が文字ばかりになってしまうと訴える力が逆に弱まってしまいますので，ここは非常に苦労しました。また，実物資料の不足というのも大きかったです。やはり資料館の中心になるのは実物資料ということになりますが，実物資料がほとんどありませんでした。現在資料館に行かれますと，例えば濾過筒なども展示されていますが，設立当時はそういったものがまだありませんでした。ですから，多くの資料を，渡辺賢二先生からの寄贈に頼っていました。渡辺先生は，ずっとご自分で，ご自身のお金を使って，たくさんの資料を集めておられました。それを，この資料館ができるにあたって，無償で寄贈していただいて，私たちはそれを活用させていただいています。もしそれがなかったら，本当に物が無い資料館になってしまった可能性があります。

実は学内混乱の後遺症というのが意外にありました。というのは，やはり登戸の保存というようなことをスローガンに掲げていた人たち，非常に急進的な政治セクトの人たちに対する反発も学内にありまして，登戸の保存とか展示とかを言った時に，どうしてもそこと直接結びつけて考えてしまうような方も決して少なくなかったのです。ですから，なかなかギクシャクしてしまうといいましょうか，要するに「登戸というのは，ああいう運動をやっていた人の名残なんだ」という誤解もあって，それを理解していただくまでに結構時間がかかったと思います。この辺りは，意外に長く尾を引いた問題です。

紆余曲折あったのですが，準備室の皆さんの大変な努力と，寝食を忘れた献身的な働きがあっ

て，2010 年 3 月 29 日，つまり元々決定した 2009 年度の最後，ギリギリ年度の内に資料館が開館しました。実は，開館の式典をやっている最中も中は工事をしている状態でした。

この資料館の特徴として，設置された時は博物館の分館ではなくて，教務部管轄機関として開設されたということが挙げられます。明治大学には明治大学博物館という立派な，駿河台にある博物館があります。考古学，刑事，それから商品という，三つの博物館が一緒になって大きな博物館を構成しています。本来ならばその分館的なものとして登戸研究所資料館があってもおかしくはないのですが，設立の経緯が，平和教育のための機関なんだと，もちろん博物館も，いろんな形で歴史教育だとか，そういうところに資するところは大きいのですけれども，とりわけ平和教育の発信地としてやっていくんだという理念から出発したという関係もあって，教務部が管轄するという大学の組織としてはやや変則的な形になりました。

開館記念式典の時に，当時の納谷学長がこんなことをおっしゃっています。**第 12 図**は開館式典の様子ですが，資料館の前に，手前から当時の農学部長，それから学長，理事長，理工学部長，そして一番奥でかしこまっているのはこの式典の司会の私です。

第 12 図　明治大学平和教育登戸研究所資料館の開館
（2010 年 3 月 29 日　右から田畑農学部長，納谷学長，長堀理事長，三木理工学部長（いずれも当時））

【資料４】〔本稿 p.50〕は，開館にあたっての納谷学長のスピーチです。前段で，有名なヴァイツゼッカー西ドイツ大統領が 1985 年に行った演説から「過去に目を閉ざす者は，現在にも盲目になる」という言葉を引用したうえで，このように述べました。「人びとは，ともすると辛い過去（戦争はその最たるものといえましょう）に目を瞑り，忘却しがちです。しかし，人類の過ちを忘却させないためには，日常的に，目に映る形で過去に向き合うことが必要かつ適当であると思います」。ということで，目に見える形，ということが大事な所だと思います。最後の段落「この意味においても，私どもは，生田キャンパスに旧陸軍の登戸研究所があったことに加え，このキャンパスが理系のキャンパスであることをも考え合わせ，この地に登戸研究所資料館を開設し，平和教育を展開する「場」を得た意義は，まことに大きいものと考えております」ということで，ここでも資料館が平和教育を展開する場であると位置付けられているわけでして，まさに教育機関なのである，ということがここで述べられています。

4　登戸研究所資料館の意義

現在でも，明治大学の構内にはいくつも遺跡が残っています。登戸研究所時代の弥心神社，現在の生田神社です。動物慰霊碑。動物慰霊碑の裏面には，はっきりと「陸軍登戸研究所建之」と彫りこんであります。陸軍の星のマークの入った消火栓が２基あります。先程ちょっと見ていただいた弾薬庫と，もう一つ資料館裏手の弾薬庫，倉庫です。研究所本館前に植えられていたヒマラヤ杉，これは日本高等拓植学校時代からのものですけれども，まさにその長い時代を目撃してきたものとしてこのヒマラヤ杉があるということです。

弥心神社（現・生田神社）

動物慰霊碑
（表面）動物慰霊碑
篠田鐐書
（裏面）昭和十八年三月
陸軍登戸研究所建之

陸軍の星のマークが入った消火栓

通称「弾薬庫」（倉庫）

ヒマラヤ杉

第 13 図　明治大学構内に今も残る登戸研究所の遺跡

そして，この資料館です〔**第 14 図**〕。当時の面影を可能な限り残しつつ，少し塗り替えたりしたので何か新しい建物のように見えるところもありますが，この建物は明治大学生田キャンパスだけではなく，明治大学の中にある建物の中でも多分一番古い建物です。1940 年前後に建てられていると推定されますので，建てられてから 80 年以上，経っているということです。ですからこの建物自体が，非常に重要な遺跡であるということです。そういうこともあって，この建物を保存し，且つ活用していくということで，この登戸研究所資料館は成り立っていると言えます。この資料館を始めとして，生田に残っている戦争遺跡は，川崎市地域文化財として認めていただいていますし，かつて文化庁が，2003 年だったと思いますが，近代遺跡の調査，特に戦争遺跡の調査を行った時にもその対象になっています。ですから，全国的に見ても非常に貴重な遺跡と言えます。

第 14 図　36 号棟（生物兵器開発）＝登戸研究所資料館
（2010 年 3 月開館）

この登戸研究所資料館，あるいはこの戦争遺跡の保存の意義ということを，最後にまとめておきたいのですが，この資料館自体は旧日本軍の研究施設をそのまま保存活用した資料館とし

て唯一の事例です。旧陸軍の施設を資料館にしたという事例はあるのですが，研究施設をそのまま保存・活用したという点では，多分唯一の事例です。今申しましたように，資料館そのものが非常に重要な戦争遺跡であるということです。

大学キャンパス内の戦争遺跡を保存・活用した数少ない事例。実は大学には，多かれ少なかれどんな大学でも，何らかの形で戦争時代の遺跡というのはあるのですが，戦後取り壊されてしまったり，十分に検証されないままに放置されているという事例が少なくないのです。そういう点では，それをしっかりと遺跡として位置付け，資料館にしたということです。

それから，もっと大きな意義としては，歴史にはほとんど記録されていない秘密戦に焦点を当てた，日本ではほぼ唯一の資料館です。秘密戦というのは，旧陸軍の定義によれば，防諜・諜報・謀略・宣伝ということになり，これは一見すると水面下の出来事ですが，結構戦争の本質を示しているものです。つまり，手段を選ばないという点，平時・戦時の区別はなく，実は平時から戦時の準備がされているということ，それから，軍人・一般人の区別もなく巻き込んでいくということです。ですから，秘密戦というと特殊な分野のように見えるのですが，戦争を考える上では非常に重要なファクターであるということです。

そして，この資料館は登戸研究所の全貌，あるいは各科の活動の概要を実証的かつ視覚的に，学長のスピーチにもあったように，目で見える形で残しているということです。しかし，先程資料館のコンセプトのところでもお話しましたけれども，登戸研究所で開発された兵器とか資材というのは，人道的に，あるいは国際法規上，問題があるものも多いです。実際に毒物開発で人体実験が行われたという歴史もあるわけです。それを，高い技術を開発したという観点だけで評価してしまうと，大きなものを忘れてしまうということですね。やはり戦争という大義名分が与えられ，また潤沢な研究資金のもとに研究者がそれに没入していくと，結果的に倫理観や正常な人間性が失われてしまうということの事例でもあるわけです。ですから，これは昔のことだからというだけでは済まされないところがあるということですね。場合によっては，いつ繰り返されておかしくないというものです。特に，この生田は理系のキャンパスですから，やっぱり技術と戦争との関係，技術と倫理の関係ということを，多くの人に考えていただきたいということです。

それから，今日お話ししてきたことでもあるんですけれども，登戸研究所の史実発掘過程を展示しています。一般市民や高校生が，知られざる歴史，戦争の暗部を解明するきっかけを作ったと。戦争の記憶は，その当事者がどんどん減っていくわけです。その記憶はどんどん薄れていってしまうのですが，戦争以後に生まれた新しい人たちが，新しい問いを発することで，戦争体験者もまた違った考え方，気持ちになっていくということです。この登戸研究所資料館は，川崎市の行政と，市民と，それから関係者，登研会と，明治大の連携の結果できたということです。もちろん大学の中の様々な努力もあるのですけれども，それ以前に市民，登研会，こう

いう人たちが遺跡の保存・活用という土台を作ってくださったおかげで，明治大学も，そういう成果に則って資料館を作ることができたということです。ですから設置理念のところでも掲げていますが，平和教育の発信地であると同時に，地域連携の発信地なのだということで，大学が大学としてだけではなくて，その地域の人たちに支えられたものとして存在するということでもあります。なので，戦争遺跡の保存とか，戦争の記憶の継承などの際にも，常に多くの方々の意見を聞きながら，保存にあたっていくということです。その大切さを，この資料館がどうできてきたかということを振り返る中で，もう一度私たちも再確認したいと思います。

おわりに

まさに歴史教育・平和教育・科学教育の発信地として，登戸研究所資料館が作られました。とりわけ，目をつむってはいけない戦争の裏側，加害的側面も語り継ぐ。記憶継承の受け皿となっていく。つまり，ありのままに戦争をとらえようとすれば，都合の良いところだけを切り取るのではなく，非常に心の痛むところもきちんと見据えていくということです。それがないと，平和教育ということにはならないのだと思います。

それから，地域住民・教育者との連携を構築する場として，この登戸研究所資料館があるということでして，そういう歴史の中で，この資料館が形成されていったということです。この事実というのは非常に重いものがありますし，私たちもそれを継承していかなければいけないことだと思っております。

それでは，私の話はここまでとさせていただきます。どうも，ありがとうございました。

質疑応答

〔問１〕コロナで企画展を見る機会がない。オンラインでの解説付きの展示案内ができないか。

〔山田〕つい最近，解説会をオンラインでも見られるように録画しました。現在 YouTube で配信中ですので，詳細は資料館のホームページをご覧ください。この第 11 回企画展の内容について，説明をした動画を配信中です。

〔問２〕登戸研究所の歴史の掘り起こしについて，川崎市教育委員会が大変前向きに協力していたと聞くが，これに対し国や政府からの問い合わせ，あるいは圧力などはあったのか。

〔山田〕川崎市教育委員会は，平和館などもありますように，歴史の掘り起こしなどに大変熱心なところなのですけれども。特に国とか政府からの問い合わせはないと思いますし，

圧力があったとも聞きませんが，援助を受けたという話も聞きません。やはり戦争遺跡というのは，まだ国レベルでは認知されていないところもあるのかなと思います。ただこれは時代の趨勢（すうせい）で，戦争がらみの遺跡をどう保存していくかというのは待ったなしの課題ですので，これは地域だけではなくて，本当に国・政府のレベルで進めていただかないといけないところだと思います。

〔問３〕資料館設立のご苦労に感銘を受けた。設立にあたって妨害や圧力はなかったのか。川崎市の行政が協力的なのは分かったが，政治的な圧力などはなかったのか。

〔山田〕先程の質問とも重なりますが，もし，国立大学だったらなんらかの問題があったかもしれません。やっぱり私立大学であるという点が，逆に良かったのかもしれません。明治大学は，権利・自由・独立・自治という理念を掲げている大学ですので，そういう点では，なかなか外から言ってきにくいということもあったと思いますし，この資料館設立に関しては，やはり大学の当局というか，学長以下そういう信念の下に動きましたので，圧力があったとしても多分資料館の設立に動いただろうと思います。

〔問４〕資料館の理念に平和教育を加え，歴史教育・科学教育の視点を入れた経緯を教えてほしい。

〔山田〕平和教育というのは，元々，かなり以前から，戸沢学長時代からいわれていたことです。しかし，平和教育を実現していく上では，歴史教育がきちんとしていないとダメだということで，分離することができないと。平和教育と歴史教育，それから特に，この理系のキャンパスだということもあり，科学がどうあるべきだ，人間に対してどうあるべきだ，という，この観点も必要だということで，どうせ理念として掲げていくのであれば，それは落とせないだろうと。だからこの平和教育と歴史教育，科学教育っていうのは，三位一体であるということが設立過程で合意事項になったということですね。

〔問５〕保存運動は市民・行政・登研会など，学外の活動が大学内に波及したという認識で間違いないか。

〔山田〕基本的に私はそれで正しいと思います。外側から刺激を受けて，大学の中で「なるほど，そうだ」と，それを受け止めようという機運が出てきたということですよね。もちろん大学の中に個人的には，ずいぶん昔からそういうことに関心を持ったり，考えを持っていた人もいらっしゃったとは思いますけれども，やはり市民や行政や登研会の影響がなければ，なかなか大学としては踏み切れなかったんじゃないかと思います。

〔問６〕元々登戸研究所にいた勤務員や伴さん，それから山本憲蔵さんとはどのようにコンタクトを取ったのか。

〔山田〕実は1980年代に元勤務員の人たちが発言をし始め，そして登研会に集まり始めたというところと，非常に深い接触を持ったのはやはり渡辺賢二先生です。渡辺賢二先生が，

こういう方々と直接コンタクトを持つようになって，それで保存運動でも，そういう人たちの知見というか，経験，言葉，考え方を参考にするようになりました。だから，こうした登研会の人たちと保存運動の架け橋になったのは渡辺先生の功績だと思います。

〔問７〕現在コロナ禍によるもの以外で，何か課題や問題があれば教えてほしい。

〔山田〕たくさんあります。資料館は，コロナ禍になって，なんとかオンラインなどで発信をしておりますが，やはり〔実際に〕見ていただかないと分からないという部分もあるんですよね。映像で最大限，なんとかご理解いただけるようにしていますが，現物，展示を目の前にして人が人に伝えるという方法はなんといっても基本でして，それがなかなか，今実現できないということを非常にもどかしく思っています。それから，やはり大学の中にある施設ですから，大学の施設，キャンパスの開発，新しく何かを作るというような時になると，遺跡の保存ということとバッティングしてしまうことも時にはあるわけです。そこをどう調整していくのかというのも，この資料館の大きな課題です。すべてが残せれば一番良いわけですけれども，もしそうでないならば，後世から見て，何が一番良い方法なのかということをいろいろと考えていきたいと思っています。

〔問８〕海外に同様の謀略兵器の博物館はありますか。

〔山田〕実は，謀略兵器とかスパイの博物館というのは，ほとんどないんです。個人で，マニアのような人がやっている資料館というのはあるようなんですが。前にちょっとテレビの取材を受けたことがありまして，その時に聞いたことによると，一般の戦争博物館っていうのは大体どの国でもあったりするわけです。ところが，秘密戦，となると，どのように，誰をスパイとして派遣した，みたいな話は現在と結びついてしまうおそれがあるので，公にできないようなんですね。ですから，結果として資料館もない。つまり，公共性の強い性格を持ったものとして，秘密戦の資料館っていうのは非常に作りにくいところがある。この点では，登戸研究所資料館は，かなり貴重なものだと考えています。

〔問９〕私の学校の先輩が登戸研究所で働いていた。渡辺先生にいろいろと証言をしたようだ。私はその方を知りませんが，その後大阪で会社を興されたようだ。通っていた学校には印刷科・機械科があり，会社の名前が出てそう感じた。

〔山田〕このように，いろんな方から証言をいただいていて，登戸研究所で働いていた方は戦後，例えば起業して会社をお作りになったとか，戦後もいろんな所で活躍されたという情報もたくさんいただいております。私たちもなるべくそういう情報を集めていきたいと思いますので，ご存じのことがありましたら是非ご協力をお願いいたします。

〔問 10〕山田愿蔵さんの要望書にあった，歴史の審判を受けるという覚悟に感銘を受けた。開館式，もしくはその後の元所員の人たちの感想などを教えてほしい。

〔山田〕山田愿蔵さんが，学長宛にお手紙を書いていただいて，それが非常に大きなきっかけ

となって，資料館ができる，というところに進むんですよね。私たちも山田愿蔵さんに開館式典にご出席いただきたくて，とにかく開館を急ぎました。そして，2010 年の 3 月 29 日に開館式典があったのですが，非常に残念なことに一歩遅かったんです。山田愿蔵さんはそのちょっと前にお亡くなりになっておりまして，私たちはその開館式典にお招きすることはできませんでした。本当に残念なことです。

それで，ちょうどその開館直後に，私は資料館の中でこういう方に会いました。その方も登戸研究所に勤めていらっしゃった方です。今まで登戸研究所について発言はしたことはないと。ですが，その方は，こういう資料館ができたということは，もう私たちは話しても良いんですね，っておっしゃったんです。ですから，登研会に集まって，登戸研究所についていろいろとお話になる，そういう方もいらっしゃったわけですが，この資料館ができるに至っても，その時代までも，やはり話してはいけないんだと，強く自分を縛ってこられた方はいらっしゃるんですね。それを聞いた時には私もちょっと驚きましたけれども，戦争というのは，ここまで長く人間を縛ってしまうものなのだということを，本当に実感いたしました。登研会に加わった方の中には，非常に積極的に，次の世代に歴史の真実を伝えなければいけないんだっていう強い使命感で，私たちの活動にご協力いただいている方もいらっしゃいますけれども，やはり人それぞれ，戦争というものが，その人の人生にいろいろな影響をずっと与え続けたんだなということを，私もこの仕事をしていて実感いたします。

〔問 11〕元々資料館として建てられていない建物を展示施設として，また資料保存の場として利用する際に問題点や考慮された点はあるか。

〔山田〕現在登戸研究所資料館になっている建物というのは，おおむね登戸研究所時代の部屋の中を復元した形になっています。しかし，大きく変わっているところが一ヵ所あります。元々あの建物にはお手洗いがありません。昔のことですから，お手洗いは外にあったんです。しかし資料館にするのに，そのままというわけにはいかないものですから，その部分だけは改造しました。衛生上も，それからずっと学芸員として勤務する人たちもいるわけですから，その部分だけは新しくしました。しかしそれ以外のところはなるべく当時の雰囲気を残すということを第一に考えました。ですが勤務している人たちにとっては，あの建物は非常に住みづらい建物でして，特に冬はとんでもなく寒いですね。コンクリートが丸々冷えてしまうものですから。今の建物と違って断熱効果とかはあまり考えていない。天井も高いですから，少々空気を暖めてもあまり効果がないんです。そういう点では，かなり職場としては過酷です。一応展示室はエアコンをつけてはいますし，なるべく快適に見ていただけるようにはしてるのですが，元々の建物の構造上，なかなか克服しがたい点もあるということで，今後どうしていくのかという大きな課題の一つ

になっています。

それから，この資料館が現在，多くの方々のご協力の下に成り立っているわけですが，とりわけご尽力いただいているのが「保存の会」の皆さんですね。「保存の会」は，まさに大学関係者よりも古くから，この登戸研究所の保存運動をずっとやっていらっしゃった方の会で，会員もたくさんいらっしゃいます。今でも，そういう保存運動をやってこられた方の経験というのが非常に大事ですし，私たちの，これからの資料館の在り方っていうことについても，定期的に懇談会をもってご相談をして，資料館が抱えているいろんな問題点についても，包み隠さずお話をして，それで運営に活かすと。そして展示の改善に少しでも活かしていくという形にしています。ですからこれは大変ありがたいことで，大学の中だけで考えるのではなくて，まさに地域連携の場であるという，この資料館の設立の趣旨からしても，やはり「保存の会」の皆さんとの話し合いの場ないし交流の場というのは，忘れてはいけないと思っています。

〔問 12〕戦時中に登戸研究所が空襲に遭わなかったのですか。

〔山田〕結論からいいますと爆撃は受けてないです。機銃掃射を受けたことはあるそうですが，大規模な爆撃は受けていません。ですから，今日ご覧いただいたように，登戸研究所の建物のほとんどは，戦後もそのまま残っていたんですね。それで，なぜ空襲を受けなかったのかというのは，これは謎といえば謎なんですけれども，敢えてしなかったんじゃないかと思います。これは伴繁雄さんが，戦後米軍に勤めて，そこでいろいろなことを聞いたようなのですが，米軍は登戸研究所の存在はどうもわかっていたようです。いろんな思惑，つまり戦後のことを考えて，人材やデータを確保しようという意図があったものと思われます。爆撃してしまうと，人材もデータも全部ふっとんでしまいますから，敢えてそれをしなかった。川崎は激しく空襲を受けてますから，やり忘れたというような感じではないんですよね。やはりわかっていて，敢えてやらなかったのだろうと思います。そういう場所は意外にあるんです。明治大学の駿河台の校舎なんかも，近くにニコライ堂があるということと，大学の中自体に捕虜が働かされているという事情があって，爆撃を受けていないんです。そういうところでも飛び火で焼けてしまうことはあるのですが，ほとんど無差別に行われているように見える空襲も，とりあえずここはやめておこうという場所があるということですね。

〔問 13〕貴重な資料は中学，高校生への教育の機会はあるのか。

〔山田〕今，明治大学の教員・学生以外，入館できない状態ではあるのですが，コロナの状況が改善できましたら，また通常通り，どなたでも見学していただけるということになります。実際コロナ前は，中学・高校の方の見学も多くありましたので，また状況が改善しましたらお知らせします。〔資料館註･2022 年 9 月現在，事前予約制で一般の来館が可。〕

〔問 14〕長野県の駒ヶ根でも資料館設立の動きがあると聞いている。そちらとの連携・協力は。

〔山田〕これはもちろん，ずっと連携をしているところです。私が駒ケ根にお話をしにいったりとか，あるいは駒ケ根から，こちらに見学に来ていただいたりという関係もあります。今後も，実際に駒ケ根で市立博物館の中にこの登戸の常設展示を作っていこうという動きが，今強くありますので，連携・協力していきたいと思っています。

〔問 15〕戦争と科学について焦点を当てていて素晴らしい。資料館設立の推進力になったのは高校生たちの純粋な問いだったのか，あるいは高齢となった元勤務員の，今語っておかなければならないという思いだったのか。

〔山田〕これは両方です。高校生たちの純粋な問いかけが無ければ，関係者はひょっとしたら，話さなかったのかもしれないです。ここが，やはり戦争体験者だけではなく，戦争非体験者も戦争の記憶の発掘に参加できるということですよね。若い人が問いかけることで，体験者はそこでまた新しい刺激を受けて，話そうという気になったり，「いや，もっとこのように話さなきゃいけないんだ」と感じたりということがあるのです。だから，戦争非体験者の存在というのは，実は非常に大切であるということがわかります。

〔問 16〕資料館，あるいは大学で今後の保存運動や研究に対する方針・コンセプトがあるか。大学，地域の教育・研究者との連携について課題はあるか。

〔山田〕この資料館は，一応，明治大学にある博物館の中の一つであるように見えますが，先ほどもいいましたように，やはり平和教育・歴史教育・科学教育，これらを実現していく場であるという揺るぎないところがありまして，大学自体の考え方をかなり反映しているところがあります。それだけでなく，こういった新しい機関ができることで，大学自体にもいろんな新しい風を吹かせることができると思っています。今後とも，大学が大学としてだけ，その大学だけの考えだけではなくて，やはり地域との連携であるとか，広範な研究者との連携ということを，意識的に図っていく，意識的に戦争の記憶の継承ということをやっていかなければならないと考えています。ですから，皆さんからも，いろいろとご意見をいただきながら，資料館をより良いものにしていこうと思いますので，是非よろしくお願いいたします。

いただいたご質問について，一通りお答えをさせていただきました。ありがとうございます。

〔追記〕

本稿は，2021 年 5 月 15 日（土）にオンラインで開催された第 11 回企画展記念講演会②「資料館開館に向けての大学の取り組み」の書き起こしに加筆・修正したものです。

明治大学平和教育登戸研究所資料館　第 11 回企画展　記念講演会②〔1〕

資料館開館にむけての明治大学の取り組み

明治大学平和教育登戸研究所資料館長　山田　朗

はじめに

〔1〕明治大学平和教育登戸研究所資料館の開館（2010 年 3 月 29 日）
→　開館に至る大学内での混乱と議論
〔2〕**行政・市民・遺跡所有者＋遺跡関係者（登研会）が連携**した戦争遺跡保存活用の模索

１　明治大学による用地・建物の取得

〔1〕慶應義塾大学・北里研究所・巴川製紙などが利用（敗戦～1950 年）
〔2〕明治大学による跡地の取得
建物 89 棟、土地 31,218 坪を 977 万円（1949 年の申請時の価格）で取得
→　1950 年生田キャンパス開設、1951 年度より農学部が使用）
〔3〕キャンパス整備のため建物の取り壊し、改築（1970 年代以降）
→　1990 年、旧登戸研究所本部本館の取り壊し発表を契機に市民による保存運動
→　1990 年代半ばには木造建物 2 棟（5 号棟・26 号棟）・鉄筋建物 2 棟（36 号棟・44 号棟）と弥心神社・動物慰霊碑・消火栓（2 ヶ所）・「弾薬庫」（2 ヶ所）だけに。

２　登戸研究所に関する調査・研究

〔1〕ジャーナリストによる調査：斎藤充功・鈴木俊平ら
〔2〕旧軍人（伴繁雄・山本憲藏ら）による回想・証言（1980 年～）。
〔3〕元所員による「登研会」の結成（1982 年）。
〔4〕市民・高校教員（渡辺賢二・木下健藏ら）・学生と「登研会」の連携
1989 年：『雑書綴』の発見、高校生たちが元所員の証言を掘り起こす。
1990 年：川崎で「旧陸軍登戸研究所の建物を保存する市民の会」を結成。
〔5〕市民と大学関係者の連携
1994 年：明治大学、旧登戸研究所 26 号棟の取り壊しを決定。
→　明大生・教職員、「旧陸軍登戸研究所の解体に反対し保存を求める会」を結成。
共同代表に海野福寿文学部教授・森恒夫経営学部教授らが就任。
1995 年：明治大学内における調査・研究の始まり
→　大学（人文科学研究所）の研究費を使った海野教授らのチームによる調査・研究
「旧陸軍登戸研究所の総合的研究：十五年戦争におけるその意義」**→【資料１】**

３　明治大学における登戸研究所保存・活用の取り組み

〔1〕明治大学による保存・活用方針の決定
1998 年：戸沢充則学長（1996-1999）、登戸研究所跡地の保存・活用方針打ち出す。
学長室「旧登戸研究所の保存・活用について」（1998 年 2 月 14 日）
記念碑を設置した小広場、生田内施設に資料室を設置（26 号棟は解体）
1999 年：「登戸研究所跡地の保存及び活用に関する検討委員会」設置（委員長：津坂伸幸農学部長）
→　44 号棟取り壊しに伴う残存建物の保存・活用を検討
「平和資料館」（平和教育の場）として 5 号棟あるいは 36 号棟を活用すべき。
明治大学創立 120 周年にあたる 2001 年に展示施設、モニュメント設立を決定。
争点：「平和資料館」とするのは５号棟か 36 号棟か、両方か。

〔2〕保存・活用方針の一時凍結

2000 年：学生自治会・生協と大学との対立激化

→　大学祭中止、学生部長襲撃事件の勃発

→　山田雄一学長、「学内正常化」の達成を優先し、登戸保存活動を凍結。

→　「保存を求める会」の生田生協が中心となり、5 号棟内に「登戸研究所ミニ展示室」を独自に設置、元勤務員を講師に迎えた講演会等を開催。

〔3〕保存・活用方針の復活と「展示資料館」開設の動き

2004 年：納谷廣美学長、登戸研究所跡地の保存活用方針を表明。

2005 年：登研会会長山田愿蔵氏からの学長宛に「施設保存・資料館開設」を求める手紙　→【資料２】

→　事前に登研会事務局長・渡辺賢二・海野福寿・森恒夫各氏が懇談
関係者の高齢化などにより保存・活用の具体化を急ぐ必要性を確認

2006 年：「登戸研究所明治大学展示資料館（仮称）の設置に関する検討委員会」（委員長：坂本恒夫教務部長）設置される。

→「展示資料館」は教育施設という位置づけで、教務部長の管轄に。

→「展示資料館」は 2009 年までに設置することを決定。

→　争点：明治大学が設置することの是非、設置の理念、資料館の「需要」の有無

2007 年 3 月：「検討委員会」のもとに「登戸研究所明治大学展示資料館（仮称）展示専門委員会」（委員長：山田朗文学部教授）設置。

6 月：「展示専門委員会」中間報告、**資料館の基本コンセプト**を示す。

① 36 号棟を展示資料館として保存し、登戸研究所の全貌を伝える歴史教育・平和教育・科学教育にふさわしい施設とすること。

②登戸研究所に関する資料・文献・証言を収集すること。

③平和教育の発信地として、明治大学における研究・教育に役立てるとともに一般に公開すること

同月、「展示専門委員会」は生田キャンパスで現地見学会と講演会、展示資料館説明会を開催。

2008 年：納谷学長、「登戸研究所問題の解決」を選挙公約として再選。

→「登戸研究所展示資料館（仮称）」を生田キャンパス内の旧登戸研究所施設である 36 号棟を改装して開館することを正式決定。

→　6 月、展示資料館（仮称）設立の学内調整ワーキンググループを設置。
教務事務室・施設課・博物館・設置準備室（予定）で構成。

→　7 月、**登戸研究所明治大学展示資料館（仮称）設置準備室**を駿河台研究棟に設置
36 号棟改装：施設課、展示企画：準備室、展示施工：乃村工藝社 **→【資料３】**

→　作業にあたっての問題点：
登戸研究所に関する共通認識の欠如、調査・研究をしながらの展示作成
学内混乱の後遺症
実物資料の不足（多くの資料を渡辺賢二氏からの寄贈に頼る）

2010 年 3 月 29 日：明治大学平和教育登戸研究所資料館開館（4 月 7 日～一般公開）
博物館の分館ではなく、教務部管轄機関として開設

→　開館記念式典における納谷学長のスピーチ　**→【資料４】**

４　登戸研究所資料館の意義

〔1〕**旧日本軍の研究施設をそのまま保存・活用して資料館にした唯一の事例**
→　資料館（登戸研究所第二科第 6 班研究棟）そのものが重要な戦争遺跡
→　大学キャンパス内の戦争遺跡を保存・活用した数少ない事例
〔2〕**歴史にはほとんど記録されていない〈秘密戦〉に焦点をあてた、日本ではほぼ唯一の資料館**
→　〈秘密戦〉（防諜・諜報・謀略・宣伝）は、戦争の本質を示すもの。
→　手段を選ばず、戦時・平時の区別なく、軍人・一般人の区別なし。
〔3〕**登戸研究所の全貌、各科の活動の概要を、実証的かつ視覚的に表現**
→　登戸研究所で開発された兵器・資材には、人道上・国際法規上問題のあるものも多い。
→　戦争という大義名分と研究への没入により、倫理観・人間性を次第に喪失していく。
〔4〕**登戸研究所の史実発掘過程をも展示**
→　一般市民・高校生が知られざる歴史、戦争の暗部を解明するきっかけをつくった。
→　市民・登研会・行政・遺跡所有者（明治大学）の連携の成果
→　平和教育・地域連携の発信地として明治大学も開設を決定

おわりに

〔1〕歴史教育・平和教育・科学教育の発信地としての登戸研究所資料館
→　とりわけ、戦争の裏面（加害的側面）を語り継ぐ場（記憶継承の受け皿）としての意義
〔2〕地域住民・教育者との連携を構築する場としての登戸研究所資料館

【参考文献】登戸研究所保存運動に関する著作

〔1〕川崎市中原平和教育学級編『私の街から戦争が見えた 謀略秘密基地 登戸研究所の謎を追う』（教育史料出版会、1989 年）
〔2〕長野・赤穂高校平和ゼミナール、神奈川・法政二高平和研究会『高校生が追う陸軍登戸研究所』（教育史料出版会、1991 年）
〔3〕木下健蔵『消された秘密戦研究所』（信濃毎日新聞社、1994 年）
〔4〕海野福寿・渡辺賢二ほか編『陸軍登戸研究所―隠蔽された謀略秘密兵器開発―』（青木書店、2003 年）
〔5〕姫田光義監修・旧陸軍登戸研究所の保存を求める川崎市民の会編『学び・調べ・考えようフィールドワーク 陸軍登戸研究所』（平和文化、2009 年）
〔6〕明治大学史資料センター編『明治大学小史』(学文社、2010 年)
〔7〕駿台史学会編『駿台史学』第 141 号（2011 年 3 月）「特集：戦争遺跡の検証と保存―登戸研究所資料館の開館によせて」
〔8〕山田朗・渡辺賢二・齋藤一晴『登戸研究所から考える戦争と平和』（芙蓉書房出版、2011 年）
〔9〕渡辺賢二『陸軍登戸研究所と謀略戦―科学者たちの戦争―』（吉川弘文館、2012 年）
〔10〕明治大学平和教育登戸研究所資料館・山田朗編『陸軍登戸研究所〈秘密戦〉の世界』（明治大学出版会、2012 年）
〔11〕木下健蔵『日本の謀略機関 陸軍登戸研究所』（文芸社、2016 年）
〔12〕明治大学平和教育登戸研究所資料館編刊『明治大学平和教育登戸研究所資料館 開館 10 周年記念誌　10 年のあゆみ』（2020 年 3 月）

明治大学平和教育登戸研究所資料館　第 11 回企画展　記念講演会②〔4〕

【資料１】人文科学研究所総合研究「旧陸軍登戸研究所の総合的研究―十五年戦争におけるその意義」の主な研究成果

〔1〕写真家・吉田一法氏に依頼し、生田キャンパス、疎開先である長野県・福井県・兵庫県、人体実験を行った南京病院、阪田機関本部(上海)を取材およびスライド記録を作成。

〔2〕元所員の証言を基に第三科疎開先である福井県武生および粟田部を調査。登戸研究所「北陸分廠」として接収した加藤製紙・西野製紙を調査し、疎開先での第三科の活動を明らかにした。

〔3〕疎開先である兵庫県小川村を調査。「関西分廠」の活動を明らかにした。

〔4〕元所員の証言を基に、静岡大学工学部（浜松市）に終戦直後登戸研究所から寄贈された「登戸研究所」蔵書印がある書籍約 1,000 冊を発見。

〔5〕『雑書綴』復刻。(第三展示室に展示中)

〔6〕**研究成果をまとめた『陸軍登戸研究所：隠蔽された謀略秘密兵器開発』(青木書店，2003 年)刊行、A4 判 267 頁。**

出典：第 11 回企画展展示パネル第 4 章・表 2 より作成。

【資料２】登戸研究所跡の保存・資料館設置の要望書

明治大学学長　納谷廣美　殿

〔前略〕

戦後六〇年たった今日、あの戦争の風化現象が進んでいます。私たちが行っていた研究や製造した兵器について何一つ明らかにされないまま埋もれようとしています。私たちの歴史そのものが消し去られようとしています。

私たちは、例え、当時は秘密の研究所であっても事実は事実として残し、歴史の審判を受けるべきだと考えています。そこで、以下の点をご要請します。

記

１、陸軍登戸研究所当時の戦跡をできるだけ保存していただきたい。

２、陸軍登戸研究所当時の資料を展示・公開することができる資料館をつくっていただきたい。なお、この点に関しては私たちは当時の資料の提供など、ご協力いたします。

平成一七〔2005〕年一〇月三〇日

登研会代表　山田愿蔵

出典：明治大学平和教育登戸研究所資料館・山田朗編『陸軍登戸研究所〈秘密戦〉の世界』(明治大学出版会、2012 年) 230 頁。

【資料３】展示資料館（仮称）設置準備室の陣容

準備室長：　山田　朗

展示総監督：渡辺賢二講師

展示総監督補佐：齋藤一晴講師

準備室学芸員：吉田桃子・石橋星志（DC）→ 森麻弥・橋本朋子

展示制作担当責任者

レストスペース（時代背景）：森麻弥学芸員

第一展示室（登研全容）：山本智之講師

第二展示室（第一科）：小山亮（DC）

第三展示室（第二科）：吉葉愛（MC）

第四展示室（第三科）：酒井晃（DC）

第五展示室（大戦末期・戦後）：本庄十喜（DC）

その他：山口隆行（MC）・花岡敬太郎（MC）・阿部靖子（MC）・大堀宙（MC）
展示施工：（株）乃村工藝社
出典：駿台史学会編『駿台史学』第 141 号（2011 年 3 月）「特集：戦争遺跡の検証と保存―登戸研究所資料館の開館によせて」より作成。DC は大学院博士後期課程の大学院生、MC は大学院博士前期課程（修士課程）の大学院生。

【資料４】明治大学平和教育登戸研究所資料館開館にあたって（2010 年 3 月 29 日）

開館式典において納谷学長は、1985 年におこなわれたヴァイツゼッカー西ドイツ大統領（当時）の演説から「過去に目を閉ざす者は、現在にも盲目になる」という言葉を引用したうえで、次のように述べた。

> 人びとは、ともすると辛い過去（戦争はその最たるものといえましょう）に目を瞑り、忘却しがちです。しかし、人類の過ちを忘却させないためには、日常的に、目に映る形で過去に向き合うことが必要かつ適当であると思います。〔中略〕
>
> アインシュタイン、湯川秀樹、朝永振一郎などの著名な物理学者が、晩年に原水爆禁止を訴える運動に参加したことからも明らかなとおり、自らの発明・発見（研究成果）がその利用如何によっては世界平和を脅かすことにもなる現実に対する反省、悔悟に基づく行動でもあったことを想起すべきです。
>
> この意味においても、私どもは、生田キャンパスに旧陸軍の登戸研究所があったことに加え、このキャンパスが理系のキャンパスであることをも考え合わせ、この地に登戸研究所資料館を開設し、平和教育を展開する「場」を得た意義は、まことに大きいものと考えております。

出典：納谷廣美「開館記念式典のご挨拶」、『季刊・明治』第 47 号（2010 年 7 月 15 日）6～7 頁。

【年表】登戸研究所保存運動と明治大学

1990 年	明治大学、旧登戸研究所本部本館の建物の取り壊しを決定。 川崎で「旧陸軍登戸研究所の建物を保存する市民の会」発足。
12 月　14 日	「市民の会」、保存を求める署名 3,339 筆を川崎市議会に提出。
1991 年	川崎市、本館建物の記録保存を決定。
6 月	「市民の会」、本館建物の移築保存を求める請願書を提出。
1994 年	明治大学、旧登戸研究所 26 号棟の取り壊しを決定。 明治大学学生・教職員、「旧陸軍登戸研究所の解体に反対し保存を求める会」を結成。 「保存を求める会」共同代表の海野福寿文学部教授・森恒夫経営学部教授らが、明治大学人文科学研究所に申請した登戸研究所に関する総合研究（1995～1997 年度）が採択される。
1995 年	文化財保護基準の改正 明治大学、26 号棟の取り壊しの 3 年間凍結を決定。
1998 年 2 月 14 日	戸沢充則学長（1996-1999）、登戸研究所跡地の保存活用方針を打ち出す。
1998 年	文化庁、「近代遺跡調査」開始、登戸研究所も調査対象に。
1999 年4 月 28 日	明治大学、「登戸研究所跡地の保存及び活用に関する検討委員会」（委員長：津坂伸幸農学部長）を設置。

明治大学平和教育登戸研究所資料館　第 11 回企画展　記念講演会②〔6〕

9 月	「登研会」、戸沢学長宛に「旧陸軍登戸研究所建物等保存について(お願い)」を提出準備（提出できず）
2000 年 10 月	明治大学、特定セクトの内部対立にともなう学内の混乱に対処するため駿台祭・和泉祭・生田祭の中止を決定。
11 月　2 日	長尾史郎学生部長襲撃事件
12 月　12 日	「学内正常化」のための明大教職員による全学集会 山田雄一学長（2000-2003)、「学内正常化」を優先するために、登戸研究所保存・活用の動きを凍結。 「保存を求める会」、5 号棟内に「登戸研究所ミニ展示室」を独自に設置、元勤務員を講師に迎えた講演会等を開催。
2003 年 3 月 19 日	1995-97 年の共同研究の成果として海野福寿・山田朗・渡辺賢二編『陸軍登戸研究所：隠蔽された謀略秘密兵器開発』(青木書店)が刊行される。
12 月　8 日	文化庁による「近代遺跡（軍事に関する遺跡)」として生田キャ ンパスを詳細調査
2004 年	納谷廣美学長（2004-2011)、登戸研究所跡地の保存活用方針を表明。
2005 年 10 月 30 日	登研会山田愿蔵代表、学長宛に「旧陸軍登戸研究所建物等保存について(お願い)」を提出。
2006 年 7 月	明治大学、「登戸研究所明治大学展示資料館（仮称）の設置に関する検討委員会」（委員長：坂本恒夫教務部長）を設置。 「旧陸軍登戸研究所の保存を求める川崎市民の会」発足。
2007 年 3 月	「検討委員会」のもとに「登戸研究所明治大学展示資料館（仮称）展示専門委員会」（委員長：山田朗文学部教授）設置。
6 月	「展示専門委員会」中間報告、資料館の基本コンセプトを示す。 「展示専門委員会」、生田キャンパスで現地見学会と講演会、展示資料館説明会を開催。
12 月	納谷学長、「登戸研究所問題の解決」を選挙公約として再選。
2008 年	「登戸研究所展示資料館（仮称)」を生田キャンパス内の旧登戸研究所施設である 36 号棟を改装して開館することを正式決定。
6 月	展示資料館（仮称）設立の学内調整ワーキンググループ設置される(教務事務室・施設課・博物館・設置準備室で構成)。
7 月	登戸研究所明治大学展示資料館（仮称）設置準備室を駿河台研究棟内に設置（展示施工：乃村工芸社)。
2009 年	26 号棟取り壊し、部材を部分保存。
2010 年 3 月 29 日	明治大学平和教育登研研究所資料館開館（4 月 7 日～一般公開）

明治大学平和教育登戸研究所資料館　館報
第８号　2022 年度
53 － 87 頁，2022 年９月

第 12 回企画展「参謀本部と登戸研究所による対中国謀略
―アジア太平洋戦争開戦 80 年―」記録
展示パネル解説

椎名　真帆
明治大学平和教育登戸研究所資料館特別嘱託学芸員

館長ごあいさつ

2021 年はアジア太平洋戦争（1941 ～ 1945 年）の開戦から 80 年目にあたります。この戦争は一般に対英米戦争として捉えられがちですが，この戦争の最中も日中戦争は続いていました。

本企画展では，アジア太平洋戦争前からの日中戦争にさかのぼりつつ，大戦中も継続して展開されていた様々な対中国謀略に焦点をあてて，参謀本部と登戸研究所が果たした役割について検証します。《謀略》とは，秘密戦の４要素（防諜・諜報・謀略・宣伝）の一つであり，戦争を有利にするために行われる相手を攪乱（かくらん）する行為のことです。

武力戦と並んでアジア太平洋戦争前から行われた対中国謀略には，大きく分けて政治謀略と経済謀略があります。政治謀略の最たるものは，中華民国国民政府（蔣介石（しょうかいせき）政権）からその実力者の一人である汪兆銘（おうちょうめい）を日本側に取り込んで，蔣政権の分裂・弱体化を図るもので，これは 1940 年３月の汪兆銘政権の成立を経て，「梅機関」（影佐機関）によって継続されました。この汪政権の支配基盤を確固たるものにしようという地域支配のための工作が「清郷（せいごう）工作」です。

また，経済謀略として特に重要なものが，登戸研究所もそれを担った偽札の散布です。経済謀略は，元々は日本軍占領地における通貨工作として始まり，日本側の傀儡（かいらい）政権の通貨（例えば汪政権の儲備券（ちょびけん））や日本軍の軍票を流通させて蔣政権側の法幣を駆逐しようとするものでしたが，なかなかうまくいきませんでした。そのため，日本軍は，蔣政権の紙幣の偽札を大量に散布することで中国経済を混乱させ，あわせて日本側の物資調達を図るという新たな経済謀略に力を注ぎました。

本企画展では，アジア太平洋戦争中も展開された対中国謀略の実態について検証し，対英米戦争の根源にある日中戦争について認識を深め，戦争というものの諸側面について振り返るための一助としたいと思います。

明治大学平和教育登戸研究所資料館長　　山田　朗

はじめに

謀略とは，戦争を有利に運ぶための工作などを指す。

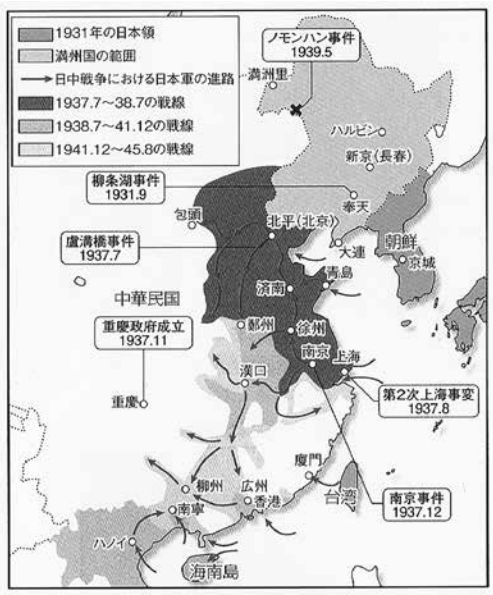
日中全面戦争の最中，1940 年 3 月，日本の傀儡（かいらい）政権といわれた汪兆銘（おうちょうめい）政権が成立した。これは，参謀本部の影佐禎昭（かげさ さだあき）が主導した影佐機関（別名「梅機関」）が行った謀略によるものであった。そして，この謀略と登戸研究所は，参謀本部による対中国謀略の大きな枠組みの中で繋がっていた。

本企画展では，汪政権のナンバー 2 であった周仏海（しゅうふっかい）の日記や，汪兆銘政権の勢力を確固たるものとするための「清郷（せいごう）工作」の極秘の報告書などを取り上げ，影佐機関が行ったことがらと，登戸研究所で製造された秘密戦資材や偽札が対中国謀略の一翼を担っていたことを詳らかにし，参謀本部による対中国謀略とその枠組みの中の登戸研究所の役割と意味を検証する。

1．日中全面戦争と登戸研究所

1937（昭和 12）年，北平（現・北京）郊外での盧溝橋事件以降，満州国に接する北平を含む華北地域から日本軍は南進，日中戦争は泥沼化した。1939（昭和 14）年には蔣介石政権軍との軍事衝突を繰り返し，戦況は持久戦にもつれ込んだ。

1940（昭和 15）年 3 月には，日中戦争の打開策のひとつとして，陸軍は傀儡政権である汪兆銘政権を成立させた。その背後では参謀本部による謀略が行われ，登戸研究所も軍の拡大していく要求に呼応するように拡充・発展した。



第 1 図　日中戦争要図
（出典：宮地正人監修 / 大日方純夫，山田朗，山田敬男，吉田裕著『日本近現代史を読む』（新日本出版社, 2010 年））

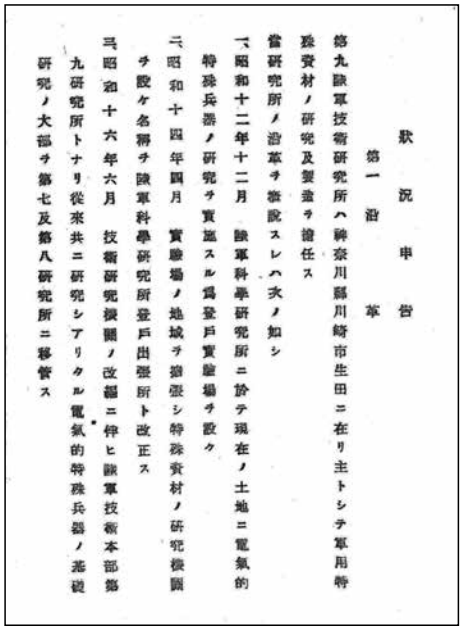
（1） 参謀本部の期待と登戸研究所の拡大

盧溝橋事件が起こった 1937 年，陸軍科学研究所登戸実験場が電波兵器開発のため生田の地に設置された。これが登戸研究所の起こりである。

日中戦争の局面が悪化すると，陸軍内では中国経済を壊滅に陥れて戦争を終結させるという構想が生まれ，参謀本部でも経済謀略が画策された。登戸研究所ではその一端を担うため，特殊工作遂行のための資材・兵器開発が一層期待され，さらに，敵対する蔣介石政権が発行する紙幣（＝法幣）の偽造を行うことになった。その結果として，1939 年，登戸実験場には秘密戦資材（兵器）開発部門である第二科と偽札製造部門である第三科が設置され急拡大し，「陸軍科学研究所登戸出張所」となった。

第二科：秘密戦兵器開発
第三科：偽造法幣製造

第２図　1939 年に新設された科
（1941 年撮影航空写真（国土地理院所蔵）をもとに筆者加工）
この後，敗戦まで登戸研究所は拡大を続け，最終的には写真右手の丘陵へも敷地を拡げた。



状況申告

第一　沿革

第九陸軍技術研究所ハ神奈川縣川崎市生田ニ在リ主トシテ軍用特殊資材ノ研究及製造ヲ擔任ス

當研究所ノ沿革ヲ概說スレハ次ノ如シ

一、昭和十二年十二月　陸軍科學研究所ニ於テ現在ノ土地ニ電氣的特殊兵器ノ研究ヲ實施スル爲登戸實驗場ヲ設ク

二、昭和十四年四月　實驗場ノ地域ヲ擴張シ特殊資材ノ研究機關ヲ設ケ名稱ヲ陸軍科學研究所登戸出張所ト改正ス

三、昭和十六年六月　技術研究機關ノ改編ニ伴ヒ陸軍技術本部第九研究所トナリ從來共ニ研究シアリタル電氣的特殊兵器ノ基礎研究ノ大部ヲ第七及第八研究所ニ移管ス

第３図　状況申告（部分）
（当館所蔵 / 作成者不詳，登戸研究所幹部か）
沿革によれば，1939（昭和 14）年頃からの組織の拡大とともに登戸研究所の性質が変わったことを明示している。

（2） 謀略に使用された登戸研究所の秘密兵器

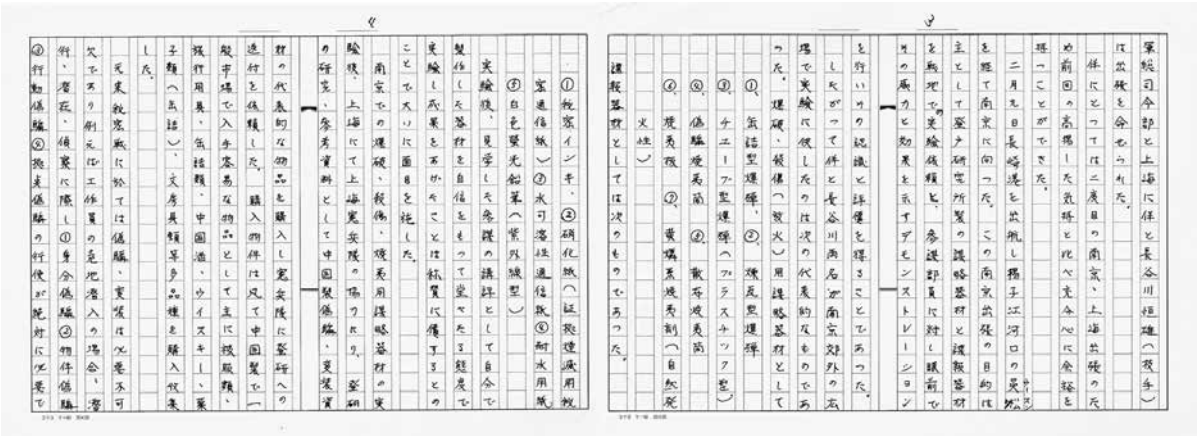
日中全面戦争下では，登戸研究所の秘密戦兵器開発部門の前身，陸軍科学研究所 篠田研究室に対し参謀本部からの要求が増大し，研究内容も人員も膨らんだ。そこで篠田研究室は新宿・百人町の科学研究所から分かれ生田の地に移動し，登戸出張所の第二科となった。篠田研究室の主任であった篠田鐐は陸軍科学研究所登戸出張所長に就任した。

第１表は，初期から秘密戦兵器研究開発に携わった登戸研究所第二科第一班長 伴繁雄の中国への出張記録である。ここからも，第二科の変遷と，第二科に対し徐々に増大した参謀本部からの要求がうかがえる。中でも表中，1940 年の南京，上海への出張目的･内容は，２．-（２）で後述するとおり，影佐機関（別名「梅機関」）が行った謀略において直接必要とされた可能

性を想起させ，参謀本部と登戸研究所との密接な関係を示唆している。

第１表　登戸研究所第二科第一班長 伴繁雄の中国への出張記録　（筆者作成，参考：伴繁雄『陸軍登戸研究所の真実』ほか）

年月日	行先	出張目的・内容
1927（昭和２）年４月 伴繁雄，浜松高等工業学校卒業後，陸軍科学研究所に採用，篠田鐐（しのだりょう）のもとで秘密戦兵器開発開始		
1937（昭和 12）年 11 月９日 -25 日	中華民国： 上海	戦闘中の上海で秘密戦のノウハウや技術を習得
1938（昭和 13）年 11 月４日 -12 月６日	満州国： 新京， ハルビン	参謀本部から篠田に出張命令，伴は助手として同行／新京で関東軍憲兵に秘密戦講義・実習などを実施／教育内容：科学的秘密通信法および発見法，郵便検閲法ほか
1939（昭和 14）年９月　陸軍科学研究所 篠田研究室が生田へ移動，陸軍登戸研究所（出張所）第二科となる **→陸軍省軍務課による秘密戦兵器の製造・調達体制の整備完了**		
同年 ９月４日 -10 月 20 日	満州国	関東軍情報部からソ連・満州国境での秘密戦技術的要望を受ける／兵器化の要望内容：敵軍用犬からの追跡防避剤（エ号剤），潜入行動資材としての補力剤（軽量携帯食料，強力栄養剤，頭脳と目の補力剤，疲労回復剤）など
1940（昭和 15）年 ２月３日 - ３月４日	中華民国： 南京， 上海	南京・上海における戦地での登戸研究所製謀略兵器・資材の実験とデモンストレーション**→主として汪兆銘政権の勢力拡大目指す工作目的か？** 実験器材：爆破・殺傷（放火）用謀略資材としての缶詰型爆弾，レンガ型爆弾，秘密通信手段としての秘密インキ，秘密通信用紙，紫外線型白色蛍光鉛筆など
1941（昭和 16）年 ５月９日 - ６月 28 日	中華民国： 南京	参謀本部からの命令で，中支那防疫給水部で中国の捕虜に対し青酸化合物（登戸研究所製青酸ニトリルなど）の人体実験
1942（昭和 17）年 12 月 20 日 - 翌年１月 16 日	中華民国： 上海	上海の特務機関で二度目の青酸ニトリルの人体実験 (1)

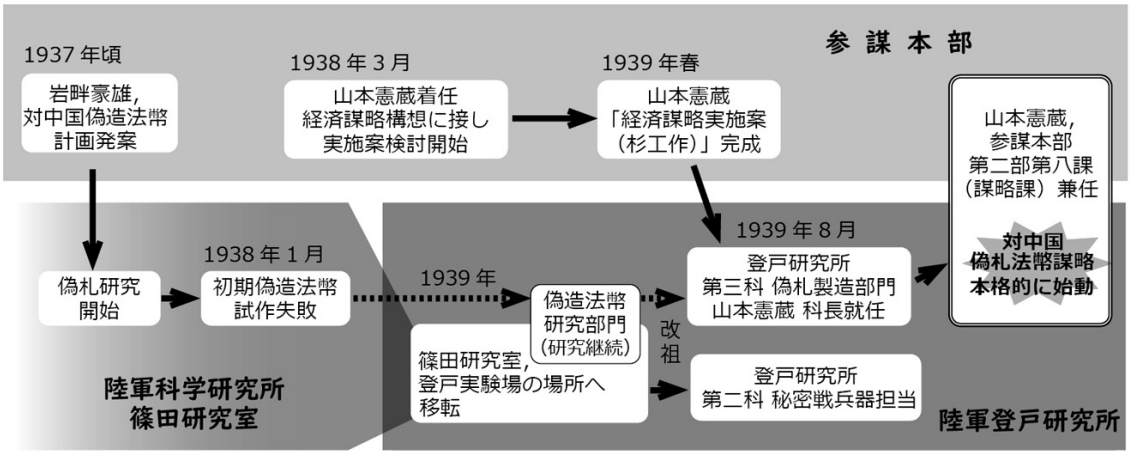


第４図　伴繁雄『陸軍登戸研究所の真実』原稿（部分）（当館所蔵 / 作成者　伴繁雄ほか）
昭和 15 年３～４月にかけて南京と上海における戦地での登戸研究所製謀略兵器・資材の実験とデモンストレーションのため，伴らが出張に行った際のことが書かれている。

（３）　登戸研究所に偽札製造部門が設置された理由

参謀本部主導の偽札謀略の「兵器」である偽札の製造部門が登戸研究所に設置されたのは次のような背景があった。

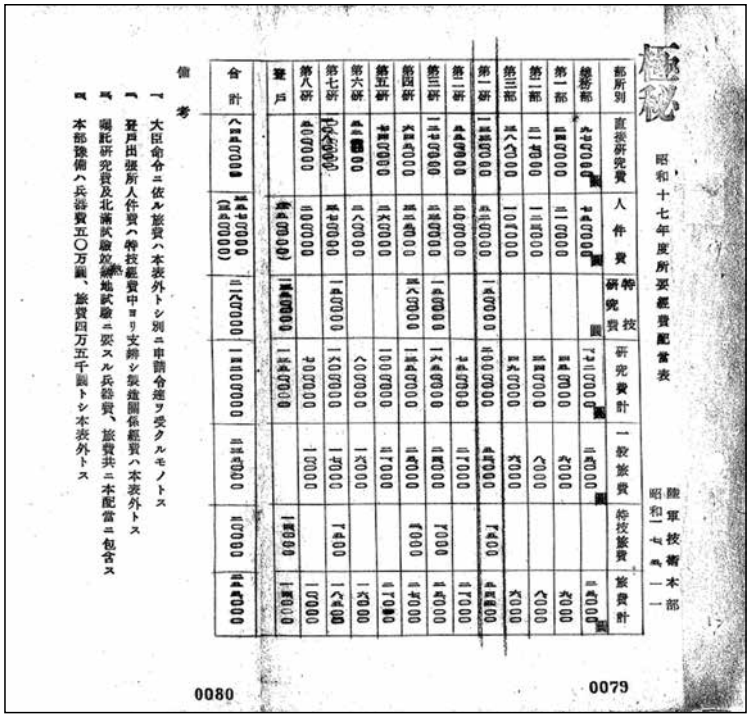
中国の経済を崩壊させるため「偽札をばらまくことで，法幣の勢力を弱める」という謀略は，1930 年代には参謀本部の岩畔豪雄（いわくろひでお）が発案し，極秘裏に進められていた (2) 計画を，当時，参謀本部第七課（別名・支那課）の山本憲蔵が 1939（昭和 14）年春に工作実施案を完成，本格化させた。登戸研究所は，その前身である陸軍科学研究所 篠田研究室の時代から，従来の兵器



第５図　登戸研究所に偽札製造部門が設置されるまで（筆者作成，参考：山本憲蔵『陸軍贋札作戦』ほか）

の枠に収まらない新しい兵器開発研究を全て引き受けており，山本による具体案の立案以前から内閣印刷局の技師を引き抜き，すでに偽造法幣の研究を開始していた[(3)]ため，岩畔は，当初より登戸研究所で偽札を製造することを決定していたと考えられる。

そこで，登戸研究所に偽札製造部門が設置され，現場責任者として山本憲蔵が登戸研究所第三科長に就任し，工作を進めやすいよう参謀本部の第二部第八課（別名･謀略課）課員も兼任した。したがって偽札製造は，参謀本部の対中国経済謀略構想に組み込まれていた謀略のひとつであり，参謀本部がこの偽札製造を主導したということは当然のことと言える。



第６図　「昭和十七年度所要経費配当表」陸軍技術本部 1942 年５月 11 日，２，３頁目

（防衛省防衛研究所戦史研究センター所蔵 / アジア歴史資料センター公開 Ref.C15120584800）

備考に，「二，登戸研究所人件費は特技経費中より支弁し製造関係経費は本表外とす」とある。

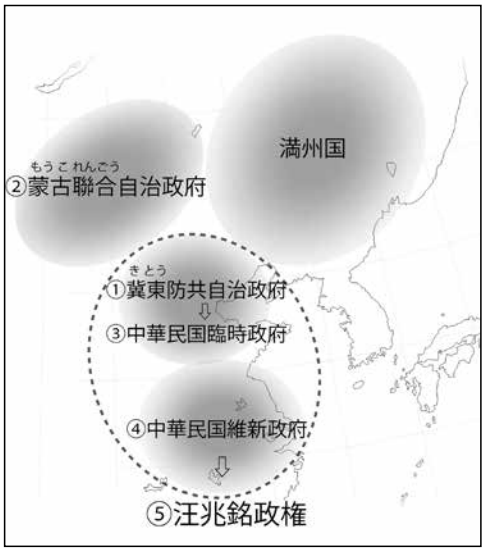
登戸研究所の秘密戦兵器，偽札の製造に関する経費は，別途支給されていた。

２．日中全面戦争と登戸研究所

ここでは参謀本部が構想していた対中国謀略の大きな枠組みと，組み込まれていた各工作を明らかにする。

（1） 汪兆銘工作以前

1937（昭和 12）年 12 月，当時の中国国民政府の首都・南京の攻略に日本国内は戦勝ムードに沸き，軍も民間も積極的な拡大思想が大方を占めていた。しかし，当時の日本の実情は，中国での戦争の長期化に耐えられる余力はなく，さらには抗日運動の激化により占領地でも民心を掌握できなかった。そのため，陸軍は現実的には，「敵対する蔣介石の国民政府との早期問題解決」を目指していたと考えられる。



第７図　満州事変以降中国大陸において日本軍が擁立した傀儡政権（筆者作成，白地図出典：© craftmap.box-i.net）

しかし，有利な立場での幕引きを狙った日本の思惑どおりには進まなかった。そこで日本は，かろうじて得た占領地で，内戦などで失脚した中国人政治家らを利用し，中国国内に傀儡政権を成立させた。その中で日本の発言力を確保し，占領地の経営・開発は中国人に行わせつつ既得権を確保しようとした。

また，傀儡政権があるところでは経済謀略が行われた。傀儡政権が勢力を確立するには，独自の通貨を発行し他の勢力を経済面から駆逐する謀略は常套手段であった。またその通貨を浸透させるために，抗日戦線を刺激しないことが重要で，且つ日本の戦時インフレを進行させないようするには，中国人によって中国で発行される形をとる必要があった[(4)]。

では満州国成立以降に日本軍が擁立した主な傀儡政権とそこで発行された通貨を概観する。

①　華北分離工作

満州国建国後，日本陸軍は，満州国に隣接する，鉄などの資源が豊富な華北に勢力を拡大した。1935 年には関東軍司令部付奉天特務機関長 土肥原賢二を中心とし，北平（現・北京）や天津を含む河北省，青島を含む山東省など５つの省を蔣介石の国民政府から分離させ「第二の満州国」を目指し，「**冀東防共自治政府**」（のちに「冀東自治政府」と改称）に統治させようとした。しかし，この政府はわずかな地域を統治したのみで，後年，中華民国臨時政府に合流した。

②　蒙古聯合自治政府

駐屯する日本軍により1937年に内蒙古（南モンゴル）に設立された。首府は張家口，首班はデムチュクドンロプ（徳王）で，「蒙疆銀行券」を発行した。

③　中華民国臨時政府（のちの華北政務委員会）―北平（北京）

1937年に北平を占領した陸軍は天津を含めた周辺地域を統治する「中華民国臨時政府」を傀儡政権として設置，首班に，北伐で蔣介石に敗れ隠棲していた王克敏を担いだ。

当初，日本軍は華北で植民地の通貨である朝鮮銀行券を軍票として使用したが，戦時インフレを進行させないよう，中国で通貨を発行するため「中国聯合準備銀行」を設立，「中国聯合準備銀行券」（聯銀券）を物資調達に使用した。しかし奥地での調達には蔣介石政府の法幣しか使用できず，流通は極めて限定的であった。

汪兆銘政権に統合後も「華北政務委員会」と改称され存続した。華北は日本軍の力で制圧できていた特殊性が尊重されたため，汪政権にとって障害になった。

第８図　王克敏と中国聯合準備銀行券
（王克敏写真出典：『最新支那要人伝』，中国聯合準備銀行券：当館所蔵）

④　中華民国維新政府―南京

1938年，梁鴻志を行政委員長として担ぎ，成立させた。英米資本や民族資本が集中する上海を含む華中は，日本が軍の力で制圧できていた華北とは比較にならないほど抗日意識が熾烈で，民衆への影響力はほぼ皆無であった。のちに汪兆銘政権に吸収された。

中央銀行とは性質が異なるが，「華興商業銀行」を設立，兌換券である「華興商業銀行券」（華興券）を発行した。

⑤　汪兆銘政権―南京

蔣介石の国民党重慶政府から脱出させた汪兆銘に，参謀本部影佐禎昭の「影佐機関」（別名「梅機関」）の工作により南京に国民政府として「還都」させ，1940年に打ち立てたのが汪兆銘政権である。

影佐らはこの勢力を確固たるものとするため，南京・上海・杭州周辺では「清郷工作」を行った。

第９図　汪兆銘と中央儲備銀行券
（汪兆銘写真出典：『最新支那要人伝』，中央儲備銀行券：当館所蔵）

経済面では，「中央儲備銀行」を設立，法幣を駆逐できるよう「中央儲備銀行券」（儲備券）を発行したが，信用を得るのは困難であった。

（２） 影佐機関（別名「梅機関」）が行った謀略

中華民国成立直後，汪兆銘はその建国の父・孫文の側近として活躍したが，日中全面戦争の頃には孫文が結党した中国国民党は蔣介石が主導していた。その蔣介石政権でナンバー２の地位にあった汪兆銘を担ぎ出し政権を打ち立てさせたのが，参謀本部の影佐禎昭が指揮する影佐機関であった。

①　影佐禎昭の人物像

影佐は頭脳明晰，中国通として有名で，日中戦争の早期解決を目的[5]として1937（昭和12）年に設置された参謀本部第二部第八課（謀略課）の初代課長を務めた。

第２表　影佐禎昭略歴　（筆者作成，参考：浅田百合子『日中の架け橋　～影佐禎昭の生涯～』ほか）

1893（明治26）年 3 月 7 日	旧浅野藩士（広島）の家系に生まれる
1914（大正３） 年 5 月	陸軍士官学校卒業（第26期）
1923（大正12）年11月	陸軍大学校，優等で卒業（第35期）
1924（大正13）年12月	参謀本部付（作戦課）勤務
1925（大正14）年 4 月～	陸軍派遣学生として東京帝国大学政治学科聴講（3年間）
1929（昭和４） 年 3 月～	参謀本部付中国研究員として中国各地に駐在（３年間）
1937（昭和12）年11月	参謀本部第二部第八課（謀略課）*設置，初代課長に就任（当時大佐）
1938（昭和13）年 6 月	陸軍省軍務局軍務課長に就任
1939（昭和14）年 3 月	汪兆銘工作開始
同　年 8 月	少将に進級，影佐機関（別名「梅機関」）設立
1940（昭和15）年11月	汪兆銘政権最高軍事顧問就任
1942（昭和17）年 5 月	軍事顧問解任，戦地を転々と移動
1943（昭和18）年 6 月	第38師団長（南太平洋ニューブリテン島ラバウル）
1946（昭和21）年 5 月	復員
1948（昭和23）年 9 月10日	戦病死，享年55歳

＊参謀本部第二部第八課（謀略課）発足時の陣容
大佐 影佐禎昭…汪兆銘工作首謀者
中佐 唐川安夫…次期第二部第八課長
中佐 岩畔豪雄…偽造法幣工作発案者
中佐 臼井茂樹…桐工作（対重慶工作）首謀者

汪政権成立後は政権の最高軍事顧問に就任した。しかし，当時の首相兼陸軍大臣 東条英機からは，影佐は中国に対して寛大すぎる[6]，と政権顧問から外され，1943（昭和18）年には南太平洋のニューブリテン島ラバウル戦線に左遷された。

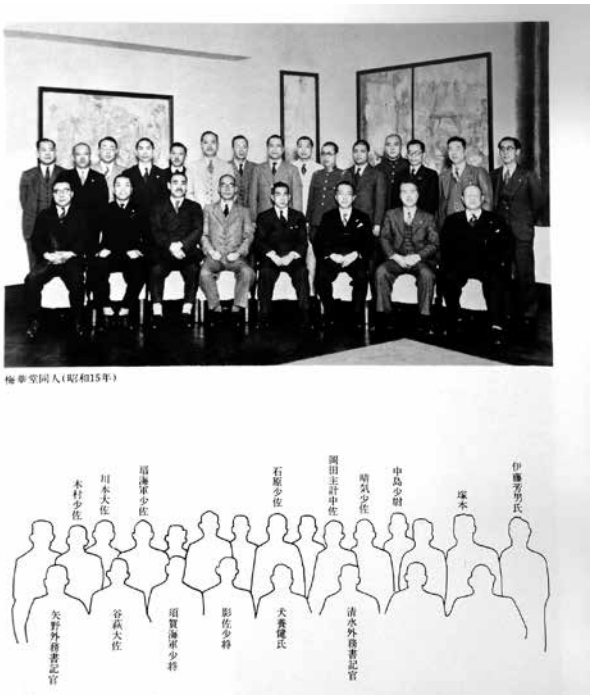
ラバウルでは，影佐機関で行った事がらを含む中国大陸での活動の回想を手記「曾走路我記」に記している[7]。それによれば，自身は日中関係研究のため派遣された中国北部で，深刻に感じた中国での排日思想の広まりに憔然とし，強硬策から現実路線へ転換したことを示唆している。

なお，陸軍士官学校 26 期は，参謀本部第二部第八課（謀略課）初代課長 影佐禎昭，登戸研究所長 篠田鐐，中野学校初代校長 秋草俊と，秘密戦の作戦考案・兵器開発・人材育成という秘密戦実行のための重要機関のトップ経験者を輩出している。

②　影佐機関（別名「梅機関」）とは

参謀本部 影佐禎昭を中心として，汪兆銘政権成立のため上海を拠点として活動した謀略機関で，別名を「梅機関」と呼ばれたのは本拠地「梅華堂（ばいかどう）」の頭文字をとったものである。上海は中国随一の巨大国際都市で，当時から諸外国が統治する租界が存在し，各国による国際的な諜報活動が展開され，謀略拠点とする利点があった。

影佐機関は，もとは，参謀本部 土肥原賢二が上海で旧軍閥 呉佩孚（ごはいふ）らによる傀儡政府を成立させようと工作を行っていた特務機関，土肥原機関（別名「重光堂」）が失敗し，その残務処理を引き継いだものであった。1938 年末に汪兆銘を重慶政府から脱出させ，政権成立工作の仕上げのため，政府直轄機関として上海に梅機関が開設されたのは 1939（昭和 14）年 8 月だった [8]。



第 10 図　昭和 15 年当時の影佐機関員ら
（出典：塚本誠『或る情報将校の記録』口絵，塚本英史氏提供）
梅華堂とは梅機関のことであり，影佐機関を指す。

第３表　影佐機関（梅機関）の主な構成員
（筆者作成，参考：影佐禎昭「曾走路我記」，『周仏海日記』，浅田百合子『日中の架け橋　～影佐禎昭の生涯～』，「汪清衛関係　第三巻」〔矢野記録〕２．汪精鋭工作備忘録（外務省外交史料館所蔵 / アジア歴史資料センター公開 Ref. B02031744800），『戦史叢書　支那事変陸軍作戦＜３＞』）

陸　軍 （参謀本部）	機関長：影佐禎昭少将，石原幸次少佐（影佐の副官），川本芳太郎大佐，谷萩那華雄（やはぎなかお）大佐， 大村主計少佐，堀場一雄中佐（のち桐工作*に関与） 土肥原機関から特務工作を引き継いだメンバー：晴気慶胤（はるけよしたね）中佐，塚本誠少佐 ＊水面下で，直接，重慶の蔣介石政権との和平工作を行おうとした工作
海　軍	須賀彦次郎大佐，扇一登（おうぎかずと）少佐
外務省	矢野征記（せいき）書記官，清水董三（とうぞう）書記官
民　間	犬養健（たける）衆議院議員
興亜院*官僚	＊日中戦争の拡大に対応し，対中政策の統一を図るために内閣に設置された機関
新聞関係者	松本重治（同盟通信），神尾茂，太田宇之助（ともに朝日新聞）

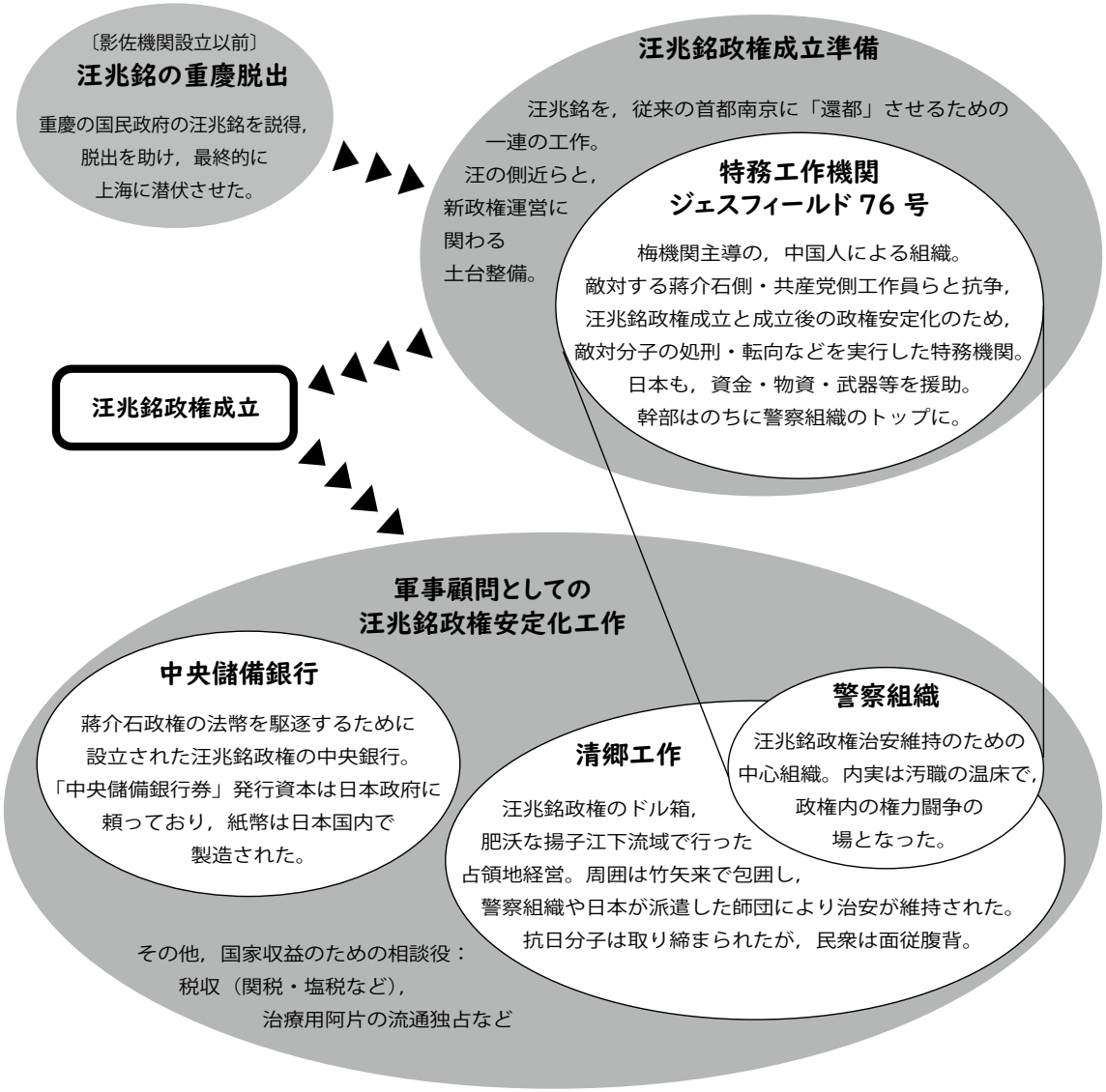
梅機関の汪兆銘に対する方針：　①密接なる連絡　②絶対的不干渉　③徹底的援助 [9]

汪兆銘政権が成立した後は，影佐を最高顧問とした軍事顧問団を形成し，汪兆銘政権の地盤固めと勢力拡大のため，多方面にわたり工作を行った。

③　影佐機関が行った謀略

影佐が行った初期の謀略は，参謀本部第二部第八課（謀略課）の設立と，影佐の初代課長就任まで遡る。参謀本部第二部第八課は，1937（昭和 12）年 11 月，日中全面戦争の早期解決を図るため必要に迫られて設置された。しかし，本丸である蔣介石政権との交渉は日本が思うようには進まず，日本政府は 1938（昭和 13）年 1 月「爾後（じご），国民政府を対手（あいて）とせず」と蔣介石政権の否認を宣言した第一次近衛声明を発した。これにより蔣介石政権との交渉は表向き不可能となった。そこで影佐は，蔣介石政権内にいた汪兆銘を和平交渉の相手として担ぎ出すため，汪兆銘政権を樹立させようと画策する。汪政権成立後は，影佐は政権安定化を目指した。

影佐が展開した主な謀略は**第 11 図**のとおり。



第 11 図　影佐機関が展開した対中国謀略（筆者作成）

④ 『周仏海日記』から読み解く汪兆銘政権と影佐機関

第12図　周仏海
（出典：『写真週報』110号 昭和15年4月3日号）
1897年湖南省生。京都帝大留学時代は中国共産党にも接触。帰国後は中国国民党に参加。重慶脱出後，汪兆銘政権内の権力者に。戦後は「漢奸（売国奴）」として捕えられ，1948年に獄死。

日本の参謀本部の謀略を検証するうえで，今回は『周仏海日記』（みすず書房，1992年）を取り上げる。

汪兆銘の側近で，汪政権の実質ナンバー２として財政部長，警政部長などを務めた周仏海（1897-1948）は，1937（昭和12）年７月１日から1945（昭和20）年６月９日まで，ほぼ毎日日記を綴っていた。周は，中国国民党幹部であった時に汪兆銘と共に重慶を脱出，以来，影佐機関員らとも深く交わった。したがって，彼の日記からは，傀儡政権の「カネ」と「警察権力」を握った人物の目を通した，汪政権の始まりから終焉間際までの実態を読み取れる。残念なことに，影佐機関による汪政権成立工作が始まった1939年の日記は所在不明であるため，その年に展開された初期工作の記録はない。しかし1940年以降は，汪政権成立までの「梅機関員」との日常的な接触や，汪政権の中央銀行であった「中央儲備銀行」の設立とその内実などが当事者の視点から書かれている。

周の次男 周幼海による「周仏海日記について」（『周仏海日記』所収）には，周は自身の「高潔さ」をひけらかすために日記を記していたとあり，事実もあれば意図的に隠されたことがらもあろう。だが，この日記は，当時の影佐機関の働きや傀儡政権の空疎な実態を伝える貴重な記録である。

１）汪兆銘政権成立以前の工作①　「梅機関」以前の工作

1937年，第二次上海事変のさなか，蔣介石の国民政府の中にも日本との和平を積極的に探るグループが存在していた。周仏海もそのメンバーだったが，当時は蔣介石の党・政府・軍の権力の支配機構である「侍従室」の一員だった[(10)]。周は，その立場にあって，まずは戦争状態を終結し，その後外交で決着させることを，当時の国民政府のナンバー２であった汪兆銘を通じ蔣介石に提案している。

周仏海日記	※〔 〕内は筆者補足（以降同じ）
1937年 ８月30日	…〔陶〕希聖*1と伴に汪先生のところに行き，戦時は適当な時点で切り上げ，目下は外交を開始すべきとの理由を力説し，…汪先生は蔣先生を極力説得することを承知された。帰宅後，適之*2，〔高〕宗武*3と共に対日外交の段取り及び要点など具体策を検討し，宗武が起草することになった。…希聖と内容を検討し，若干手を加える。 ＊1　当時，北京大学教授。重慶を脱出した汪兆銘，周仏海とともに昆明からハノイへ脱出。 ＊2　胡適。当時，北京大学文学院院長。 ＊3　当時，国民政府外交官。日本との秘密交渉の窓口となった。翌年２月に「日本問題研究所」という情報機関を設置，日本の民間エージェントと接触，６月に影佐らに面会する[(11)]。
同年 ８月31日	…我々の提案した外交進行方式は蔣先生に採用されなかった…

だがこの提案は，蔣介石政権側にとって全面戦争終結のための日本の要求が高く，激しさを増していた抗日運動を背景に受け入れがたいものであり，蔣に却下された。それでもなお，周らは一刻も早い戦争の終結を望み，蔣介石との意見の対立は続いていた。

周仏海日記	
1937 年 10 月 3 日	…余は，一日でも早く和平することが中国にとってより多くの利益をもたらすとして，直ちに米，独に調停依頼を要請すべきことを主張…

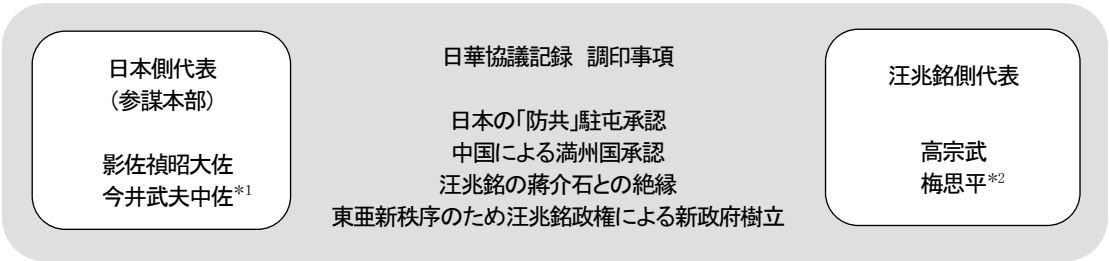
1938（昭和 13）年 1 月の「国民政府を対手（あいて）とせず」とした近衛声明が象徴するように，日本は強硬姿勢のまま日中全面戦争を展開する。とはいえ，日本にとっても日中全面戦争の長期化は望ましくなかった。

その直後，事態が動く。同年 6 月，周仏海らと行動をともにしていた和平派の高宗武（こうそうぶ）らが，影佐と接触する。日本側（影佐）と彼らのような蔣介石政権内の和平論者とは戦争の長期化を避けたい思惑が合致したのである。影佐は「対手とせず」とした蔣介石と和平交渉は行わない代わりに，交渉相手として傀儡政権を打ち立てる必要があったのである。

こうして，日本が利権を手放すことなく戦争を終結させるための謀略の構想が固まっていった。

２）汪兆銘政権成立以前の工作② 重光堂会談と汪兆銘の重慶脱出

首都南京が日本によって陥落した後，蔣介石の国民政府は重慶に移転した（重慶政府）。汪兆銘が日本とともに政権を成立させるには，重慶から脱出する必要があった。この計画の 1938 年 11 月 20 日，上海の「重光堂」（土肥原機関）で汪兆銘側代表の高宗武・梅思平（ばいしへい）と，日本側の影佐らで会見を行った（「重光堂会談」）。この際に「日華協議記録」(12) が調印され，この中で「日支新関係調整方針」について日本政府と汪兆銘が互いに同意した場合に汪兆銘は重慶を脱出することが決定された。



＊1　当時，参謀本部第二部第七課（支那課）支那班長。のちの対重慶和平工作である「桐工作」の中心人物のひとり。
＊2　当時，国民政府大本営第二部（政略）秘書。高宗武の肺病治療のため日本との秘密交渉窓口を引き継いだ (13)。

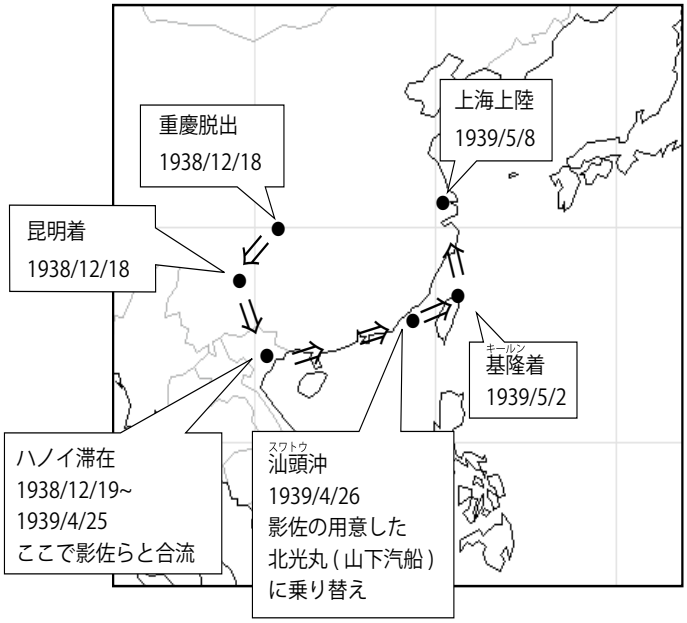
第 13 図　重光堂会談　1938 年 11 月 20 日，於 上海・重光堂（土肥原機関）（身分は当時）

周仏海日記	
1938 年 11 月 21 日	…関わっている事*に幾分か目鼻がついたが，変化があるかどうかは予想できない。… ＊重光堂会談で日本側の条件を受け入れ，汪兆銘らが重慶を離脱し，汪政権を成立させ，汪兆銘が蔣介石にとって代わり日中の「和平」を実現すること。

『周仏海日記』によれば，高宗武は周仏海と重光堂会談の直前に頻繁に会っており，周もこの交渉における汪兆銘グループ側の方針を定めるのに関わっていたことが示唆される。その約１ヵ月後，汪兆銘は重慶を脱出，12 月 18 日に昆明（クンミン）で周仏海，陶希聖（とうきせい）と合流し，翌日にフランス領インドシナ（現・ベトナム）のハノイへ向け出国する。

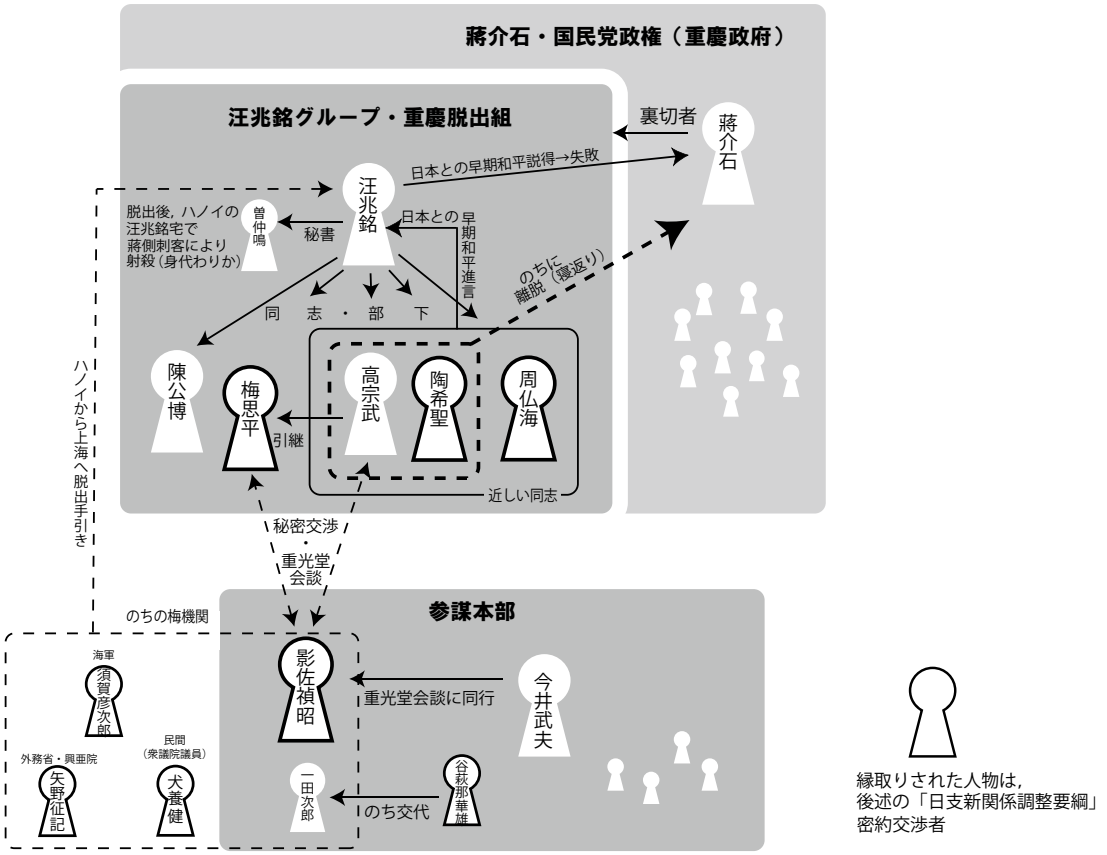
周仏海日記	
1938 年 12 月 19 日	…九時に戻ると，〔陶〕希聖がすでに来ており，一緒に汪先生を拝謁し，午後二時にハノイ行の飛行機をチャーターできるとのこと。飛行機なら早いが危険が伴う。列車だと安全だが二日は待たねばならぬ。…結局冒険でも飛行機に乗ることに決めた。そこで希兄〔陶希聖〕とそれぞれ宿舎に戻り，旅装を整えた。…三時十五分に離陸する。…一時間ほどでベトナム領〔ママ〕に入り，安全になったことを知る。五時半に〔ハノイに〕到着する。…これで現状を脱したのである。

その後の，ハノイでは秘書の曽仲鳴（そうちゅうめい）が身代わりとして射殺されるなど，汪兆銘にとって命の危険があった。汪をハノイから安全に脱出させるため，1939（昭和 14）年４月，日本側から影佐，犬養などのちの梅機関員となるメンバーが派遣された。５月には，日本が汪を保護することができる，共同租界のある上海へと移動した。そこで梅機関を発足させ，汪兆銘政権を成立させるための謀略活動を開始した。

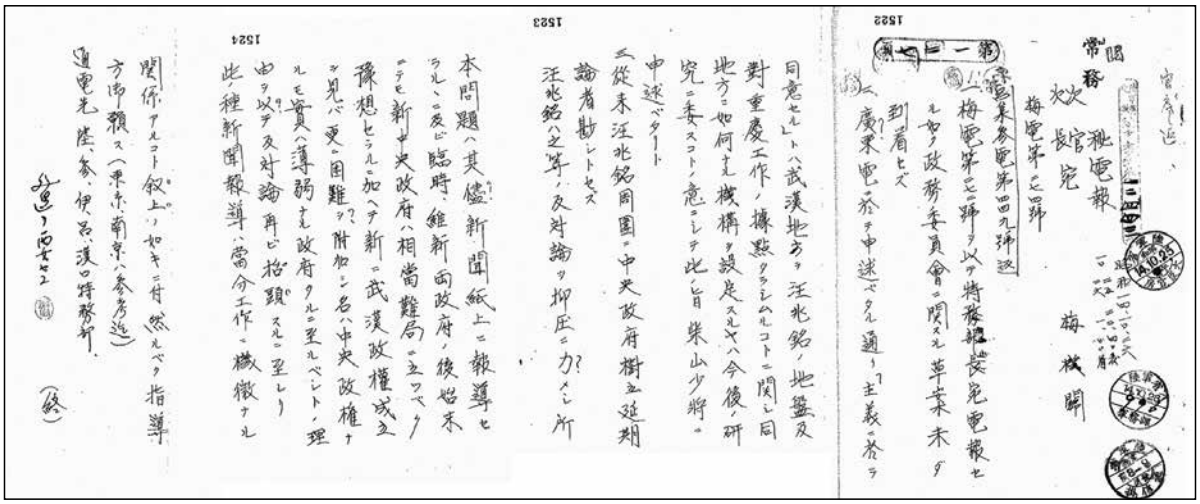


第 14 図　汪兆銘の重慶脱出から上海入りまでのルート
（筆者作成，参考：『周仏海日記』，
『戦史叢書 支那事変陸軍作戦＜２＞』，
影佐禎昭「曾走路我記」，
犬養健『揚子江は今日も流れている』
白地図出典：Ⓒ craftmap.box-i.net）

なお，梅機関設立前の情況を人物相関図として整理すると**第 15 図**のとおり。



第 15 図　梅機関設立前の汪兆銘グループ周辺人物相関図
（筆者作成，参考：『周仏海日記』，「汪清衛関係　第三巻」〔矢野記録〕２．汪精鋭工作備忘録（外務省外交史料館所蔵 / アジア歴史資料センター公開 Ref.B02031744800）ほか）



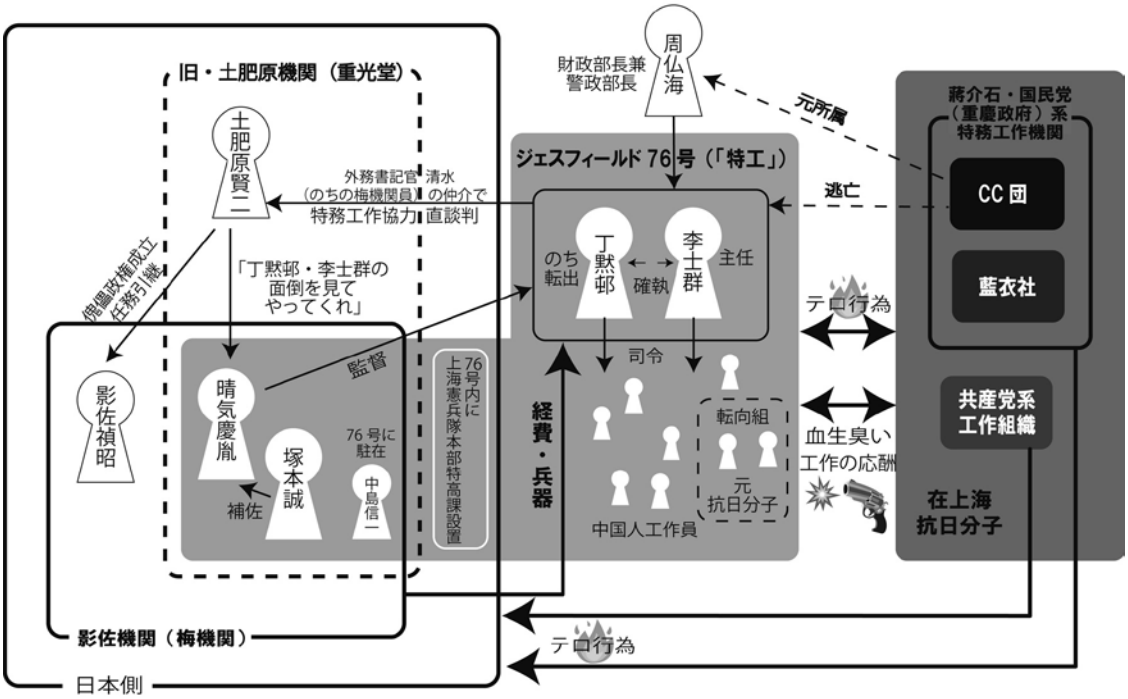
第 16 図　汪兆銘政権成立前の工作の状況について，梅機関から参謀本部宛てに送られた秘電報
「昭和 14 年 10 月 26 日新中央政府樹立運動に関する件」（防衛省防衛研究所戦史研究センター所蔵 / アジア歴史資料センター公開 Ref.C04121519700）
「梅機関」から陸軍省，参謀本部や在中国特務機関などへ工作に関する情況を伝えている。

3）「梅機関」による主な工作① 特務工作機関「ジェスフィールド 76 号」

1939 年 3 月，梅機関は政権の安定化を図るための特務工作機関「ジェスフィールド 76 号」を上海に設置した。機関名は上海のジェスフィールド通りの住所に由来し，存在は秘匿された。上海では重慶政府から離反した汪一派への反感も大きく，頻発する抗日テロに対してテロ行為で対抗した。具体的には，敵対する工作員を転向させ味方に引き入れ，敵のノウハウを入手，相手の転向が見込まれない場合は処刑するなどした。だがこのテロ合戦は一般市民からも「泣く子もだまる 76 号」と嫌悪される一因にもなった。

この工作機関の資金・武器は日本から提供されていた。このことは，1．-（2）で触れた登戸研究所の規模拡大と伴繁雄の上海出張（爆破・殺傷用謀略兵器実演）とも関係する。

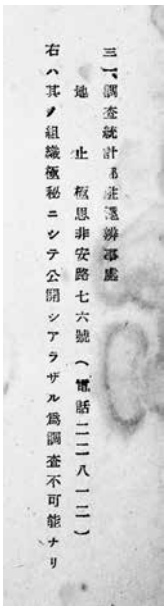
汪政権成立後は「特工総部」（別名「特工」）という正式機関となり，この組織の主任が，後述する「清郷工作」の現場責任者となったことから政権内の権力争いの激化と腐敗が進んだ。



第 17 図　「ジェスフィールド 76 号」関係者相関図
（筆者作成，参考：晴気慶胤『謀略の上海』，塚本誠『或る情報将校の記録』ほか）

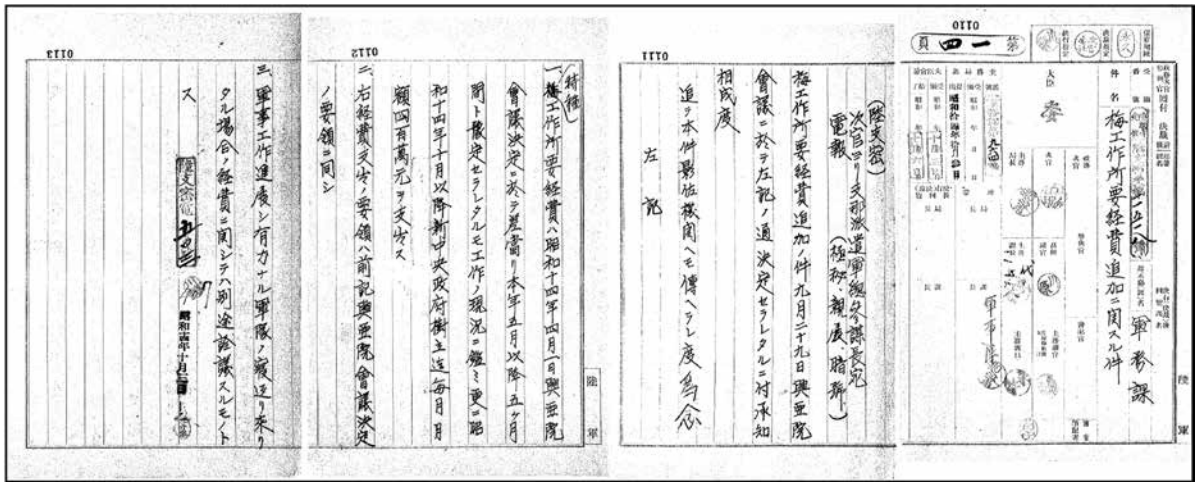
周仏海日記	
1940 年 1 月 12 日	…晴気及び塚本が来て，特工拡大計画を陳述し…必需経費の拡大を求める。このために財源を準備する必要があり，一番良いのが阿片税で充当することである。ただ特工人員が特税を行うのは好ましくはなく，一つには腐敗の恐れ，一つには実力と財力のいずれも特工人員が握ることになると将来権力が増大し操縦が難しくなるので，余が別に幹部を組織して処理することを望む。… 〔注・結局は別組織にならなかった。〕
1941 年 5 月 25 日	〔丁〕黙邨，〔李〕士群の摩擦は…ますます激化…いずれも職務の去就を以てどちらも影佐の支持を取りつけようとしており，影佐も対応に苦慮しているとのこと。…

特務工作機関「ジェスフィールド 76 号」に関する資料

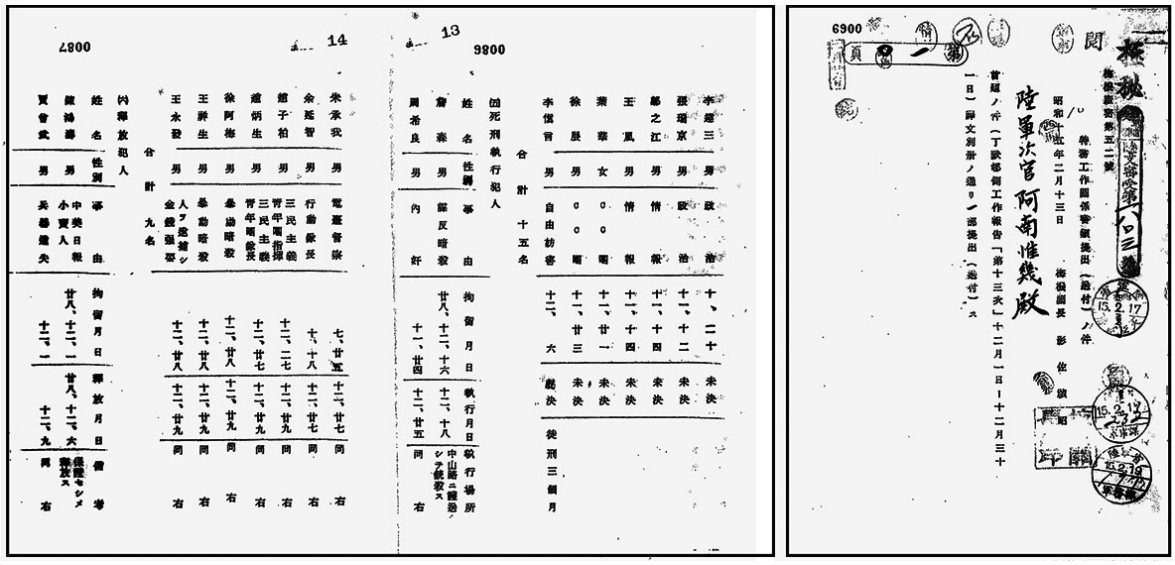

三、調査統計ハ注意厳秘ノ事
地　止　極恩非安路七六號（電話二二八一二）
右ハ其ノ組織極秘ニシテ公開シアラザル為調査不可能ナリ

第 18 図　ジェスフィールド 76 号が「極秘」組織であったことを示す資料
（上海市政研究会『昭和 17 年 9 月 30 日上海共同租界内行政権に関する諮問事項答申書添附調査報告書（其ノ一）』より，狛江市教育委員会所蔵）
２行目，「極恩非安路七六號」で「ジェスフィールドロード 76 号」と読む。「右は其の組織極秘にして公開しあらざる為調査不可能なり」。

第 19 図　昭和 14 年当時のジェスフィールド 76 号関係者の集合写真
（出典：塚本誠『或る情報将校の記録』口絵，塚本英史氏提供）
前列左から，川本（芳太郎）大佐，李士群，丁默邨，影佐（禎昭）少将。後列左から，塚本（誠，少佐），晴気（慶胤）少佐。


第一四頁
件名　梅工作所要経費追加ニ関スル件
軍務課
陸支密
次官ヨリ支那派遣軍総司令部参謀長宛
電報（極秘、親展、暗号）
梅工作所要経費追加ノ件九月二十九日興亜院
會議ニ於テ左記ノ通決定セラレタルニ付承知
相成度
追テ本件影佐顧問ヘモ傳ヘラレ度尚念
左記
特種
一、梅工作所要経費ハ昭和十四年四月（月興亜院
會議決定ニ於テ差當リ本年五月以降五ヶ月
間ト暫定セラレタルモ工作ノ現況ニ鑑ミ更ニ昭
和十四年十月以降新中央政府樹立迄毎月月
額四百萬元ヲ支出ス
二、右経費支出ノ要領ハ前記興亜院會議決定
ノ要領ニ同シ
三、軍事工作進展シ有力ナル軍隊ノ報返リ来リ
タル場合ノ経費ニ関シテハ別途諮議スルモノト
ス
陸支密
昭和十四年十月三日

第 20 図　「昭和 14 年 10 月 3 日　梅工作所要経費追加に関する件」
（防衛省防衛研究所戦史研究センター所蔵 / アジア歴史資料センター公開 Ref.C04121431800。）
「梅工作」の「特種」工作所要経費として新中央政府（汪兆銘政権）樹立まで月額 400 万元（現在の日本円の価値で約 40 億円）の支給が興亜院会議で決定された。



第 21 図　「昭和 15 年２月 13 日　特務工作関係書類提出（送付）の件（１）」表紙，18，19 頁
（防衛省防衛研究所戦史研究センター所蔵 / アジア歴史資料センター公開 Ref.C04121869900。）
影佐が阿南陸軍次官に宛てた抗日敵性分子処分の「第 13 次」報告。1939（昭和 14）年 12 月 1 日 -31 日の丁黙邨らによる特務工作として「死刑執行犯人」が合計９人であったとある。

４）「梅機関」による主な工作②　「日支新関係調整要綱」合意の密約

1939 年の『周仏海日記』は所在不明であり，梅機関と汪グループがはじめて接触した時期や梅機関の活動の経過がわかる日々について，その当時に記された記録は残っていない。そのため，梅機関長としての影佐と梅機関員が日記にはじめて登場するのは汪兆銘政権成立約２か月前の 1940 年１月２日である。

周仏海日記	
1940 年 １月２日	…午後，汪先生のお供をして影佐を接見し，日本当局と汪先生との間で連合宣言を発表するか，あるいは同時にそれぞれ発表し，互いに呼応する形をとるかどうか協議する*。…またわが方はその時に日本が要人を上海に派遣してくれるよう要望するが，影佐は東京と連絡を取って協議するよう努めると述べる。… ＊　汪兆銘側と梅機関が秘かに前年 12 月 30 日に合意した「日支新関係調整要綱」に基づくもので，この要綱は７回の公式協議会と非公式会議を経て決定。協議会は汪側からは周仏海，梅思平，陶希聖，周隆庠，（５回目以降より）林柏生が出席。梅機関側からは影佐，谷萩（陸軍），須賀，扇（海軍），矢野，清水（外務省），犬養（衆議院議員）ら６～９名が毎回出席した [14]。

この日に先立つ 1939 年 12 月 30 日，汪兆銘グループの幹部と梅機関の密談により「日支新関係調整要綱」[15] が合意に至り，汪兆銘政権を日本の傀儡政権として成立させたうえで，汪政権を正式に中国政府を代表する交渉相手とする方針が定まった。しかし，これは中国にとり一層不利なものであったため，この密約交渉の汪政権側当事者のひとりであった陶希聖と，早い時期から影佐と接触していた高宗武の二人が一転，汪兆銘グループから離脱，日本側からの過酷な条件を批判し，1940 年１月下旬，交渉の内実を香港のメディアに暴露した。

「日支新関係調整要綱」の中身

中国による満州国の承認
防共地帯（華北）における日本軍の駐屯地域での日本によるインフラ監督権留保
華北・満蒙資源の共同開発にかかる日本への便宜供与
汪兆銘政権の中央銀行設立・新通貨発行などへの日本側からの援助
汪兆銘政権への日本人顧問の招致，採用
事変中における中国本土での日本国民が被った損害補償（賠償）の要求　など

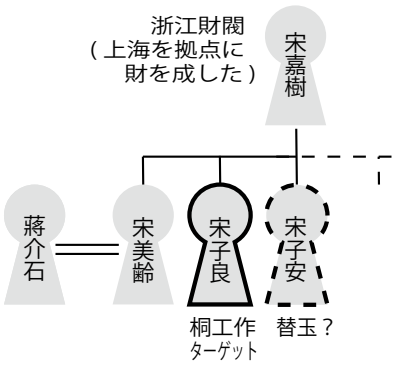
5）汪兆銘政権の成立と「軍事顧問」としての活動の継続

1940 年 3 月 30 日，汪兆銘政権が南京で成立した。使命を達成したと同時に梅機関は上海を引き払った。そして「還都」した南京へ移転し，「国民政府〔＝汪兆銘政府〕最高軍事顧問部」として活動を継続した。梅機関員であった者のうち，影佐は政権の「最高軍事顧問」となり，同じく「軍事顧問」となった谷萩，晴気，塚本とともに引き続き謀略を進めた。

6）桐工作への協力

汪政権工作と並行して，水面下では，日本政府が「対手とせず」と声明を発したはずの蔣介石の重慶政府側とも直接交渉が行われていた。

影佐とともに 1938 年の重光堂会談を行った今井武夫（桐工作実行時は支那派遣軍総司令部第二課長兼第四課長）と，参謀本部第二部第八課長（謀略課長）臼井茂樹（影佐の元部下）らが，汪政権成立に前後する 1940 年春頃から，蔣介石の義弟 宋子良（と思しき人物）に対し重慶政府との直接和平を目指す「桐工作」を行っており，梅機関も協力した。日本側はこの工作で支那派遣軍総参謀長 板垣征四郎と蔣介石とを秘密裏に直接会談をさせ，戦争の終結を期待していた。それを達成できたならば，蔣政権に代わる相手，すなわち汪政権は不要となる。したがって，桐工作の失敗が確定するまで，日本は汪政権の承認を引き延ばしそうとした[16]。



第 22 図　蔣介石と宋子良の関係
（筆者作成）

『周仏海日記』には，重慶政府に意図を見透かされた日本が，期待を持たされつつ，できるだけ交渉を先延ばしにされ，翻弄される様子が記録されている。

周仏海日記	※ゴシック体での強調は筆者による（以降同じ）
1940年 3月25日	…影佐が来て，重慶に対する工作及び将来の全般的趨勢（すうせい）について話し合う。…
同年 6月14日	…晩，今井大佐と対重慶工作について話し，三回にわたって香港で宋子良と交渉した経過を詳しく聞く。この事について余は最初から実現しそうにないと判っていたが，…彼も以前より自信を失ったようであった。宋らの行動が蔣の命令あるいは同意を得たものなのかどうか疑問であるが，…大まかに言えば**和平は〔蔣の〕その意とするところになく，これでもってわが政府を破壊したいというのが実際の気持ちであろう。**そこで今井に，日本側が注意するよう告げる。…
同年 8月20日	…余は**宋子良の真偽を問い質すと，彼〔臼井〕はおそらく宋子安〔子良の実弟〕が交渉に出ているのだろうと言う*。数ヵ月にもなる相手の真偽がまだ定かでないとは，まったくお笑い草なり。**… ＊　替え玉とされる人物には諸説あり。
同年 11月23日	…この一年来，**日本側の中国情勢についての認識の不正確なこと，情報も常に誤っている**ことを深く思わざるを得ない。…
同年 11月24日	…松岡〔洋右，当時 外相〕は，…もし重慶側がはっきりと和平すると表明したなら，直ちに汪先生と調印〔≒汪兆銘政権承認〕延期を協議するという。余はもし本当にそうであるなら，…おそらくそれは**重慶の引き延ばしの術に嵌（は）まるだけ**であろう，と言った。
同年 11月28日	…犬養からは東京は三十日調印を確定した，との電話があり，これで重慶和平の説が事実でないことが証明されたといえよう。…

⑤　清郷工作[17]

汪兆銘政権成立後，その勢力圏の治安維持・経営のための謀略が「清郷工作」である。

汪政権の勢力範囲は上海・南京など限定的であったが，その周辺の肥沃な揚子江河口域南岸地域は税収のドル箱と言え，汪政権は「完全な自主独立の基盤」として「清郷工作」を展開しようとした。しかしこのあたりは中国国内でも特に裕福な地域で有力な浙江財閥など蔣介石支持層の地盤であり，また共産党も農村を中心に勢力を伸ばしていた敵性地区でもあったため抗日感情が特に強い地域だった。当然，そこでも汪政権に対する人民からの信用は低く，汪政権，国民党系軍，共産党系軍（新四軍）との三つ巴で激しく争った。そのため，もともと財政難の汪政権は経済的にも軍事的にも日本に頼らざるを得ず，実態は日本による占領地経営であった。

しかし実体のない汪政権にとって支配地経営は悲願であり，この工作に大きな期待をかけた。『周仏海日記』には，政権の中心とも言えるこの工作への，元梅機関員をはじめとした多くの日本人による関与や，その困難であった様子が書き留められている。

清郷工作大綱（要旨）

・民衆に基礎を置く自立体制確立のための日華協力と汪政府の強化
・工作に専念できる特殊な清郷機構（＝清郷委員会）による政治建設と中国人による自力維持
・汪主席直接指導による清郷委員会の設置と現地工作責任者（秘書長）の任命
・敵性武装団体，組織の総力戦的討伐と妨害防止のための工作地域の封鎖（竹矢来の建設），
日本軍による敵の集団武力討伐と封鎖戦の維持防衛
・敵〔反汪政権，抗日勢力〕を掃討後の民衆による自衛と警察による治安維持
・民衆生活の向上を至上目的とした強力な保護経済政策による民心の把握

→　**理念は素晴らしいものに見えるが，民衆の抗日感情や汪政権の財政難を鑑みると到底実現可能なものではなかった**

周仏海日記	
1941 年 ４月 11 日	…晴気中佐が清郷問題で来訪。…午後，谷萩大佐が来訪*し，国民政府の強化法について軍事，外交，政治，金融のそれぞれの角度から提案するが，採用すべき点が多い。… ＊　晴気中佐も谷萩大佐も元梅機関員。特に晴気は清郷工作の日本側現場責任者。
同年 ５月８日	…〔李〕士群が清郷委員会の工作を報告に来たので，一つ一つ指示を与えた。人事と経費に特に注意を促した。…岡田〔酉次〕大佐〔当時 汪政権経済兼軍事顧問〕が清郷の経費問題を相談に来たので，政府の財政は困難であり，…いつかは破産してしまうと述べた。…

この工作では日本による派遣師団や，汪兆銘が直接指導した「清郷委員会」が治安維持に努め抗日分子を取り締まったが，人民は面従腹背という状況であった。

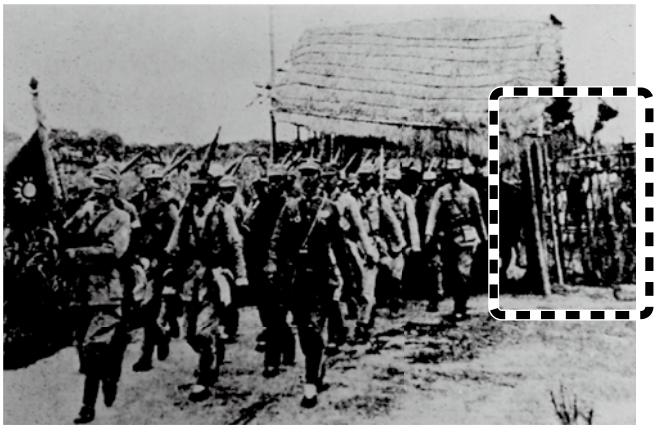
また汪兆銘が直接任命した現場責任者は上海の元「特工総部」主任 李士群であり，政権中央から独立した場所での汪兆銘直接指導という名目のもと，李は，汪政権中央幹部（特に周仏海）との確執を招いた。こうして「清郷工作」は政権の基盤を揺るがすこととなる。

清郷工作概要

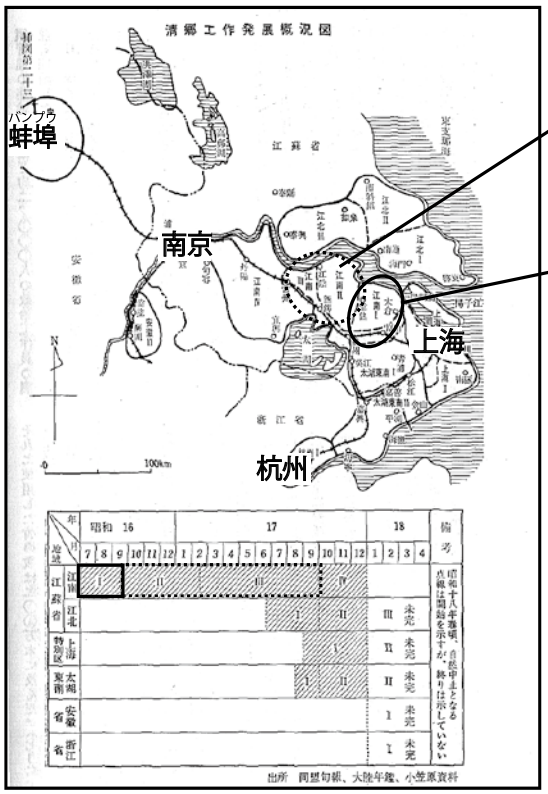
実施時期：1941 年７月～ 1943 年春頃（自然消滅）　　汪兆銘が直接選任
主な対象地域：揚子江南岸地区　　⇓
責任者：（汪政権側）清郷委員会秘書長（李士群，元特工総部主任）
　　（日本側）第十三軍（別名「登」部隊）参謀長
現場責任者：晴気慶胤中佐，中島信一中尉
　　（ともに元梅機関員，従来より李士群の監督係）
治安担当：清郷委員会（汪兆銘直属），第十三軍司令部（日本陸軍）
特徴：周囲を「竹矢来」で囲い込み，敵性組織の掃討と人民支配を行う
竹矢来総延長：1700km（使用した竹の本数は第Ⅰ期 130km分だけで約 200 万本）
敵性勢力：忠義旧国軍（重慶側遊撃隊），新四軍第六師（中国共産党軍）ほか

第 23 図　李士群
（出典：『最新支那要人伝』）

周仏海日記	
1941 年 ７月 31 日	…彼〔影佐〕が言うには，〔清郷工作をやらせている〕李士群〔清郷委員会秘書長〕の禍は大である。…〔注・周仏海の嫉妬からくる記述である可能性あり〕
同年 ８月３日	…〔李士群に対する〕汪先生の臆病と日本側の庇護がその傲慢ぶりを助長した主な原因である。今，日本側は判ってきたようだが，汪先生は依然として恐がっている。これでは権威を維持できない…



第 24 図 「清郷工作　清郷地区に活躍する保安隊と竹矢来」
（出典：『戦史叢書　支那事変陸軍作戦＜３＞』口絵）
日本国内では清郷工作は成功していると喧伝されていた。竹矢来は中段右端（**点線枠内**，筆者追加）に見える。



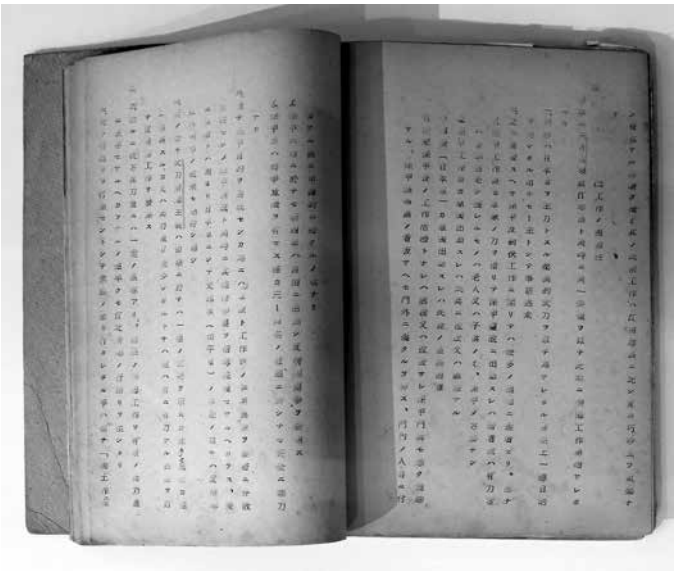
江南地区第 II，第 III 期
（1941（昭和 16）年 9 月半ば ~ 翌年 9 月末）に
工作を行った地区

江南地区第 I 期
（1941（昭和 16）年 7 月 ~9 月半ば）に
工作を行った
常熟 - 蘇州（含まず）- 崑山（含まず）- 太倉に
囲まれた 1,800 平方キロにわたる地区

その他の地区の記録は
ほぼ残っていない

第 25 図　「清郷工作発展概況図」
（出典：『戦史叢書　支那事変陸軍作戦 < 3 >』に筆者加筆）

在北京大使館情報課駐在員 大原実による出張報告（**第 26 図**）では，①掃討を事前に察知した敵兵は封鎖線外に逃亡，または良民に扮装し良民と敵兵との識別困難のため多くの良民が犠牲，②軍隊の力を借りて出動すれば若者や有力者は逃亡，残るのは老人や子供のみ，③単独で清郷工作員が出動すると敵性組織により拉致，または惨殺される状況であったことを示している。こうして，清郷工作は最終的に自然消滅，占領地の経営もままならない汪政権はますます経済的に追い詰められた。



第 26 図　「昭和 18 年 12 月 12 日　中支ニ於ケル清郷工作ニ関スル調査報告書」（部分）
（渡辺賢二氏所蔵『在北京（昭．十七，八年）参考資料』所収）
在北京情報課駐在員 大原実による極秘印が押された出張報告書。写真見開きにある「（二）工作の困難性」には「一，掃蕩は日本軍を主力とする圧倒的武力をもって為されたる関係上一応目的をなしたる如きも－主として〔人民は〕事前逃走」とあり，その対処のため，保甲*工作員や軍隊の力を借り，保甲編成のため出動しても「若者或いは有力者は全部逃走し残れるものは老人又は子供のみ，保甲の方法なし」且つ「保甲工作員が単独出動すれば民兵に拉致又は虐殺され」るなどと報告され，汪側，日本側が武力を行使しようとするほど返り討ちに遭い，占領地経営が機能していないことがわかる。

＊中国の行政機関の最末端組織。一般農民で組織された。

⑥　中央儲備銀行の設立

汪兆銘政権は独自の通貨「中央儲備銀行券」（儲備券）を発行する「中央儲備銀行」を設立した。梅機関員らが全面的に支える中，汪政権の財政部長 周仏海（のちに中央儲備銀行総裁）を中心に計画を進め，日本は多額の出資に加え，儲備券自体を日本国内の内閣印刷局（現 国立印刷局）や凸版印刷で製造した[18]。

なお，「儲備銀行」という名称は，蔣介石が 1937 年に設立予定だった中央銀行の名称として考えられていたものだった。

ここでは，日本の資金調達や紙幣印刷を裏付ける記述を『周仏海日記』から紹介する。

第 27 図　「儲備券用紙〔綴〕」背表紙
（当館所蔵）
戦後，日本国内で発見された。
綴の実際の中身は偽造法幣用紙の試抄紙と思われる。

周仏海日記	
1940 年 5 月 3 日	…午後，中央銀行準備委員会〔主席 周仏海〕第一回会議を招集し，「中央儲備銀行」と名付け，双十節〔10 月 10 日〕に正式に成立させること*を決定する。… ＊　中央儲備銀行は実際には翌年 1 月に業務を開始する。
同年 5 月 20 日	…犬養〔健〕*が来て，…**東京で中央銀行の資金調達と紙幣印刷の件を進めてもらう**よう頼み… ＊　元梅機関員で，当時は汪政権経済顧問。
同年 7 月 1 日	…影佐，犬養，安藤〔明道〕，久保〔文蔵〕*らに来てもらい，法幣〔ここでは儲備銀行券を指す〕を製造するうえの各種措置を合同で協議し，図案及び数量を決定し，日本**内閣印刷局に印刷の代行を委託**することにする。… ＊　安藤と久保は，当時それぞれ，興亜院経済第三局長と同経済部第四課長で，中央儲備銀行設立に奔走した。
同年 11 月 20 日	…午後，日銀に行き，総裁の結城〔豊太郎〕氏を訪問する。…結城は，日本銀行と中央〔儲備〕銀行の間の密接な協力が必要であり，彼も出来る限りの援助をすることを表明した。…その後，**内閣印刷局を参観し，中央〔儲備〕銀行の新紙幣印刷**のため努力をしているのを目にして大いに感激する。…この印刷局は規模も大きく，仕事もとても複雑であった。…
同年 12 月 17 日	行政院会議に出席し，貨幣整理暫行辦法（べんほう）[19] 採択と中央銀行正副総裁及び理幹事の承認を行う。安藤と久保が中央銀行成立に関する中日協力の覚書を携えてやって来る。日高〔信六郎〕*と余が調印する。…一月六日に中央〔儲備〕銀行は正式に業務を開始することを決定した。… ＊　もと興亜院経済部長，当時，南京駐在大使館参事官に転任。

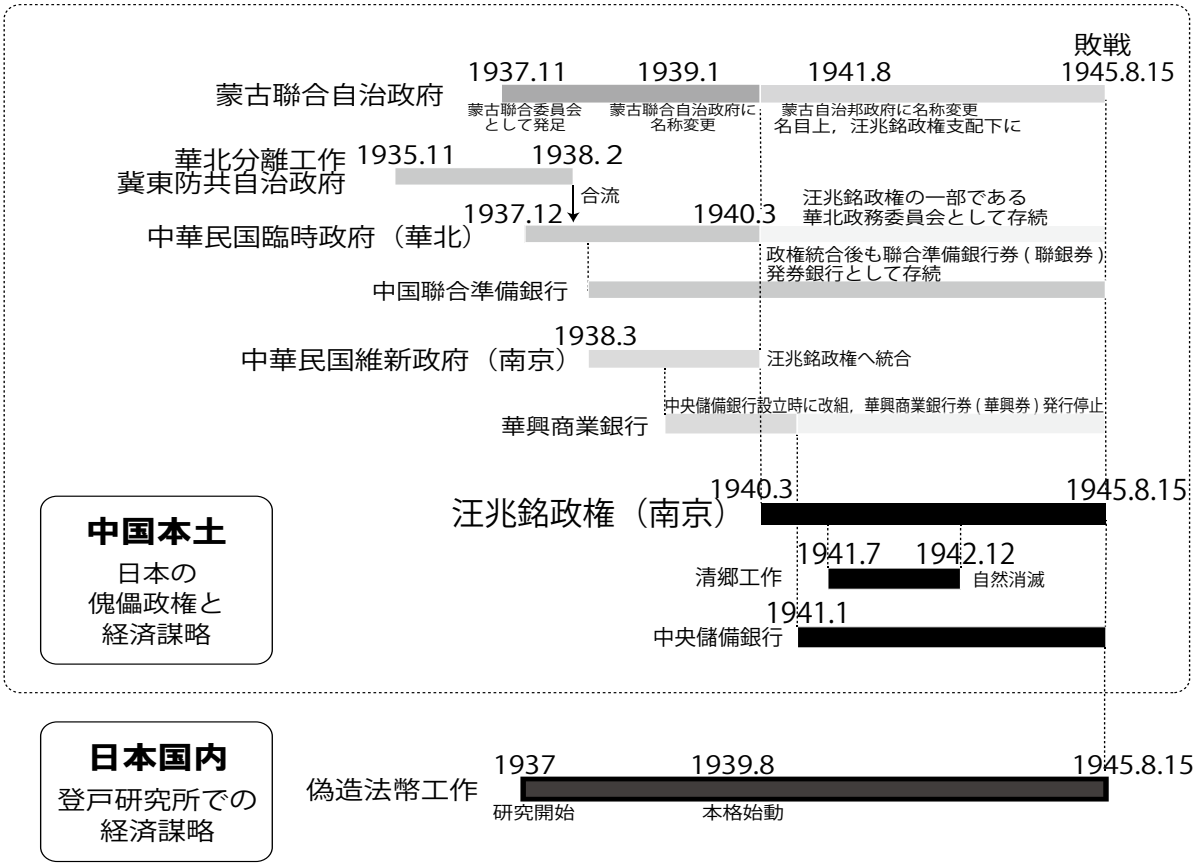
3．謀略最後の切り札 - 偽札工作

清郷工作の自然消滅，儲備券の価値下落といった経済面の理由により，日本が期待をかけた傀儡の汪兆銘政権の権威はますます失墜した。ここでは，そうした背景の中で，登戸研究所の偽造法幣が最終兵器となっていった様子を見ていく。

（1）　参謀本部による経済謀略の失速

第 28 図のとおり，参謀本部は汪兆銘政権成立以降，中国本土での対中国謀略はこの政権に

政治・経済謀略の全てを集約し，戦争早期終結の全ての望みを賭けていた。したがって，汪政権を使った謀略が奏功しない場合，蔣介石政権の法幣弱体化のための対中国謀略は登戸研究所製造の偽札が切り札となることがわかる。



第 28 図　中国本土及び日本国内で日本陸軍が行った経済謀略とその時期（筆者作成）

①　傀儡政権の失敗

1936（昭和 11）年頃からの戦時インフレにより，日本円の価値は下落し戦費調達は困難に陥っていた。そうした中で戦時に傀儡政権を成立させることには次の利点があった。

・占領地経営による収益増

・独自通貨の発行・流通による日本主導の経済圏形成，戦費調達の安定化

・占領地での通貨統制による蔣介石政権の法幣駆逐と弱体化

日本が中国に複数の傀儡政権を樹立し，それを汪政権に集約した一連の流れは，対中国謀略としては理に適っていたと言える。しかし，日本の傀儡政権をほぼ統合した汪政権での工作を総括すると，占領地経営としての清郷工作は**失敗**，独自通貨としての中央儲備銀行券は普及しないどころか**価値が下落**し，通貨統制は法幣の信用度の高さから**逆効果**，と，いずれも失敗に終わっている。

②　経済面から見た汪兆銘政権の中身

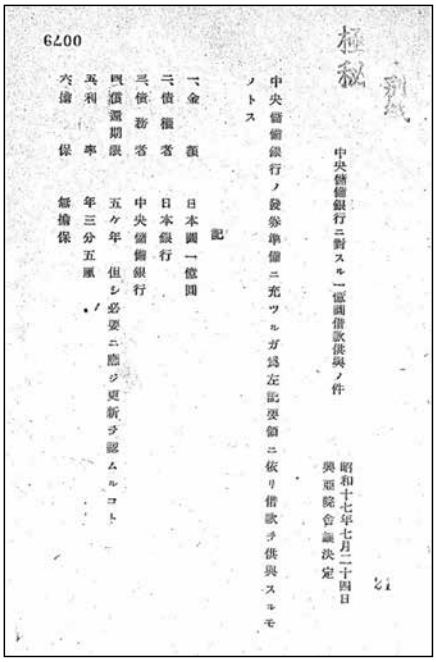
実体の無い政権維持のための資金捻出は困難であり，戦局の悪化とともに，汪政権の財政はますます困窮していった。汪政権の財政部長であり中央儲備銀行総裁であった『周仏海日記』を再び取り上げながら政権の実態を見ていく。

１）赤字財政

汪政権は，そもそも経営自体が日本の支援がなくては成り立たず，当初より，日本からの借款を繰り返していた。主な収入は「関税」,「塩税」,「統税」[20] で，華北からの税収も中央に融通していた。しかし，財政は毎月大幅な赤字が続いた。周仏海は財政部長として，当初は，アヘンに特税を科すことで不足を補うことも考えていた。

第４表　汪政権の赤字財政
（『周仏海日記』1941 年 12 月 31 日注記より）
1942 年度１月収支（単位：万元）

	予算	実収入	決算額
関税	2015	250	-1765
統税	1214	200	-1014
その他	1130	351	-779
塩税	200	228	28
合計	4559	1029	-3530


6200

極秘

中央儲備銀行ニ對スル一億圓借款供與ノ件

昭和十七年七月二十四日
興亜院會議決定

中央儲備銀行ノ發券準備ニ充ツルガ爲左記要領ニ依リ借款ヲ供與スルモノトス

記

一、金額　日本圓一億圓
二、債權者　日本銀行
三、債務者　中央儲備銀行
四、償還期限　五ヶ年　但シ必要ニ應ジ更新ヲ認ムルコト
五、利率　年三分五厘
六、擔保　無擔保

第 29 図　「中央儲備銀行に対する１億円借款供与の件」
（部分，防衛研究所戦史研究センター所蔵／
アジア歴史資料センター公開 Ref.C04123657700）
『周仏海日記』と照合すると，儲備券印刷費用に充てられたとみられる。

第５表　『周仏海日記』から判明した汪政権による主な対日借款
（日付は主に調印日，1940 年頃の換算レート１円≒１元）

年　月　日	金額および目的
1940 年 3 月 29 日	4,000 万元（正金銀行経由）
同年 5 月 10 日	日英関税協定由来の上海市での当年４月分の関税剰余信用契約
同年 12 月 24 日	5,000 万元（銀行資本の一部として，華興商業銀行*経由）　＊日本の傀儡の維新政府（南京）の銀行
1941 年 2 月 28 日	300 万元（華興銀行経由か）
1941 年 6 月 21 日	３億円相当の貨物取引による信用借款決定
1942 年 6 月 10 日	3,500 万元の兵器（武器・被服等軍需物資の当座貸越）
同年 7 月 28 日	日本円１億円（儲備銀行券印刷用）
同年 8 月 3 日	日本円 3,000 万円（儲備銀行券印刷用）
1943 年 6 月 10 日	（金額不明）日本から金塊を持ち込み，利益を中央儲備銀行に帰属
1944 年 12 月 15 日	金券発行準備として金塊（少なくとも 20 トン）を運ぶよう依頼

２）治安維持費・軍事費の膨張

安定した収入源として占領地経営を目指した清郷工作は 1942 年５月の影佐の左遷に伴い，

彼に後ろ盾を求めた現場責任者 李士群が失脚し，自然消滅した。そして，もともと面従腹背であった占領地の治安維持費を含んだ軍事費は膨れ上がり，さらに汪政権の財政を圧迫した。

周仏海日記	
1942 年 5 月 29 日	…〔支那派遣軍総司令部付〕住谷〔主計〕大佐が来て軍事予算について相談する。…これまで日本軍部が支配してきた治安協力費及び物資統制設備費を…交付停止，清郷〔工作〕及び軍事経費に回してくれたのであり，そうでなければ本期の概算編成は実に難しかった。…
1943 年 5 月 17 日	…来年度予算編成を協議する。軍事費の膨張が巨額過ぎて，編成に手を着けられず，焦燥するのみ。…

3）日本側都合による華北での中央儲備銀行券（儲備券）使用制限

日本が多額を出資した中央儲備銀行券（儲備券）の目的は，汪政権の通貨として中国全土に流通させ，法幣を駆逐することであった。しかし，華北では日本軍が物資調達に使用していた軍用手票（軍票）や中国聯合準備銀行券（聯銀券）の流通に支障をきたす，という日本側の都合により使用を制限された。それだけでなく，儲備券と聯銀券は直接交換することも出来なかった（軍票を仲介させれば可能）[21]。1937（昭和 12）年以降，日本軍の軍事力により聯銀券による通貨統制ができており，聯銀券が儲備券に置き換わる，もしくは流通通貨に儲備券が加わるという不都合，また，軍票の価値に影響することを嫌ったためであった。

第 30 図　日本陸軍の経済謀略に使用された紙幣
左上から，時計回りに「軍用手票（軍票）」，「中国聯合準備銀行券」，「中央儲備銀行券」（すべて当館所蔵）

周仏海日記	
1941 年 3 月 16 日	…新法幣〔＝儲備券〕が順調に普及できない最大の障害はやはり日本の軍票である。日本は新幣に対し相変わらず徹底的な援助はしていず，口先ではうまいことを言うが実際には何もしないという性格がここにも見られる。…

4）対法幣交換レートの悪手

儲備券の普及を急ぐあまり，発行から約一年半後の 1942（昭和 17）年 5 月，もとは等価だった対法幣の交換レートを徐々に下げ 1 対 2 とすることを決定した（**儲備券の価値＝法幣の 1／2**）。しかし，同時期に汪政権は南京市・上海市とその周辺三省で法幣の流通禁止と儲備券を統一通貨とすることを宣言したことにより，銀行での取り付け騒ぎが起こった。このとき儲備券はさらに信用を下げ，米物価などの急上昇を招いた。さらには敗戦間際，1944（昭和 19）

年には悪性インフレに見舞われ，財政は壊滅的な状況に陥った。

周仏海日記	
1943 年 ３月４日	…〔知人との会話で〕たまたま新旧法幣〔＝儲備券と法幣〕を二対一で交換したことに話が及んだので，余は次のように言った。これは余の唯一の失敗であり，新旧法幣の等価交換を勝ち取れなかったことは今思いおこしてもなお心が痛む。…

５）政権内権力の腐敗

北京大使館情報課 大原実は「極秘」の出張報告書「同盟条約後の中支を観る」[22] で，『周仏海日記』には記されない汪政権の実態を次のように報告している。（以下一部要約抜粋）

首都南京の印象は「沈滞の街」/ 汪兆銘の取巻や部下は皆最悪との噂 / 汪本人は言葉は立派だが節操がない / 汪の妻 陳璧君は食糧・アヘン関係を握り私腹を肥やす / 周仏海は税金と警察権力を手中にし蓄財に励む / 政権内幕は日本人好みの名文句で煙に巻き，思う存分占領地域の民衆の骨をしゃぶっている / 和平軍・保安隊・警察隊などは日本側に忠犬ぶりを装うが民衆に対しては狂犬であり強盗，陰では蔣政権に協力 / 重慶側から人望無いことは自覚しているはず

『周仏海日記』からは，周は，敗戦間際にインフレのため公務員給与の 50 ～ 70 倍の賃上げを日本側へ要求していたことがわかっている。さらに，周仏海の蓄財額は 1944 年末で約 3.1 キロの金の延べ棒 75 本分相当であった（2021 年 11 月現在，金１g ＝約 7,000 円換算で約 16 億３千万円相当）。

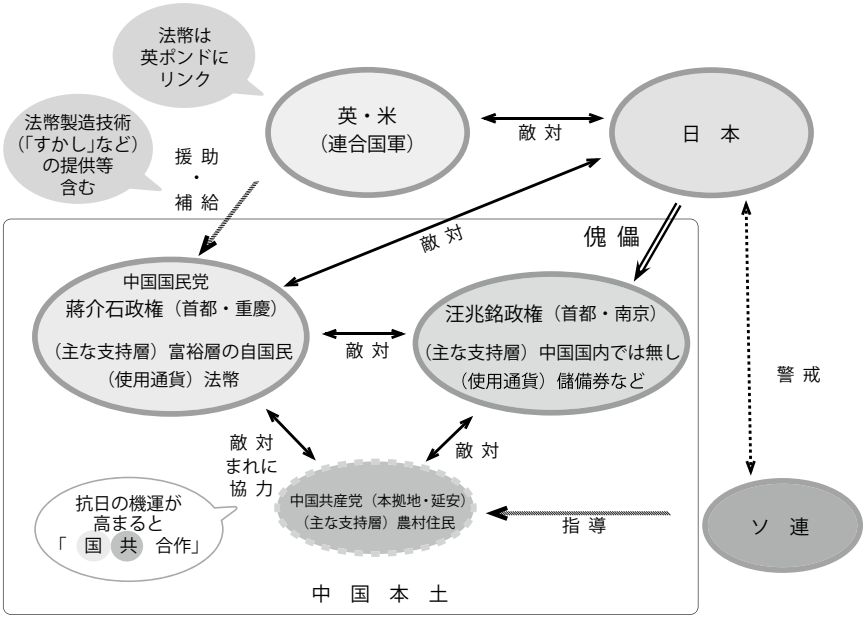
（２）「強い」法幣とアジア太平洋戦争の関係

参謀本部が挑み続けた蔣介石政権の「法幣」。中国国内では圧倒的な信用度から，日本は法幣を駆逐することはおろか，弱体化ですらも不可能であった。

中国では歴史が浅い法幣制度であったが，法幣の高い信用度は英米の支援と技術に支えられていたため，法幣を駆逐しようとすることは英米に対する挑戦でもあった。そのため，法幣の偽札謀略は，「蔣介石政権とそれをサポートする英米」対「日本」という構図になっていた。

そもそも日米開戦を回避する条件として米国からの「ハル・ノート」では，日本に　①中国からの日本軍の撤兵　②汪兆銘政権の否認　③三国同盟の空文化　を求めていた。

これらを履行できないと判断した日本は米国に対し開戦に踏み切った。したがって，主に太平洋上で展開された対米戦争は，日中戦争の延長線上にあると言える。また，中国本土での全面戦争は，対蔣介石政権だけでなく，当時農村を中心に力を伸ばしていた共産党勢力を加え，アジア太平洋戦争開戦直後は**第 31 図**のような構図になっていた。



第 31 図　1941 年後半頃の汪兆銘政権と日本を取り巻く構図（筆者作成）

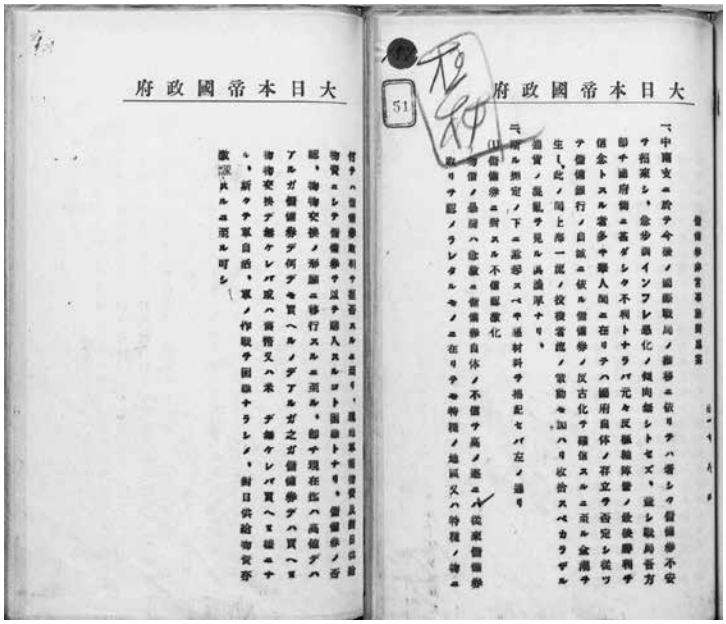
（3） 重要性を増す登戸研究所製の偽造法幣

蔣介石政権を弱体化させる手段としての登戸研究所の偽造法幣。ますますその重要性が高まった背景を見ていく。

① 儲備券の価値の低下

手書きで「極秘」と記された**第 32 図**は，戦局により儲備券が著しく価値を落とし，反故になる可能性を鑑みて出された対処案である。

その背景のひとつに，「儲備券に対する不信感激化」とあり，特種地区で物品（米など）を購入する際，儲備券の受取拒否が起こっており，将来的に使用できなくなると危惧され，ひいては，軍の作戦などに支障を来すだろうと報告されている。



第 32 図　昭和 17 年 8 月 4 日付「儲備券非常事態対処案」
（部分，国立公文書館所蔵 / アジア歴史資料センター公開 Ref.A17110555000）

②　聯銀券，軍票の限界

儲備券と同時期に併用されていたのが，謀略の一環で使用された華北の聯銀券や華中・華南で通貨として使用されていた軍票であったが，これらは次に挙げる理由から，法幣を駆逐する勢力として儲備券の代役にはなり得なかった。寧ろ，聯銀券と軍票の欠点を補う工作として儲備券の普及が画策されたのである[23]。

聯銀券…日本軍の軍費として使用され，**日本の軍事力が及ぶ（抗日勢力を抑え込め得る）地域での使用を限定**された管理通貨

軍　票…「軍行動の自由と生命確保のための経済武器」[24]で，物資調達と軍票の価値の維持が軍の生命線であり，日本軍の豊富な物資に対する信用を基礎に交換が成立するため，**法幣を攻撃（駆逐）する性質を持ち合わせない**

③　奥地での「法幣一強」

日本の中国本土での占領地は広大な大陸においてはごくわずかで，少し奥地に行けば法幣しか通用しないことが普通であった。そのため，大陸奥地での戦時物資調達のためには偽造法幣は非常に有効だった。

④　唯一残された「法幣の偽造」という対抗手段

儲備券による法幣の駆逐や弱体化が期待できなくなると，蔣介石政権を弱体化させるため「偽造」法幣を大量に流通させることで経済攪乱（かくらん）を起こす，という謀略が最後の手段として残った。この謀略成功のカギは１）流通ルートの確保と２）量産体制の確立にあった。

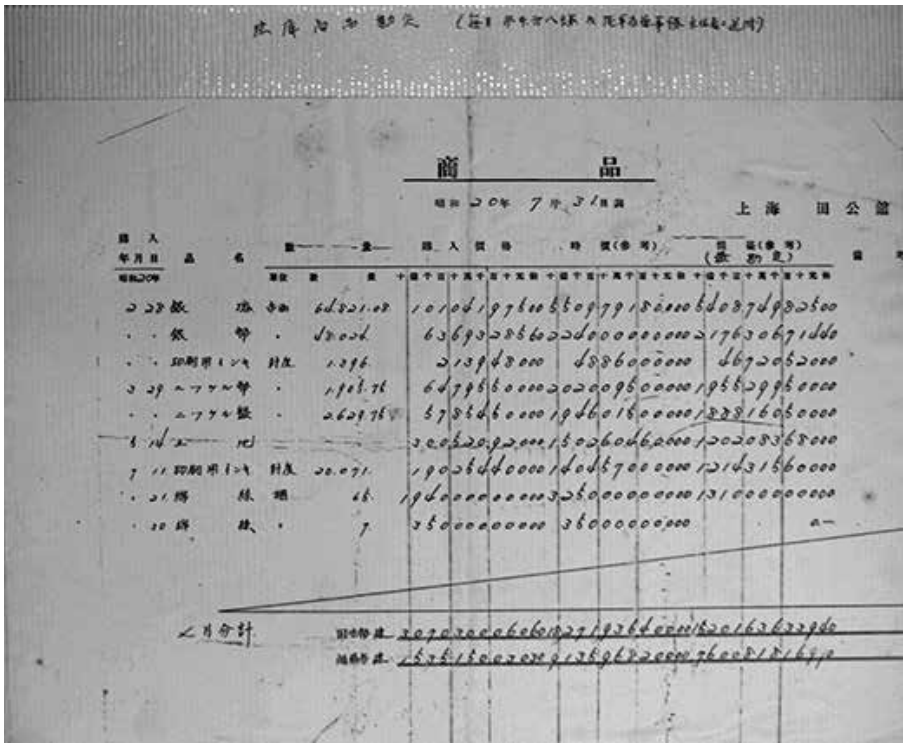
１）流通ルートの確保

この偽造法幣謀略のため，阪田誠盛（さかたしげもり）の阪田機関を中心としたルート（当館第四展示室で紹介）に加え，敵側への流通拠点である蚌埠（バンブウ）〔安徽省北部〕に参謀本部の岡田芳政が機関長を務めた松機関の支部や関門を設置，敵側との直接交渉取引も行った。

山本が偽造法幣で阪田機関が購入したものを参謀本部へ報告していたことがわかる資料も現存する（**第 35 図**）。

第 33 図　蚌埠と南京の位置関係
（原田清『昭和 18 年 12 月 11 日「中国における戦争経済」備忘録』巻末「蚌埠日華雑穀共同委員会収買地域要図」（狛江市教育委員会所蔵）に筆者加筆）
山本憲蔵旧蔵。右下が南京，左上の◎に囲まれた駅が蚌埠。蚌埠が奥地への流通拠点であることがわかる。

第 34 図　山本憲蔵（左）と阪田誠盛
（狛江市教育委員会所蔵）



第 35 図　山本憲蔵旧蔵「アルバム」に貼付された，上海・田公館（阪田機関）の買付商品リストコピー
（狛江市教育委員会所蔵）
アルバム上部に山本の自筆で,「陸庫商品勘定（毎月参本〔= 参謀本部〕第八課及陸軍省軍事課主任者へ送附）」とある。

２）量産体制の確立

偽札を大量に流通させるためには，当然，量産する必要があった。戦時中，日本銀行券や植民地（満州，朝鮮，台湾）の紙幣を製造していたのは，本来，内閣印刷局のみで，聯銀券，儲備券などを製造する程の余力は無かった。そのため，聯銀券，儲備券については，偽造防止を期待できる程に高度な製紙や印刷技術を持つ民間企業などが選ばれ，製造にあたった。分担などを整理すると，これら企業，機関と登戸研究所第三科との紙幣製造機関同士のネットワークが示唆される。

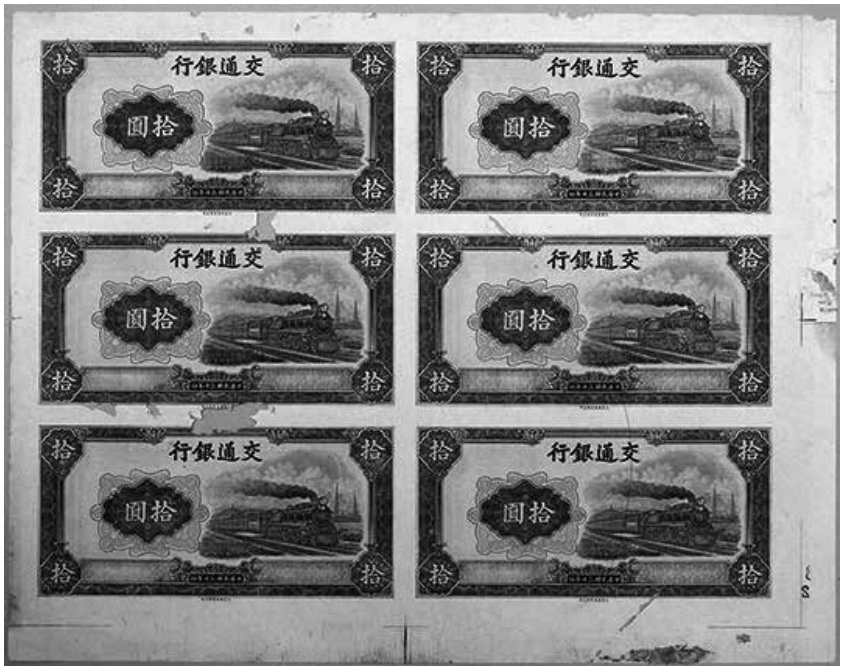
第６表　戦時中の日本における対中謀略に関係する紙幣製造機関　（筆者作成）

券種／分担	軍票 蒙彊銀行券 華興商業銀行券	聯銀券 （華北）	儲備券 （汪兆銘政権）	偽造法幣	
製　紙	福井・越前和紙組合， 巴川製紙所？	越前和紙組合	越前和紙組合[25]， 巴川製紙所？	巴川製紙所， 特種製紙	陸軍登戸研究所 第三科
印　刷	凸版印刷				
関係機関	内閣印刷局（1943（昭和 18）年 11 月以降は大蔵省印刷局）				

＊　企業名は判明しているもののみ
＊　越前和紙組合の 1942（昭和 17）年以降の名称は越前製紙工業小組合
＊　巴川製紙所と凸版印刷はともに社長が実業家の井上源之丞
＊　登戸研究所第三科は敗戦直前に福井県へ疎開
＊　内閣印刷局は登戸研究所に技術指導

1940 ～ 41 年頃には，民間製紙会社により，登戸研究所が単独で偽造法幣用紙の量産を可能にする「漉（す）かし」を含む技術が完成していた。また 1942 年には，香港の法幣印刷工場から法幣と同じ材料・製造機械を接収したことにより「ホンモノ」同様の偽札製造が可能になった。

このように偽札の量産体制が確立した登戸研究所の第三科への期待はさらに高まり，敗戦まで第三科は規模を拡大し続けた。



第 36 図　登戸研究所製造「六連偽札」原本
（当館所蔵 / 渡辺賢二氏寄贈）
戦後，日本国内で発見された。裁断・ナンバリング前に不良品としてはじかれたと思われる，登戸研究所で偽造されたとされる「中国交通銀行 10 元券」。

第 37 図　登戸研究所で製造された偽造法幣と同じ種類の法幣（当館所蔵）
左上２種：トーマス・デ・ラ・ルー社製中央銀行 10 元券と５元券，左下２種：ウォータールー・アンド・サンズ社製中央銀行 10 元券と５元券，右上・中：トーマス・デ・ラ・ルー社製中国銀行 10 元券と５元券，右下：アメリカン・バンクノート・カンパニー社製中国銀行 10 元券
英国製のトーマス・デ・ラ・ルー社とウォータールー・アンド・サンズ社製の券面中央部縦には絹繊維の「抄（す）き込み」と，右側に「漉（す）かし」が入っている。米国系のアメリカン・バンクノート・カンパニー社製のものには直径１ミリ程度の丸型小紙片が全体的に散らされ，抄き込まれている。登戸研究所ではこの絹の「抄き込み」と「漉かし」や紙片が入った用紙に紙幣印刷することで，この種の偽造法幣を大量生産できるようになった。偽造法幣は大量に流通させる必要があったため，工作開始当時の最高額面 10 元券が偽札工作の中心的役割を果たし，５元券は補助的であった。

おわりに

登戸研究所で製造された「偽札」とその工作について初めて見聞きしたとき，なんと滑稽で愚かな作戦と感じた方も多かったのではないだろうか。しかし，参謀本部の対中国謀略を概観したうえで偽造法幣謀略を検証すると，傀儡政権を成立させようとする政治謀略や他の経済謀略に並行して行われたこの工作は，打倒・蔣介石政権＝法幣の枠組みで考えると，重要な経済謀略であったと言える。

たかが「偽札」で戦争に勝てるわけがない－だが，影佐機関が全てを賭した汪兆銘政権にかかる工作に暗雲が立ち込めた時，登戸研究所が製造した偽造法幣は，「引いては終えられない戦争」を継続するために残された，一条の希望の光のようなものだったのかもしれない。

「偽札」や「謀略」に感じた滑稽さや愚かさは，今，私たちが生きる現代社会にも形を変えて存在しているような気がしてならない。今回の企画展が，皆様にとり，何かを考えるきっかけとなれば幸いである。

謝辞

本稿は，2021 年度に開催された明治大学平和教育登戸研究所資料館主催第 12 回企画展「参謀本部と登戸研究所による対中国謀略―アジア太平洋戦争開戦 80 年―」の記録を目的として，企画展の展示内容にその後の研究結果をふまえて加筆・修正したものである。

また，この企画展を開催するにあたり，下記の方々，機関にご協力，ご後援いただいた。ここに記し，感謝申し上げる。（敬称略・個人 - 機関，五十音順）

協力　大島規弘 / 塚本英史 / 狛江市教育委員会 / 防衛省防衛研究所戦史研究センター

後援　川崎市 / 川崎市教育委員会

〔注〕

（1）二回目の人体実験の時期は 1943 年としている資料もある（木下健蔵『日本の謀略機関陸軍登戸研究所』（文芸社，2016 年）など)。

（2）偽札製造に関する一連の流れは，山本憲蔵『陸軍贋幣作戦』（現代史出版会，1984 年）pp.56，57，61，63 をもとにしている。

（3）太陽インキ製造社史編纂委員会編『太陽インキ製造 50 年のあゆみ』〔歴史編〕（太陽インキ製造，2003 年）p.4。

（4）桑野仁『戦時通貨工作史論』（法政大学出版局，1965 年）p.14。

（5）有賀傳『日本陸海軍の情報機構とその活動』（近代文藝社，1994 年）p.55。

（6）犬養健『揚子江は今日も流れている』（文藝春秋新社，1960 年）p.126。

（7）影佐禎昭「曾走路我記」臼井勝美解説『現代史資 13 日中戦争 5』所収（みすず書房，1966 年）p.351。

（8）防衛省防衛研修所戦史室『戦史叢書　支那事変陸軍作戦＜３＞』昭和 16 年 12 月まで（朝雲新聞社，1975 年）p.26。

（9）塚本誠『或る情報将校の記録』（非売品，中央公論事業出版，1971 年）p.243。

(10) 蔡徳金編，村田忠禧訳『周仏海日記』（みすず書房，1922 年）p.11，1937 年 8 月 8 日注記。

(11) 同前，p.82，1938 年 7 月 22 日注記。

(12) 防衛省防衛研究所戦史研究センター所蔵 / アジア歴史資料センター公開 Ref.C11110699300 および C11110699400 より

日華協議記録

昭和十三年十一月二十日，日本側影佐禎昭，今井武夫の両名は中国側高宗武，梅思平の両名と左記の如き内容を協議成立せり

左　記

第一　日華両国は共産主義を排撃すると共に侵略的諸勢力より東亜を開放し東亜新秩序建設の共同理想を実現せんが為め相互に公正なる関係に於て軍事政治，経済，文化，教育等の諸関係を律し善隣友好，共同防共，

経済提携の実を挙げ強固に結合す之が為左記条件を決定す

第一条　日華防共協定を締結す

其内容は日独伊防共協定に準じて相互協力を律し且日本軍の防共駐屯を認め内蒙地方を防協〔ママ〕特殊地域となす

第二条　中国は満州国を承認す

第三条　中国は日本人に中国内地に於ける居住，営業の自由を承認し，日本は在華治外法権の撤廃を許容す又日本は在華租界の返還をも考慮す

第四条　日華経済提携は互恵平等の原則に立ち密に経済合作の実を挙げて日本の優先権を認め特に華北資源の開発利用に関しては日本に特別の便利を供与す

第五条　中国は事変の為生じたる在華日本居留民の損害を補償するを要するも日本は戦費の賠償の要求せず

第六条　協約以外の日本軍は日華両軍の平和克復後即時撤退を開始す

但し中国内地の治安恢復と共に二年以内に完全に撤退を完了し中国は本期間に治安の確立を保証し且駐兵地点は相方会議の上之を決定す

第二　日本政府に於て右時局解決条件を発表せば汪精衛氏〔汪兆銘の別名〕等中国側同志は直に蔣介石との絶縁を闡明〔せんめい〕し且東亜新秩序建設の為め日華提携竝反共政策を声明すると共に機を見て新政府を樹立す

昭和十三年十一月二十日

日　本　側　　影　佐　禎　昭
今　井　武　夫

中　国　側　　高　宗　武
梅　思　平

(13) 前掲『周仏海日記』p.107，1938 年 10 月 6 日注記。

(14)「日支新関係調整要綱」合意に至るまでの周仏海らと梅機関員による 7 回の協議議事録は，臼井勝美解説『現代史資料 13 日中戦争５』（みすず書房，1966 年）pp.249-301 を，また，往復書簡は同書 pp.316-335 を参照されたい。

(15) 本誌 p.114**【資料３】**参照。

(16) 前掲『戦史叢書　支那事変陸軍作戦＜３＞』昭和 16 年 12 月まで pp.243-251。

(17) 清郷工作については，主に，同前，『戦史叢書　支那事変陸軍作戦＜３＞』昭和 16 年 12 月まで pp.414-421 および晴気慶胤『謀略の上海』（東亜書房，1951 年）pp.224-264 に依拠する。

(18) 凸版印刷株式会社社史編集委員会『凸版印刷株式会社六拾年史』（凸版印刷，1961 年）p.130。

(19) 前掲『周仏海日記』p.279，1940 年 12 月 17 日注記によれば，「一，中央儲備銀行は貨幣の発行，兌換の特権を有し，その名称も「法幣」と称する〔実際は**「中央儲備銀行券（儲備券）」**と称して発行された〕。およそ納税，為替及び一切の公私の往来に，一律に行使し，現行の法幣〔蔣介石政権の法幣〕等の貨幣と流通し，**以後次第に取って変わってゆく**ものとする。二，華興銀行〔汪政権以前の日本の傀儡政権「中華民国維新政府」の銀行〕の貨幣発行権は取り消す。三，中央儲備銀行券は**特定の地区〔= 華北〕では**暫くの間適用せず，**軍票及び聯銀券が現状を維持**する。」と規定されていた。〔**太字**は筆者による。〕

(20) 商品の移動に課せられる通貨税の代わりの税。一ケ所で課税すれば，他の地方に運んでも課税されない。

(21) 山本憲蔵『陸軍贋札作戦』（現代史出版会，1984 年）p.47。

(22) 渡辺賢二氏所蔵　大原実『在北京（昭．十七，八年）　参考資料』（非売品）収蔵。

(23) 前掲『戦時通貨工作史論』p.118。

(24) 同前，p.110。

(25) 渡辺賢二氏より聞き取り（2021 年 10 月）。

〔参考文献〕（編著者五十音，刊行年順）

浅田百合子『日中の架け橋　～影佐禎昭の生涯～』（新風社，2003 年）

有賀傳『日本陸海軍の情報機構とその活動』（近代文藝社，1994 年）

犬養健『揚子江は今も流れている』（文藝春秋新社，1960 年）
今立町誌編纂委員会編『今立町誌』第一巻（今立町役場，1982 年）
岩畔豪雄『岩畔豪雄氏談話速記録』日本近代史料叢書（日本近代史料研究会，1977 年）
臼井勝美解説『現代史資料 13 日中戦争５』（みすず書房，1966 年）
大蔵省印刷局『大蔵省印刷局百年史』第３巻（印刷局朝陽会，1974 年）
岡田芳政「中国紙幣偽造事件の全貌」（『歴史と人物』1980 年 10 月号，中央公論社，1980 年）
影佐禎昭「曾走路我記」 臼井勝美解説『現代史資 13 日中戦争５』所収（みすず書房，1966 年）
木之内誠編『上海歴史ガイドマップ』増補改訂版（大修館書店，2011 年）
木下健蔵『消された秘密戦研究所』（信濃毎日出版社，1994 年）
熊野三平『「阪田機関」出動ス』（展転社，1989 年）
桑野仁『戦時通貨工作史論』（法政大学出版局，1965 年）
斎藤岩男『越前和紙のはなし』（越前和紙を愛する今立の会，1973 年）
蔡徳金編，村田忠禧訳『周仏海日記』（みすず書房，1992 年）
篠田鐐，伴繁雄「登戸研究所の秘密」（『陸戦兵器総覧』，日本兵器工業会，1977 年）
柴田善雅『占領地通貨金融政策の展開』（日本経済評論社，2005 年）
太陽インキ製造社史編纂委員会編『太陽インキ製造 50 年のあゆみ』［歴史編］（太陽インキ製造，2003 年）
塚本誠『或る情報将校の記録』（非売品，中央公論事業出版，1971 年）
徳永清之「華興商業銀行券の機能」（京都帝国大学経済学会『経済論叢』第 50 巻第１号，1940 年）
凸版印刷株式会社社史編集委員会『凸版印刷株式会社六拾年史』（凸版印刷，1961 年）
秦郁彦編『日本陸海軍総合辞典』［第２版］（東京大学出版会，2005 年）
晴気慶胤『謀略の上海』（東亜書房，1951 年）
伴繁雄『陸軍登戸研究所の真実』（芙蓉書房出版，2001 年，新装版 2010 年）
防衛省防衛研修所戦史室『戦史叢書　支那事変陸軍作戦＜１＞』昭和 13 年１月まで（朝雲新聞社，1975 年）
防衛省防衛研修所戦史室『戦史叢書　支那事変陸軍作戦＜３＞』昭和 16 年 12 月まで（朝雲新聞社，1975 年）
防衛省防衛研修所戦史室『戦史叢書　支那事変陸軍作戦＜２＞』昭和 14 年９月まで（朝雲新聞社，1976 年）
山本憲蔵『陸軍贋札作戦』（現代史出版会，1984 年）
若松会『陸軍経理部よもやま話』（非売品，若松会，1982 年）
渡辺賢二『平和のための「戦争論」』（教育史料出版会，1999 年）

第 12 回企画展「参謀本部と登戸研究所による対中国謀略―アジア太平洋戦争開戦 80 年―」展示資料一覧

本稿 図表番号	資料名	所蔵者	資料館所蔵 資料番号
第 3 図	「状況申告」（部分）	登戸研究所資料館	567-1
第 4 図	伴繁雄『陸軍登戸研究所の真実』原稿複製	登戸研究所資料館	152
掲載なし	パネル「缶詰型爆弾」複製（複製製作：登戸研究所資料館）	登戸研究所資料館	（元資料）146
掲載なし	パネル「放火謀略兵器・万年筆型破傷器」複製 （複製製作：登戸研究所資料館）	登戸研究所資料館	（元資料）149
掲載なし	岩畔豪雄写真複製（複製者：大島康弘氏か）	登戸研究所資料館	718
掲載なし	山本憲蔵写真複製（複製者：大島康弘氏か）	登戸研究所資料館	722
掲載なし	影佐禎昭写真複製（複製者：大島康弘氏か）	登戸研究所資料館	725
第 26 図	「昭和 18 年 12 月 12 日　中支ニ於ケル清郷工作ニ関スル調査報告書」（非売品，1943 年『在北京（昭．十七, 八年）参考資料』所収）	渡辺賢二氏	-
第 30 図	日本陸軍の経済謀略に使用された紙幣　（「軍用手票（軍票）」,「中国聯合準備銀行券」,「中央儲備銀行券」）	登戸研究所資料館	678，855，856
第 36 図	登戸研究所製造「六連偽札」	登戸研究所資料館	61
掲載なし	「儲備券用紙綴」より　偽造法幣試抄紙 （昭和 16 年 7 月 9 日 14 時 30 分抄造）	登戸研究所資料館	1230-277
掲載なし	「儲備券用紙綴」より　偽造法幣試抄紙 （昭和 16 年 6 月 6 日 11 時 30 分抄造）	登戸研究所資料館	1230-265
第 37 図	登戸研究所で製造された偽造法幣と同じ種類の法幣 （トーマス・デ・ラ・ルー社製中央銀行 10 元券，同 5 元券，ウォータールー・アンド・サンズ社製中央銀行 10 元券，同 5 元券， トーマス・デ・ラ・ルー社製中国銀行 10 元券，同 5 元券，アメリカン・バンクノート・カンパニー社製中国銀行 10 元券）	登戸研究所資料館	34，35，36，37，1938， 参考 2-O1-12-001， 参考 2-O12-10-007

明治大学平和教育登戸研究所資料館　館報
第８号　2022 年度
89 － 115 頁，2022 年９月

第 12 回企画展「参謀本部と登戸研究所による対中国謀略
―アジア太平洋戦争開戦 80 年―」記録
講演会「参謀本部と登戸研究所による対中国謀略－アジア太平洋戦争開戦 80 年－」

山田　　朗
明治大学平和教育登戸研究所資料館長

はじめに

今日は当資料館第 12 回企画展「参謀本部と登戸研究所による対中国謀略－アジア太平洋戦争開戦 80 年－」にご参加いただき誠にありがとうございます。この講演会は，11 月 17 日から始まっている企画展の内容をより深くご理解していただくために，まずは日中戦争から太平洋戦争にかけての時代状況を通史的に解説するということが１つの目的です。アジア太平洋戦争といいますと，どうしても，真珠湾攻撃など対英米戦争に目が行くのですが，日中戦争も変わらず続いていたわけでして，特に 1940 年代に入って様々な動きがあります。今日は，汪兆銘工作，登戸研究所が深く関係した偽札工作を中心にお話したいと思います。アジア太平洋戦争中も日中戦争が続いていたということと，そこには様々な謀略とみなされるようなことが行われていたということです。

企画展で見ていただきたいポイントを示しながらお話します〔本稿 pp.110-113，レジュメの**【展示】**は企画展展示の必見ポイント〕。

これは日中戦争の大体の流れを示す地図〔本誌 p.54，**第１図**〕です。盧溝橋事件が 1937 年７月に起きて，戦線がどんどん拡大します。アジア太平洋戦争中も，ずっとこの広大な地域で日本軍は作戦を行なっていましたが，同時に，色々な謀略工作が行われていました。

Ⅰ　なぜ日中戦争は世界戦争に結びついたのか

１　満州事変・華北分離工作・盧溝橋事件という流れ

最初に，まず日中戦争がどうして，対英米戦争，つまり世界戦争に結び付いたのかということをお話します。それには日中戦争よりも更に前の満州事変に遡る必要があります。1931 年に満州事変があり，翌年，日本の主導の下に「満州国」ができます。これは日本にとっては，

当時の国家の指導者・軍人また多くの国民に，満蒙の権益確保拡大という成功事例として受け取られました。日露戦争で獲得した満蒙の権益を更に拡大したということです。これを成功事例とみなしましたので，今度は第二の「満州国」を，中国本土，華北に作っていこうという華北分離工作が，すぐさま始まります。この華北というのは，華北５省と言いまして，河北省・山東省・山西省・綏遠（すいえん）省・察哈爾（ちゃはる）省といった地域を中国の国民政府・蔣介石政権から引き離そうという工作です。

天津に司令部があった支那駐屯軍が中心になりこの工作を行い，河北省，あるいは一部察哈爾省などに，冀東（きとう）防共自治政府，冀察（きさつ）政務委員会といった，いわば日本の影響下にある政権を作っていきます。そして，次第次第に蔣介石政権から切り離していこうという工作を行っていました。丁度，そういう華北分離工作が行われている最中に起きたのが盧溝橋事件です。この事件そのものは，多分に偶発的な衝突の性格が強いのですが，これが日中全面戦争の発端となるのは，まさにこの事件を利用して華北を分離してしまおうという考え方が日本側に強く存在したから，と考えてよいかと思います。

２　局地紛争から全面戦争への拡大

この戦争は，このような形から始まりましたので明確な目的が無い戦争となりました。ですから，戦線が拡大するにつれ，当面の目標が華北分離というところから，蔣介石政権の打倒へと変化していきます。そのために戦線は華中（上海方面）に拡がるわけです。これが 37 年８月です。日本政府も当初，盧溝橋事件を発端とする事件を「北支事変」と呼んでいましたが，９月２日には「支那事変」という言い方になり，結局，戦線拡大に対応した名称ということになるわけです。これは大変大規模な戦争になりましたが，実は戦争というのは宣戦布告という国際法上の手続きが必要であるにもかかわらず，それが為されておりません。何故かと言いますと，日本の陸海軍は揃ってアメリカの「中立法」の適用を恐れました。当時，アメリカには国内法として中立法がありまして，これは，戦争をやっている，つまり，宣戦布告をして戦争をやっている国に対しては，戦略物資を輸出しないという法律でした。日本はアメリカから色々と戦争に関する多くの物資を手に入れていましたので，宣戦布告をしてしまいますと，戦争遂行に支障が出るということで，陸軍も海軍も宣戦布告に反対をしたわけです。ですから，戦争ではないということで，事変と言われるわけです。しかし，国際的には戦争ではないということなので，普通は当事者が宣戦布告をしますと，諸外国は局外中立というのを宣言して，その戦争に関わりませんということを一般的には宣言するのが普通なのですが，これは戦争ではないという形になりましたので，諸外国が中国を支援するということも可能になりました。実際，これはこの後，どんどん盛んに行われるようになっていきます。

３　戦争泥沼化の原因：初期和平工作打ち切りと第１次近衛声明

この戦争が泥沼化してしまったのは，やはり初動，つまり初期の和平工作の打ち切りと，第１次近衛声明というところに原因があります。戦争が始まると，暫くしてドイツの中国駐在大使トラウトマンを介して，日本側も蔣政権との交渉を水面下で始めました。そして，12 月頃に詰めの段階になったのですが，丁度その 12 月に南京が陥落します。首都が陥落したということで，これで戦争は日本側の勝ちだ，と日本側は大変強気になりまして，この蔣政権との水面下での交渉においても，中国側，蔣政権側に賠償を要求します。賠償要求というのは要するに，日本側が勝って中国側が負けたんだ，ということを公式に認めるということです。そして，1938 年 1 月 11 日に，昭和天皇にとって，国策決定のために最初に行った御前会議で「支那事変処理根本方針」が決定されます。この御前会議決定では，蔣政権の方から和を求めてこなければ以後は対手（あいて）としないという方針が決定されました。それに基づき 1 月 16 日，「爾後（じご），国民政府を対手とせず」という近衛内閣の政府声明が出ます。これが第１次近衛声明です〔**【資料１】**，本稿 p.114〕。第１次ということは，実はこれは第３次まであるのですが，大事なところにアンダーラインを引きました。「仍（よ）って帝国政府は」とありますが，当時日本政府は，自らの事を呼ぶときに帝国政府といいました。「仍って帝国政府は爾後国民政府を対手とせず帝国と真に提携するに足る新興支那政権の成立発展を期待し，是と両国国交を調整して更生新支那の建設に協力せんとす。」ということですから，国民政府，つまり蔣介石政権をもう相手としない，この相手としないというのは，外交交渉の相手と認めないという意味です。ずっと行ってきたトラウトマン工作も打ち切ることになりました。そして，蔣政権の存在を否定するこの声明を出して，むしろ，日本の言うことを聞く，新政権の育成を図るという方向に舵を切りました。つまり，日本側は，戦争は日本側の勝利であるという大前提に立ち，蔣介石政権は一地方政権に転落したんだという認識。もう既に蔣介石政権は，元々南京に首都がありましたが，それを引き払って漢口に移り，更に重慶に首都を移しています。ところが，この対手とせず声明，第１次近衛声明こそ，自ら外交交渉の相手を否定して戦争終結の手段を失わせる，そして戦争が泥沼化するという最大の原因になりました。「対手とせず」と言ってしまったので，最後の最後には，戦争というのは話し合いで決着を付けなければいけないというところがあるのですが，それを切りだせなくなってしまいました。つまり，蔣介石政権がある意味で自然消滅してしまうというようなことになれば,「対手とせず」でもよかったんですけれども，しかし，そうはならなかった。蔣介石政権は日本側が思ったよりずっと強かった，ということです。

４　戦線のさらなる拡大と外交的手詰まり

そして，戦線は更に拡大していきます。つまり，外交交渉で決着が付かないということにな

ると軍事行動で決着を付けるということになるわけです。日本側は，地域毎に日本の言うことを聞く傀儡(かいらい)政権を作ります。これは現地軍の対抗意識を反映して，地域毎に政権が分立するということで，1937年12月，華北を中心とした地域に中華民国臨時政府が成立します。それから，1938年3月には，華中を中心としたところに中華民国維新政府が成立します。そして，現地軍は軍事的に決着を付けるべく大作戦を続行します。この38年には，4月から6月にかけて徐州作戦，6月から11月にかけては，長江，揚子江をずっと遡っていく武漢作戦，武漢三鎮を攻略するという大変大規模な作戦を行います。そして同時に，軍事作戦で圧力をかけながら外交的手詰りを何とか打開しようとして，近衛内閣は5月に内閣改造を行います。元陸軍大臣として有名であった宇垣一成を外務大臣にあてて和平を探ります。事実上，これは「対手とせず」声明を白紙還元して和平交渉を開始するという，つまり日本側も「対手とせず」声明がまずかったということが分かってきたということです。そして，蔣介石政権の国民政府行政委員長，行政委員長というのは総理大臣に当たるポストですが，孔祥熙(こうしょうき)という人と接触を図ります。香港で和平条件を打診したりするのですが，この時は，陸軍の対応がバラバラで，この和平交渉を快(こころよ)しとしないグループが日本陸軍の中にいて，結局これは潰されてしまいます。

5　政治謀略（汪兆銘工作）：国民政府（蔣政権）の分裂を策する謀略の始まり

陸軍も納得する解決の方法というのは，外交交渉というよりも，謀略，政治謀略という形になるわけです。謀略，というのは相手を混乱させるということなのですが，つまり蔣政権を分裂させよう，蔣政権の重要人物である誰かを日本側に取り込んでしまって蔣介石政権の分裂弱体化を図ろう，というやり方です。実際，日本側もそのチャンスを狙っていたのですが，先程の武漢作戦や，更に華南の広東の失陥に，中国国民政府の中でもちょっと動揺が走りまして，日本と手を結ぶ，日本との和平を主張する人たちが出てきます。共産党の影響力拡大を恐れた汪兆銘（汪精衛）国民党の副総裁は早期の対日講和を主張しました。そして，そのことに目を付けた陸軍は，極秘裏に汪兆銘派と接触を図ります。38年7月には外交部前亜洲司長（日本でいうアジア局長相当）高宗武という汪兆銘派の側近が密かに来日しました。これは陸軍の飛行機でやってきて，板垣征四郎陸相らと接触をします。そして日本側でも影佐禎昭軍務課長，今井武夫参謀本部支那班長，こういう人が汪兆銘の腹心である高宗武・梅思平などと和平工作をします。結局，汪兆銘といえども国民政府の一員であるわけですから，最初の第1次声明をとにかく，体裁よく取り消さなければならないわけです。「国民政府を対手とせず」と言ってしまったわけですから，相手とするためには取り消しが必要です。そのために出されたものが，1938年11月3日の第2次近衛声明，これは別名「東亜新秩序声明」ともいいます。これは目的としては，第1次の「対手とせず」声明を事実上撤回して，国民政府にいるけれども，その中の汪兆銘派との提携による和平に期待する，こういうものです。声明を見てみましょう〔**【資**

料２】，本稿 p.114〕。最初のところ，「今や，陛下の御稜威に依り，帝国陸海軍は，克く広東，武漢三鎮を攻略して」とあります。当時の独特な言い方ですよね。現在，陛下の御稜威というような言葉を理解できる人は少ないと思います。天皇のご威光によって，というような意味です。アンダーラインを引いたところを見てください。「帝国の冀求する所は，東亜永遠の安定を確保すべき新秩序の建設にあり。今次征戦究極の目的亦此に存す」ということで，戦争始まって１年以上経っているんですけれども，実はこの戦争の目的は，「東亜永遠の安定を確保すべき新秩序の建設」，これを目指すんだ，ということです。最後のところなんですけれども，まさにこの新秩序建設が目的なのだから，それに協力してくれるのであれば，国民政府といえども，これは歓迎だというわけです。最後のところ，「固より国民政府と雖も従来の指導政策を一擲し」，投げうって，「その人的構成を改替して更生の実を挙け，新秩序の建設に来り参するに於ては敢えて之を拒否するものにあらす」。まさにこの部分が第１次「対手とせず」声明を事実上取り消して，国民政府の一員であっても，手を結ぶのだということを示した。このことを言わんがための声明，そして，ここに持っていくための「東亜新秩序」という論理であったわけです。

そして，新しく作ることを予定している汪兆銘政権との間で，どんな和平条約，講和条約を結ぶのかということで，11 月の段階で先程の日本側の影佐・今井，汪兆銘側の高・梅との間で，この講和条約案の骨子が決まりました。ここに掲げられているように，防共協定を締結する，日本軍の防共駐兵を行う，中国側が満州国を承認する，経済提携，そして，重要なのは治安回復２年以内に日本軍は撤兵しますと。そして，汪兆銘が新政権を成立させるということです。一応，交渉の現場でこのような日中間の取り決めができました。ところが，日中間といっても日本陸軍と汪兆銘派との取り決めが結ばれたにも拘わらず，この後，11 月 30 日に開かれた御前会議では，日本側は，やはり，中国側が負けたのだから賠償もしてくれと。それから，非常に重要な，いつになったら日本軍が撤兵するのか，ということについては明示しないという和平条件の吊上げを日本側が行うわけです。**【資料３】**〔本稿 pp. 114-115〕をちょっと見てみましょう。これ，「日支新関係調整要綱」と呼ばれるものですが，そのアンダーライン引いてある「一」のところで，中国が満州国を承認するというようなことが書かれています。それから，ここでは「二，日支協同して防共を実行す　之が為日本は所要の軍隊を北支及蒙疆の要地に駐屯す」ということで，日本軍は，防共という目的で中国に駐屯するというようなことです。そして，「四」のところでは「成るへく早急に」日本軍は「撤収す」と書かれているのですが，すぐ下に「但保障の為北支竝南京，上海，杭州三角地帯に於けるものは治安の確立する迄之を駐屯せしむ」というふうに，なかなか日本軍が全面的に撤退するということにはならないということを示しています。そしてこの要綱の最後の方，「附」としてあるところに，「一，支那は事変勃発以来支那に於て日本国民の蒙りたる権利利益の損害を補償す」，つまりこれは，中国側が賠償を行

うことをここに規定しているということです。ですから，中国にとってはあまりメリットの無い方針，条約案となります。

しかし，ここまで事が進んで，汪兆銘は日本側と接触していたので，もう重慶にいることはできません。38 年 12 月 18 日，汪兆銘は重慶から脱出します。そして，当時フランス領，現在のベトナムですが，ハノイに移ります。そして，そこに 39 年 4 月まで滞在し，5 月に上海にやって来ます。これに合わせて，日本側も第 3 次近衛声明というのを出しまして，「近衛三原則」：善隣友好・共同防共・経済提携といったような理念を発表するのですけれども，中国側にとって一番獲得したい，日本軍の撤兵に全く言及しないということで，条件が悪くて，汪兆銘に同調する人も減ってしまいました。つまり，汪兆銘工作，政治謀略はこの後もずっと続くのですが，事実上この段階で謀略は失敗した。つまり汪兆銘の影響力が低下した。そして日本は，影響力が低下してしまった汪兆銘を擁立して，1940 年 3 月に汪兆銘政権を作らせるということになりました。

これは展示パネルの図ですが〔本誌 p.65，**第 14 図**〕，重慶を脱出して昆明を経てハノイに着き，そして台湾を経由し上海に到着する。このように，日本側が汪兆銘を支援して，連れて来たということです。

６　「東亜新秩序」声明と対英米関係の悪化

しかし先程，第 1 次声明を否定する，事実上取り消すために出した「東亜新秩序」声明は思わぬ影響を及ぼします。この東亜新秩序声明に英米が強烈に反発したのです。1938 年 12 月 30 日，アメリカは門戸開放原則を無視した新秩序は容認し難いと，日本側に通牒してきます。これは何かというと，元々，1922 年に締結された中国に関する九か国条約，中国の現状維持を定めた国際条約，これ日本も参加しているんですけれども，これに違反しているじゃないかということなんです。39 年 1 月にはイギリスも九か国条約の規定の一方的変更は容認し難いと通牒してきます。そして，英米は態度を極めて明確にします。日本がそういうことを言うのであれば，英米は蔣介石政権を全面的に支援します，と対中国借款を設定し，中国支援の姿勢を明確にします。ソ連も蔣政権に武器，特に戦闘機や爆撃機を提供するというような行動に出るわけです。あと，フランスもこの動きに同調していますので，蔣介石政権は英米仏ソという列強の支援を受けて日本と戦う，ということです。

この支援ルートを絶つということが日本側の次の目的となり，日本軍はどんどん南へ侵攻していきます。広東，それから中国の一番南にある，ベトナムに近いところにある海南島，汕頭（スワトウ）を占領します。この南進が更に英米仏の警戒感を高める，つまり，それ以上南に下がるとすぐに仏印（フランス領インドシナ）になりますし，フィリピンにも近づきます。当然，シンガポールを中心とした英領にも段々影響を与えますので警戒をするということです。しかも，香港は

当時まだイギリス領です。その香港から延びている援蒋ルートを，日本側はその周辺を占領することによって遮断をします。そうなると，英米仏ソ側は，仏印ルートあるいはビルマルートに主力を移して蒋介石政権を支援するということになるわけです。日本側は，今度はこれを絶とうということで，新たな行動を起こしていくということになります。

ここで日本軍，北支那方面軍は，華北にある天津の英仏租界を封鎖します。39 年 6 月のことです。これはどういうことかというと，つまり援蒋の元凶は，イギリスである。フランスも同調している。だから英仏を懲らしめる，ということで，天津にあった英仏の租界，要するに英仏の小さな植民地ですけれども，これを封鎖して出入りできなくさせる，それから物資の供給を止めると。つまり，そこに住んでいる外国人を人質に取る形で，交渉を有利に進めようとしたわけです。当時，39 年 7 月といえば国内でも盛んにイギリスを批判する反英運動が起きておりました。

さすがに，租界を人質に取られる形になりますと，イギリスも困ります。つまり，イギリス人に被害が出るかもしれない。なのでイギリスはちょっと折れるかな，というふうにみえたんです。それで，これは何の交渉かというと，要するに援蒋ルートを遮断せよ，というのが日本側の要求で，それはできません，というのがイギリス側なのですが，日本側の強硬手段によってイギリスも，ちょっとこれは日本に譲歩せざるを得ないのかな，という素振りを見せた時にアメリカが出てきます。アメリカは，日米通商航海条約の廃棄を通告します。日米通商航海条約とは，日米間の自由貿易を保証している条約です。ですから，これを廃棄するということは，制限貿易，自由貿易じゃないですね，貿易に制限をかけることができるぞと。つまり，日本に対する経済制裁も有り得るぞ，ということを示しました。つまり，イギリスが苦境に陥った時にアメリカが出てきたということで，中国をイギリスが支援し，そのイギリスをアメリカが支援するという形になりました。ですから，日中戦争は日本対中国，その中国の背後にいる英米仏ソという，だんだん世界戦争の構造になっていくわけです。日本は，これにはとても対抗できませんので，英米を抑え込むために，今度はドイツに接近する。もう既に 1939 年 9 月からヨーロッパでは戦争が始まっています。その戦争をやっている片一方と日本は 1940 年 9 月に同盟を結んだ。当然，ドイツが戦争やっているイギリスとの関係，そのイギリスを支援しているアメリカとの関係が良くなるということはないです。しかし三国同盟を結ぶことで，日本は英米に対して圧力を強化する。それは，日本側はそれによって日中戦争が解決するという見通しのもとに，そうした行動に出たわけです。しかし既に，戦争をしているドイツとの同盟というのは，対英米戦争を不可避にさせたと言っていいかと思います。このように，日中戦争のこじれが世界戦争へと繋がっていくという流れがあるわけです。ここは非常に重要です。

Ⅱ　中国における政治謀略戦

１　謀略戦の中心機関＝大本営（参謀本部）謀略課

ここで，中国における政治謀略戦についてまとめておきます。先程，汪兆銘を引っぱり出してくるというところまでお話ししました。実は日本側に，謀略戦の中心機関，大本営謀略課が設置されます。1937 年 11 月に日中戦争が大規模化したために，日本軍の戦時最高司令部である大本営が設置されます。そして当初は，この大本営の一機関として大本営第八課，通称謀略課ができます。一応，官制上，表向きは，第八課は 1940 年 8 月に参謀本部第二部第八課として設置されたことになっているのですが，実際には 37 年 11 月の段階で，大本営の組織としてまず設置されました。この謀略課の陣容ですけれども，設置された時の初代の課長は，先程，汪兆銘の引っぱり出し工作の中心となった影佐禎昭。この人は，38 年 6 月からは陸軍省の軍務課長という要職に就くんですけれども，その身分のまま汪兆銘工作を始めて，後述しますが，39 年 8 月には，今回の企画展の展示の目玉になっています「梅機関」の長となります。この謀略課の課員としては唐川安夫という人がいるのですが，この人は後方勤務要員養成所，後の中野学校の前身，これを提案した人です。それから岩畔豪雄（いわくろひでお）。これは後でまたお話しますが，対中国偽札工作の発案者で，この 1939 年 2 月以降，陸軍省の軍事課長という要職に就くのですが，日本が行う謀略について，ずっとリーダーシップを執っていた人物です。あと，臼井茂樹という人も謀略課におりまして，後に重慶政権との水面下の交渉，これは桐工作といいますが，それを推進した人物です。

２　上海における謀略戦

こういう工作，謀略，特に上海において非常に激しい謀略戦が展開されました。何故かというと，上海は 1937 年 11 月に激戦の末，日本軍が占領しています。しかし，この上海には古くから欧米諸国の租界，共同租界とフランス租界というのがありまして，この租界までは，日本軍の影響が及ばないのです。日本側が掌握している上海市政府と，上海独自の工部局，これは元々インフラ整備のための部局だったのですが，これが共同租界独自の市政府の役割も果たしていました。諸外国が人を送って，この工部局を成立させていたのですが，実はこれ，複雑なことに日本も入っているんです。この上海市政府と工部局による二重支配という状況があって，共同租界とフランス租界は，外国軍隊と工部局警察，これは諸外国から人を出して，あるいは中国人も加わって警察を構成しているのですが，それが警備している。こういう状態なので，日本軍が全面的に上海を制圧するということができていないわけです。ですから，謀略戦のるつぼとして，この上海の共同租界が使われました。上海という場所は，中国の金融・貿易・流通業の中心地で，蔣介石政権が発行している法幣，法定紙幣が通用しています。そして，援蔣

物資が堂々と，日本軍が占領しているすぐ側で陸揚げされる。抗日運動の拠点にもなっている。中国とそれを支援する英米仏ソ対日本，そして日本と結ぶ汪兆銘派の謀略のるつぼとなるんです。

これは企画展の展示パネルの図ですが〔本誌 p.55，**第２図**〕，まさに謀略戦が展開されている 1938 年，登戸研究所はスパイなどが取り扱う，秘密戦兵器の開発部門というのが新設されます。それから，後でお話する，偽札の部門も増設されます。ですから，まさに日中戦争の展開とともに登戸研究所も，どんどん拡張されていっていたことが分かります。

３　梅機関＋汪兆銘派 vs 蔣政権の暗闘

日本側がつくった梅機関と汪兆銘派が，上海を舞台として暗闘を繰り広げるわけですが，1939 年５月，上海に，汪兆銘がハノイから到着します。そして参謀本部は，この年の９月に汪兆銘工作のために梅機関を設置します。汪兆銘と，汪兆銘の側近である周仏海・梅思平・陳公博，こういう人たちを日本側の憲兵が厳重に保護するという態勢になります。梅機関は，この後も中国における日本軍の秘密戦の中心機関となります。非常に重要な役割，その梅機関長こそ，影佐禎昭という人で，この人は，上海というのはやっぱり日本のマスコミも注目しているところでして，特派員を派遣しているわけです。その日本新聞各社も取り込んで，言論のコントロールも行っています。

また，重慶側，汪側，更に上海はいろんな利権が絡んでいるところで，マフィアが存在しているんですけれど，それも参入してのテロ対テロの抗争が展開されます。特に汪兆銘側の特務機関であるジェスフィールド 76 号，これは企画展で，どういう構造になっているのかということを展示しておりますので，ぜひご覧いただければと思います。日本側の新聞記者の記録によりますと，1939 年，上海だけで 2,000 人以上の人が殺されたというふうに書かれおります。これは展示パネルの一部ですが〔本誌 p.67，**第 17 図**〕，このように複雑ではあるんですけれども，蔣介石側，汪兆銘側，そして日本の梅機関といったところが，激しく抗争をしていることが分かります。

４　汪兆銘政権の成立（1940 年３月）

1940 年になりまして，汪兆銘は南京に還都宣言，還都というのは，要するに国民政府は重慶に首都を移しましたので，汪兆銘は我こそが国民政府の正統派であるということで，南京に都に戻した，という宣言です。そしてこの年の 11 月，日本との間に日華基本条約を調印して，蔣政権の否認，共同防共，日本軍による治安維持，日本艦船の駐留，日本への資源供給といったことを取り決めます。そして，この年，41 年に汪兆銘，周仏海らも来日します。その時のニュース映像が残っておりますので，ちょっと皆さんにご覧いただきたいと思います。（次の URL

の動画を再生。）

〔**【映像資料】**「汪精衛主席訪日の途へ」『日本ニュース』第 54 号（1941 年 6 月 17 日公開），URL ：https://www2.nhk.or.jp/archives/shogenarchives/jpnews/movie.cgi?das_id=D0001300439_00000&seg_number=007〕

〔**【映像資料】**「汪精衛院長感激の訪日声明」『日本ニュース』第 55 号（1941 年 6 月 24 日公開），URL：https://www2.nhk.or.jp/archives/shogenarchives/jpnews/movie.cgi?das_id=D0001300440_00000&seg_number=001〕

今回の企画展では，この周仏海という人の日記の分析も非常に目玉になっていまして，汪兆銘の側近中の側近であった人が本心としてどんなことを考えていたのか，これは本当に見どころの一つです。アジア太平洋戦争が始まると，日本にとって非常にやっかいな存在であった租界が日本軍によって接収されます。そこを拠点としていた英米側の諜報団もほとんどは逃げちゃったんでしょうけれども，日本側に検挙されるという，日本側が記録したニュース映像が残っております。「上海諜報団検挙」という，これは 1942 年 6 月公開のものなんですけれども，これをちょっとご覧いただきたいと思います。（次の URL の動画を再生。）

〔**【映像資料】**「上海諜報団検挙」『日本ニュース』第 107 号（1942 年 6 月 22 日公開），URL：https://www2.nhk.or.jp/archives/shogenarchives/jpnews/movie.cgi?das_id=D0001300492_00000&seg_number=002〕

検挙のシーンだけですので，なかなか秘密戦の実態というところまでは至らないんですけれども，結構いろいろな押収品があるのがわかります。

汪兆銘政権の工作の実態と言いましょうか，地域支配は清郷工作といいまして，抗日勢力と住民の接触を断つために村を竹矢来で囲んで検問所によって外部と遮断するというようなことが行われます。これは展示でご覧いただきたいと思います〔本誌 pp.71-73〕。日本側の記録でも，清郷工作の困難性が指摘されています。なかなか，むりやり力尽くで住民と蔣介石政権や共産ゲリラを引き離そうとしても，そもそも汪兆銘側にあまり信頼性が無いですから，上手くいかないということです。これは清郷工作のパネル〔本誌 p.72，**第 24 図**〕で，点線で囲ったところが竹矢来で囲んだ塀になっています。

Ⅲ　中国における経済謀略戦

1　経済謀略の第 1 段階：密貿易と円系通貨圏の形成

中国における謀略戦においてもう 1 つ重要なのは，経済謀略戦ということで，まずその経済謀略の第一段階として日中戦争が始まる前からの密貿易と円系通貨圏の形成というのがありま

す。先程お話した華北分離工作がありますが，その時に冀東（きとう）特殊貿易という，冀東とは河北省のことですが，その税関を通さずに日本商品を陸揚げする，まさに密輸するということが行われていました。また円系通貨，これは日本銀行券，満州中央銀行券，朝鮮銀行券，横浜正金銀行券，こういうものをこの地域にどんどん流通させる，円系通貨圏の構築を目指す，つまり経済的に日本の影響力を華北に広げていこうとしていました。

これは蔣介石政権にしてみると，税関収入，海関収入が無くなるので非常に脅威です。経済という点でいうと，中華民国，つまり蔣介石政権側は，1935年からイギリスのリース・ロスという人を招いて法幣制度，全国統一紙幣を造って全国を一つの通貨圏・経済圏に再構築するという改革を行っています。従来は，地方毎の通貨制度で国内が単一通貨圏・経済圏ではなかった。しかし，中国が安定的に発展するためには幣制改革，通貨制度の改革が必要だったのです。日本はそこに目を付けます。これは後でお話します。

日中全面戦争が始まってからの通貨戦ですけれども，日本軍占領地毎に円系通貨を流通させる試みが行われます。これも展示で詳しく，皆さんにご案内しているところです。1938年３月，華北，中華民国臨時政府によって中国聯合準備銀行というのが設置されまして，そこで使われたお金，紙幣が聯銀券といいます，また華中では中華民国維新政府によって，華興商業銀行というのが設立されまして，華興券というのが発行されます。南京にできた汪兆銘政権も41年１月に中央儲備銀行というものを設立しまして儲備券というものを発行します。

しかし，こういうものと同時に，日本軍は日本軍で，軍票で物資調達の時に支払いを行っておりまして，なかなか複雑です。後に，中華民国維新政府が汪兆銘政権に吸収されましたので華興券は回収される。しかし，依然として華北の方では聯銀券が使われる。それから，華中を中心に儲備券，そして軍票が混在する。そして更には，戦っている相手の蔣介石政権の法幣が存在すると。日本側としては蔣介石政権の紙幣を駆逐したいわけです。しかし円系通貨の信用がなかなか上昇しないために，日本軍の物資調達は非常に困難をきたします。**第１図**は中国占領地で使用された日本側の軍票の一つですが，元々これは，額面10円の日本銀行兌換券の版を利用して，「軍用手票」と書かれています。この人物は，和気清麻呂です。日本で普通に使われていた10円ですが，それを軍票として中国の戦地で使っていた。文字が書いてあるのですが，これを然るべきところ，日本側に持ってきたら正式なお金に替えてあげます，と書いてあります。ですが，まあ，なかなかこれを渡されても，恐ろしいですから，これを持って日本軍の所へ行くという人はあまりいないわけです。だからあまり受け取りたくないわけです。それからこれは聯

第１図　中国占領地で使用された10円軍票
当時，日本で使用されていた「日本銀行兌換券」の原版を流用して印刷された。

銀券です〔本誌 p.77，**第 30 図右上**〕。華北の方で使われた聯銀券です。そしてこれが汪兆銘政権の儲備銀行券〔同，**右下**〕。非常に精巧にできております。これは１万元券なんです。非常に高額紙幣ですが，中国のお札は，紙幣に何年に発行したということが書かれていまして，よく見ると中華民国三十三年と書かれている。中華民国ができたのが 1912 年，それを元年として 33 年ですから，中華民国三十三年というのは 1944 年，昭和 19 年です。かなりインフレが進んで，儲備券の価値が下落していることが分かります。ただ，印刷を見ると非常に精巧にできています。これは日本の凸版印刷とか，有力な印刷会社などで印刷しております。展示パネルをご覧いただきたいのですが〔本誌 p.82，**第６表**〕，軍票や蒙疆銀行券，華興券，そういうものは，印刷はやはり凸版印刷です。聯銀券，儲備券なんかも，こういうところでやっている。それから偽造法幣，これは登戸研究所でやっている。製紙は巴川製紙なんかでやっているということです。こういうものに，本当に日本のお金を造っている内閣印刷局も関与しているということです。

２　経済謀略の第２段階：法幣偽造による通貨謀略

そして，経済謀略の第２段階です。円系通貨を広めていこうというのが第１段階だったのですが，それが思うように広まらなかった。そこで考えたのが，偽札。蔣介石政権のお札の偽札を発行して中国経済を混乱させて中国の抗戦力を減殺しようという経済謀略です。これは先程出てきた，謀略課にいた岩畔豪雄という人が 38 年に発案したとされています。それによって，陸軍科学研究所登戸出張所，すなわち，登戸研究所に第三科が設置されまして，法幣の偽造が始まります。なかなか最初は上手くいきません。それは何故かというと，中国のお札は主にイギリス，それから一部アメリカの技術を取り入れて造られていて，日本に無い技術が使われていました。特に，黒透かしと絹糸の漉（す）き込みの技術が当時の日本には無いものですから，その技術を習得するというか，それを真似できるようにならないと，お札もできないので，巴川製紙では研究を重ね，およそ一年かけて紙すき技術が段々向上して，本物に近いものができるようになりました。先程見た写真のこの部分，登戸研究所の北部に製紙工場を作りました〔本誌 p.55，**第２図**下部点線内〕。そして，南の方に印刷工場を造っています〔同，上部点線内〕。

「対支経済謀略実施計画」〔**【資料４】**，本稿 p.115〕は，山本憲蔵さんの著書に出てくる，偽造法幣のための戦略が書かれているものですが，最初に方針として「蔣政権ノ法幣制度ノ崩壊ヲ策シ，以テソノ国内経済ヲ攪乱シ，同政権ノ経済的抗戦力ヲ潰滅セシム。」とあります。まさにその偽造法幣を散布することによって経済的抗戦力を壊滅させるのだ，というのがこの偽札作戦の目的でした。謀略資材の製作，謀略資材とはまさに偽札のことです。これは「陸軍第九科学研究所」，つまり登戸研究所が担当すると書かれています。

それで，法幣はさきほど言いましたように，なかなか技術的に難しかったのですが，それが

克服されました。**第２図**は実際の法幣です。紙幣の右側に孫文の横顔の透かしが入っていて，その透かしが中々難しい。登戸研究所では製紙などは北方班というところで行い，南方班で印刷しました。これ南方班に属する建物，左側が旧 26 号棟，これは偽札倉庫だったところです。それから，右側が５号棟で，これは印刷工場だったところ〔**第３図**〕。共に，2000 年代まで残っていたんですけれども，今は解体されて残っていません。

第２図

現在，本資料館所蔵となっていますが，巴川製紙で残されていた透かしの試作品というのがあります。透かしがだんだん質が良くなっていくのが分かる資料です。背表紙には「儲備券用紙」と書いてあり〔本誌 p.74，**第 27 図**〕，これは，表向きには汪兆銘政権の儲備銀行券のための用紙なのだということだったのですが，実は，先程見た儲備券には透かしは無いのです。ですから，そういう点で，これは法幣の偽札用紙だったと思われます。

第３図　旧 26 号棟（2009 年２月解体）南方班の偽札倉庫（左），旧５号棟（2011 年２月解体）同，偽札印刷工場（右）

３　経済謀略の第３段階：法幣大量偽造による物資調達

経済謀略の第三段階ですけれども，結局，偽札を撒いたけれども，経済混乱ということには至りません。しかし，偽札ではあっても物資が買えるということで，偽札による物資調達がだんだん主流になっていきます。しかも，アジア太平洋戦争が始まり，本当の中国の法幣を印刷していた香港の工場を日本軍が接収して，印刷機や原版を接収します。そしてそれを，登戸研究所に運んできて，42 年の夏以降，偽造法幣の大量印刷が軌道に乗ります。１ヵ月に１～２億円を印刷・輸送しました。登戸研究所から，鉄道で長崎まで運び，長崎から船で上海に運ぶというやり方です。そして物資を購入する形で偽札を散布するということを行いました。これが登戸研究所で印刷していた交通銀行の 10 元券ですが〔本誌 p.82，**第 36 図**〕，これは印刷のズレがありまして検査の途中ではねられたもの，それが偶然，戦後出てきたものです。

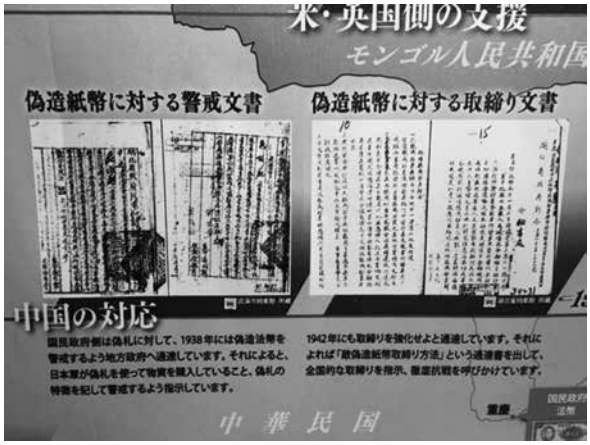
４　偽札謀略の結末

蔣介石政権は実際に本物の法幣を印刷していた工場が日本軍に奪われたために，法幣不足に

陥ってしまいます。その時期に日本軍が大量に偽札を散布したということで，経済混乱ではなく，むしろ法幣不足の方が大混乱に繋がり易いのですけれども，日本軍が偽札をどんどん撒いたということで，むしろ，奇妙なことに，重慶政権としては日本側の偽札が流通したことで逆に助かってしまうという面があるわけです。しかし，軍票とか儲備券が，信用が無いということで，法幣と偽造法幣の価値が上昇して，偽札は日本軍の物資調達とか，場合によっては兵士の給与という形で大いに力を発揮しました。ですから，経済混乱という元々の戦略的な謀略の目的は達成できなかったのですが，日本軍としては物資調達に苦労していましたので，この偽札はそういう意味では役に立ったということです。しかし，英米側も，中国を，法幣を印刷して空輸するということで支え，どんどん高額法幣を発行しました。これは蔣介石政権が，アメリカから大量に武器を調達するために，アメリカから借款を設定し，供与してもらって，大量の紙幣を導入しました。そこでどんどんインフレが加速して，逆に日本側の低額偽札は無力化されてしまうという，実に皮肉な結果となりました。

第４図は常設展の展示パネルですけれども，中国側は偽造法幣に対する警戒，日本軍が偽札撒いているぞ，とか，それに対する取り締まりを行うぞ，と言っているのですが，現実にはほとんど，実のあることは行われておりません。

1945 年になると**第５図**のように，どんどん高額紙幣が出てきます。壱百万圓（元）と書いてあるとおり，百万元札というようなものが出てくる。最高で，二百万元札まで発行されています。



第４図

第５図　終戦前後インフレで発行した高額紙幣
（最上段が「壱百万圓」札）

おわりに

まずはアジア太平洋戦争開戦 80 年ということなのですが，重要なのは，日中戦争からの連続性，日中戦争が無ければ，おそらく対英米戦争も起こらなかったいう，日中戦争の最中に世界戦争の構造ができ上がったということ，そして三国同盟というファクターを挟んで，対英米戦争になっていく，ということです。また，太平洋戦争中もずっと中国では軍事作戦も行われていましたし，今日見たような謀略もずっと続いていたということです。

政治謀略の方は，汪兆銘工作は，実は汪兆銘政権ができた時には，もう既に基本的に失敗していたと言って良いわけです。つまり，汪兆銘の権威が失墜した段階で政権ができるという，日本側にとっては，あまり益の無いことになってしまいました。汪兆銘はまた，日本側に使われてしまって気の毒なんですけれども。

それから経済謀略は，円系通貨が信用されなかったということで，偽札は一時的に物資調達という点では効果を上げますけれども，当初の目的であった経済混乱を起こすという点では，あまり実効力が無かったということです。

ご清聴どうもありがとうございました。

質疑応答

〔問１〕第１次近衛声明には，ゾルゲを始めとするスパイ団の働きがあったという説明を読んだが信憑性はいかがか。

〔山田〕第１次近衛声明の時ではなくて，ゾルゲが活躍したのは 1941 年の７月２日御前会議，つまり，日本が南に向かうのか北に向かうのかということを決定した時期。その御前会議の模様が，ゾルゲを通じてソ連に伝えられたということでして，近衛声明の時代というのは，第１次近衛内閣の時代なのですが，このゾルゲ事件の時には，1941 年段階の第２次・第３次近衛内閣，開戦前の近衛内閣ということになります。

〔問２〕汪兆銘は何を目的にして，傀儡政権を作ることに合意したのか。

〔山田〕これは，もう脱出するしかなくなってしまったということですよね。

〔問３〕諜報団検挙の映像で押収物があったが，敵のこのような道具を登戸研究所で分析・研究したような記録はあるのか？

〔山田〕これは，現物は残っていませんが，当然のことながら，通信機などは登戸研究所第一科でスパイ用のものを製造していたので，外国製品を，ここで分解したりして研究したことは想像できます。

〔問４〕42 年の上海でのスパイ摘発のニュース発表はゾルゲ事件の公表と関係があるのか。

〔山田〕ほぼ同じ時期ですよね。42 年になってのゾルゲ事件もその位，実際にゾルゲ事件が起きたのは 41 年なんですけれども。その後，ちょっと経ってからの公表だったと思います。ゾルゲ事件の公表と連動していると，こう考えて良いかと思います。

〔問５〕経済謀略戦の効果や作戦意義について，当時の東条英機を初めとするトップの理解はどれ位であったのか。

〔山田〕日本側が意図したような，本来の，例えば円系通貨を流通させるとか，偽札によって

中国のお札の信用を失わせるとか，最初に考えたことは，結果として何一つ実現していないです。ですから，そういう点では，日本側としても，これをどう評価したのかというのはなかなか公式の記録が残っておりません。何故ならば，国家が他国の偽札を造っていたということは，現在においても，きちんと公表されていないことでありますので，例えば陸軍大臣だった東条などは当然知っていたし，どういうふうに評価したのかというのは，どこかで何か記録が残っている可能性はありますが，これは私たちとしても，探していきたいと思います。

〔問６〕中国では多くの研究書が存在しているとのことだが，日本では当事者の回想があるという程度にとどまっている。今回の展示を含め，日本での研究が進展しない理由は何があると考えるか。また今回の展示をより理解するために読むべき文献を教えてほしい。

〔山田〕秘密戦に関して，やはり全体として研究があまり進んでいないということですよね。歴史学の研究分野として，戦争分野について，一定程度の研究の進展・蓄積があるわけですけれども，軍事的目的を持って秘密戦，次のこれからの秘密戦どうするのか？という問題意識で研究している人たちはプロフェッショナルの中にはいるでしょうけれども，歴史学として，もっと客観的に，それがどんな役割を果たしたのかということを研究するには，依然として，軍事史関係の研究者層が薄すぎるということです。ですから，こういう企画展などを通じて，少しでもそういうところ〔秘密戦など〕に関心を持っていただく人が増えることを祈っております。それから最近，斎藤充功さんが中野学校についての，それこそ重厚な本『中野学校全史』（論創社，2021 年）を出されておりまして，それが一つ，最近において参照すべきものかなと思います。

〔問７〕中国大陸に展開された，本日のテーマの謀略戦は，陸軍があくまでも中心であった。海軍は人員輸送で無関係ではないと思うが，海軍の関わりはなかったのか。また，海軍独自の謀略と呼べるものはあったのか。

〔山田〕これは本当に，無いということは絶対にないですよね。海軍においても当然，諜報活動や謀略戦という考え方はあったわけですけれども。その辺りを示す物的証拠，あるいは長らく回想も含めて，資料全体の数が海軍の場合少ない。ですが，たぶん無かったということにはならないだろうと思います。やはり，かなり海軍は海軍で独自の諜報・謀略網を作っていたはずです。それは戦争中も，陸海軍の間で，むしろ情報の交換というのがあまり行われなくて，独自に集めた情報でいろんなことを判断するということをやっていますので。それから太平洋戦争前には，海軍からアメリカ本土に対して，それからハワイ，フィリピン，こういうところに随分，諜報要員を派遣しているので，そういうことを重視していたということは当然あることだと思います。

〔問８〕蔣介石政権は何故，日本と継続して戦争することができたのか。国民政府は中国で支

持を集めていたのか。国内で内戦もある中，徴税・徴兵ができたのか。

〔山田〕蔣介石の力というのは，当時，日本が判断していた，あるいは戦後，凋落してしまいますので，戦争中の彼の権力の強さというのは意外に分かり難くなっていますが，もちろん物資・経済という面では，英米仏ソ，特に最終的にアメリカが蔣介石政権を支えたということです。物が切れなければ，何とかなるんです。というのは，中国は人口が多いですから，兵士を集めるという点では，日本よりはかなり集めやすいという点があります。内戦もあって，また軍閥勢力も残っている中ではあったのですが，やはりアメリカが蔣介石を中心として，そこに影響力をずっと行使し続けたということが，戦争中，蔣介石が権力を失わなかった最大の要因だろうと思います。しかし，蔣介石が急速に民心を失ってしまうのは，やはり最後になって軍事インフレというのが結構大きいです。大変な物価高が戦後に訪れまして，蔣介石政権の信頼性というのは，国民レベルでどんどん低下してしまう。ちょうど国共内戦が同時進行で進んでいて，共産党支配地域では，インフレがあまり起きなかったということもあって，蔣介石の信用はますます低下したということになるのかと思います。

〔問 9〕対中国謀略は陸軍が実施しているが，英米とも同じような体制だったのか。当時の軍人に政治が分かったとは思えない。

〔山田〕そうなんですよね。日本陸軍の中には，当時の言葉でいう「支那通」，中国に対してよくわかっているという人物がいたことになっているのですが，本当に中国のことが理解できていたのかどうかというのは，これは今となってみると，ちゃんと見ることができていなかったのではないかと思いますし，軍人は軍人で，謀略的観点で政治を見ているんですよね。だから正攻法の政治というものが，やはりわかっていなかったということは，ご指摘の通りかと思います。

〔問 10〕風見章のようなリベラル派までなぜ「対手とせず」声明に同意したのか。

〔山田〕風見章は，近衛内閣の内閣書記官長ですね。これはちょうどニュース映画でも残っていますよね。風見章が，この声明を読み上げるシーンが出てきますけれど，やはり南京陥落のインパクトは大きかったと思います。これで戦争は勝ちだと思ってしまった。中国の粘り腰というか，底力というのか，そこをきちんと理解できる日本の政治家というのが，少なかったということだと思います。

〔問 11〕汪兆銘政権側は，政府として成立していたのか。官僚組織と同時に管理する行政区を持っていたのか。

〔山田〕実際に，日本軍が安定的に支配している場所，これは華中を中心に揚子江沿岸ですが，汪兆銘政権の支配地域は存在しました。しかし，これはあくまでも日本軍があってのことであって，確かに，今回の企画展を見ていただくと，この汪兆銘政権の内実というの

が本当に空虚なものであったということが，『周仏海日記』の分析でよくわかります。特に財政的に成り立たないんですね。ですから多く，日本からの借款，日本から借金をして，財政的に何とか回しているというのが実態であったということです。また，一応軍隊も警察も持っているんですけれども，ほとんど，実際の力を日本軍の後ろ盾無くしてできるものではなかったということです。

〔問 12〕解体された偽札工場は保存すべきだとの声はなかったのか。

〔山田〕これはもちろん，おっしゃるとおりで，保存できるのであれば保存したかったというのが私達の本音でもあります。木造の建物というのは，一度雨漏りしたりして痛み始めると，なかなか維持するのは難しいです。それに，偽札の印刷工場って大きいんですよ。逆に大きい木造の建物を保存するということが，大変お金も必要であったし，また，川崎市と協議して，移設しようというようなことも考えたのですが，なかなか色よい返事が得られなかったということがあって，それはもちろん，残せればそれに越したことはなかったのですが，残念ながら残せなかったというのが実情です。

〔問 13〕中国進出を推し進めた陰の立役者は誰なのか。財閥などなのか。

〔山田〕もちろん財閥もあったとは思いますけれども，やっぱり最大の権威者は陸軍だったと考えていいのではないでしょうか。特に謀略という観点から，満州国がやはり成功事例として，まさに謀略によってできた国家で，そういうことが通用しうまくいったんだという認識です。これが後々まで災いしたのではないかと思います。

〔問 14〕何年か前に NHK スペシャルで『円の戦争』というのを放送していて，聯銀券や儲備銀行券を大量に印刷して日本軍が物資を調達していたという話だった。この預け合いと，偽法幣製造とでは，どちらが戦争物資調達に大きく寄与しているのか。

〔山田〕これは，つまり戦争物資を，儲備券，聯銀券，軍票とかで〔調達〕可能であれば，わざわざ偽札は必要なかったんですね。ということは，結局その円系通貨の信用が上がらなかったということ。それによって物資調達に難渋していたということが，最終的に日本側を偽札の方に，どんどん傾斜させた最大の要因ではないかと思います。だから結果的に，物資調達という点では偽札はかなり有効だったということですね。

〔問 15〕偽法幣製造や，預け合いによる物資調達は，戦争にかかった軍事費としてちゃんとカウントされているんですか。

〔山田〕これがわからないんですね。軍事費，戦費というのは基本的に国債を原資として調達されるんですが，偽札なんかはそれとはまったく別ルートですから，おそらく軍事費としてちゃんとカウントされたものではないと思います。

〔問 16〕戦争の最中反対の声をあげる人はいなかったのですか。「ちょっとこれをやったらまずいよね」という考えの人はみんな投獄されていたのでしょうか。

〔山田〕治安維持法という非常に強力な武器を当時の政府は持っておりますし，それが濫用されたということがありますよね。ですからそういう点で，もちろん内心戦争について反対の思いを抱いていた人はいたと思うのですが，それを声に出して言えない状況が，大体日中戦争のころから，もう作られていたということです。その国民の中で結果的に，相互に監視しあってしまうという体制になっていたっていうことも，やはり大きいのかなと。つまり治安維持法で，上から締め付けるというのと同時に，国民の中で，国民同士がお互いに監視し合うという体制を作ってしまったということが，結構大きいのではないかと思います。

〔問 17〕汪兆銘の権威が失墜したにもかかわらず，汪兆銘政権樹立まで至ったのはなぜか。当時同時進行されていた「桐工作」の結果を以ての評価とも思うが。

〔山田〕汪兆銘政権を樹立して，汪兆銘に力を持たせようということを日本はやっていますが，実は同時に，ひそかに「桐工作」といって，重慶政権と裏で交渉をしようとしていました。ところが「桐工作」，今回の企画展でも展示していますのでぜひご覧いただきたいんですが，「桐工作」に日本側は踏み込むんですが，なにか実態として，誰と交渉をしているのかよくわからないような状況になっていまして，そのことを周仏海に笑われたりしているんですね。ですから結局，蔣介石側に翻弄されたといってよいかと思います。汪兆銘工作も，「桐工作」のほうも，昭和天皇も含めて大変期待した工作なんですが，なかなか実があがらなかったということだと思います。

〔問 18〕国策ともいうべき戦争。今の原発，リニアモーターカー，外環道の問題，南海トラフ地震が叫ばれている中で，本当にビジョン本位。国策で巴川製紙，八木アンテナが戦争に動員されていったのかはなにゆえか，という反省がないということは，進歩がないということなのか。それらはすべて国民の犠牲の上に成り立っている。

〔山田〕結局，戦争ということになると，通常の価値観ではなく，そこで当然，戦争という手段で，結果として儲けてしまう人もたくさん出るわけです。そしてそういう形で，国に貢献するっていうことが，名誉だとされるという価値観が流布されてしまいます。ですからやはり，戦争というものが，人間自体を変えていってしまって，より悪い方向へ進んでいくということはあるんですよね。だから，戦争が始まってから戦争に反対するということは極めて難しいことで，その始まる前の段階で，それがきちんとなされない限りは，どんどん戦争の進行とともに，それこそ偽札を作ってもなにも感じない，人体実験をやっても平然としていられるという，こういうふうに人間自体が，どんどん通常の価値観・倫理観を喪失してしまうと思います。

〔問 19〕南京陥落により，日本国内に中国との戦争終結機運が高まったと思われる。しかし実際，日本国民にとって経済的な観点から，これ以上戦争ができないのではないかという考え

はあったのか。

〔山田〕戦争が起きますと，一時的には，物資がどんどん流通したりして，一種軍事インフレが起きて，見た目には景気が結構よくなったりします。長続きはしないのですが。しかも，勝った勝ったというプロパガンダが行われるので，日中戦争の初期の段階では，多くの人がその先，非常に厳しいことになるとはあまり考えなかったと思います。南京段階でもう終わり。次，大作戦があって，例えば徐州が陥落したらもう終わりだろう。あるいは武漢三鎮で終わるのではないかと，みんなそう思っているわけです。宣伝もそのように行われました。だけど結局，行けども行けども終わらない，ということで，結局 1939 年，40 年くらいになって，これはとんでもない泥沼にはまっているんじゃないかと，多くの人が思い始めます。ところが，それで今度は三国同盟，アメリカとの対決ということで，また一時的に精神が高揚して，そちらに突き進んでしまうということになるんですよね。だから戦争を始めますと，政府の方も常に刺激，戦果があがったとか，次にこんな大きなことが起こるんだということを宣伝して，国民の精神を引き締めたり，あるいは高揚させたりするという，その操作が行われるわけです。そういうことはそんなに長続きはしないのですが。だけど結局そういう形で，引っ張られてしまうというのが実態だったんだろうと思います。

〔問 20〕さきほど汪兆銘政権樹立と「桐工作」について質問した。それでは「桐工作」に期待して汪兆銘政権樹立をあきらめる，という形にはならなかった〔理由を伺いたい〕。始まってしまった汪兆銘工作を続けざるを得なくなったのか，それとも，汪兆銘工作の失敗を認識できていなかったということなのか。

〔山田〕おそらくは，当時やっていた人も，汪兆銘工作には限界があることには気が付いていたと思います。しかし，日本としては汪兆銘に代わるカードがなかったということです。ですから結局，謀略というレベルでなにかやろうとしても，これ以上のことはやはり難しかったということだと思います。本来は蔣介石政権との交渉を，もっと謀略的な形ではなく，きちんとやらなければいけなかったんだろうと思いますが，さりとて，汪兆銘を取り込んで，すぐに捨ててしまうということもできなかったということなのでしょう。そこに多分，日本側の大きなジレンマがあったんだろうと思います。

〔問 21〕陸軍海軍の能力に比して，現在の自衛隊・政府の能力は，相当能力低下していると思うが，米軍の二軍として使い捨てにされるのではないか。

〔山田〕軍事同盟を背景に考えると，盾にされる・利用されるということは，より強いものと同盟した時には結果として大いに起こり得ます。強いものと一緒になって漁夫の利を得ることもあるかもしれませんが，一般的には，例えば日露戦争は日本が勝利したというふうに，多くの人は認識したわけですけれど，結局イギリスからどんどん後押しされて，

そっちに向かわざるを得なかったということで，人的犠牲・財政的な損失という点では，日本がその損失を負ったということです。それでイギリスは，まさにその中で，ロシアの南下を食い止めるという，大きな戦略的目的を達したということですから，力関係，大国との軍事同盟という力関係を考えますと，力のない方は，結局大きな犠牲を払わされるという結果になるのだろうと思います。

皆様からのご質問，一応お答えしたと思いますので，質疑応答をここまでとさせていただきます。どうもありがとうございました。

〔追記〕

本稿は，2021 年 12 月 4 日（土）にオンラインで開催された第 12 回企画展記念講演会「参謀本部と登戸研究所による対中国謀略－アジア太平洋戦争開戦 80 年－」の書き起こしに加筆・修正したものです。

明治大学平和教育登戸研究所資料館　第 12 回企画展　記念講演会（2021 年 12 月 4 日）

参謀本部と登戸研究所による対中国謀略
―アジア太平洋戦争開戦 80 年―

明治大学平和教育登戸研究所資料館長　山田　朗（文学部教授）

はじめに（本報告の目的）

〔1〕企画展の内容をより深く理解していただくために、時代状況を通史的に解説する。
　アジア太平洋戦争（1941 年～1945 年）開戦 80 年にあたり日中戦争からの連続性を確認
〔2〕政治謀略の中心であった汪兆銘工作について解説する。
〔3〕経済謀略の中心であった偽札工作について登戸研究所が果たした役割を解説する。
※**【展示】**は企画展展示の必見のポイント

Ⅰ　なぜ日中戦争は世界戦争に結びついたのか

1　満州事変・華北分離工作・盧溝橋事件という流れ

〔1〕満州事変（1931 年）と「満州国」建国
　→　満蒙の権益確保・拡大という「成功事例」として認識される
〔2〕第 2 の「満州国」成立をねらう華北分離工作の活発化
　→　華北 5 省（河北・山東・山西・綏遠・察哈爾）の蔣介石政権からの分離を狙う
　→　出先軍（支那駐屯軍）が冀東防共自治政府・冀察政務委員会などの傀儡政権を育成
〔3〕盧溝橋事件（1937 年 7 月 7 日）の拡大
　事件を利用して華北分離を実現しようとする考えが底流に

2　局地紛争から全面戦争への拡大

〔1〕目的なき戦争
　当面の目標が華北分離から蔣政権打倒へ　→　華中（上海方面）に戦火拡大（8 月）
　「北支事変」（7 月 11 日）から「支那事変」（9 月 2 日）へ
〔2〕宣戦布告なき戦争
　陸海軍省はそろってアメリカの「中立法」適用を恐れ、宣戦布告に反対
　国際的には「戦争」ではないので、諸外国が中国を支援することも可能に

3　戦争泥沼化の原因：初期和平工作打ち切りと第 1 次近衛声明

〔1〕ドイツ駐華大使トラウトマンを介しての蔣政権との和平交渉（9 月～）
　詰めの段階まで至るも、南京陥落（12 月 13 日）により日本側が強気（賠償要求）に
〔2〕御前会議で「支那事変処理根本方針」を決定（1938 年 1 月 11 日）
　→　蔣政権が和を求めてこなければ、以後は対手としないという方針を決定
　→　**第 1 次近衛声明＝「国民政府を対手とせず」政府声明（1 月 16 日）　→【資料 1】**
　→　トラウトマン工作を打ち切り、蔣政権の存在を否定、新政権育成へと舵を切る
〔3〕自ら外交交渉の相手を否定、戦争終結の手段を失い、戦争は泥沼化

4　戦線のさらなる拡大と外交的手詰まり

〔1〕傀儡政権の擁立……現地軍の対抗意識を反映して分立、統治能力なし
　1937 年 12 月：中華民国臨時政府（北京）、1938 年 3 月：中華民国維新政府（南京）
〔2〕現地軍はさらに大作戦を続行（1938 年 4～6 月－徐州作戦、6～11 月－武漢作戦）
〔3〕外交的手詰まり打開の模索
　内閣改造（1938 年 5 月）、宇垣一成が外相に就任、和平をさぐる
　→「対手とせず」声明を白紙還元し、和平交渉を開始する意向
　→　国民政府行政院長・孔祥熙と接触はかる（香港で和平条件を打診）も陸軍の策動で失敗

５　政治謀略（汪兆銘工作）: 国民政府（蔣政権）の分裂を策する謀略の始まり

〔1〕武漢・広東の失陥に国民政府内でも動揺
　共産党の影響力拡大を恐れた汪兆銘（精衛）国民党副総裁らは対日早期講和を主張

〔2〕陸軍、極秘裡に汪兆銘派と接触
・外交部前亜州司長 高宗武、ひそかに来日、板垣征四郎陸相らと接触（7 月）
・影佐禎昭軍務課長・今井武夫参謀本部支那班長は汪腹心の高宗武・梅思平と和平工作

〔3〕**第 2 次近衛声明＝「東亜新秩序」声明（11 月 3 日）　→【資料２】**
　第 1 次声明＝「対手とせず」声明を事実上撤回、汪兆銘派との提携による和平に期待

〔4〕「日華協議記録」調印（上海 11 月 20 日）……影佐・今井と高・梅の間で
　講和条約案の骨子
　日華防共協定締結、日本軍の防共駐兵、満州国承認、日華経済提携､治安回復後 2 年以内の日本軍の撤兵、汪兆銘による新政権樹立

〔5〕日本側による和平条件吊り上げ（御前会議 11 月 30 日）
　賠償請求を加え、撤兵時期は明示せず　**→【資料３】**

〔6〕汪兆銘は重慶を脱出（12 月 18 日）、ハノイへ（1939 年 4 月まで滞在、5 月に上海へ）**【展示】**
　第 3 次近衛声明（「近衛三原則」: 善隣友好・共同防共・経済提携 –12 月 22 日）発表
→　「撤兵」に言及せず　→　条件わるく、汪兆銘に同調する者減少
→　謀略の失敗、汪兆銘の影響力低下（それでも日本は 1940 年 3 月に汪政権を成立させる）

６　「東亜新秩序」声明と対英米関係の悪化

〔1〕「東亜新秩序」声明に反発する英米
　1938 年 12 月 30 日…米、門戸開放原則を無視した「新秩序」容認し難い旨を通牒
　1939 年 1 月 14 日…英、九か国条約の規定の一方的変更は容認し難い旨を通牒

〔2〕英・米、対中借款を設定、中国支援の姿勢を明確に
　ソ連も蔣政権に武器（戦闘機・爆撃機など）を提供

〔3〕広東・海南島・汕頭（6 月）占領　→ 英・米・仏の対日警戒心高まる
　香港ルート遮断により「援蔣ルート」は仏印ルート・ビルマルートが中心に

〔4〕北支那方面軍、天津の英仏租界を封鎖（1939 年 6 月 14 日）
　日本国内でも英を「援蔣の元凶」とする排英運動（7 月）
　米、日米通商航海条約の廃棄を通告し（7 月 26 日）、英を支援する姿勢示す
→　**日中戦争は日本 vs 中国＋英米仏ソの世界戦争の構造に**

〔5〕中国（蔣政権）を支援する英、英を支援する米
→　英・米を押さえ込むためにドイツに接近（**1940 年 9 月三国同盟締結**）
→　すでに戦争をしているドイツとの同盟は、対英米戦争を不可避にさせた

Ⅱ　中国における政治謀略戦

１　謀略戦の中心機関＝大本営（参謀本部）謀略課

〔1〕大本営謀略課の設置（1937 年 11 月、大本営設置にともない）
　官制上は、1940 年 8 月に参謀本部第 2 部第 8 課として設置されたことになっている

〔2〕謀略課の陣容（1937 年の設置時）
　課長：影佐禎昭大佐 → 1938 年 6 月～陸軍省軍務課長、1939 年 8 月**梅機関長【展示】**
　課員：唐川安夫中佐 → 後方勤務要員養成所（中野学校の前身）設置を発案
　　岩畔豪雄中佐 → 対中国偽札工作を発案、1939 年 2 月～陸軍省軍事課長
　　臼井茂樹中佐 → のちに桐工作を推進

２　上海における謀略戦

〔1〕日本軍の支配権が及ばない上海共同租界とフランス租界
　1937 年 11 月：日本軍、激戦の末、上海を占領
→　日本側の上海市政府と工部局（共同租界の独自の市政府）による二重支配
→　共同租界とフランス租界は外国軍隊と工部局警察が警備

〔2〕謀略戦の坩堝としての上海共同租界
→　中国の金融・貿易・流通業の中心地、蔣政権の法幣が通用
→　援蔣物資搬入と抗日運動の拠点、中国・英米仏ソ vs 日本・汪の謀略の坩堝

３　梅機関＋汪兆銘派 vs 蔣政権の暗闘

〔1〕汪兆銘、ハノイから上海に到着（1939 年 5 月）

〔2〕参謀本部、汪兆銘工作のために上海に**梅機関を設置（1939 年 9 月）**……**【展示】**
→　汪兆銘と側近である**周仏海**・梅思平・陳公博たちを日本軍憲兵の手で厳重に保護

〔3〕梅機関は中国における日本軍の秘密戦の中心機関に
　在華米軍に関する情報収集、同基地の破壊、対重慶防諜・諜報、物資買い付け
　梅機関長・影佐禎昭少将による日本新聞各社の取り込み
→　重慶・汪と上海マフィア（青幇）も参入してのテロ対テロの抗争
　汪側特務機関「ジェスフィールド 76 号」の暗躍……**【展示】**
→　1939 年だけで上海で 2000 人以上が殺害された

４　汪兆銘政権の成立（1940 年 3 月）

〔1〕汪兆銘による南京「還都」宣言（1940 年 3 月 30 日）

〔2〕日華基本条約の調印（1940 年 11 月 30 日）
　蔣政権否認、共同防共、日本軍による治安維持、日本艦船の駐留、日本への資源供給

〔3〕汪兆銘・周仏海らの来日
→**【映像資料】**「汪精衛主席訪日の途へ」『日本ニュース』第 54 号（1941 年 6 月 17 日公開）
→**【映像資料】**「汪精衛院長感激の訪日声明」『日本ニュース』第 55 号（1941 年 6 月 24 日公開）
　周仏海の日記を分析 ……**【展示】**

〔4〕アジア太平洋戦争開戦にともなう租界の接収（1941 年 12 月）
→**【映像資料】**「米英戦力の基地租界を電撃接収」『日本ニュース』第 80 号（1941 年 12 月 16 日公開）
→**【映像資料】**「上海諜報団検挙」『日本ニュース』第 107 号（1942 年 6 月 22 日公開）

〔5〕清郷工作の実施……**【展示】**
　抗日勢力と住民の接触を断つため、村を竹矢来で囲み検問所によって外部と遮断
　日本側の調査でも「清郷工作の困難性」が指摘されている……**【展示】**

Ⅲ　中国における経済謀略戦

１　経済謀略の第１段階：密貿易と円系通貨圏の形成

〔1〕経済謀略の始まり
　「冀東特殊貿易」：冀東（河北）の海関（税関）を通さずに日本商品を陸揚げ
　円系通貨圏（日本銀行券・満州中央銀行券・朝鮮銀行券・横浜正金銀行券）構築を目指す

〔2〕中華民国における幣制改革（1935 年～）
　英国リース・ロスを招いて法幣制度を確立、全国統一通貨圏・経済圏の成立めざす
　（従来は地方ごとの通貨制度によって、国内が単一通貨圏・経済圏ではなかった）

〔3〕日中戦争の全面化（1937 年 7 月）以降の通貨戦
　日本軍占領地ごとに**円系通貨**を流通させる試み……**【展示】**

1938 年 3 月：中華民国臨時政府（北京）による中国聯合準備銀行の設立、**聯銀券**の発行
1939 年 5 月：中華民国維新政府（南京）による華興商業銀行の設立、**華興券**の発行
1941 年 1 月：汪兆銘政権（南京）による中央儲備銀行の設立、 **儲備券**の発行
→　同時に、日本軍は**軍票**での支払いも実行（軍票のみの地域も）
→　華興券は回収、聯銀券・儲備券・軍票を蔣介石政権の法幣と同価値で発行
→　円系通貨の信用は上昇せず（日本軍は物資調達に困難をきたす）

２　経済謀略の第 2 段階：法幣偽造による通貨謀略

〔1〕参謀本部第 7 課（支那課）、のち第 8 課（謀略課）が通貨謀略を構想（1938 年 10 月～）
岩畔豪雄による**偽造紙幣工作**の発案
→　中国経済を混乱させて抗戦力を減殺しようとする経済謀略　　**→【資料４】**

〔2〕登戸研究所（「陸科研」登戸出張所）に第三科設置、法幣偽造の開始（1939 年 8 月）
科長：山本憲蔵主計少佐
最初は 8 名の体制で、中央銀行の五圓(元)券を試作（失敗）
→　法幣はイギリスの抄紙（紙すき）・透かし技術を駆使して製造されていた
→「黒透かし」と絹糸漉き込みの技術的蓄積なし
→　巴川製紙の技術を動員
約 1 年かかって紙すき・透かし技術の課題を克服……**【展示】**

３　経済謀略の第 3 段階：法幣大量偽造による物資調達

〔1〕アジア太平洋戦争の開始、香港占領（1942 年 1 月）
1942 年春、香港の法幣印刷所から正式の原版・輪転機などを接収、登戸研究所に搬入
→　1942 年夏以降、偽造法幣の大量製造が軌道に乗る
1ヶ月に 1～2 億圓(元)を印刷・輸送
五圓券・十圓券、のち百圓券・二百圓券を製造

４　偽札謀略の結末

〔1〕1942 年秋～1943 年：法弊不足（香港失陥のため）に陥った重慶政権に大きな打撃
〔2〕軍票・儲備券の信用失墜で法幣・偽造法幣の価値が上昇
→　偽札は日本軍の物資調達、兵士の給与には大いに力を発揮した
〔3〕英米が法幣印刷・空輸をして中国を支援、次第に高額法幣を発行
十圓券（1942 年）→ 百圓券 → 千圓券 → 一万圓券……百万圓券・二百万圓券（1945 年）
〔4〕軍事インフレーションの進行（1945 年春以降）
蔣介石政権による米からの武器調達、米からの借款による大量の紙幣導入
→　日本側の低額偽札は無力化

おわりに

〔1〕政治謀略（汪兆銘工作）は、汪政権成立以前に失敗
〔2〕経済謀略は、円系通貨は信用されず、偽札は一時的に効果を上げるが、当初の目的であった経済混乱を起こすことはできず

【参考文献】

〔1〕山本憲蔵『陸軍贋幣作戦：計画・実行者が明かす日中戦秘話』（徳間書店、1984 年）
〔2〕斎藤充功『謀略戦　陸軍登戸研究所』（時事通信社、1987 年、学研M文庫、2001 年）
〔3〕**伴繁雄『陸軍登戸研究所の真実』**（芙蓉書房出版、2001 年、新装版 2010 年）
〔4〕海野福寿・渡辺賢二ほか編『陸軍登戸研究所―隠蔽された謀略秘密兵器開発―』（青木書店、2003 年）
〔5〕**渡辺賢二『陸軍登戸研究所と謀略戦』**（吉川弘文館、2012 年）
〔6〕明治大学平和教育登戸研究所資料館編『陸軍登戸研究所〈秘密戦〉の世界』（明治大学出版会、2012 年）
〔7〕山田朗『兵士たちの戦場：体験と記憶の歴史化』（岩波書店、2015 年）

資　料　編

【資料１】「国民政府を対手とせず」政府声明（第 1 次近衛声明：1938 年 1 月 16 日）

帝国政府は南京攻略後尚ほ支那国民政府の反省に最後の機会を与ふる為め今日に及べり、然るに国民政府は帝国の真意を解せず漫りに抗戦を策し内民人塗炭の苦しみを察せず外東亜全局の和平を顧みる所なし、仍つて帝国政府は爾後国民政府を対手とせず帝国と真に提携するに足る新興支那政権の成立発展を期待し、是と両国国交を調整して更生新支那の建設に協力せんとす。元より帝国が支那の領土及主権並に在支列国の権益を尊重するの方針には毫も変る所なし、今や東亜和平に対する帝国の責任愈々重し、政府は国民が此の重大なる任務遂行の為め一層の発奮を冀望して止まず

出典：外務省編『日本外交年表竝主要文書』下（原書房、1965 年）386 頁。

【資料２】東亜新秩序声明＝第２次近衛声明（1938 年 11 月 3 日）

今や、陛下の御稜威に依り、帝国陸海軍は、克く広東、武漢三鎮を攻略して、支那の要域を戡定したり。国民政府は既に地方の一政権に過きす。然れとも、同政府にして抗日容共政策を固執するかぎり、これか潰滅を見るまては、帝国は断して矛を収むることなし。

帝国の冀求する所は、東亜永遠の安定を確保すへき新秩序の建設にあり。今次征戦究極の目的亦此に存す。

この新秩序の建設は日満支三国相携へ、政治、経済、文化等各般に亙り互助連環の関係を樹立するを以て根幹とし、東亜に於ける国際正義の確立、共同防共の達成、新文化の創造、経済結合の実現を期するにあり。是れ実に東亜を安定し、世界の進運に寄与する所以なり。

帝国か支那に望む所は、この東亜新秩序建設の任務を分担せんことに在り。帝国は支那国民か能く我か真意を理解し、以て帝国の協力に応へむことを期待す。固より国民政府と雖も従来の指導政策を一擲し、その人的構成を改替して更生の実を挙け、新秩序の建設に来り参するに於ては敢えて之を拒否するものにあらす。

出典：外務省編『日本外交年表竝主要文書』下（原書房、1965 年）401 頁。

【資料３】御前会議決定「日支新関係調整方針　別紙 日支新関係調整要綱」(1938 年 11 月 30 日)

日支新関係調整要綱

第一　善隣友好の原則に関する事項

日満支三国は相互に本然の特質を尊重し渾然相提携して東洋の平和を確保して善隣友好の実を挙くる為各般に亘り互助連環友好促進の手段を講すること

一、支那は満州帝国を承認し日本及満州は支那の領土及主権を尊重し日満支三国は新国交を修復す

二、日満支三国は政治、外交、教育、宣伝、交易等諸般に亙り相互に好誼を破壊するか如き措置及原因を撤廃し且将来に亙り之を禁絶す

三～五、［略］

六、日本は新中央政府に少数の顧問を派遣し新建設に協力す特に強度結合地帯其他特定の地域に在りては所要の機関に顧問を配置す〔中略〕

第二　共同防衛の原則に関する事項

日満支三国は共同して防共に当ると共に共通の治安安寧の維持に関し協力すること

一、日満支三国は各々其領域内に於ける共産分子及組織を芟除すると共に防共に関する情報宣伝等に関し提携協力す

二、日支協同して防共を実行す　之か為日本は所要の軍隊を北支及蒙疆の要地に駐屯す

三、別に日支防共軍事同盟を締結す

四、第二項以外の日本軍隊は全般竝局地の情勢に即応し成るへく早急に之を撤収す

但保障の為北支竝南京、上海、杭州三角地帯に於けるものは治安の確立する迄之を駐屯せしむ

共通の治安安寧維持の為揚子江沿岸特定の地点及南支沿岸特定の島嶼及之に関連する地

点に若干の艦船部隊駐屯す尚揚子江及支那沿岸に於ける艦船の航泊は自由とす
五、支那は前項治安協力のための日本の駐兵に対し財政的協力の義務を負ふ
六、日本は概ね駐兵地域に存在する鉄道、航空、通信竝主要港湾水路に対し軍事上の要求権及監督権を保留す
七、支那は警察隊及軍隊を改善整理すると共に之か日本軍駐屯地域の配置竝軍事施設は当分治安及国防上必要の最小限とす
日本は支那の軍隊警察隊建設に関し顧問の派遣、武器の供給等に依り協力す〔中略〕
附
一、支那は事変勃発以来支那に於て日本国民の蒙りたる権利利益の損害を補償す
二、第三国の支那に於ける経済活動乃至権益か日満支経済提携強化の為自然に制限せらるるは当然なるも右強化は主として国防及国家存立の必要に立脚せる範囲のものたるへく右目的の範囲を超えて第三国の活動乃至権益を不当に排除制限せんとするものに非す
出典：外務省編『日本外交年表竝主要文書』下（原書房、1965 年）405-407 頁。

【資料４】対支経済謀略実施計画（1939 年）→1942 年以降の組織名が使用されている

一、方針
蒋政権ノ法幣制度ノ崩壊ヲ策シ、以テソノ国内経済ヲ攪乱シ、同政権ノ経済的抗戦力ヲ潰滅セシム。
二、実施要領
１　本工作ノ秘匿名ヲ「杉工作」ト称ス。
２　本工作ハ極秘ニ実施スル必要上、之ニ関与スル者ヲ左ノ通リ限定ス。
（イ）陸軍省
大臣、次官、軍務局長、軍事課長、担当課員
（ロ）参謀本部
総長、次長、第一部長、第二部長、第八課長、担当参謀及部付将校
（ハ）兵器行政本部
本部長、総務部長、資材課長
３　謀略資材ノ製作ハ陸軍第九科学研究所（以下登戸研究所ト略称ス）ニ於テ担当スルモ、必要ニ応シ大臣ノ認可ヲ得テ民間工場ノ全部又ハ一部ヲ利用スルコトヲ得。但シ機密保持ニ万全ヲ期スルヲ要ス。
４　登戸研究所ニ於テ製作スヘキ謀略器材ニ関スル命令ハ、陸軍省及参謀本部担当者ニ於テ協議ノ上、直接登戸研究所所長ニ伝達ス。
５　謀略資材完成シタルトキハ、其種類、数量ヲ陸軍省及参謀本部担当者ニ直ニ報告スルモノトス。
６　参謀本部ハ陸軍省ト協議ノ上、送付先ヲ定メ、所要ノ宰領者ヲ附シ極秘書類トシテ所定ノ機関ニ送附ス。
７　支那ニ本謀略ノ実施機関ヲ置ク（以下本機関ノ秘匿名ヲ松機関ト称ス）。本機関ハ差当リ本部ヲ上海ニ置クモ、支那又ハ出張所ヲ対敵貿易ノ要衝地並ニ情報収集ニ適シタル地点ニ置クコトヲ得。
８　本工作ハ敵側ニ対シ隠密連続的ニ実施シ経済攪乱ヲ主タル目的トス。コレカタメ法幣ヲ以テ通常ノ商取引ニヨリ軍需及民需ノ購入ヲ原則トスル。
９　獲得セル物資ハ軍ノ定ムル価格ヲ以テ各品種ニ応シ所定ノ軍補給廠ニ納入シ、得タル代金ハ対法幣打倒資金ニ充当ス。但シ別命アルトキハコノ限リニアラス。
10　松機関ハ松工作用資金並ニ獲得シタル資材ヲ常ニ明確ニシ、毎月末資金及資材ノ状況ヲ陸軍省及参謀本部ニ報告スルモノトス。
11　松機関ハ機関ノ経費トシテ送附セル法幣ノ二割ヲ自由ニ使用スルコトヲ得。
出典：山本憲蔵『陸軍贋幣作戦―計画・実行者が明かす日中戦秘話―』（徳間書店、1984 年）66 頁。

明治大学平和教育登戸研究所資料館　館報
第８号　2022 年度
117 － 159 頁，2022 年９月

明治大学平和教育登戸研究所資料館主催　オンライン講演会
「帝銀事件と日本の秘密戦－捜査過程で判明した日本軍の実態－」

講演１　「帝銀事件と日本の秘密戦－捜査過程で判明した日本軍の実態－」

山田　　朗
明治大学平和教育登戸研究所資料館長

はじめに

登戸研究所資料館館長の山田でございます。今日はよろしくお願いいたします。

今日の講演会は，「帝銀事件と日本の秘密戦」と題しまして，この帝銀事件の捜査過程で判明した日本軍の実態についてお話します。帝銀事件捜査陣が明らかにした日本陸軍の秘密戦部隊とはどのようなものであったのか，その広がりがいかほどのものであったのかということです。実際の捜査では，731 部隊と，登戸研究所（九研），この二つが焦点になりました。

捜査の流れを左右した 731 部隊の石井四郎，それから登戸研究所関係者の証言があります。毒物が何であったのかなど，非常に重要な役割を果たした発言というのがいくつかありますので，そのご紹介をします。

それから，帝銀事件捜査の背後にありました GHQ の占領政策の大きな転換・捜査への介入，なにゆえアメリカはここで大きな政策転換をしたのかという背景も含めてお話します。そして，帝銀事件が，その捜査過程を通じて戦前と戦後を繋ぐ事件であるととらえていいかと思いますが，それは何故か，ということです。

Ⅰ　帝銀事件とはどのような事件だったのか？

１　帝銀事件の発生

まず，帝銀事件がどういう事件であったのかということを振り返ります。帝銀事件は，1948（昭和 23）年１月 26 日午後３時過ぎに起きました。銀行の窓口業務が終わった直後です。帝

国銀行椎名町支店に，左腕に腕章をつけた中年男性が来訪して，「東京都衛生課並厚生省厚生部医員　医学博士 ○○」と書いた名刺を差し出しました。なぜ名前が正確にわからないかというと，犯人は確かに名刺を出して，支店長代理がそれを受け取りました。当日たまたま支店長が病欠で，支店長代理が受け取ったのです。ところが，犯人は逃走する時にこの名刺を回収していったようで，現場に残されていませんでした。ですから，なんと書いてあったのかという細部がよくわからないのです。

そして，やってきた男はこういいました。「近くで集団赤痢が発生した。進駐軍が消毒する前に予防薬を飲んでもらいたい」。実際に，集団赤痢が発生したとされる実在する家の名前とその共同井戸の存在を告げ，進駐軍のジープがそこまで来ていて，米軍の実在の人物の名前を出しています。また「感染者の一人がこの銀行に来ている」と，これも実名を挙げています。ですから，非常に具体的な情報であるということと，進駐軍という権威を前面に出しての発言ということで，全く疑うことなくその銀行の行員と，その用務員の一家，全部で 16 名が「予防薬」といわれるものを飲みました。銀行側が用意したお茶碗に，犯人が薬剤を注いで，それをみんなが飲むのですが，12 人が死亡します。犯人は現金 16 万円と小切手，合わせて 18 万円ぐらい，現在の貨幣価値に換算すると 500 万円ぐらいというふうに考えられますけれども，それを奪って逃走をしました。先程申したように，名刺は回収したようで，現場には残されていませんでした。

初動捜査は混乱しました。銀行から苦しみながら這い出してきた人を近所の人が見つけて，警察，あるいは不特定多数の人が現場に踏み込んでしまって，現場保存が極めて不徹底な状態になりました。当初は，警察官も毒殺事件とは思わず集団食中毒と誤断してしまいます。

また，そこに残された毒物です。お茶碗に恐らく微量ではあるけれども残っていた毒物を，非常に不適切な方法で回収しました。近くにあった瓶を洗って，その中に残った薬液を入れたのです。これが元々醤油の瓶だったようで，そこに使われた毒が正確になんであったのかということはわからなくなってしまいます。ですから，非常に重要な物証が消滅したといえます。しかし，実際に毒物を飲んだ人の解剖結果から，毒物は青酸化合物であるということまではわかったのですが，青酸化合物といってもいろいろな種類があるので，この後，毒物がなんであるかということを巡って捜査も非常に混迷しました。

それから，犯人は小切手も盗んでいます。この小切手は，翌日換金されています。安田銀行板橋支店で換金されておりまして，もし警察の初動捜査が速やかであるならば，この時点で犯人を捕まえることができたはずなのですが，実は，現場検証を事件のあった 26 日の翌日に回してしまったために，小切手が盗まれたことに気が付くまでに時間がかかってしまいます。犯人はその間に，まんまと小切手を現金に換えたということです。

２　使用された特殊な毒物

使用された毒物がなんであったのかということですが，青酸化合物であるということは確かなのですが，非常に特殊な飲ませ方をしています。薬瓶からお茶碗に駒込ピペットで少量ずつ，まず，第一薬というのを注ぎ分けています。これは16人の人が飲んで12人亡くなっているのですが，４人生存者がいますので，その時の状況は正確にわかっています。犯人は第一薬と第二薬に分けて飲ませているのです。第一薬を飲ませる時に，歯の琺瑯質（ほうろうしつ）（エナメル質）を痛めるから舌を出して飲むようにと指示をして，犯人も第一薬を飲んでみせました。ここは非常に重要な所です。この飲んでみせたというのが，一種のトリックなのか，本当に犯人も毒薬を飲んだのかということで，この後の捜査も変わってきます。

生存者の証言によると，第一薬を飲むと強いウィスキーを飲んだような胸が焼けるような感覚になったといいます。その後に注がれた第二薬，これはピペットではなくて薬瓶から直接，ガバガバっとお茶碗に注がれた第二薬を飲みました。そしてその直後，次々と倒れ，意識を失います。しかし，少し考えてみれば，おかしいことがわかります。つまり第一薬をみんなが一斉に飲む必要というのは，本当は無いわけです。ところが犯人は，一斉に飲むことを要求したということで，要するに誰か早く飲んでしまうということを防いだわけです。そして，この第一薬を飲んでから実際に多くの人が意識を失うまで，数分の時間があります。現場で11人，病院で１人が死亡しまして，助かったのは４人だけでした。

使用された毒物の特徴はなにかということですが，実際の毒物は第一薬のみではないかというふうに，捜査陣は推定しています。第二薬は第一薬を洗い流すための単なる水だったのではないかというのです。しかし，第一薬のみで毒性が完成するのか，第二薬まで含めて毒性が完成するかで，毒物の性格は随分異なります。ですから，この帝銀事件の毒がなんであったのか検証する際には，二つの毒物が混ざって初めて完成するという説もあります。しかし，少なくともはっきりしているのは，第一薬のみが毒物であったとしても，少なくともそれを犯人が飲んでいるわけです。そうするとそれは，演技あるいはトリックなのか，それか犯人は解毒剤を飲んでいたのか，というようなことで，この飲ませ方の特異性，わざわざ自分も飲んで見せたというところに捜査陣は非常に特徴があるとみたわけです。そして，嚥下（えんげ）してから効果が現れるまで２～５分くらいかかっていると。ですから，毒物として一般的にいえば即効性の部類ですけれども，ちょっと遅れて効いているという特徴がありました。これは毒物そのものの特徴なのか，それとも別の要因で遅くなったのか，捜査の過程で意見が分かれます。

３　初期捜査の重点

そして，早速，事件があった当日の夜，捜査会議が開かれて，捜査本部は目白署に置かれました。そこで，刑事たちがいろいろな意見を述べるのですが，これは進駐軍出入りの者ではな

いかと。実際に米軍のジープが近くに来ていたということと，実在の米軍の人物の名前を挙げているというようなこと。それから衛生・防疫関係者ではないか。非常に薬品の扱いに手慣れていたということです。それで一見してインテリ風だったということです。それから，詐欺的手腕のある者というのも疑われました。銀行の内部事情に詳しいと。それから，こういうことからすると，類似事件があるんじゃないかというふうに，この刑事たちはにらみます。実際に，この類似事件がありました。

そして，生存者から聞き取りをした結果，年齢は当初は44，5歳。のちに50歳前後というところまで広がります。それから身長5尺2，3寸，158～160cmくらい。当時でいえばこれくらいの男性は普通，といえると思います。そして，好男子ということが強くいわれています。それで落ち着いた人格者であるという。人格者であるかどうかというのは，付き合ってみなければわからないわけですけれども，当初からこういわれていました。また非常に大きな特徴は，短髪で白髪交じりの，いわゆる胡麻塩頭ということが強調されます。この短髪白髪交じり，胡麻塩頭ということが非常に特徴あるものとして，この後，捜査でもまず一見してここで違うか違わないかというところで容疑者をふるい分けていきます。

第1図は，この事件のモンタージュ写真です。モンタージュ写真はこの時初めて作られました。当時は「似寄り写真」といいました。**第2図**，「五尺二，三寸，中肉」，「好男子」と大きく書いてあります。目鼻立ちが整っているというようなことです。そして，**第3図**，こんな物を持っている，ということで，右側から第一薬を入れた瓶。それからお医者さんが持っているようなケースです。そして駒込ピペット，それからボンド瓶というのは第二薬が入っていたものです。こういったものを持っていたというのがその生存者の証言なのですが，実はこれ，その後の捜査過程で何一つ出てきませんでした。この物証というか，生存者が目撃したものというのは，現実には一つも揃わなかったのです。

第1図　「帝銀毒殺犯人捜査必携」部分
（当館所蔵，以下同じ）

それから，先程，刑事が，未遂事件があったのではないかと推定していましたが，実際に類似の事件が起こっていました。これは帝銀事件の前年，1947年10月14日，安田銀行荏原支店で，やはり予防薬を飲んでくれ

第2図　「帝銀毒殺犯人捜査必携」部分

第3図　「帝銀毒殺犯人捜査必携」部分

ということで人が訪れて，この時にその人は「松井蔚（しげる）」という名刺を出しています。非常に重要なのは，この松井蔚は実在の人物であるということです。その名刺は，「厚生技官　医学博士　厚生省予防局」という，これは実際に松井蔚という人が仙台で作った名刺なんです。しかしこの時は，まったく金銭被害も，毒物を飲まされたということもなく終わりました。そしてもう一つ，帝銀事件が起きた一週間前です。1948 年の１月 19 日，三菱銀行中井支店に「山口二郎」と書かれた名刺を持った人が訪れて「厚生省技官　医学博士　東京都防疫課」と書いた名刺を差し出しました。しかし，この山口二郎は架空の人物でした。この名刺がどこでつくられたのかということまで捜査陣は追うのですが，結局，ここからは何もつかめませんでした。ということで，この実在の人物，松井蔚の線で追っていこうと，この名刺を手掛かりにしました。これは帝銀事件本体ではなく，未遂事件とか類似事件です。しかし手口が非常に似ているとのことで，この松井名刺は，帝銀事件の数少ない物証の一つとされました。

Ⅱ　捜査の焦点はどこにあったのか

１　『甲斐捜査手記』の存在

帝銀事件というのは占領下で起こった事件ですから，当時，警視庁の上に，GHQ の公安局というのがあって，ここが捜査の最終責任者になります。しかし，実際に捜査にあたっているのは警視庁で，刑事部長は藤田次郎という人です。殺人事件ですから，捜査１課が中心で，主力はここです。第１課の中で，名刺班という，名刺の線を洗っていく班も作られます。そして，捜査２課が投書や密告の処理，それから捜査２課の人を集めて，秘密捜査班が作られます。これは藤田刑事部長の特命で設置されたものです。当時の検察のメンバーには出射刑事部長，高木検事がいました。

最初に活動したのはこの秘密捜査班（成智（なるち）班）で，これが結成されます。この成智班がどのようにできたのかということは，まさにこの成智さんという人が非常に重要な証言をしています。**【資料１】**〔本稿 p.140〕です。事件が起きたのが１月 26 日ですが，成智英雄という捜査二課の主任が，「二月一日の朝，私は藤田刑事部長に呼ばれた。部屋には部長以外，誰もいなかった。部長は声を落として，戦時中，大陸で生きた人間を，細菌や毒物の実験材料にしていた秘密部隊があったという，意外な情報を語った。『米軍はその事実を知っていて，元隊員を戦犯にしないという条件と交換に，彼らに詳細なデータを書かせている。ソ連軍は，関係者の身柄引渡しを強く要求しているらしい。』」ということで，重要なのは，刑事部長は，こういう部隊が存在したということを既に知っていたということです。そして，軍関係に犯人がいるのではないかということで，この成智英雄を中心とした秘密捜査班を結成して，軍関係を洗えと。そ

して，わかったことは直接自分に教えて欲しいというふうにいっています。ですから，刑事部長は最初から軍関係に目を付けていたことになります。

また，捜査１課を中心とした捜査班，捜査の主力はどうであったのかというと，捜査１課の係長に甲斐文助という人がいますが，この人は捜査本部で捜査情報を集約して，刑事の役割分担を指示していました。つまり，どこに人を重点的に集めるかということです。それでグループを作って，明日からこっちを聞き込めというふうに，指示する。この事件が起きた１月 26 日から 10 月８日までの 257 日間を全 12 巻の捜査手記に残しています。目白署の捜査本部での報告のすべて，これは先程の秘密捜査班と名刺捜査班は出てきません。名刺関係は少し出てきますけれども。この甲斐係長が記した膨大なメモが残っていて，その全体の分量は 2,289 枚です。大体，１ページ当たり平均すると 275 字ぐらい入っておりますので，400 字換算すると，実際に平沢貞通氏が逮捕された８月までだけで 1,500 枚くらい。さらに裏付け捜査分を含めると，400 字換算で 2,000 枚近くの資料になります。**第４図**が，捜査手記の原本です。現在では，紙がもうボロボロの状態で，直接ページを繰って中を閲覧するということはほぼ不可能です。しかし，帝銀事件再審請求弁護団が，以前にこの画像データを撮って，ワープロにおこしています。ですから，そういうものも現在では閲覧することができます。

第４図『甲斐捜査手記』
（帝銀事件再審請求弁護団保管）

２　『甲斐捜査手記』（第１巻～第８巻＋別巻）の数量的分析

この平沢逮捕に至るまでの『甲斐捜査手記』の数量的な分析をいたしますと，捜査本部において捜査員が報告しますね。よく刑事ドラマなんかでも見るように，大体二人一組で散っていった捜査員が，夕方帰ってきて，今日こういうことがわかったという報告をします。その結果，この『甲斐捜査手記』を見ますと，捜査結果の報告は，１月から８月までに 1,798 本行われております。この 1,798 本の中には，違う項目に分けられるものもあります。つまり二種類のことが報告されている。それを集計しますと，2,060 項目報告されています。**表１**〔本稿 p.140-141〕をご覧いただきますと，どんな分野なのかがわかります。全期間を通じてどういう分野の捜査をしたのかがわかるのですが，軍関係者の捜査というのが一番多く，2,060 項目のうち，716 で 35％。似寄・通報・投書関係が 17％。捜査の基本である地取りが 12％。ほか，医師・薬剤師関係，衛生防疫関係者。ということで，帝銀事件の捜査というのが軍関係に重点を置いた捜査であったことが，数字の面からもよくわります。**表１**の内訳の項目は便宜的に分けたものですけれども，最初の内は名刺関係，これが数少ない物証ですから，そちらの報告が多いです。

だんだん，軍関係者の報告が多くなってきて，４月には一番多くなります。200 件ちょっとの報告の内 150 件ぐらいが軍関係という状態になります。

では，軍関係の中で，さらにどこに焦点が当てられていたのかを見ていきます。**表２**〔本稿 pp.141-142〕ですが，全期間，軍関係者の項目が 716 項目ありますが，その中でも，一つの報告の中に２種類以上の部隊名が出てきたりすることがあるので，細かく分けると 755 細項となります。上位５位をとると，一番多い報告は 731 部隊の 173 項目 23％。２番目が九研（登戸研究所）で 95 件 13％。３番目，毒ガスの研究をやっていた六研が 94 件 12％。上位３機関だけでだいたい半分，362 件あります。さらにその下も見ていくと，1644 部隊（731 部隊の姉妹部隊の中支那防疫給水部）が８％。それから軍医学校も８％。これでもう，上位５機関で６割以上となります。以下，516 部隊（関東軍化学部）です。それから化学戦，つまり毒ガス戦を研究・教育する習志野学校。それから中野学校，特務機関と続いていきます。

表２は時期によっても特徴があります。最初の内，３月になって，にわかに軍関係が出てきますけれども，習志野学校，516 部隊，526 部隊，それから六研，これらはみんな毒ガス関係です。化学戦部隊が最初に浮上してきます。なぜかというと，使われたのが青酸化合物であるということは明らかで，「青酸」という言葉に非常に捜査陣は反応します。六研でも，それから習志野学校でも，516 でも 526 でも，青酸ガスを使った研究とか，あるいはその実践の準備を行っていたということで，青酸化合物というのは飲ませるものですけれども，青酸ガスというのは飛行機から撒いたり，あるいは小さな瓶の中に入れて投げたり，といったような形で使いますが，そういうものがまず浮上してきます。そしてこの六研は，ずっと非常にたくさんの捜査報告があるのですが，そのうちに３月の末ぐらいから 731 部隊が出てくる。731 はこの後一貫して多いです。その 731 に付随して 1644 部隊とか，その他の防疫給水部，あるいは 100 部隊といったようなところ。そして，だんだん捜査も後半にいきますと，７月ぐらいになると，731 も多いですが依然として九研，さらには，特務機関関係です。そういうところがどんどん増えていきます。つまりこれはなぜかというと，捜査の焦点は，少しずつ移っていくということなんです。まず捜査対象になった陸軍の部隊は，指揮機関としては参謀本部とか，陸軍科学研究所，陸軍兵器行政本部。軍医学校，獣医学校，衛生材料廠，糧秣廠，造兵廠，というところなのですが，最初にクローズアップされたのが習志野学校・六研・516・526 で，ほぼ化学戦部隊です。その次に生物戦部隊。そして，後になればなるほど，謀略戦部隊。これは登戸研究所，九研・中野学校，その他憲兵関係です。こういうところか，特務機関が怪しいとみられたということです。

実は『甲斐捜査手記』には別巻というのがあり，これは甲斐さんが本部に不在の時に，他の人が記録していたものです。この『甲斐捜査手記』の別巻に，一覧表があります〔**第５図**〕。

第５図　『甲斐捜査手記』別巻より一覧表（帝銀事件再審請求弁護団保管）

これだけ見ても，当時の捜査陣がどれくらい幅広く陸軍の諸部隊を調べたのかということがわかりまして，特に「○印は特に関係深きもの」とありまして，習志野学校，憲兵隊，南方軍防疫給水部，1644，731, さらにこの陸軍技術本部の下の研究所です。もう少し見てみますと，この辺り〔**第５図**中心右側〕，南方軍防疫給水部，1644，731，習志野。こういうところに，やはり非常に注目しているということ。それから，技術本部関係では第六研，九研。こういうところに注目しているということがわかります。

３　捜査の焦点の推移

少し前に戻りますと，元々松井名刺，という物が証拠として一番重視されたわけです。この松井蔚という人自身はアリバイがあって犯人ではなさそうだということでしたが，この松井蔚が，戦時中，南方軍防疫給水部にいて，ジャワ，インドネシアで住民多数を毒殺したという，こういう証言が得られます。これは成智班がつかんでいました。**【資料２】**〔本稿 p.142〕は松井を取り調べた成智主任の手記です。「〔松井蔚〕博士が陸軍司政官として，第二十五軍軍政部衛生課長在任当時，土人を注射で二百数十名殺害した」というような投書があるといいます。この件について，松井蔚を取り調べます。そして，「土人殺害の件は，チブス予防薬と破傷風菌を間違えて注射した過失であると，弁解した」ということですから，何らかの注射をして，多くの住民を殺したということは認めたわけです。しかしあくまでも過失なのだということです。当時，捜査する方も結構荒っぽくて，「あなたを戦犯として絞首台に送ることもできる」

けれども，そうするか，それとも捜査に協力するのかという脅しをかけて，いろいろと訊いたようなのですが，結局，帝銀事件そのものには松井蔚は関係が無いということがわかります。しかし，防疫給水部，これは南方軍ですけれども，どうやら非常に怪しいことをやっていたんだなという印象は，捜査陣の中で強まります。

今申しましたように，松井蔚自身が南方軍にいた当時に，住民を多数毒殺したという疑いがあって，毒殺経験者を洗っていこうとなります。当時，捜査陣は青酸化合物と青酸ガスの違いが，あまりまだよくわかっていなくて，いきなり青酸ガスを研究していた化学戦部隊の方に注目します。その毒ガス戦の教育をやっていた習志野学校，ここに最初に目が向けられる。というのは，毒物を飲ませるという訓練もやっていたようで，その時に，多くの人に毒物を飲ませるためには，自分も飲んでみせるという〔ことが書かれた〕「体験要領」といわれるマニュアルを，習志野学校が持っていたということがわかりまして，この習志野学校で学んだ人，あるいはそこで教えていた人がたくさんいる六研，あるいは関東軍の 516 部隊，こういうところが非常にクローズアップされる。そしてもう一つ, 陸軍糧秣廠。これは軍隊で使う食糧とか,「秣」は「まぐさ」，馬糧です，馬のエサ。こういうところが，なぜ関係するのかというと，青酸ガスの解毒剤の製造をこの糧秣廠がやっていたということで，解毒剤の研究をやっていたということは，その犯人も実際にその毒物を飲んでみせているわけですから，ひょっとして犯人も解毒剤を，あらかじめ飲んでいたのではないかということで，こういうところも疑われたわけです。こちらは怪しい人物は出てくるのですが，だんだん捜査の重点は，化学戦部隊から生物戦部隊，731 等に移りました。実際に捕虜とかスパイを毒殺したという証言がいくつも出てきて，731, 1644, それから 100 部隊, それから軍医学校。こういうところが怪しいぞとなるのですが，特に，731 が非常に疑われたのは，毒殺経験者がいるというのも確かにありますが，この 731 部隊の中心人物であった石井四郎が，実は一種，捜査を操縦した部分があります。捜査陣は，９回にわたって石井四郎と面談しています。これについてはいくつか資料をあげました。

まずは**【資料３－１】**〔本稿 p.142〕ですが，これは石井四郎からの最初の聞き取りです。731 部隊の前身部隊，いわゆる東郷部隊といわれた時代のことも，ある程度聞きます。それで人名を出させるというのが一つの目的ですから，いろいろな人の名前が出てきますが，この太字で示したように，この第１回の聴取の時には,「軍隊関係は聞かないで呉れ」という石井の言です。もう軍隊当時のことは聞かないでくれ，と，あまり協力的な態度を示しません。ところが，この後石井の態度はガラッと変わります。**【資料３－２】**〔本稿 p.142〕が第２回，４月 27 日の聴取です。坂和・仲西というこのコンビが，ずっと石井四郎を聴取するのですが,「石井四郎に面会」と。「青酸加里は分量により時間的に生命を保持させられるか否かできる　致死量多くすればすぐ倒れる」。これは，刑事は何を聞きたいかというと，青酸カリというのは分量によって，すぐ死ぬか，時間をおいて死なせるか，そういうことができるのかということ

を聞いています。つまり，帝銀事件では少し時間をおいて効いてきているということで。それで，これはどうにでもできると石井は答えています。「五分―八分　一時間三時間翌日／どうでもできる（之は絶対的のものである）　研究したものでないと判らぬ」といっています。ですから時間をコントロールすることができるといっているのですが，その後こういうことをいいます。「俺の部下にいるような気がする　君等が行っても／言わぬだろう」。石井自体がこういうことをいっているわけですから，この言葉が捜査陣を引き付けます。そして，「一々俺らの処へ聞きに来る／十五年二十年俺の力で軍の機密は厳格で／あるので仲々本当の事は言はぬだろう」。つまり，自分の権威があるから，他の人は本当のことを言いっこないと。だから俺に聞きに来いと。「参謀本部も手を廻して聞いてやる」と言って。ここで，刑事は石井が，「九研は石井さんの反動部隊である／（俺が行かなかったので）」，つまり石井四郎が九研の方に関わらなかったので，「（下ッパを集めて何かコソコソやっていたらしい）」と，なにか九研というのが下っ端の集まりなんだ，みたいなことをいって，「何時でも俺の処へ来い」と。第１回聴取ではもう話したくないみたいなことを言っていましたけれども，今度は打って変わって，何でも俺のところへ聞きに来いと言う姿勢に変わります。これが，捜査陣を 731 関係に非常に引き付ける大きな要因になります。実はこれは甲斐さんの戦後の回想が残っていて，この４月 27 日の，この面談に，捜査本部にわざわざ石井四郎がやって来て話したと言っています。ですからこの辺りになると，むしろ石井四郎は協力者を装って，積極的に捜査本部に接近をしてきているわけです。

ところが，第３回の聴取になるとまた少し話が変わります〔**【資料３－３】**，本稿 p.143〕。白神・向田というコンビが，石井四郎のところに行き，こう言っています。「関係等更に連絡を兼ね／一面泣き落しの意味で石井氏を訪問した所」つまり，情報がなくて，なんとか石井に縋（すが）り付こうと石井を訪問したら，なにか訳のわからないことで石井が怒っていた。〔米進駐軍の〕トンプソンが石井を調べていて，天皇も戦犯だということで，それに石井が立腹していると。だが，結局最後のところ，「種々苦情／を申され何等得る点が無かった」。要は，今度，警察の方から近寄っていくと，また何か訳のわからないことで拗ねて，突っ放しているということです。しかし，こういうふうに何でも俺のところに聞きに来いと言っておいて，突き放す，というやり方によって，逆に捜査陣はどんどん石井に引き付けられていってしまいます。

その次に会った時には〔**【資料３－４】**，本稿 p.143〕，この刑事たちは「ピース四箇を届けた」と書いてありますから，ご機嫌を取ろうということです。これはやはり，捜査の質問の重点は青酸カリによってゆっくり殺すことができるのかどうかというところに，刑事たちは注目しています。それで，「写真，フィルムが残っているんじゃないですか？」という話をしたら，「実験した写真は全然ない」と石井は言って，これは大ウソなのですが，平気でこういうことをはぐらかしています。そして，少しだけ情報を出します。「部下の中で／兵上がり憲兵中尉／チョ

コレートに青酸カリを入れて人を／殺した」ということを少し言う。ということで，また捜査陣は，ぐっと石井に引き寄せられます。

その後〔**【資料３－５】**，本稿 pp.143-144〕，石井も人の名前をある程度出したりはするのですが，この聴取では，「捕虜運搬憲兵がやった／憲兵指揮官　乙津　某　44.5〔歳〕」と。これが怪しいんじゃないかと言います。それで具体的に，モンタージュ写真を見せると，乙津某が一番よく似ていると言う。あるいは「青龍／赤龍を殺したのは」，これは反満抗日ゲリラのようなのですが，乙津が彼らを，チョコレートの中に青酸カリを入れて殺したというようなことを話します。ですから捜査陣も，この乙津という人が，非常に人相としても似ているし，平気で毒殺をやってのけるということで，非常に注目するのですが，結局この人物も行方はわかりません。これは最後までわからない。そういうふうに，結局，石井は名前を少し出すのですが，みんなわからずじまいのところに行ってしまいます。

そして，生物戦のところから，さらに，毒殺の実施部隊である秘密戦関係・謀略戦部隊と，それを支えていた九研，つまり登戸研究所というところに，注目が集まります。結局，特捜本部は旧日本陸軍の化学戦・生物戦・秘密戦関係の諸機関・諸部隊の，ほぼ全貌を把握したことになります。ですから 731 だけに注目したわけではなく，非常に幅広く，捜査陣は日本陸軍の秘密戦の諸部隊について注目しました。例えば 731 部隊について，具体的な研究というのがされるのは 1980 年代になってからですから，それからすると，もう本当に終戦直後の段階で，捜査陣は非常に重要な情報を集めることができたということです。

７月頃になりますと，個人謀略を実施する部隊に接近をしています。また，６月末の時点で刑事部長も特殊任務の関係者に的を絞れというような通達も出しています。**第６図**は６月の時点で出された，「帝銀毒殺犯人捜査必携」というチラシなのですが，この中にも，**第７図**，「職歴」欄を拡大すると「医療防疫（含消毒）其の他薬品取扱に経験あり（軍の関係は特に）」と

帝銀毒殺犯人捜査必携

◎犯人の所持品

◎犯人の体作

◎犯人の顔

昭和二十三年六月　警視廳帝銀毒殺事件捜査本部

第６図　「帝銀毒殺犯人捜査必携」（当館所蔵）

醫療防疫（含消毒）其の他藥品取扱に經驗あり（軍の關係は特に）且つ之等の器具（下記參照）を引續き持つて居た者である。

第７図
「帝銀毒殺犯人捜査必携」部分

書いてあります。「且つ之等の器具（下記参照）を引続き持って居た者である」ということで，やはりそういう関係者に軍関係は特に注目しなければならないのだ，ということが，この６月末の段階で，語られています。ですから実際，捜査は幅広く行われていて，だんだん化学戦から生物戦に移り，さらに謀略部隊にだんだん絞られていくという過程であったわけです。

４　使用毒物の特定捜査

使用毒物の特定捜査は進みまして，青酸カリ，あるいは青酸ナトリウム，これらは一般人でも入手可能ですが，もう一つ，青酸ニトリールという特殊な毒物，アセトンシアンヒドリンというのですが，これは一般人では入手不可能なもので，戦時中に登戸研究所で暗殺用毒物として開発されたものです。４月 26 日の『甲斐捜査手記』に，元九研，登戸研究所の所員であった伴繁雄氏の証言がありまして，使われた毒物は「青酸加里とは思えない」という証言を得ています〔**【資料４】**，本稿 p.144〕。小林・小川というコンビが長野県へ出張して，そこから帰ってきて 26 日に捜査本部で報告をしているのですが，「元陸軍技術中佐」，これは実際には少佐です，「伴繁雄　43〔歳〕」。人物が出てくると，その歳を必ず記入しています。何といっても，50 歳前後というのが怪しいわけですから。それで，その九研で成功した毒物として青酸ニトリールというのがあるというのです。「青酸ニトリールは／液体で透明／味は喉をやく／ような刺激はあるが臭味／はない」と。「一回一人分２ccのアンプルに入っている」と言っています。実は，この証言は非常に重要なのですが，難しいところがありまして，暗殺用毒物ですから，味は喉をやくような刺激があるというのは本当なのかどうかということです。常石敬一さん[(1)]は，この『甲斐捜査手記』を分析する中で，これは青酸ニトリールの説明ではなくて，青酸カリ，あるいは青酸ナトリウム，要するに青酸ニトリール以外の一般的な青酸化合物の特徴を語ったのを，書き間違えたのではないかと仰っています[(2)]。青酸ニトリールは暗殺用毒物だから，刺激があるようなものだったら相手にこっそり飲ますことができないだろう，という考え方です。

実は，伴さんはここで，「伴は昭和十六年五月二十二日から人体実験をした」ということで，南京の 1644 部隊に行って「実験を始めた」と。「始めは厭であったが馴れると一つの趣味になった」とのことで，ここでどうやって毒を飲ますかというと，「俺が先に呑んで見せるから心配しなく／ともよい」といって飲んだ，飲ませたということをいいます。これは中国の捕虜を使って，ということが書かれています。あと，注射をしてだとか，いろいろな種類の毒物を試して，人体実験をしたと言っています。ですから，どういう毒物を飲んだ時にどのような状態になるかというのは，もう実地で実験してよくわかっていると。この結果からすると，「状況は／青酸加里とは思へない」と言っています。これは帝銀事件の状況ですが，「青酸加里はサジ加減によって時間的に／経過さして殺す事はできぬ」と。「私にもしさせれば／青酸ニトリールで

やる」と。つまりこれはどういうことかというと，青酸カリのように非常に早く効いてくる毒物というのは，大人数を殺すのには向いていないということなのです。つまりわずかでも先に飲んでしまう人がいるとその人が倒れてしまう。すると，他の人が飲まない。ですから，大人数をいっぺんに毒殺する時には，少しあとから効いてくる青酸ニトリールがいいんだ，と言っています。そして，最後,「青酸加里と後で聞いたが」，これは報道で，ということですが,「私の実験の結果からは」青酸カリとは思えないと言っています。実は，先程青酸ニトリールの特徴を示したときに，常石敬一さんは，青酸ニトリールは暗殺用毒物だから，そのような刺激があるということは無いだろうと言っているのですが，伴さんは結論的に，青酸カリとは思えないとはっきり言っているんです。ですからここで，石井四郎を中心とした青酸カリを主張する人たちと，伴さんのように，人体実験の結果からも青酸カリとは思えない，むしろ青酸ニトリールが有力だという，こういう，あえて大きく分ければ，二つにわかれてくるということになります。ですから，捜査陣が青酸カリでゆっくり殺すことはできるのかということにこだわって，先程石井に何度も何度も聞いているのはそこなのです。

５　平沢貞通の逮捕（捜査の急展開）

ところが，捜査は８月に急転回します。名刺班の捜査，これはほぼ独自に行っていた捜査なのですが，松井蔚が誰に名刺を渡したのかということを突き止めて，松井蔚自身が何月何日，どこで誰に名刺を渡したということを記録していたのです。要するに，松井名刺を一旦もらったけれども，その１枚が未遂事件の時に使われているわけだから，その名刺を渡されたのに持っていない人が怪しいという流れを作ったわけです。松井名刺，作られた 100 枚のうち，松井が所持していたのが８枚で，残り 92 枚。そのうち，62 枚を捜査班は回収します。回収したということは，その本人が持っていたということですから，この人たちはシロだということです。さらに紛失したが事件と無関係と見られたものが 22 枚で，行方確認ができなかったものが８枚あって，うち１枚が平沢さんに渡っていたということを確認します。平沢さんは，この名刺を持っていなかったのです。これはバッグに入れたまま窃盗に遭って無くなったということなのです。しかし，状況証拠を積み重ねていって，名刺班は平沢貞通さんを８月 21 日逮捕します。逮捕・起訴の理由は「松井名刺」の不所持です。明らかに「松井名刺」を貰っている，これは平沢さん自身も認めているのですが，しかしそれを盗まれたと証言しています。そして，事件当日のアリバイが不明確であるということ。それから，過去に銀行に関係した軽微な詐欺事件（日本堂事件という，拾った小切手が元になった事件）を起こしていると。それから，事件直後に被害額相当額のお金を預金している，というようなこと，状況からすると怪しいぞ，というものを積み重ねて，逮捕に至ったわけです。しかし，平沢真犯人説というのはどうしても疑問が残りました。まず平沢さんが北海道で逮捕されて東京にやって来て，生き残った人，ある

いは未遂事件で遭遇した人の中で面通しが行われるのですが，この人物だと断定した人がいないのです。結局，平沢氏は８月に逮捕されて，一か月間，検事によって非常に厳しい取り調べを受けて，そのうちに，自白を始めてしまいます。この，本当にこの自白に信憑性があるのかどうかという自白の問題については，講演の後でご紹介しますが，浜田寿美男さんの『もう一つの「帝銀事件」』という，心理学の手法を使って自白とか，あるいは目撃証言を分析した研究があるのですが，それによってこの自白というのは，無理矢理作られたものだということがほぼ明らかになっています。そもそも，平沢さんには毒物の知識が無い。何を飲ませたんだというふうに最初に取り調べを受けた時に，塩酸を飲ませましたということを言っています。それで，塩酸ではなくて青酸なんだろ，とだんだん誘導されていくのですが。しかも，捜査によっても，毒物の入手経路がわかりませんでした。そういう点では，一番肝心なことがはっきりしないままなのです。

６　捜査方針の大きな転換：捜査・裁判過程における毒物鑑定

この捜査方針の転換といいましょうか，青酸ニトリールも怪しいということだったのですが，だんだん青酸カリ説にまとまっていってしまいます。裁判過程ではそればかりになります。最初に捜査陣が石井四郎に，青酸カリでゆっくり殺すことができるのかと訊いたのは４月 27 日です。実はほぼ同じころ，厳密には少し前ですが，伴繁雄さんは青酸カリとは思えないと言っています。ところが，平沢さんが逮捕された後，同じ伴繁雄さんが，９月６日に捜査会議に出席して，「帝銀毒殺事件の技術的の検討及び所見書」という，同じく登戸研究所にいた土方博さんと連名での所見では，「使用毒物は純度の比較的悪い工業用青酸加里で入手の比較的容易な一般市販の工業用青酸加里であると断定」すると言っているのです。つまり，捜査初期における青酸ニトリール説から，青酸カリ説に大きく転換したということです。この後，裁判過程でも，伴さんは同様に証言しています。

毒物鑑定と犯人との関係性でいうと，青酸ニトリールは一般人では入手不可能ですから，多分に旧軍関係者は怪しいとなりますが，青酸カリは一般人でも入手可能ということで，犯行は平沢氏であっても可能だという話になるのですが，それでも入手経路はわかりませんでした。しかし，使用毒物が青酸カリと断定されたことが，自白とあわせて平沢犯行説，あるいは平沢有罪・死刑を導いたという点では，非常に重要なところです。

Ⅲ　帝銀事件捜査と占領政策の転換

１　占領政策の転換とＧ－２の台頭

この帝銀事件が起きた1948年というのは，大きな転換点なんです。占領政策の転換，これは翌年の49年になると，下山事件，三鷹事件とか松川事件というようなものがあって，明らかに占領政策が転換したことは明確なのですが，48年の時点でも，中国で国共内戦が激化して，翌年中華人民共和国ができる。それから朝鮮半島に南北ふたつの政権が成立したのもこの48年です。GHQの中でも力関係が大きく変化して，権力の中心が，それまでの初期占領政策，非軍事化と民主化というところに中心があったわけですが，民政局からだんだん参謀二部，Ｇ－２へと，権力の中心が移ってくる。そのＧ－２の責任者はウィロビーという人です。ウィロビーは結局，GHQの公安局のさらに上に存在していました。また，ウィロビーは，旧日本軍人を盛んに利用していて，CIS，民間諜報局の下に，有末機関という，参謀本部の元第二部長（有末精三）ということは登戸研究所を指揮していた人物を使って，米軍のための情報収集をさせていたのです。有末精三は対連合軍陸軍連絡委員長ということで，マッカーサーを厚木に迎えに行った人物です。それから，帝銀事件当時，駐留米軍顧問という肩書も持っています。この人は，陸軍の表も裏も一番わかっている人物で，その人が真っ先に米軍の方にくっついたわけです。有末のさじ加減で，旧軍人は戦犯になるかならないかが決まってくるという，非常に旧軍人にとっては恐ろしい存在になります。有末たちににらまれると，どうなるかわからないということです。そしてまた，GHQに非常に協力した人物として，元参謀本部の作戦課長，服部卓四郎という人がいます。当時，軍人は基本的に公職追放されていたのですが，第一復員局，これは陸軍から変わったもので厚生省に吸収されたのですが，その史実調査部長という，堂々たる公職に服部卓四郎は就いていました。のちに引揚援護局資料整理部長にも就きました。調査するとか整理するとは何かというと，旧日本軍の関係資料，特に，対ソ連情報を米軍に提供するという役割を担っていたのです。

２　731部隊関係者の免責

731部隊関係者への免責というのは，既に47年段階でかなり明確になっているのですが，その少し前を見ていくと，日本のいろいろな軍事技術について，多くのレポートが書かれています。最初に作られたのはサンダースレポートというもので，これは731関係だと内藤良一といった人達が尋問を受けています。人体実験については，内藤良一はサンダースをだまして，そんなことはやっていないと証言しているのですが，これは大嘘だったわけです。そして，46年１月から５月に先程のトンプソン。石井が憤慨して見せたという。これ〔レジュメ，本稿p.139

Ⅲ-２-〔１〕米軍機関による 731 部隊関係者への尋問〕をよく見ていただくとわかるのですが，捜査員の前で石井が憤慨していたのは 48 年の話ですよね。実際にトンプソンが石井を尋問したのは 46 年の話で，２年も前の話を捜査員の前で持ち出して怒って見せたのです。そして，丁度この頃ソ連が，46 年の末に石井四郎らの身柄引き渡しを要求し，独自にハバロフスク裁判というのをやろうとしました。ここでアメリカの態度は大きく変わります。つまり，ソ連に引き渡すよりも，米軍側にこれらの人々を囲い込んだ方がいいんじゃないか，と。あと，1947 年にフェル・レポートとヒル・レポートというのが出て，結局戦犯免責を条件に人体実験のデータを 731 部隊関係者に提供させることが決まっていきました。47 年になると明らかに本国関係が，そういうことを承認する。免責と秘密扱い，それから，戦犯訴追よりも生物戦データの獲得の方が価値があると。要するに米軍が獲得しないとソ連側に持っていかれるということなんです。

３　『甲斐捜査手記』に散見される GHQ と旧軍人の関係

このことが，48 年に起こった帝銀事件の捜査過程ではっきりと出てきます。GHQ が，あるいは GHQ と連動した旧日本の軍人が，731 関係者に口止めをしたりするということが起きてきます。**【資料５】**〔本稿 pp.144-145〕は 731 部隊にいた早川清という人の証言です。７月の段階なんですが,「最近に至って GHQ の吉橋と云ふ二世を通じて私達の身柄を／保障して呉れる」と米軍が言っていると。そして,「若し米ソ戦争が開始された／際には」身柄はアメリカ本国へ移すことになっているということなんです。だから，完全に守ってくれるということと，それから「生体解剖の件も戦犯にならぬ事が最近判ったので〔波下線は資料館による〕」ちょっとお話した次第です，ということなんです。それで,「GHQ では本件に関して」,「秘密を厳守するがお前達」，つまり 731 部隊関係者の方から「墓穴を掘る様な事の／無様」と。なぜかというと，関係者がその日本軍の秘密についてぺらぺらしゃべると,「警察官の中にも共産党あり　警察官にも口外せざるとの事である　何万かの部下／を保護する為にも」と，つまり，旧軍関係者を守るためにも日本軍の秘密については警察官に対しても口外しないように念押しされているということです。これは GHQ からいわれているという部分もありますが，その GHQ に連動して動いている有末たち旧日本軍人の力も，ここで働いているのです。

【資料６】〔本稿 p.145〕では捜査員も，服部卓四郎や有末精三に話を聞いているのですが，たまたま服部卓四郎に話を聞いていた時に，有末精三がやってくるんです。「話最中に／有末中将／が来た」ということで，これは GHQ と関係があるということで話をして,「有末は軍の秘密を聞くのは GHQ の関係で無理であろう」。要するに, 旧軍関係の秘密を追っていくのは, 捜査では無理だと。「之を聞かずに似寄り写真〔モンタージュ写真〕」から「行ったが／よかろう」と言って，要するに旧軍関係の秘密をほじくるなということをいうわけです。これはやは

り，GHQ と連動して有末たちが動いているということと，何よりも旧軍人たちにとって怖いのは，この有末たちににらまれると保護されるどころか，下手すると戦犯になりかねないということです。ですから，そういう点で，口止め，圧力が強く働く。そして，これが帝銀事件の捜査の過程で，どんどん強まっていくということになります。

４　米軍による登戸研究所関係者への調査・追及・免責

実際，この免責という考え方は，731 部隊だけではなく，その他の部隊にも当然波及します。現実に，この帝銀事件の捜査対象になったような機関からはほとんど戦犯として訴追された人は出ていないわけでして，登戸研究所もその中に含まれます。早い時期から，アメリカ側の機関によって，登戸研究所関係者の召喚・尋問は行われているのですが。一般的に，化学戦とか細菌戦，それから捕虜を使った人体実験というのは通常の戦争犯罪，いわゆる BC 級戦犯裁判の審議対象になる訳ですけれども，帝銀事件の捜査中の 48 年 4 月から 9 月初めまでの間に，GHQ の介入あるいは登戸研究所関係者へ米軍が接近してくるということが起こったようです。先程 731 関係者が最近，免責がわかったので，ということを言っていました。それと同じように，**【資料７】**〔本稿 p.145〕は伴さんが残した手記ですけれども，登戸研究所と GPSO の接触の第一歩，GPSO というのは後でお話しますが，米軍の中に作られた偽パスポート等を作る秘密戦機関です。これは要するに登戸研究所でやっていたことを，米軍も同じようなことをやると。それをやっているのは，登戸研究所の第三科，偽札とか偽パスポートを作っていた人達，それから伴さんも含めて，登戸研究所にいた人達がこの GPSO という組織に集められて秘密戦に協力するということをやっていたのですが，その接触の第一歩は昭和 23（1948）年春と書いてあります。偽札や偽パスポートの責任者であった「山本憲蔵が，対支経済謀略としての偽札工作の責任者として，GHQ･G － 2 に召喚され，長期間の取り調べを受けたことに始まる」ということで，ちょうど帝銀事件の捜査が行われている真っ最中に，この九研，登戸研究所関係者と，GHQ・G － 2 の関係者が接触をはじめたと。「伴も」，これは伴さん，自分のことをこのように表現してます。「これと前後して〔昭和〕23 年 4 月に CIC（対敵諜報部）の呼び出しに応じ，郵船ビルを占拠していた GHQ・G － 2 に出頭し，秘密戦の全貌について詳細な取り調べを受けた」。「G － 2 は CIS と協力して登戸研究所の全貌を把握し，山本のいうところのいわゆる“ギブ・アンド・テイク”の相互関係による交渉の結果，米軍に偽造〔パスポートの偽造・証明書の偽造〕に関する過去の経緯・技術と成果を体験的に説明した」ということで，まさにここでいう昭和 23 年春というのは，帝銀事件の捜査が非常に重要なところ，毒物に関して何なんだということを，追及していた頃です。ですから，おそらく順番から考えると，青酸ニトリールの話は非常に軍の秘密に関することですから，そのことを一旦伴さんは捜査陣に話したけれども，その後 GHQ からの「ギブ・アンド・テイク」，つまり情報を提供する代わ

りに免責するという，こういう呼びかけに応じて話さなくなった。話さなくなって，証言を変える，青酸ニトリール説から青酸カリ説に転換するということになったのではないかと。ここは推定ですけれども，あまりにも，時期がぴったり合いすぎるということなのです。それで，

5　登戸研究所関係者の米軍への協力（秘密戦技術の戦後への継承）

結局 731 や登戸関係者が免責されたということは明らかなのですが，先程言いましたように，登戸研究所関係者は，もっと直接的に米軍に協力することを求められます。横須賀基地の中に，GPSO という組織がつくられまして，そこでいろいろなものの偽造，これらはまさに，第二次世界大戦中の登戸研究所がやっていたことです。ですから，特にソ連の偽パスポートとか，そういうものは技術の蓄積があるわけです。それをそのまま活用して，米軍の秘密戦に協力する，協力するといっても，本当にその一員となってやっていました。実際，朝鮮戦争の頃から，第三科関係者を中心に，横須賀基地に GPSO という機関があって，活動が行われました。**第８図**，横須賀の，この○で囲ったところに GPSO というのがあって，上の方に航空母艦が泊まっているのがわかります。まさに横須賀軍港です。**第９図**が，GPSO があった建物で，これは元々日本海軍が作った建物なのですが，それを戦後は米軍が使い，朝鮮戦争の頃にはここに GPSO が置かれていたということです。

第８図

第９図　GPSO のあった建物（現存，資料館撮影）

補足説明しますと，1952 年の段階で，元々この GPSO の責任者であった山本憲蔵は，登戸研究所の第三科の科長だった人ですが，新拠点設置準備のためにサンフランシスコへ移ります。後任のチーフに先程の伴繁雄さんが推薦されます。それで 52 年 4 月より伴さんは横須賀に勤務をして，契約期間 10 年だったといいます。30 人ほどの，第二科・第三科，第三科が多いよ

うですけれども，登戸研究所にいた人達が中心となって，この組織が運営されていました。**第 10 図**のような記念写真も残っておりまして，GPSO という旗を持った人の隣の，真ん中のメガネをかけた人物が山本憲蔵さんですけれども，こういう，まさに米軍の一員として働いていたということがわかります。

第 10 図

おわりに

日本陸軍の秘密戦機関・部隊と，帝銀事件との密接な関わりということがここでわかるわけですけれども，731 部隊や登戸研究所関係者への免責，それから事件捜査への介入が，極めて時期的に符合します。その背景にあったのが占領政策の大きな曲がり角ということです。つまり，この 48 年というのは，まだ戦犯裁判をやっています。一方で BC 級戦犯裁判や A 級戦犯裁判をやっている，戦犯追及ということが行われている中，他方では戦犯免責という全くのダブルスタンダードがここで設定されているということです。ですからもう，米軍の関心としては戦争責任とか戦争犯罪の追求ということよりも，ソ連に対していかに優位に立つかということが優先されているということなのです。GHQ と，それからそれと一体となった旧軍関係者の捜査介入，まさに戦前的な要因が，戦後につながっているということです。この占領政策の大きな転換によって，戦前的なものが戦後に生きながらえていく。むしろ，米軍の保護の下に，それが段々巨大化していくという，そういう過程であります。

いろいろな登戸研究所関係の本が，今出ておりまして，この『甲斐捜査手記』の分析というのは，2018 年度の登戸研究所資料館の企画展で行いました。その時のデータも元にしまして，私も今回の報告をいたしました。

〔注〕

（１）神奈川大学名誉教授。専門は科学史。単著に『謀略のクロスロード　帝銀事件の捜査と 731 部隊』（日本評論社，2002 年）ほか。

（２）常石敬一『謀略のクロスロード　帝銀事件の捜査と 731 部隊』（日本評論社，2002 年）p.90。

2021 年度帝銀事件関連企画・講演会（2021 年 8 月 7 日）〔1〕

帝銀事件と日本の秘密戦
―捜査過程で判明した日本軍の実態―

明治大学平和教育登戸研究所資料館長　山田　朗

はじめに（本報告の目的）

〔1〕帝銀事件捜査陣が明らかにした日本陸軍の秘密戦部隊とは？
　→　捜査の焦点となった７３１部隊と登戸研究所（九研）
〔2〕捜査の流れを左右した石井四郎と登戸研究所関係者の証言とは？
〔3〕帝銀事件捜査の背後にあったＧＨＱの占領政策の転換、捜査への介入とは？
　→ 帝銀事件がなぜ「戦前と戦後をつなぐ」事件なのか？

Ⅰ　帝銀事件とはどのような事件だったのか？

１　帝銀事件の発生

〔1〕1948（昭和 23）年 1 月 26 日午後 3 時すぎ
　帝国銀行椎名町支店
　左腕に白腕章をつけた中年男性が来訪
　「東京都衛生課並厚生省厚生部医員　医学博士〇〇」の名刺を差し出す
　「近くで集団赤痢が発生した。進駐軍が消毒する前に予防薬を飲んでもらいたい」
　行員と用務員一家 16 名に「予防薬」を飲ませ、うち 12 名が死亡した（生存者 4 名）。
　犯人は、現金 16 万円と小切手を奪って逃走（名刺は回収したらしい）。
〔2〕初動対応の混乱
　被害者を救出しようと警察や不特定多数の者が現場を踏み荒らす（現場保存不徹底）。
　当初は警察官も集団食中毒と誤断、不適切な方法で残存毒物を回収（物証消滅）。
　小切手盗難の確認は、換金された翌日（犯人逮捕の格好の機会を逸する）。

２　使用された特殊な毒物

〔1〕青酸化合物であることは確か（遺体から検出）。
〔2〕特異な飲ませ方（薬瓶から茶碗に駒込ピペットで少量ずつ入れる）
　第 1 薬と第 2 薬に分けて飲ませる。
　第 1 薬は、歯の琺瑯（エナメル）質を傷めるから舌を出して飲むように指示。
　犯人も第 1 薬を飲んでみせた。
　第 1 薬を飲むと強いウイスキーを飲んだような胸が焼けるような感覚になった。
　その後につがれた第 2 薬を飲む。その直後、次々と倒れ、意識を失う。
〔3〕使用された毒物の特徴
　第 1 薬のみで毒性完成か、第 2 薬までふくめて毒性完成かで、性格は全く異なる。
　→　第 1 薬のみならば、犯人が飲んでみせたのはトリックか解毒剤使用か
　嚥下してから効果が現れるまで 2～5 分ほどかかっている　→　**やや遅効性**

３　初期捜査の重点

〔1〕犯人像（事件直後―1 月 26 日の捜査会議での刑事たちの意見）
　物取り（計画的強盗殺人）
　進駐軍出入りの者（米軍のジープが近くまで来ていた。実在の米軍将校の名を使用
　衛生・防疫関係者（インテリ風、薬品・医学の知識あり）
　共犯者（黒幕）が必ずいるはず
　詐欺的手腕のある者（しかも銀行の内部事情に詳しい）、前科がある

→　類似事件があるに違いない

人物像：**年齢 44-45 歳（のち 50 歳前後）**、身長 5 尺 2・3 寸（158-160cm）くらい

好男子・落ち着いた人格者、**短髪白毛交り（胡麻塩頭）**

〔2〕**２つの未遂事件**の存在（ともに金銭被害・犠牲者なし）

安田銀行荏原支店（1947 年 10 月 14 日）遺留品**「松井蔚」名刺**

松井蔚は実在の人物（「厚生技官　医学博士　厚生省予防局」記入の名刺）

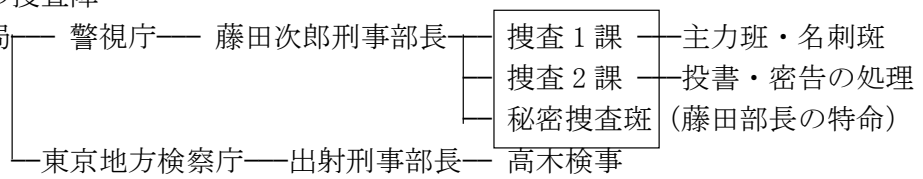
三菱銀行中井支店（1948 年 1 月 19 日）遺留品「山口二郎」名刺

山口二郎は架空の人物（「厚生省技官　医学博士　兼東京都防疫課」記入の名刺）

Ⅱ　捜査の焦点はどこにあったのか

１　『甲斐捜査手記』の存在

〔1〕帝銀事件の捜査陣



〔2〕秘密捜査班（成智班）の結成　**→【資料１】**

旧軍の秘密戦部隊の存在と米軍による庇護を知っていた刑事部長

〔3〕警視庁捜査 1 課係長・甲斐文助

捜査本部で捜査情報を集約、刑事の役割分担を指示

→　1 月 26 日から 10 月 8 日までの 257 日間を全 12 巻の捜査手記に残す

目白署の捜査本部での報告の全てを記録（秘密捜査班・名刺捜査班を除く）

第 1 巻（1 月 26 日から）～第 8 巻（8 月 25 日まで）＋別巻

→　分量は 2289 頁（1 頁あたり@275 字とすると 400 字 ×1574 枚分）

第 9～11 巻（平沢裏付け捜査分）598 頁を含めると**合計 2887 頁（400 字 ×1984 枚分）**

２　『甲斐捜査手記』（第 1 巻～第 8 巻＋別巻）の数量的分析

〔1〕捜査本部における報告

本部から捜査員への情報提供、捜査員の捜査結果報告の合計：**1798 本**

捜査実動 20 日を 1 期として区分

〔2〕**報告の内容・捜査対象の変遷**

1798 本（2060 項目）の報告内容・捜査対象を期別に分類　**→【表１】**

全期間の上位 5 項目

①軍関係者 716/2060（35%）、②似寄・通報・投書 348（17%）、③地取り 240（12%）、④医師・薬剤師 163（8%）、⑤衛生防疫関係者 135（7%）

※帝銀事件の捜査は、軍関係を重点とした捜査であったことが数字の面でも明らかに

〔3〕**「軍関係者」のどこに捜査の焦点があてられたのか**　**→【表２】**

全期間の「軍関係者」（716 項目・755 細項）上位 5 細項（機関）

① 731 部隊 173(23%)、**② 9 研 95(13%)**、**③ 6 研 94(12%)**、上位 3 機関 362(48%)

④ 1644 部隊 63（8%）、**⑤軍医学校 50（8%）**、上位 5 機関 475（63%）

以下、⑥その他 38、⑦ 516 部隊 32、⑧習志野学校 29、⑨中野学校 25、⑩特務機関 22

３　捜査の焦点の推移

松井蔚 → 戦時中、南方軍防疫給水部（9420 部隊）に在籍

→ 原住民多数を毒殺した疑い　**→【資料２】**

毒殺経験者が焦点：化学戦（毒ガス・毒物）関係部隊が浮上
→ 習志野学校 →6 研・516（関東軍化学部）→ 陸軍糧秣廠（解毒剤製造）
生物戦関係部隊が浮上：731 などでの捕虜・スパイの毒殺が明らかに
→ 731（関東軍防疫給水部）・1644（中支那防疫給水部）・100（関東軍軍馬防疫廠）
軍医学校
→ 石井四郎による捜査の操縦＝攪乱（9 回にわたり面談）　**→【資料３】**
秘密戦関係部隊（毒殺の実施部隊）も浮上：個人謀略活動が明らかに
→9 研・中野学校・特務機関・86 部隊（新京特設憲兵隊）・中野実験隊・特設憲兵隊
※特捜本部は旧日本陸軍の化学・生物・秘密戦関係諸機関・部隊の全容をほぼ把握
7 月頃には陸軍の個人謀略を実施する機関・部隊に接近していた。
6/25:刑事部長からの指示で特殊任務関係者に的をしぼる

４　使用毒物の特定捜査
青酸カリ・青酸ナトリウム　→　一般人でも入手可能
青酸ニトリール（アセトン・シアン・ヒドリン）　→　一般人では入手不可能
4 月 26 日報告：元 9 研伴繁雄証言「青酸加里とは思えない」　**→【資料４】**

５　平沢貞通の逮捕（捜査の急転回）
〔1〕名刺斑の捜査（居木井班長）
「松井蔚名刺」100 枚のうち松井所持 8 枚、残る 92 枚のうち 62 枚を回収
→　行方確認ができないもの 8 枚（うち 1 枚が平沢貞通に渡っていたことを確認）
〔2〕名刺斑が北海道で平沢を逮捕（8 月 21 日）
〔3〕逮捕・起訴理由
「松井蔚名刺」の不所持、事件当日のアリバイ不明確
過去に銀行に関係した詐欺事件を起こしている（日本堂事件）
事件直後に被害額相当の金額を預金している
〔4〕平沢真犯人説への疑問
被害者の最初の平沢面通しで「この人物」と断定した者がいない
警視庁での過酷な尋問、検事による自白調書の捏造疑惑
「自白」（9 月 23 日～）前後のきわめて異常な平沢の言動
平沢に毒物の知識なく、捜査によっても毒物の入手経路は判明せず

６　捜査方針の大きな転換：捜査・裁判過程における毒物鑑定
〔1〕4 月 27 日 石井四郎による毒物所見（青酸カリ説）
〔2〕9 月 6 日　伴繁雄、捜査会議に出席
「帝銀毒殺事件の技術的の検討及び所見書」（土方博との連名）では
「使用毒物は純度の比較的悪い工業用青酸加里で入手の比較的容易な一般市販の工業用青酸加里であると断定」する。
→　捜査初期における「青酸ニトリール」説から「青酸カリ」説に転換
〔3〕1949 年 12 月 19 日　伴繁雄の東京地裁法廷証言（捜査会議と同様の証言）
〔4〕毒物鑑定と犯人像との関係性
青酸ニトリール　→　一般人では入手不可能　→　犯行は旧軍関係者
青酸加里　→　一般人でも入手可能　→　犯行は平沢でも可能
使用毒物が青酸加里と断定されたことが、自白とあわせて平沢犯行説・平沢有罪・死刑を導いた

Ⅲ　帝銀事件捜査と占領政策の転換

１　占領政策の転換とＧ－２の台頭

〔1〕米ソ冷戦の激化　→　中国国共内戦・朝鮮半島分断（南北 2 政権成立）=1948 年

〔2〕ＧＨＱ内の力関係の変化

権力の中心が民政局（ＧＳ）・経済科学局（ＥＳＳ）から参謀２部（Ｇ－２）へ

Ｇ－２責任者：C.A.ウィロビー准将

参謀２部（Ｇ－２）―民間諜報局（ＣＩＳ）―公安局（ＰＳＤ）―警視庁という指揮関係

〔3〕ウィロビーによる旧日本軍人の利用

民間諜報局（ＣＩＳ）の下に**有末機関（有末精三・元参謀本部第二部長・中将）**

→　対連合国陸軍連絡委員長（1945.8-46.6）、駐留米軍顧問（1946.7-1956.12）

→　有末の匙加減で旧軍人は戦犯になるか、ならないかが決まる

同じく「歴史課」に**服部卓四郎（元参謀本部作戦課長・大佐）**

→　第一復員局史実調査部長（1946.12-）、引揚援護局資料整理部長（1948.5-）

２　731 部隊関係者の免責

〔1〕米軍機関による 731 部隊関係者への尋問

1945.9-11　サンダース：内藤良一・増田知貞らを尋問（人体実験については秘匿）

1946.1-5　**トンプソン：石井四郎らの尋問**

1946 末　ソ連、石井四郎らの身柄引き渡しを要求

1947.4-6　フェル：石井四郎、部隊員の戦犯免責を条件に人体実験データ提供を申し出

1947.10-12　ヒル：米本国に 731 部隊員の保護を求めるレポートを提出

〔2〕アメリカ本国の動き

1947.7.15　米 3 省調整委員会極東小委員会、731 関係者免責と秘密扱いを決定

1947.8.1　同小委員会、**生物戦データの価値は戦犯訴追より重要**と勧告

３『甲斐捜査手記』に散見されるＧＨＱと旧軍人の関係

〔1〕早川清（元軍医大佐）：ＧＨＱによる口止め、身柄の保障（免責）　**→【資料５】**

〔2〕服部・有末：731 部隊はＧＨＱと関係あり、捜査は無理と指摘　**→【資料６】**

４　米軍による登戸研究所関係者への調査・追及・免責

〔1〕米側機関による最初の登戸研究所関係者の召喚・尋問（1946 年 6 月から）

〔2〕研究成果の提供とひきかえに免責

化学戦・細菌戦と捕虜を使った人体実験は「通常の戦争犯罪」 → 戦犯裁判の審理対象

〔3〕帝銀事件捜査中の 1948 年 4 月から 9 月初めまでに間に、GHQ の介入

登戸研究所関係者へ米軍が接近　**→【資料７】**

５　登戸研究所関係者の米軍への協力（秘密戦技術の戦後への継承）

朝鮮戦争（1950 年～）の頃から、登戸研究所関係者が米軍横須賀基地に集められる

→　GPSO（政府印刷補給所 Government Printing Supplies Office）という機関

中国・北朝鮮・ソ連などの紙幣、パスポート、軍隊手帳、身分証明書などを偽造

おわりに

〔1〕日本陸軍の秘密戦機関・部隊と帝銀事件との密接な関わり

〔2〕米軍による 731 部隊・登戸研究所関係者への免責と事件捜査への介入の時期的符合

→ 占領政策の曲がり角（戦犯追及と戦犯免責のダブルスタンダード）

→ 戦争責任・戦争犯罪の追及よりもソ連に対して優位に立つことを優先

→GHQ と旧軍関係者の捜査介入：**戦前と戦後をつなぐ事件**

【参考文献】

〔1〕**木下健蔵『消された秘密戦研究所』**（信濃毎日新聞社、1994 年）、増補改訂版**『日本の謀略機関 陸軍登戸研究所』**（文芸社文庫、2016 年）
〔2〕吉永春子『謎の毒薬：推究帝銀事件』（講談社、1996 年）
〔3〕遠藤誠『帝銀事件の全貌と平沢貞通』（現代書館、2000 年）
〔4〕**伴繁雄『陸軍登戸研究所の真実』**（芙蓉書房出版、2001 年、新装版 2010 年）
〔5〕常石敬一『謀略のクロスロード：帝銀事件捜査と 731 部隊』（日本評論社、2002 年）
〔6〕海野福寿・渡辺賢二ほか編『陸軍登戸研究所―隠蔽された謀略秘密兵器開発―』（青木書店、2003 年）
〔7〕**渡辺賢二『陸軍登戸研究所と謀略戦』**（吉川弘文館、2012 年）
〔8〕明治大学平和教育登戸研究所資料館編『陸軍登戸研究所〈秘密戦〉の世界』（明治大学出版会、2012 年）
〔9〕塚本百合子「『甲斐捜査手記』より明らかになった旧日本陸軍の毒物研究とネットワークおよびＧＨＱと交わされた“ギブ・アンド・テイク”」『明治大学平和教育登戸研究所資料館 館報』第 5 号（同資料館、2019 年 9 月）
〔10〕山田朗『帝銀事件と日本の秘密戦』（新日本出版社、2020 年）

【資料１】警視庁捜査 2 課・成智英雄の回想：秘密捜査班の結成〔1948 年 2 月 1 日〕

二月一日の朝、私〔捜査 2 課主任・成智英雄〕は藤田〔次郎〕刑事部長に呼ばれた。部屋には部長以外、誰もいなかった。部長は声を落として、戦時中、大陸で生きた人間を、細菌や毒物の実験材料にしていた秘密部隊があったという、意外な情報を語った。
「米軍はその事実を知っていて、元隊員を戦犯にしないという条件と交換に、彼らに詳細なデータを書かせている。ソ連軍は、関係者の身柄引渡しを強く要求しているらしい。もし、元隊員が犯人として浮かび上がり、秘密部隊の事実がわかると、恐るべき影響がおこる。従ってこの捜査は極秘を要するので、君はこの一線に捜査を結集し、一切の捜査報告は極秘として、直接、私に知らせて貰いたい」
　こうして、私を班長とする極秘捜査班が設けられた。係員は私以下五名。いずれも優秀な刑事たちで、私は信頼して捜査を開始した。
出典：成智英雄「平沢貞通“無罪”の確証」、遠藤誠『帝銀事件の全貌と平沢貞通』（現代書館、2000 年）365 頁。初出は、『新評』（新評社、1972 年 10 月号）所収。

【表１】捜査期別・捜査報告の内容・捜査対象の変遷

捜査期	第１期	第２期	第３期	第４期	第５期	第６期	第７期	第８期	第９期	合計
	1/26～	2/15～	3/07～	3/31～	4/23～	5/19～	6/11～	7/04～	7/27～	
捜査報告本数	275	248	194	163	214	196	148	164	197	1798
報告内訳（報告内容・捜査対象の項目）										
名刺関係	**35**	34	2	0	0	3	5	2	0	**81**
犯人持物	15	17	6	1	0	2	0	0	0	**41**
衛生防疫関係者	18	**40**	5	4	2	10	12	**20**	**24**	**135**
医師・薬剤師・獣医	6	29	**23**	4	13	10	2	**23**	**53**	**163**
医薬品・毒物取扱者	0	0	5	4	7	**16**	17	0	4	**53**
銀行関係者	0	1	15	0	0	0	0	0	0	**16**
引揚者	27	23	9	3	0	3	0	2	7	**74**
軍関係者	5	6	**79**	**112**	**151**	**118**	**65**	**99**	**81**	**716**
似寄・通報・投書	**87**	**95**	**45**	**34**	**28**	12	**18**	17	12	**348**
詐欺前科者	6	0	5	5	3	2	3	0	11	**35**
的屋・香具師	0	0	0	0	0	3	14	1	4	**22**

ＧＨＱ関係者	11	12	7	0	0	0	0	0	0	30
地取り・足取り	65	55	12	20	17	29	22	11	9	240
写真鑑定・面通し	0	4	2	6	4	6	3	3	2	30
捜査情報	27	4	0	1	1	0	1	0	0	34
その他	0	9	6	3	6	2	2	9	5	42
内訳（項目）合計	302	329	221	197	232	216	164	187	212	2060

出典：警視庁捜査１課甲斐文助係長『捜査手記』第１巻～第８巻、別巻（帝銀事件再審請求弁護団保管）より作成。
注：報告本数は、原則２人１組の捜査員がその日に捜査本部で報告した本数。報告内訳は、報告内容や捜査対象によって分類したもので、報告１本に異なる内容・対象について複数項目が含まれることがあるため、各期の報告本数と内訳合計は一致しない。

【表２】捜査期別・軍関係捜査の変遷

捜査期	第１期	第２期	第３期	第４期	第５期	第６期	第７期	第８期	第９期	合計
	1/26～	2/15～	3/07～	3/31～	4/23～	5/19～	6/11～	7/04～	7/27～	
軍関係者報告数	5	6	79	112	151	118	65	99	84	716
軍機関別内訳										
陸軍科学研究所	－	2	1	1	－	－	－	－	－	4
6 研	－	2	33	36	18	1	－	4	－	94
7 研・8 研	－	－	－	－	－	－	－	4	8	12
9 研	－	－	3	12	19	21	14	19	7	95
陸軍兵器行政本部	－	－	－	－	－	－	－	13	4	17
731 部隊	－	－	6	25	45	36	30	26	6	174
1644 部隊	－	－	－	4	21	20	17	1	－	63
その他防疫給水部	2	－	－	－	4	1	－	1	1	9
100 部隊	－	－	－	－	15	2	－	－	－	17
516・526 部隊	－	－	11	18	3	－	－	－	－	32
陸軍軍医学校	－	－	3	2	4	1	6	20	15	51
陸軍獣医学校	－	－	1	－	1	－	－	1	10	13
陸軍習志野学校	－	－	20	－	－	－	1	－	9	30
中野学校	－	－	－	1	15	8	－	1	－	25
86 部隊	－	－	－	－	－	－	－	14	3	17
憲兵隊	－	－	－	－	－	－	－	1	1	2
特設憲兵隊	－	－	－	－	1	－	－	－	17	18
特務機関	－	－	－	6	4	10	1	－	1	22
陸軍衛生材料廠	－	1	1	3	2	－	－	－	－	7
陸軍糧秣廠	－	－	－	－	－	16	－	－	－	16
陸軍造兵廠	－	－	－	－	－	－	－	－	4	4
その他	3	3	8	8	6	2	1	4	2	38
内訳合計	5	8	87	116	158	118	70	109	88	759

出典：『甲斐捜査手記』第 1 巻～第 8 巻、別巻（帝銀事件再審請求弁護団保管）より作成。
注：軍関係者報告数は、捜査員がその日に捜査本部で報告したものの中に含まれていた軍関係に限定した項目数。軍機関別内訳は、捜査員の 1 本の報告に複数の軍機関が含まれることがあるため、各期の軍関係者報告数と軍機関別内訳の合計は一致しない。

【資料２】警視庁捜査 2 課・成智英雄の回想：松井蔚の取り調べ〔1948 年 1 月 29 日〕

松井〔蔚〕博士が犯人だという投書が、連日数通配達された。なかには、博士が陸軍司政官として、第二十五軍軍政部衛生課長在任当時、土人を注射で二百数十名殺害したとか、また博士の学生時代の非行から、戦時での婦女凌辱などの詳細を書いたものもあった。しかし、松井博士は〔帝銀事件〕当時仙台にいて、アリバイが認められたが、犯人を知っていて故意に黙秘しているものと思われた。

一月二十九日、松井博士は特捜本部の要請で、上京した。私はその日、藤田刑事部長の特命を受けて、世田谷下北沢の実弟宅に泊まっている博士を訪れ、夜八時ごろから取調べを始めた。博士は、私の質問に頭をさげるだけで、何も答えなかった。

結局、投書の非行事実は否認したが、土人の殺害の件は、チブス予防薬と破傷風菌を間違えて注射した過失であると、弁解した。そこで私は、「ご存じの通り、捜査二課は戦犯を担当しているので、この事実を公けにして、あなたを戦犯として絞首台に送ることもできるが、そうするか、それとも捜査に協力してくれるか」とおどしたが、結局、博士は事件については何も知らないものと認め、私は引きあげてきて、その旨刑事部長に復命した。
出典：成智英雄「平沢貞通“無罪”の確証」、遠藤誠『帝銀事件の全貌と平沢貞通』（現代書館、2000 年）363 頁。初出は、『新評』（新評社、1972 年 10 月号）所収。

【資料３－１】『甲斐捜査手記』第 4 巻（1948 年 4 月 24 日）
〔白滝―松原〕〔石井四郎からの聴取①：七三一部隊人名情報〕
背陰河の関係
少将　北川正隆／佐藤信二／羽山良雄
大佐　西村英二／太田澄／井上隆朝
中佐　小野寺義夫〔小野寺義男〕／園田太郎／酒井忠良／板倉シュン〔淳〕
少佐　増田英〔美〕保／古木〔本〕廣文／沼口豊潔／渡辺聯／八木澤行正／北條圓了
軍隊関係は聞かないで呉れと石井の言
参謀本部から以上の人物を貰った／参謀本部山木光郎／から貰った
（山形鳳二わ〔は〕貰ってヒドイ目に会った）
本件をやりかねぬ人物であると石井の言／（度の強い眼鏡をかけている）
一年だけ面倒見て首にしたので此後南京、上海／に行ったであろう
六研／九研／（登戸部隊）／中野の学校（中野部隊）
南方此他にはそんなのはない……と石井の言
出典:捜査一課係長・甲斐文助『帝銀事件捜査手記』第 4 巻（帝銀事件再審請求弁護団保管）311-314 頁。／は原文の改行。下線は原文では右傍線。

【資料３－２】『甲斐捜査手記』第 5 巻（1948 年 4 月 27 日）
〔坂和・仲西〕〔石井四郎からの聴取②〕〔傍線は原文のまま〕
(1)**石井四郎に面会**
〔中略〕**青酸加里は分量により時間的に生命を保持させられるか否か出来る　<u>致死量多くすれば</u>すぐ倒れる**
分量により五分―八分　一時間三時間翌日／どうでも出来る（<u>之は絶対的のものである</u>）
研究したものでないと判らぬ〔中略〕
<u>俺の部下にいるような気がする</u>　君等が行っても／言わぬだろう
<u>一々俺らの処へ聞きに来る</u>／<u>十五年二十年俺の力で軍の機密は厳格で／あるので仲々本当の事は言はぬだろう／俺が真から言ふているを信じてないだろう　極力協力しているが非常に忙しい（一時間も話をした始末で――）／参謀本部も手を廻して聞いてやる</u>
九研は石井さんの反動部隊である／（俺が行かなかったので下ッパを集めて何かコソコソやっていたらしい）／**何時でも俺の処へ来い**
出典：捜査一課係長・甲斐文助『帝銀事件捜査手記』第 5 巻（帝銀事件再審請求弁護団保管）25-26 頁。／は原文の改行。下線は原文では右傍線。

【資料３－３】『甲斐捜査手記』第 5 巻（1948 年 4 月 30 日）
〔白神・向田〕〔石井四郎からの聴取③〕
千葉へ出張の結果と二木に会った関係等更に連絡を兼ね／**一面泣き落しの意味で石井氏を訪問した**所
過般来進駐軍のトムソン〔トンプソン〕中将（中尉の誤りか）が／石井氏を調べてゐる　それは共産党が投書したものと思ふが多々／の研究は総て天皇の命でやったので天皇も戦犯である／との意味でそれに関する訊問の速記録を石井氏は／涙を浮べて見せて呉れて立腹してゐた
又当時石井部隊で濾過機の箱のペンキ塗職であっ／た佐久間某が石井氏を訪ねて警視総監が云ったと
これが事実とせば総監は男らしく無いとか**種々苦情／を申され何等得る点が無かった**
出典：捜査一課係長・甲斐文助『帝銀事件捜査手記』別巻（帝銀事件再審請求弁護団保管）118-119 頁。／は原文の改行。下線は原文では右傍線。

【資料３－４】『甲斐捜査手記』第 5 巻（1948 年 5 月 6 日）
〔白神・向田〕〔石井四郎からの聴取④〕
ピース四箇を届けた
石井四郎
（青酸加里によって死ぬる時間の相違／青酸死　絞首死と同じ）
絞首十八分で死亡／首をユルメルと翌日翌々日死んだり生／きたりする
青酸死も量の大小で違ふ／体質でも違ふ個人差あって一定せず
恰も人相が違ふ如し
０・３瓦〔g〕～１瓦〔g〕の間で相違する／死ぬる時間は違う
１瓦〔g〕では一分以内に百発百中／（純度よく純粋たるを要す）／■■により違う
胃液の関係　アルカリ／酸性　中性の間
〔上部に横書き〕０・１／
〔上部に横書き〕０・２を呑ませればフラフラする
０・３瓦〔g〕の時七五％死亡する２５％死ない
コーヒー
砂糖　　に入れると　　省略〔原文のまま〕
ウィスキー
フィルムの話　実験した写真は全然ない／貯金帳まで焼却して逃げて来た
実験者（青酸加里による）／石井要／千原光生／は此の二人で二人共死んだ
部下の中で／兵上がり憲兵中尉／チョコレート青酸加里を入れて人を／殺した
出典：捜査一課係長・甲斐文助『帝銀事件捜査手記』第 5 巻（帝銀事件再審請求弁護団保管）95-96 頁。／は原文の改行。下線は原文では右傍線。

【資料３－５】『甲斐捜査手記』第 5 巻（1948 年 5 月 13 日）
〔白神・向田〕〔石井四郎からの聴取⑥〕
(尾形を連れて石井四郎方へ午后三時半頃／行ったら不在五時頃石井が帰へって来た)
三人で検討して貰った　いい感じは出ぬ
青酸加里で人物試験したのは四回位あり
(昭和九年頃)
実験者　中佐　佐藤大雄 57 各自一回〔住所略〕
死亡　池原光正　各自一回
死亡　石井　要　各自一回
昭和十一年頃
基地でやった十名位研究した（ハルピン郊外）／石井部隊は当時南棟と云っていた
指揮官は太田　澄 55
　参画者　内藤良一 43 ／早川清 43
　雇　員　近納勘蔵 39 ／渡辺栄造 39 ／瓜生栄次 36 ／山崎豊 34
　　石井庸三郎 38 ／厚山洋一 45
〔上部に記述〕之を写／真に撮／った／撮影したのは／（■■）／の写真／野口保／〔住所略〕／（十六年頃ま／で七三一にいて退官）
五尺三寸五分／人相ヒゲあり角顔白毛／眼鏡かけたり／かけなかったりする
捕虜運搬憲兵がやった／憲兵指揮官　乙津　某　44.5

一緒に行った憲兵　関口定雄
それ以外にもあったと思ふ／（以上は尾形が記憶しているもの）其の当時尾形／は軍医学校へいた／ので聞いている
此の詳細を聞くには
〔住所略〕瓜生栄治／〔住所略〕厚山洋一／が良く知っているから此の二人に聞けばよい
此の中では／憲兵の指揮官／軍曹　乙津　某　44.5
が一番よく似ている　昭和十三年頃免官とす／退職当時（免官　素行不良の為）
人をだます脅迫する／（此の中の秘密をバラスから金をよこせと）／言ってきた
石井庄三郎に聞けば乙津　某／の消息を知っているか知れぬ
(昨夜九時頃まで待ったが買出しに行き帰へらな／かった)
〔住所略〕で乾物屋をやっている
青龍／赤龍を殺したのは（乙津のは青酸である）／乙津某であった
チョコレートの中に入れて殺した
乙津の相棒吉里は背が高い柔道をやる
(三) 石井四郎を脅迫
軍医学校雇員　竹沢　某　三七
友人に〔住所略〕早川丁一／がいる其処へ捕虜撮影の写真を売る／と云ふて竹沢が話したので／今は戦犯中だから／解剖した写真が何枚もある
早川が石井さんの処へ告げに行った
出典:捜査一課係長・甲斐文助『帝銀事件捜査手記』第 5 巻（帝銀事件再審請求弁護団保管）137-140 頁。／は原文の改行。下線は原文では右傍線。

【資料４】『甲斐捜査手記』第 5 巻（1948 年 4 月 26 日）
(一) 小林-小川
〔4 月 21 日から〕長野県下へ出張しての捜査結果〔中略〕
元陸軍技術中佐伴繁雄　43〔中略〕〔1 頁〕
〔九研での〕毒物合成は個人謀略に用いる関係上死後原因が／一寸掴めぬような毒物を理想として研究し／中には成功したものもあった（青酸ニトリール）〔中略〕〔2 頁〕
青酸ニトリールは／青酸と有機物の合成に／九研が特殊なものを加えて作った
服用後胃の中に入ってから／三分から七、八分経つと／青酸が分離して人を殺す（致死させる
青酸ニトリールは／液体で透明／味は喉をやく／ような刺激はあるが臭味／はない
一回一人分２ cc のアンプルに入っている
伴は昭和十六年五月二十二日から人体実験をした
南京病院／多摩部隊の本部になっている
課長　佐藤少佐の指揮で〔3 頁〕
実験を始めた
始めは厭であったが馴れると一つの趣味になった／（自分の薬の効果を試すために）
相手は／支那の捕虜を使って／相手が試験官を疑うので擬装して行なった
例えば／紅茶の中に／青酸加里を入れて呑ました場合
試験官と一緒に／俺が先に呑んで見せるから心配しなく／ともよいから呑めと云ふてやった
捕虜の分のは予め茶碗に満たさせておく／又は給仕が予め茶碗に入れて来て／各自に出してくれる（入れない印のあるのを／捕虜に与える）
斯様にして呑ました〔中略〕
私〔伴繁雄〕は／青酸加里で試験した結果／帝銀事件を思い起こして考えて見るのに／青酸加里は即効的のものであって／一回先に薬を呑まして／第二回目を一分後に呑まして／更に呑んだものがウガイに行って倒れた／状況は／青酸加里とは思へない／青酸加里はサジ加減によって時間的に／経過さして殺す事は出来ぬ／私にもしさせれば／青酸ニトリールでやる〔5 頁〕〔中略〕
青酸加里と後で聞いたが私の実験の結果青／酸加里とは私の実験の結果からは思えない
出典:捜査一課係長・甲斐文助『帝銀事件捜査手記』第 5 巻（帝銀事件再審請求弁護団保管）1～7 頁。／は原文の改行。

【資料５】『甲斐捜査手記』別巻（1948 年 7 月 26 日）
元軍医大佐　早川清〔255 頁〕〔中略〕
生体解剖に就て

帝銀事件が発生した頃は未だ進んでいなかったけれ共〔256 頁〕／**最近に至ってＧＨＱの吉橋と云ふ二世を通じて私達の身柄を／保障して呉れると米軍では申し若し米ソ戦争が開始された／際には身柄は早速米本国へ移す事になっていると聴いている。**／細菌戦術の優れた点も幾分認めて居るらしい。〔中略〕
当時使用した薬物方法・人員等につき聴くに／
ＧＨＱで調査された際関係者同志事件については絶対口外／せぬ様誓約したのであるから勘弁して呉れとの事で語らなかった
生体解剖の件も戦犯にならぬ事が最近判ったので申した次第で／すと附言す（ＧＨＱでは本件に関しては秘密を厳守するがお前達の方から墓穴を掘る様な事の／無様　警察官の中にも共産党あり　警察官にも口外せざるとの事である　何万かの部下／を保護する為にも）
出典：捜査一課係長・甲斐文助『帝銀事件捜査手記』別巻（帝銀事件再審請求弁護団保管）255-257 頁。／は原文の改行。

【資料６】『甲斐捜査手記』第 8 巻（1948 年 8 月 6 日）
元参本作戦課長／元大佐　服部托〔卓〕四郎　46.7 ／現在資料整理部長をしている
石井部隊／防給関係なら〔中略〕
◎服部の言／**・一六四四／・南方防給／・九研／の三ツが関係ありと思ふ／当局の見方と同じ**
石井部隊は関東軍直属／陸軍省の配下で参本に連絡はあった／が命令は出さぬ
石井部隊はＧＨＱの関係あったが／之を念頭に置いてやるのが一番〔98 頁〕
九研関係の話しもした〔中略〕
(2)**話最中に／有末中将／が来た**　同人は〔住所―中略〕／参本作戦第二部長／有末精三
52.3
ＧＨＱの嘱託でなく復員局の嘱託であった
日本クラブにいて／復員局の出店があり／此処に連絡がある　取次をやっていた
同人とも話して見た〔中略〕
(3)化学戦部隊と云ふと／習校である／服部有末は帝銀には関係ないだろう／と云ふ
やり方が個人的でなく、部隊行動である／からである
有末は軍の秘密を聞くのはＧＨＱの関係で無理であろう／之を聞かずに似寄り写真等から行ったが／よかろう〔100 頁〕
出典：捜査一課係長・甲斐文助『帝銀事件捜査手記』第 8 巻（帝銀事件再審請求弁護団保管）98-100 頁。／は原文の改行。下線は原文では右傍線。

【資料７】召喚時の様子を語る「伴繁雄手記」
〔登戸研究所とＧＰＳＯの接触の第一歩は〕**昭和 23（1948）年春**、登戸研究所第三科長山本憲蔵が、対支経済謀略としての偽札工作の責任者として、ＧＨＱ・Ｇ－２に召喚され、長期間の取り調べを受けたことに始まる。
伴もこれと前後して〔昭和〕23 年 4 月にＣＩＣ（対敵諜報部）の呼び出しに応じ、郵船ビルを占拠していたＧＨＱ・Ｇ－２に出頭し、秘密戦の全貌について詳細な取り調べを受けた〔中略〕。Ｇ－２はＣＩＳ（民間諜報部）と協力して登戸研究所の全容を把握し、**山本のいうところのいわゆる“ギブ・アンド・テイク”の相互関係による交渉の結果、**米軍に偽造に関する過去の経緯・技術と成果を体験的に説明したため、最初の出頭の段階で、米側の協力の求めに応じたのであろう。〔中略〕
昭和 23 年春、山本大佐はＧＨＱ・Ｇ－２に召喚されたが、予想に反し、すこぶる紳士的な態度で接せられ米国にとって偽造工作という新しい「技術とノウハウ」の提供を求められた。
出典：「伴繁雄手記（手書き）」（原本・明治大学平和教育登戸研究所資料館所蔵）

講演２　「帝銀事件 再審請求の進捗状況についての報告」

渡邉　良平　氏
帝銀事件再審弁護団，弁護士

再審請求の手続き，現在どういう状況になっているのかというこれまでの経緯を含めご報告いたします。

１　平成 27 年（2015 年）11 月 24 日付　再審請求書～平成 28 年（2016 年）１月 29 日付再審請求書訂正版

今回の再審請求は平成 27 年 11 月に再審請求書を提出しました。この段階でかなり分厚いものになったんですけれども，この時点では毒物に関する新証拠はまだ提出しておりません。追加で提出するということで，この時，主として新証拠として提出したのは供述関係の鑑定書です。平沢さんの事件については, 決定的な証拠となったのは自白あるいは目撃証言なんですね。帝銀事件の前に安田銀行荏原支店の事件，直前に三菱銀行中井支店の事件といった似たような事件があり，その時に犯人と思われる人間をかなりの人数の銀行員が目撃しています。その目撃供述の信用性。また平沢さんの一時期自白をしたときの自白供述書の信用性。これについて浜田〔寿美男〕先生他, 原先生, 厳島先生, 永田先生などの詳細な供述分析の鑑定書〔本稿, p.151 レジュメ参照〕，かなり充実したものだったんですが，これを新証拠として提出しました。

この再審請求最初の段階では供述分析のこの鑑定書が主たる新証拠であり，毒物については簡単に言及はしましたが，新証拠としては今後補充して提出するということで終わらせています。これが 2015 年 11 月 24 日です。

毒物についていいますと，本件の毒物の謎としては，山田先生からも先ほどお話があったように青酸カリであればすぐに死亡する可能性が十分にあるのに，そうではなく，すぐには死ななかった。しかも 16 人全員が第一薬の時には特に倒れたり死亡する者はいなかった。ところが第二薬を飲ませた後に次々と倒れ，16 人中 12 人が死亡しているとのことですので，なんらかの毒物の効き目をコントロールする，時間をコントロールするような特殊な毒物あるいは特殊な手法があったのではないか，ということは当然疑問として思われました。このことはずっと以前から問題にされていましたが，もう一つ，亡くなった方の遺体を解剖して東大と慶應大学で解剖しました。慶應大学で６遺体を解剖したのですが，慶應義塾の方では遺体の血中濃度を測定していたんですね。遺体の血中濃度が普通の青酸カリの致死量と言われているものと比較して 15 ～ 20 倍程度，かなり遺体の青酸の血中濃度が高いという特徴がありました。これはいったい何なのか。ここに今回の毒物の特徴があったのではないかと疑われました。ただ，こ

れについてある程度の仮説はありましたが，証拠を持ってここはこうだということまでは言えない段階だったので，この時点ではこちらの手中は詳しくは保留しまして，後日証拠に基づいて補充します，ということにして，2015 年 11 月 24 日付の再審請求書を提出しています。その２か月後に，再審請求書訂正版の補充書を提出し，今いったようなことを補充して，帝銀事件の毒物は青酸カリではないと指摘はしているんですが，ただし新証拠はこの段階では提出していません。

２　令和３年（2021 年）１月 29 日　検察官が意見書提出

このあとしばらく間があくのですが，この間弁護団が何をやっていたかというと，研究機関の協力を得て，動物，これは豚ですけれども，豚を使った実験を続けていました。これはかなり本格的な実験であり，色々と，研究機関の研究者の方には本当にいろんなご苦労をかけてしまったのですが，この実験を行いました。

これで一気に話は飛ぶのですが，検察官，すでにこちらの方は供述分析を主として意見書，再審請求書を提出していたのですが，これに対しての反論が検察官から出ました。これが今年（2021 年）の１月 29 日です。検察官がかなり詳しい反論書を提出しています。これは主として供述証拠に対する浜田先生たちの鑑定について反論している。「専門領域ではない」とか，いろんなことを言っていますが，かなり詳しい内容の反論書を提出しています。まだ毒物についてこちらもこの段階では新証拠を出しているわけではなかったため，この検察官の意見書は，弁護人の主張は失当であると数行程度の簡単なものにとどまっています。ただこの頃こちらの方でも動物を使った実験は終了しておりまして，専門家の方，協力していただいた研究者の方に鑑定書を作っていただいています。これがちょうど検察官の意見書を出すのと前後するんですけれども，今年の１月 20 日付の鑑定書です。

３　令和３年（2021 年）１月 20 日付「鑑定書」

これは弁 37 号証として提出しています。表題としては「鑑定書（，帝銀事件で使用された毒物が青酸カリウムか否かに関する動物実験の結果を踏まえた医学的分析）」というものです。鑑定事項と鑑定結果ですが，鑑定事項の一番目として，「青酸カリウムを経口的に服用した場合に生産が吸収される機序（きじょ）〔＝メカニズム〕」。これは青酸カリがどういう風に吸収されていくのかということは実はあまりよくわかっていなくて，青酸カリを飲んだ場合，胃液で分解され，それでシアン化水素というガスが発生すると，それが肺に達成すると呼吸困難になり死亡するというのが機序だというのはわかっていました。しかし，それがどのようにして肺に達するのかということはいろんな説がありまして，それこそ生体実験をすることはできませんので，必ずしもはっきりとしていませんでした。今回の豚を使った実験ではどういう風にやったかとい

うと，青酸カリを豚に服用させて，その後豚のあちこちの心臓とか足や手等の血管の血中濃度を測定します。時間の経過とともにどのように血中濃度が変化するかということを測定しました。その結果，結論だけ言いますと，判明したのが青酸カリウムを経口的に服用した場合に青酸は消化管から吸収され，肺で排泄される可能性があるということが判りました。これは本件に直接関わりはないかもしれませんが，今まで青酸カリを服用した場合，どのような経緯で肺に達するかということは必ずしもわかっていませんでしたので，あるいはかなり新しい知見であるということが言えると思います。

そしてもう一つのもっと重要なことですが，一番我々としては知りたいことは，帝銀事件で犯人が使用した毒物は青酸カリウムや青酸ナトリウムと断定することができるかどうかということですが，鑑定の結論としては帝銀事件で投与された毒物を青酸カリウムや青酸ナトリウムと断定することはできない，という結論となっています。この理由，なぜこういう風に言えるのかというのはさらにこの後でご説明いたします。という鑑定書が今年の１月 20 日付でこのような形でできました。

４　令和３年（2021 年）２月　再審請求補充書提出

これを基に弁護団の方でも再審請求の補充書というものをさらに今年の２月（３月だったかもしれませんが,）提出しています。これは鑑定書に基づくものですが，この請求書，補充書では供述分析等についても言及していますが，ここではとりあえず毒物にしぼって鑑定書の内容に沿ったご説明をしますと，胃から青酸は吸収されて消化管を通って肺で切り離されて肺で窒息させるという機序をたどる。それで，ここが大事なのですが，胃の中の青酸というのは死後拡散して心臓などに達し，（心臓などの）血中濃度がしだいに高まっていくということが実験の結果からわかりました。別の言い方をすると，死亡すると，最初服用しているわけなので，胃の中に青酸がたくさんあるわけですが，胃の中の青酸濃度はしだいに低くなってその代わりそれが拡散して心臓などの血中濃度が高くなるということです。先ほど申し上げたように，慶應義塾大学の鑑定で，血中濃度が致死量よりもかなり高かったと，これがどういうことかというのが謎だったのですが，一つの考え方として，死後それが拡散していったのではないかいうことが考えられています。〔この実験結果は〕それを裏付けるものということが言えると思います。

ださらに今回の実験の結果明らかになったのが，ここが一番大事なことですが，拡散のスピードが帝銀事件の場合は豚の実験の場合と比べてかなり早いということです。先ほど言いましたように，死亡すると胃の中の青酸が死亡した後も拡散されて心臓などにいって，それで最終的には胃の中の青酸濃度と心臓等の血中濃度が平衡になる，だいたい同じぐらいになる，ということになるんですが，そのスピードが帝銀事件の被害者の場合は非常に高かった。スピー

ドが速かったということです。死亡後１日～１日半でご遺体の解剖がなされたのですが，その時は胃の中の血中濃度とそれ以外の血中濃度はそれほど変わりはありませんでした。つまり，すでに平衡状態に達していました。ところが豚の実験では死亡１日後では胃の中の血中濃度がかなり高く，心臓などの血中濃度はそれほど高くありませんでした。つまり，まだ平衡に達していなかったんですね。ということはどういうことかというと，帝銀事件で使用された毒物は青酸イオンが分離しやすい特殊な青酸化合物だった，あるいは特殊な手法で青酸イオンを早く分離するような操作が成されたという可能性が高い（，あくまでも可能性ですが），そこまでは言える，ということです。これは必ずしもただちに帝銀事件の毒物の正体が何だったかということを示すものではありませんが，この実験の結果，かなりのことがわかりまして，青酸が肺に達する機序もわかり，本件の毒物がやはり何か特殊で，青酸イオンが分離しやすいなどの理由で拡散のスピードが普通の青酸よりもかなり早いものだったということまで現時点でわかっています。

弁護人の主張として，今回の犯行を実行するためには第一薬を飲ませた後，これは 16 人全員に飲ませると，そこで先ほど山田先生のお話〔本誌 p.119〕にもありましたが，そこで誰かが飲まなかったりするとこれはすぐ発覚してばれてしまう。全員が同時に飲む必要がある。かつ，実は豚の実験でもそうだったのですが（毒物の）効き目というのは豚によって効き目が出る時間というのはかなり幅があります，したがって飲ませてすぐ死ぬとは限らない。人によって，対象者によって，効き目が出る時間というのはかなり前後がある。それにも関わらず 16 人全員に同時に飲ませて最初の１～２分は死亡せず，第二薬を飲んだ後に一斉につぎつぎと死亡する，という効果を出すためには，捜査機関はそれこそ最初から念頭に，疑問に，問題視していたように，毒物が効き目を発する時間をコントロールする何らかの薬物，手法の特徴があったと言えます。本件の今回の実験結果から言えるのは，やっぱり普通の青酸とは違い，分離しやすい，拡散の速度が速いという特徴がみられますので，やはり何等かのコントロールをすることと関連のある事実があったのではないかと言えます。したがって，まだその正体（毒物の正体）がなんであったのかということまでは明確にこれだということは言えていません。ある程度仮説はあります。しかし，そこまでは現段階では言えていません。

５　今後の予定

今後の予定ですが，検察官の，特に供述分析に関する意見書を攻撃するような内容がありましたので，弁護人からはこれに対する反論の書面を近々出す予定です。また，検察官からはこちらの動物実験の結果を踏まえた毒物についての（鑑定書に対し）恐らく詳しい反論が今度でるものと思われます。

再審としてはこういう状況で，いよいよ動き出したなという感じがしています。こちらとし

てはさらに今まで協力していただいた先生の他にさらに薬物に詳しい先生などにお伺いするなどして，今後さらに主張を充実させていきたいと思っています。

以上で私の報告を終わります。

〔山田〕渡邉先生ありがとうございました。今のご報告の前半部分で出てまいりました第二十回再審請求の鑑定書に関する書籍，浜田寿美男先生の『もう一つの「帝銀事件」』（講談社選書メチエ，2016 年）をご紹介します。目撃者の証言の部分の分析，浜田先生は心理学の専門分野から分析した鑑定書をお書きになって，「平沢貞通は無罪である」という結論をお出しになっています。関心のある方は是非ご覧いただければと思います。

帝銀事件　　再審請求の進捗状況についての報告　渡邉

平成 27 年（2015 年）11 月 24 日付　　再審請求書

・主として供述関係の鑑定書

・自白の任意性信用性についての浜田鑑定、3 事件（安田銀行荏原支店、三菱銀行中井支店、帝銀事件）の目撃証言についての浜田・原・厳島・仲鑑定、小切手の筆跡についての宇野鑑定

・毒物については、遺体の血中濃度が異常に高いことを指摘

平成 28 年（2016 年）1 月 29 日付　再審請求書訂正版

・遺体の青酸の血中濃度が非常に高く、通常の青酸カリではない。その理由が解明できていない。帝銀事件の毒物は青酸カリではない、と指摘。

・新証拠はこの段階では提出していない。

研究機関の協力で動物を使った実験を続ける

令和 3 年（2021 年）1 月 29 日、検察官が意見書提出

・主として供述証拠についての鑑定に対して反論するもの

・毒物に関しては、この段階では新証拠が出ていないから弁護人の主張は失当である、という数行の簡単なもの

令和 3 年（2021 年）1 月 20 日付「鑑定書」

・弁 37 号証「鑑定書（帝銀事件で使用された毒物が青酸カリウムか否か等に関する動物実験の結果に踏まえて医学的分析）」

鑑定事項と鑑定結果

１　青酸カリウムを経口的に服用した場合に青酸が吸収される機序

→青酸カリウムを経口的に服用した場合、青酸は消化管から吸収され、肺で排泄される可能性

２　帝銀事件で犯人が使用した毒物は青酸カリウムや青酸ナトリウムと断定することができるか否か

→帝銀事件で投与された毒物を青酸カリウムや青酸ナトリウムと断定することはできない

令和 3 年（2021 年）2 月　再審請求補充書提出

・1 月 20 日鑑定書に基づく

・胃から吸収され消化管を通って肺で排泄という機序

・胃の青酸は死後拡散し心臓等の血中濃度が高まる

（死後、胃内の青酸濃度は低くなり、心臓等の血中青酸濃度は高くなる）
・拡散のスピード（胃内濃度と血中濃度が平衡になるまでの時間）が、帝銀事件では豚の実験と比べて早い
・帝銀事件で使用された毒物は青酸イオンが分離しやすい特殊な青酸化合物、ないし特殊な手法であった可能性

・本件の犯行を実現するためには、第 1 薬を飲ませた後 1 、2 分の間は誰も死亡せず、かつ、第 2 薬を飲ませた後は 16 名 全員が速やかに倒れる、という事が必要

今後の予定

弁護人から、検察官の意見書への反論（供述分析）
検察官から、毒物についての反論意見

質疑応答

〔問１〕犯行時に犯人が言及したという GHQ の実在の人物とはどういった人だったのか。

〔山田〕GHQ のパーカー中尉という人なのですが, 吉永春子さんの『謎の毒薬―推究帝銀事件』（講談社，1996 年）で詳しく紹介されておりますので，そちらをご覧ください。

〔問２〕犯行は進駐軍の指示で行った可能性があるのか。

〔山田〕事件そのものは，犯人は危険を冒して小切手を換金しています。もし警察の手回しが良ければその時点で犯人は捕まってしまう，という大変な危険を冒しながら換金していることを考えると，基本的に犯人そのものの動機は，やはり金銭目的がかなり大きな要因であったと思われます。しかし，さらにその背後，どういうことがあったのかということは，いろいろな推定が可能かと思われます。

〔問３〕現在の科学技術をもって証拠品などからの解明は不可能か。

〔山田〕今まさに，渡邉先生からお話がありましたように，さすがに現在，人体実験をするなどということは絶対にできないことですが，いろいろと科学的に分析をしていくと，動物実験なども重ねています。ですが，実は現在は，動物実験もいろいろな制約があって，なんでもできるということではありません。例えば，豚も苦しませてはいけないといった制約があるそうなのですが，しかしそのような制約がありながらも，いろいろなことがわかってきています。これはもっと詳しく，もう少し時間が経てば，皆様にもお知らせできるのではないかと思いますので，まさに現代の技術を使った解明ということですよね。それは可能になってくる部分はあるかと思います。

〔問４〕第二薬のみが毒物であった可能性はあるか。

〔山田〕先程ご紹介した吉永春子さんの『謎の毒薬』では，一薬二薬が合わさって，初めて毒性が完成するという説です。第二薬のみが毒物であるという考え方は，ちょっと私が今まで聞いた中で，それを明確に主張しているものは無いかと思うのですが，これもまだ，そもそも毒そのものがどうであったのかということ自体が不明確ですので，これは何ともお答えし難いという感じが致します。

〔問５〕毒薬の飲み方の指導で，エナメル質という医学用語を使っている。犯人は歯科医師ではないか。

〔山田〕これは実際には琺瑯質と犯人は言ったようです。今ではエナメル質というらしいです。確かにご質問のとおり〔歯科医師で〕あるかもしれません。ですから医学用語を使っているという意味では，医学，歯科医師かどうかということは別として，医学について非常に知識が深い人物がやったということは明らかでしょう。

〔問６〕生存者が４人出た理由は何なのか。

〔山田〕犯人が，致死量を大きく超えるような毒を使わなかったということが理由なのですが，それは，犯人の知識が浅かったからではなくて，一般的に素人が毒殺事件を起こすと，致死量をはるかに超えた毒を飲ませてしまう事例が多いそうです。つまり，あまり濃厚な毒を飲ませてしまうと早く効いてきたりすることがあるので，そのあたりのさじ加減をよくわかっている人物。しかし，先程渡邉先生からの話にもありましたように，体質などの関係で，致死量ギリギリの場合に死に至らないというようなこともあるということです。ですから，逆に素人ではない人物，致死量をかなり正確に把握している人物だからこそ，こういうことが起きたのだろうと思います。

〔問７〕銀行員や用務員の中で飲んだふりだけする人がいた場合の対策を，犯人は立てていたのか。

〔山田〕これは犯人の言葉を信じてしまったわけですよね。そこに非常に具体性があったので。本当に実在の人物を挙げて，そこで集団赤痢が発生したという，その恐怖感から，飲む真似だけをしておこうかな，とは，おそらく思わなかったということと，それからこの薬は非常に強いけれども GHQ が出してくれた非常に良い薬なんだというイメージを最初に先入観として与えていますので，やはり飲んでおいた方が良いのかなと思えたということなのでしょう。〔対策を立てていたというよりも〕そのあたりは非常に話術が巧みであったということがいえるかと思います。

〔問８〕捜査が軍関係中心に行われた理由とは何か。

〔山田〕先程説明したように，南方軍防疫給水部から始まって，旧軍が異常なまでに毒物とか毒殺とか生物兵器ということにかなり力を入れていたということを警察も掴んでいたということです。そして，いろいろな寄せられた投書などに，そういうような秘密を暴くようなものもけっこうあったようです。それからやはり，捜査関係者の上層では，先程の藤田刑事部長の発言にもあるように，旧軍関係が怪しいという情報が一部でもう既に入っていたということ，そして米軍とつながっているということがある程度わかっていたということです。ですからかなり，狙いを軍に定めた。だから秘密捜査班というのは軍中心にやれというふうに命令されたわけです。ところが，その捜査陣主流も，刑事部長の心配とは別に，結局あたっていくと軍関係が怪しいということに行きついたわけです。

〔問９〕六研について説明をしてほしい。

〔山田〕陸軍には第一から第十まで技術研究所がありました。六研とは，第六陸軍技術研究所で，新宿百人町にあった，化学兵器，つまり毒ガスの研究をしていた研究所です。ですから，六研と，九研つまり登戸研究所というのはすごく密接に関わりがありまして，結構人も

行き来していたというようなことがあります。ですから，今回も技術研究所関係では六研と九研がクローズアップされたということです。

〔問 10〕毒ガスの製造というのはどの部隊の担当なのか

〔山田〕研究は六研，製造も一定程度六研でやっていますが，瀬戸内海にある広島県の大久野島というところで毒ガスの大量生産をやっておりまして，漏れた毒ガスで，戦後まで島民に被害が出ております。大久野島には毒ガスの町立資料館，今でも毒ガス工場の遺跡が残っておりまして，非常に見ごたえがあります。

〔問 11〕731 部隊に注目されたのは，森村誠一さんの『悪魔の飽食』からではないか。

〔山田〕実はその直前に，常石敬一さんが『消えた細菌戦部隊』（海鳴社，1981 年）〔現在ちくま文庫でも発行あり〕という本をお書きになっておりまして，これがほぼ同時です。一般には森村さんの『悪魔の飽食』が非常に話題になりました。同時に，そういう学問的研究でも，若干森村さんの本よりも早く常石さんの本が出まして，個別論文レベルではさらに前に常石さんがお書きになっています。しかし，いずれにせよ 1980 年代です。ですからそういう点では，この 1948 年段階の帝銀事件の捜査段階というのは，まさに関係者が存命の時期に，存命の時期だったからこそ明らかにできた部分というのが当然あるわけですけれども，非常に早かったということです。

〔問 12〕石井四郎たちが米軍に提供したという人体実験のデータは公にされているのか。

〔山田〕これは公にされていません。これは随分研究者も探しているのですが，例えば軍関係の研究所の中に入ってしまったりすると，そのデータはなかなか公開されないようです。ですから，そういうデータを米軍が持って行ったことは明らかですし，研究者の多くは，なんとかデータそのものが見つからないかと追及しているのですが，今の所は見つかっていないということです。

〔問 13〕平沢氏が犯人であると判断されていく要因や背景とは何だったのか。

〔山田〕平沢さんが逮捕されたことは，警視庁の中でも驚きをもってとらえられているところがあります。例えば 8 月に平沢氏が北海道で，これは名刺班が逮捕するわけですけれども，東京に平沢さんが連れてこられた時に，新聞が当時の捜査一課長にインタビューしていまして，捜査一課長はたぶんシロだろう，と言っているのです。というぐらい，平沢説というのは，当初あまり説得力は無かったのです。ところが，結局こんな大事件で容疑者があげられないという事態になると，いわゆる警視庁の威信にかかわるという力学が働いて行くわけです。そして，軍関係が手詰まりだということもあって，結局あらゆる証拠が，平沢さんにとっては不利な形で組み立てられていく，ということになったのだと思います。

〔問 14〕平沢氏が自白してしまった要因・背景とはなにか。

〔山田〕平沢さんが脳の病気を患っていた，「コルサコフ症候群」という，狂犬病の予防注射かなにかがもとでその病気になって，その後遺症が残っていたというようなことがありますし，なにせ一か月間責め立てられたということなので，異常な状態になってしまうということは，大いにあり得ると思います。現在ではこのような取り調べは絶対にあり得ないことですが，当時は旧刑事訴訟法の時代ですから，とにかく自白が証拠の王様，という考え方です。ですから何が何でも自白を得てしまえば，それでOKという感覚が非常に強かった。ですから人権感覚というのが全く今とは違う。今でもいろいろな事件が起きますけれどもね。

〔問15〕帝銀事件の動機は何か。

〔山田〕これは非常に難しいです。つまり，それだけの多くの人を殺害して，それに見合った金額なのか。それはさておき，金銭目的の部分があったことは確かです。犯人にしては，おそらくもっとたくさん取りたかったのでしょう。しかし，こればかりははっきり言って，ある程度やってみなければわからないところがあったということだと思います。

〔問16〕秘密機関としてお金が必要だったのか，個人として必要だったのか。

〔山田〕これは何ともわかりませんが，やはり当時，組織としてもお金を必要としていたような団体はあったのかもしれません。といいますのは，これは帝銀事件とは関係無いのですが，この時期，アメリカは麻薬の取り締まりに大変力を入れています。当時のその理由は，麻薬を通じての資金が軍国主義を復活させようとする団体に流れる。旧日本軍はアヘンなどで機密費を作っていたりしましたから，そういう麻薬関係でお金を得て，民主主義体制を破壊しようという動き，反占領政策の動きが出てくるんじゃないかということを危惧していたことは確かです。ですから，そのようなことを目指す動機を持った団体が無かったとは言い切れません。この点については，非常に重要なご指摘だと思います。

〔問17〕レジュメ〔本稿 p.138〕にある特設憲兵隊とはどのような部隊なのか。

〔山田〕今日は実は時間の関係で十分なお話ができませんでしたが，特設憲兵隊という組織が出て参りました。それから86部隊というのも新京特設憲兵隊というもので，これは元々，スパイ活動とか謀略活動というのは，結構憲兵が中心になってやっているわけです。ですから特に個人謀略，これはまさに暗殺などをやる部隊として86部隊（新京特設憲兵隊），あるいは東京（鷺宮）にあった特設憲兵隊がありました。このような個人謀略の部隊というのに参加していた人の，最も得意としていたのは変装なんです。そのことを，『甲斐捜査手記』でも結構述べていますけれども，胡麻塩頭にするのなんかは簡単だ，というような証言も，捜査員は聞いてきています。しかし，それを重要視すると，捜査方針が最初からひっくり返ってしまうわけです。50歳前後で胡麻塩頭というのが捜査のポイン

トになっていた。それすら確実なものじゃないということになりますと，大変なことですが，そういう個人謀略をやるような人たちは，実はそういう技も身に着けていたということがありますので，ますます帝銀事件の犯人は誰なんだ，とわからなくなってしまうということです。

〔問 18〕平沢氏の多額の預金の出どころはなんなのか。

〔山田〕平沢氏が保有していた多額の預金，大体なくなった額と相当額といわれておりますけれども，これは平沢氏の本業が画家であるということからすると，絵を描いているというのが一番の現金収入の道です。本人もそういうことを証言している部分もあるわけですけれども，最終的にそのお金がどういうものであったのかというのは，どちらの側も立証しきれてないということだと思います。

〔問 19〕帝銀事件のあった椎名町支店，この土地や場所に何かの意味があるのか。

〔山田〕実は未遂事件も含めて，ちょうど特定の道路に沿っているところばかりということがあるのですが，それが犯人の行動とどういうふうに結びついているのかというのは，これは今一つわかっていないところです。

〔問 20〕帝銀事件自体が，警察に，旧陸軍の生物化学兵器関係を全般的に調べさせて，資料を収集させるのが目的だったのではないか。

〔山田〕そういうようなことを考えていたような人たちが，どこに存在するかということですよね。結果として警察は相当良く調べたと思いますけれども。ただ，もしそういうことが目的であるならば，警察よりも直接軍関係者を集めてということのほうが，効率的なのかもしれないです。これはちょっとわかりません。ただ，一つ言えるのは，陸軍の中のあちらこちらに，化学戦・生物戦・謀略戦，いろいろな部隊でいろいろなことを，例えば青酸カリとか，あるいは青酸ガスとか，いろんな所でいろんなことをやっているという，そういうことを日本陸軍が重視していたという面はあるのですが，実は系統性が無い，ということもあります。いろいろな所でそれぞれやっている，ということは，結局何か大きな方針に基づいて分業しているというよりも，必要だからいろいろな所でそれぞれやっているという，バラバラさ加減というのがあるのかなと思います。

〔問 21〕帝銀事件の犯人から毒を飲まされた生存者らの証言はどうだったのか。

〔山田〕生き残った方の証言は決定的に重要です。その人たちしか明確なことはいえないわけですから。しかし，生き残った人たちを満足させるようなものというのは何一つ出てこなかったわけです。物証は全然現れなかったですし，よく似ているという証言も最初の内はあまりないです。面通しを何回も何回もやっているうちに，だんだん「あの人かもしれない」というふうに変わってきた人はいます。

〔問 22〕捜査途上で平沢貞通さん以外に有力容疑者とされた人物はいなかったのか。

〔山田〕有力人物は結構いました。それから先程の秘密捜査班も，マークした人物はいたわけですけれども，結局みんな居所不明とか，あるいは生死不明とかで，藪の中に隠れてしまいます。だから怪しいと言われた人物がいなかったわけではありません。先程の石井の証言の中に出てきた乙津という人も，結局居所不明でつかめませんでした。

〔問 23〕吉永さんのいっている『謎の毒薬』，青酸配糖体という毒物を提起されているが，このことについては検証をされなかったのか。

〔山田〕先程の渡邉先生のお話ですと，とりあえず有力なものとして青酸カリと青酸ニトリールで検証したということのようです。

〔問 24〕米軍・米国の公文書の中に，帝銀事件と GHQ の関わりについて手掛かりとなる文書はあるのか。

〔山田〕これについては長年にわたって弁護団も調べてきているのですが，はっきりしたものが見つかっておりません。

〔問 25〕帝銀事件は毒物の人体実験だったのか。

〔山田〕この説は，割とあります。けれども，ただそれだったらお金を盗まなくてもよかったわけです。だから，非常に金銭に執着した事件であったという部分，それから，実際その毒薬の効果を確かめたかったという両方が確かにあったのかもしれません。

〔問 26〕この事件で，次世代に活かせるものはなんだろうか。

〔山田〕この事件が，結果的には最大の人権問題であるということです。それから，それこそ占領政策の転換を象徴するものであるということで，まさに歴史の大きな転換点に起きた事件であるということと，それとやはりその中で，一人の人間の人権が蹂躙されたという，これは非常に大きな意味のあることだと思います。

〔問 27〕使用毒物が青酸ニトリールだと言えた場合に，犯人は平沢さんではないと言えるのか。

〔山田〕青酸ニトリールを入手するというのは，普通の人ではまず困難です。これは，登戸研究所関係者も言っているのですが，入手できたとしても，実は敗戦の時に，自決用毒物として渡せっていうことで，参謀本部や陸軍省関係者がアンプルで 2 ～ 300 本，登戸研究所から持ち出していますが，結局それで自決した人はいません。ですからそういう点でいうと，どこかに流通した可能性はあるのですが，平沢さんがそれを確保できる可能性というのはますます少ないです。そういう点ではほとんど無理と思います。平沢さんがターゲットにされたというのは，名刺班の異常な執念によって，状況証拠が積み上げられてしまったということです。それほど組織的に警視庁が狙ってしまい，しかも自白まで持ち込まれてしまうと，なかなか当時としては覆せなかったのではないかということです。

〔問 28〕元々平沢さんの弁護団は，平沢武彦さんが中心となって裁判が引き継がれたわけだが，

その平沢武彦さんは亡くなってしまっている。今回の再審請求の弁護団とかつての弁護団との連続性はあるのか。

〔山田〕弁護団の人たちは，ずっと代々つながっているかと思います。

〔問 29〕平沢の度重なる再審請求が棄却された主な理由はどういったことか。

〔渡邉〕一般論として，再審請求というのは難しいです。再審請求開始決定の要件として刑事訴訟法上，新しい証拠がなければならず，また，新規性・明白性という，無罪であることを示す明白証拠がなければなりません。これらの証拠を出す必要があります。つまり，いままでの記録に基づいて，この分析をちゃんとやればこれは無罪だろうというのでは再審開始は決定されない，という一般的な難しさがあります。また，帝銀事件は 70 年以上前の事件ではありますが，それにしても再審請求を 20 回やるというのは多い方です。これは平沢貞通さん自身が再審申し立てをしましたが，それが簡単に棄却され続けたというのも理由の一つではないでしょうか。

〔問 30〕毒物について、アセトンシアンヒドリンの効果の時間についての話題がちらっとあった『謎の毒薬』などで話題になった青酸配糖体は毒物から消えたということか。

〔渡邉〕全くそういうことではありません。青酸配糖体は，使用された毒物候補の一つとして考えています。

〔山田〕どうもありがとうございます。非常にたくさんのご質問をいただきましたが，お答えしきれず申し訳ありません。私たちにとっても非常に勉強になることですので，後日，きちんとそれぞれにお答えをしたいと思いますので，どうかご容赦ください。

この帝銀事件に関しましては，やはり登戸研究所と深く関わっていたということは明らかなことでございまして，これからも折に触れて，先程の弁護団が新しく作成されているビデオの件も含めて，みなさんにご紹介していきたいと思っております。

〔追記〕

本稿は，2021 年 8 月 7 日（土）にオンラインで開催された講演会「帝銀事件と日本の秘密戦－捜査過程で判明した日本軍の実態－」の書き起こしに加筆・修正したものです。本文中の〔　〕内は資料館による補足です。

明治大学平和教育登戸研究所資料館　館報
第８号　2022 年度
161 － 175 頁，2022 年９月

明治大学平和教育登戸研究所資料館 2021 年度年次報告

１．2021 年度活動概要及び 2022 年度にむけての展望

館長　　山田　　朗

コロナ２年目の開館 12 年目，来館者は 1,247 人に若干回復

開館 12 年目を迎えた 2021 年度は，新型コロナウイルス感染症拡大防止のため４月 28 日～６月 19 日，７月 14 日～ 10 月９日は本学学生，職員に限定して開館した。開館日数 189 日（うち特別開館１日）で来館者 1,247 名，回収アンケート 138 通（別途オンラインアンケート 445 件回収）であった。平均来館者数は，１ヶ月あたり 103.9 名，１ヶ日あたり 6.6 名になる。前年度（開館日数 67 日，来館者 150 名，回収アンケート０通，１ヶ月あたり 30.0 名，１ヶ日あたり 2.2 名）に比べて来館者数 831.3％になった。開館以来２番目に少ない年間来館者数ではあるが，オンライン等で活発な発信を続けた１年であった（オンライン講演会など開催４回、YouTube 配信７回の総再生回数 6,172 回）。開館以来の通算来館者は，2022 年３月末で８万 1,699 名である。

新型コロナウイルス感染症拡大の影響で，対面での定期見学会は全て中止となった。学校見学は，10 校・129 名（前年度：１校・33 名，390.9％），グループ見学（学校見学を除く４名以上の団体）が 28 グループ・204 名（前年度：１グループ・８名，2,550％）であった。なお，定員の関係から４団体約 450 名の見学予約を断った。

展示内容の点検，資料の収集

登戸研究所の実態解明は依然として進行中であり，資料館独自の調査と来館者からの情報提供によって不断に展示内容を点検している。2021 年度は，常設展示の増設等は行わなかった（第一展示室パネルの一部修正のみ）。また，所蔵資料の増加に対応するために，学生会館内に収蔵スペースを確保し，本年度受け入れ資料から収蔵を始めた。

資料の収集・調査研究という点では，戦時中の防弾ガラス，元登戸研究所第一科勤務員旧蔵「独軍用真空管試験記事」，また，当館へ寄託されていた元登戸研究所第三科勤務員大島康弘氏旧蔵資料（26 件，1,396 点）などの寄贈を受けた。

元登戸研究所勤務者２名，勤務者子息１名への聞き取り調査を行った。

企画展・イベントの実施

2021 年度は，2020 年度企画展「極秘機関『陸軍登戸研究所』はこうして明らかになった！」（１月開始）を７月まで開催するとともに，11 月からは 2021 年度企画展として，「参謀本部と登戸研究所による対中国謀略」を開催した。また，新型コロナウイルス感染症拡大による臨時閉館措置で中断のやむなきに至った 2019 年度企画展「少女が残した登戸研究所の記録」を９月～10 月に再展示した。企画展関連イベントとして，オンラインでリアルタイムの講演会２回・展示解説１回、収録型の展示解説２回を行い，全て後日 YouTube で公開した。また，帝銀事件関係のオンライン講演会を８月に実施し，これも YouTube でも公開した。今年度から資料館に Wi-Fi を導入し，展示解説等を館内から配信できるようにした。

新型コロナウイルス感染症拡大のため，例年５月に開催してきた国際博物館の日イベントは，2021 年度に続き本年度も開催できなかった。また，全学共通総合講座「登戸研究所から考える戦争と平和」に連動した資料館主催の見学会（例年月２回・土曜日）も開催できなかった。

教育・研究活動

2021 年度も上記全学共通総合講座を春学期には生田キャンパス，秋学期には駿河台キャンパスで開講したが，全てオンライン（オンデマンド配信方式）での実施となった。また，例年，春期・秋期にそれぞれ５回の連続講座として開催してきたリバティアカデミーの生田講座は，新型コロナウイルス感染症拡大のため春期は中止となったが，秋期には，９月に単発リアルタイムオンライン講座「アジア太平洋戦争と登戸研究所：開戦 80 年目にあたって日本の〈秘密戦〉を考える」，11 月から 12 月に連続リアルタイムオンライン講座「アジア太平洋戦争期における参謀本部と登戸研究所による対中国戦略」全３回を開催することができた。総合講座の授業とリバティアカデミーの連続講座は，2022 年度以降も継続していく予定である。

研究に結びつく活動として行ってきた戦争遺跡の調査等は，実施できなかった。

資料館の調査・研究活動の成果をより広く普及させるために，2021 年度も『資料館館報』第７号の刊行と図書館・資料館等への配付を行った。

また，小中学生を主対象とした登戸研究所を通じて戦争や平和を学ぶ入り口となる映像コンテンツを 2021 年度，2022 年度の２年度計画で製作中である。

地域・社会との連携活動

外部の研究団体・市民団体と共同した聞き取り調査などは，多摩区内在住の元登戸研究所勤務員を対象に行った。

職場体験は行わなかったが，学芸員実習生の受け入れは前年度と同様に行った。

また，資料利用申請 22 件，調べ学習などレファレンス 17 件を受けた。

宣伝・広報活動

2021 年度は随時大学ホームページの資料館専用ページを改善するとともに，資料館独自の広報手段として『資料館だより』第 21 号，第 22 号をそれぞれ 2021 年 9 月，2022 年 1 月に発行した。

YouTube での動画配信は，企画展講演会・展示解説等 7 本を新たに追加した。また既存の SNS もコンテンツを増やし，増強した。

2021 年度は，新聞社 5 件・テレビ局 4 件など合計 12 件の取材を受けた。企画展に際しては，郵送，E メールでの広報活動を行い，各キャンパスでのポスター掲示，駿河台キャンパス教員ポストへのチラシのポスティングを行った。来館者アンケートによって寄せられた声は，資料館にとって重要な情報源であったが，2021 年度は 583 件（うち 445 件はオンライン講演会などでのオンライン回答）にとどまるも，大学や資料館自体の広報宣伝活動の効果を検証する材料となった。

2022 年度にむけての展望

開館 12 年目は，新型コロナウイルス感染症拡大の影響で，来館者数・アンケート回収数は開館以来 2 番目に厳しい状況となった。オンライン講演会等に際してのアンケート調査では，企画内容に対しては好意的な評価を受けることが多かったが，そういったことに甘んじることなく，資料館は今後も展示内容の充実と来館者対応のさらなる向上に努めていかなければならない。また，オンライン企画や YouTube での動画配信を対面代替措置としてのみ捉えるのではなく，全国あるいは外国にも発信していく方法として今後も展開の仕方を工夫していく必要がある。

今後における対面企画の再開に際しては，近年，課題として浮かび上がったグループ見学・学校見学の増加を図るための受け入れ体制の強化が必要である。さらに，見学会・企画展解説会だけでなく，特定展示室解説会などの機会を増やすことも考慮しなければならないだろう。

調査によって訂正・改善が必要と認められた展示パネルについては 2022 年度以降，計画的に改修するともに，新たに収集した物品・資料やレプリカを効果的に展示することが急務である。2022 年度から，順次，常設展示パネル・解説ビデオなどの全般的なリニューアルに向けての取り組みを始める。

生田キャンパス内の登戸研究所関係の遺物を保存し，戦争遺跡として保存・整備することにも努め，引き続き国の登録文化財指定に向けての作業を進めたい。また，明治大学各キャンパスの戦争遺跡の保存・活用についても提案をしていきたい。

『資料館館報』をさらに充実させるとともに，懸案である『図録』の編集準備を始めたい。

「平和教育の発信地」としての役割を高めるために，資料館・学内遺跡を案内できるガイドの養成を進めることも大切な課題である。

２．開館状況

（１）新型コロナウイルス感染拡大の影響

・祝日及び夏季一斉休暇期間中の閉館

・学内関係者限定開館　４/28 ～６/19, ７/14 ～ 10/ ９

・一般開館期間中の一般来館者は，原則，前日 16 時までの事前予約制とし，次のとおり定員を設けた。

４/ １～ 2022/ ３/ ５　① 10 ～ 13 時，② 13 ～ 16 時の各枠で 10 名

2022/ ３/ ９以降　10 ～ 16 時を１時間毎に区切り各枠で 10 名

・少なくとも４団体計 448 名の見学予約を断った。

【表１】月別開館状況（2021 年４月１日～ 2022 年３月 31 日）

月	開館日数	一般開館日数	学内限定開館日数
４月	17	15	2
５月	16	0	16
６月	17	5	12
７月	17	7	10
８月	12	0	12
９月	17	0	17
10 月	18	12	6
11 月	16	16	0
12 月	16	16	0
１月	12	12	0
２月	13	13	0
３月	18	18	0
合計	189	114	75

（2）来館者状況（月次）

【表２】来館者・アンケート回収 月別集計表（2021 年４月１日～ 2022 年３月 31 日）

月	開館日数（日）	月別来館者（人）	１日あたり平均来館者数（人）	年度内来館者累計（人）	アンケート回収数	年度内アンケート回収数累計
4 月	17	193	11.4	193	44	44
5 月	16	49	3.1	242	3	47
6 月	17	86	5.1	328	13	60
7 月	17	69	4.1	397	11	71
8 月	12	24	2.0	421	0	71
9 月	17	15	0.9	436	1	72
10 月	18	145	8.1	581	20	92
11 月	16	209	13.1	790	11	103
12 月	16	129	8.1	919	11	114
1 月	12	73	6.1	992	8	122
2 月	13	55	4.2	1,047	0	122
3 月	18	200	11.1	1,247	16	138
合計	189	1,247	6.6		138	

【参考】

年度	開館日数（日）	来館者数（人）	月平均来館者数（人）	日平均来館者数（人）	アンケート回収数
2010 年度	208	11,185	932.1	53.8	1,199
2011 年度	215	6,751	562.6	31.4	1,657
2012 年度	218	7,019	584.9	32.2	1,698
2013 年度	217	6,889	574.1	31.7	1,318
2014 年度	224	8,733	727.7	38.9	1,849
2015 年度	219	8,176	681.3	37.3	1,685
2016 年度	207	7,595	632.3	36.7	1,368
2017 年度	207	8,314	692.8	40.2	1,592
2018 年度	207	9,094	757.8	43.9	1,877
2019 年度	189	6,546	545.2	34.6	1.425
2020 年度	67	150	30.0	2.2	0
合計	2,178	80,452	648.8	36.9	15,668

注）臨時休館が生じた, 2019 年度は開館できた 11 カ月, 2020 年度は５カ月を対象に月次・日次を算出。

【表３】開館日月別データ（2021 年４月１日～ 2022 年３月 31 日）

月	開館日数	通常開館日数 （水～土）	特別開館日※数 （日・月・火）	特別開館日
４月	17	17	0	
５月	16	16	0	
６月	17	17	0	
７月	17	17	0	
８月	12	12	0	
９月	17	17	0	
10 月	18	18	0	
11 月	16	15	1	11/ 3（文学部授業での見学）
12 月	16	16	0	
１月	12	12	0	
２月	13	13	0	
３月	18	18	0	
合計	189	188	1	

※特別開館日：通常開館日（水～土）以外の事前団体予約等による開館日

（３）学校見学等

10 校（グループ）129 名。内訳は和光高校，田園調布学園，本学文学部史学地理学科，同農学部食料環境政策学科ほか計 129 名。昨年度（2020 年度　１校・33 名）より大幅に増加した。

（４）グループ見学

28 グループ 204 名。昨年度（2020 年度　１グループ・８名）より大幅に増加した。

【参考】

年度	学校見学等	グループ見学
2010 年度	10 校／ 400 名※1	109 グループ /3,374 名
2011 年度	23 校／ 378 名	177 グループ /3,718 名
2012 年度	34 校 /1,367 名	149 グループ /2,532 名
2013 年度	29 校 /1,329 名	124 グループ /1,811 名
2014 年度	34 校 /1,845 名	219 グループ /2,952 名
2015 年度	42 校 /1,182 名	163 グループ /2,797 名
2016 年度	35 校 /1,361 名	141 グループ /2,481 名
2017 年度	32 校 /1,220 名	176 グループ /2,684 名
2018 年度	45 校／ 509 名	139 グループ /2,348 名
2019 年度	27 校／ 616 名	110 グループ /1,711 名
2020 年度	1 校／ 33 名	1 グループ／ 8 名
2021 年度	10 校／ 129 名	28 グループ／ 204 名

※ 1 概算

3．資料

（1）2021 年度までの所蔵資料点数

・実物資料

2,017 件，全 5,683 点

・視聴覚，記録資料（証言映像，登戸研究所に関するテレビ番組の映像など）

341 件

（2）2021 年度収集資料

近隣住民より戦時中の防弾ガラス，元登戸研究所第一科勤務員旧蔵『独軍用真空管試験記事』，また，当館へ寄託されていた元登戸研究所第三科勤務員大島康弘氏旧蔵資料（26 件，1,396 点）などの寄贈を受けた。書籍資料なども購入した。元陸軍中尉故武田和雄氏旧蔵軍隊教育関係資料も年度内に寄贈を受けたが現在資料整理中のため 2021 年度の収集資料には含めていない。

・実物資料

収集資料点数 38 件，全 1,408 点

資料名		件数
大分類	小分類	
1．登戸研究所	第三科関係（大島康弘氏旧蔵資料）	26 件（1,396 点）
	元勤務員所持品関係	1 件（1 点）
	登戸研究所旧蔵書	3 件（3 点）
2．登研会	資料一式	1 件（1 点）
3．その他	防空備品	2 件（2 点）
	多摩研実験記事	1 件（1 点）
	書籍類	2 件（2 点）
	明治大学生田校舎建物関係資料	2 件（2 点）

・視聴覚・記録資料

収集資料点数　全 6 件（映像　4 件，音声　2 件）

（3）2021 年度証言収集状況

元登戸研究所勤務者 2 名

元登戸研究所勤務者遺族 1 名

（4）今後の資料収集および史跡保存について

登戸研究所の実態を明らかにしていくためには，登戸研究所関係者だけではなく，他の陸軍技術研究所関係者や秘密戦関係者へも調査対象を広げていくことが必要である。戦争体験者が少なくなっている今, ご存命の関係者への聞き取り調査は早急に行っていかなければならない。すでに本人が鬼籍に入っている場合も，資料散逸を防ぐため，早急に遺族への調査と聞き取りを行うことが求められる。

後世に「登戸研究所」を確実に遺していくため，生田キャンパス内の史跡保存に引き続き勤める。特に，第一校舎 1 号館裏手の建造物が今後予定されている校舎建て直しにより消失することがないようにする。また，現ヒマラヤ杉並木一帯に第二中央校舎（2025 年 4 月より使用予定）の建設が決定され, ヒマラヤ杉の保存が事実上困難であるが, 記憶を継承するための「ヒマラヤ杉メモリアル」の設置を実現に向けて努める。

4．活動内容

（1）新型コロナウイルス感染拡大の影響により中止した活動

・資料館主催見学会

・オープンキャンパスイベント

（2）企画展

①第 11 回企画展「極秘機関『陸軍登戸研究所』はこうして明らかになった！」概要

2021 年 1 月 13 日（水）から 7 月 3 日（土）まで「極秘機関『陸軍登戸研究所』はこうして明らかになった！」を資料館内で開催。テキストパネル 12 点（挨拶・謝辞除く），資料展示 28 点（複製含む）の計 40 点の展示を行った。新型コロナウイルス感染症流行拡大のため，初日よりオンラインでも展示パネル，一部の資料を公開した。

各種関連イベントはオンラインで行った。うち，第二回目の講演会は 2021 年度中に実施。2021 年度末までの来場者数は 53 名，2022 年度の来場者数は 347 名，総来場者数は 400 名。

②第 10 回企画展「少女が残した登戸研究所の記録」再展示概要

2021 年 9 月 29 日（水）から 11 月 13 日（土）まで，コロナ下で会期中に臨時休館になった 2019 年度第 10 回企画展「少女が残した登戸研究所の記録」を再展示した。テキストパネル 28 点（挨拶・謝辞除く），資料展示 12 点（複製含む）の計 40 点の展示を行った。

関連イベントとして，オンラインで展示解説会を実施した。期間中来場者数は 230 名。

③第 12 回企画展「参謀本部と登戸研究所による対中国謀略」概要

2021 年 11 月 17 日（水）から 2022 年 5 月 28 日（土）まで「参謀本部と登戸研究所による対中国謀略」を資料館内で開催（当初予定会期 3 月 26 日までのところ会期延長）。テキストパネル 27 点（挨拶・謝辞除く），資料展示 21 点（複製含む）の計 46 点の展示を行った。新型コロナウイルス感染症流行拡大のため，初日よりオンラインでも展示パネル，一部の資料を公開した。

各種関連イベントはオンラインで行った。2021 年度末までの来場者数は 583 名。

④企画展開催時の総来館者数

	開催期間	会期中 開館日数 （日）	来館者数 （人）	日平均 （人）	アンケート （件）	日平均 （件）
第１回	2010/11/03 ～ 2010/12/18	31	2,046	66.0	203	3.1
第２回	2011/10/26 ～ 2011/12/17	41	1,515	37.0	416	10.2
第３回	2012/11/21 ～ 2013/03/09	59	2,140	36.3	399	6.7
第４回	2013/11/20 ～ 2014/03/29	72	2,474	34.4	488	6.8
第５回	2014/11/19 ～ 2015/03/21	69	2,831	41.0	524	7.6
第６回	2015/08/05 ～ 2016/03/26	141	5,365	38.6	973	6.9
第７回	2016/11/16 ～ 2017/03/25	67	2,684	40.0	388	5.7
第８回	2017/11/22 ～ 2018/03/31	70	2,882	41.2	671	9.6
第９回	2018/11/21 ～ 2019/05/11	93	5,077	54.6	1,297	14.0
第 10 回	2019/11/20 ～ 2021/01/09 ※1	78	1,978	25.4	476	9.2
第 11 回	2021/01/13 ～ 2021/07/03 ※2	94	400	4.3	62	0.7
第10回再展示	2021/09/30 ～ 2021/11/13 ※3	27	230	8.5	27	1.0
第 12 回	2021/11/17 ～ 2022/03/31 ※4	67	583	8.7	39	0.6

※１　当初の予定会期（～３/31）から延長。３/ １～ 11/10 臨時閉館，11/11 ～１/ ９学内限定開館。
※２　１/13 ～３/30 および４/28 ～６/19 学内限定開館。
※３　当初の予定会期（～ 10/30）から延長。９/30 ～ 10/ ９学内限定開館。
※４　当初の予定会期(～３/26)から５/28 まで会期延長。来館者数等は 2022 年度末までの数。

⑤関連イベント

2021 年度中に開催した企画展関連イベント

・第 11 回企画展オンライン講演会②「資料館開館にむけての明治大学の取り組み」

2021 年５月 15 日（土）　講師　館長 山田朗

申込人数　116 名　参加者　77 名　アンケート回答数　67 件

・第 10 回企画展再展示オンライン展示解説会「少女が残した登戸研究所の記録」

2021 年 10 月 30 日（土）　講師　館長 山田朗

申込人数　135 名　参加者　60 名　アンケート回答数　52 件

・第 12 回企画展オンライン講演会「参謀本部と登戸研究所による対中国謀略」

2021 年 12 月４日（土）　講師　館長 山田朗

申込人数　135 名　参加者　96 名　アンケート回答数　79 件

・第 12 回企画展展示解説　YouTube 配信　講師　館長 山田朗

⑥報道

神奈川新聞，東京新聞，タウンニュース多摩区版の３紙に企画展等について掲載された。

⑦展示音声ガイド

今年度から新しい試みとして，YouTube で配信中の「企画展展示解説」を企画展の音声ガイドとしても活用した。

（３）講演会

・オンライン講演会「帝銀事件と日本の秘密戦：捜査過程で判明した日本軍の実態」

2021 年８月７日（土） 講師　館長 山田朗，弁護士 渡辺良平氏

申込人数　433 名　参加者　288 名　アンケート回答数　247 件

（４）常設展示

第一展示室パネル「研究条件を満たす登戸という土地」陸軍溝ノ口演習場位置修正。

（５）調査・研究活動

・元登戸研究所勤務員らからの証言収集活動

（６）教育ツールの充実

・若年層向け映像コンテンツ制作開始（2022 年度内完成予定）

（７）地域社会および外部と連携した活動

①川崎市民との連携

稲田郷土史会，登戸研究所保存の会と共同で多摩区内の元登戸研究所勤務者の聞き取り調査を継続中。

②川崎市平和館への協力

2020 年度（３/ ６～５/ ５），2021 年度（３/12 ～５/ ８）「川崎大空襲展」への資料提供，貸出。

③職場体験・博物館実習生などの受け入れ

種別	学校・人数	期間
職場体験	なし	-
地域インタビュー	なし	-
博物館実習	明治大学２名 , 岩手大学１名	2021 年 11 月 30 日～ 12 月 4 日（5 日間）

（8）資料利用・閲覧および調査依頼状況

資料利用申請は 22 件あった。主にデータでの写真提供など。申請者内訳は出版物や WEB サイト掲載用データ貸出または撮影が６件，放送用データ貸出が５件，展示用資料貸出または撮影５件，講演会等教育目的での使用が３件，その他が４件。

その他，学生，研究者，各種メディア関係者ほかより風船爆弾，第二科の活動，企画展に関する内容，また，近隣在住の中学生からの調べ学習に関する問い合わせが計 17 件あった。

（9）その他事業

・寄贈資料「独軍用真空管試験記事」『多研技報』第 27 號、修復（依頼先：資料保存器材）

・Wi-Fi の導入

5．広報

（1）YouTube 動画配信

2021 年度は７本の動画を配信した。

・第 11 回企画展オンライン講演会①「登戸研究所掘り起こし運動 30 年のあゆみ」

４月 15 日配信　1,716 回再生

・第 11 回企画展「極秘機関『陸軍登戸研究所』はこうして明らかになった」展示解説

５月 12 日配信　1,254 回再生

・第 11 回企画展オンライン講演会②「資料館開館にむけての明治大学の取り組み」

６月９日配信　370 回再生

・「応急防毒面作ってみた」　９月９日配信　398 回再生

※元登戸研究所第二科長山田桜考案の応急防毒面を身近な材料で製作する動画

・講演会「帝銀事件と日本の秘密戦：捜査過程で判明した日本軍の実態」

10 月 13 日配信　1,041 回再生

・第 12 回企画展「参謀本部と登戸研究所による対中国謀略」展示解説

12 月 25 日配信　511 回再生

・第 12 回企画展オンライン講演会「参謀本部と登戸研究所による対中国謀略」

12 月 25 日配信　882 回再生

（2022 年 4 月 19 日現在）

（2）ホームページ

ホームページではニュースやイベントの情報を随時更新している。2021 年度は昨年度開催した第 11 回企画展「極秘機関『陸軍登戸研究所』はこうして明らかになった」展示パネルと記念講演会の記録，『館報』第 7 号，『資料館だより』第 21 号，第 22 号の PDF が新たにダウンロード可能になった。

（3）SNS

2013 年 5 月 6 日の開設以来，職員がイベントの周知を行っている。今年度から新しい試みとして，360° カメラで学内史跡を撮影した動画，また新コンテンツとして「＃記憶をつなぐ」で元風船爆弾製造関係者遺族に協力を呼び掛ける企画など行っている。

＜ Facebook ＞　フォロワー数　　84 人（前年度 784 人）

※仕様都合のため 2022 年 1 月よりアカウント新設・移行

＜ Twitter ＞　　フォロワー数　1,440 人（前年度 1,296 人）

＜ Instagram ＞　フォロワー数　　145 人（前年度 98 人）

（2022 年 4 月 19 日現在）

（4）『明治大学平和教育登戸研究所資料館 館報』

第 7 号（2021 年度）を 2021 年 9 月 30 日に発行した。内容は第 11 回企画展「極秘機関『陸軍登戸研究所』はこうして明らかになった」記録，2020 年度年次報告など。2022 年 9 月に第 8 号を発行予定。『館報』掲載論文は，資料館ホームページおよび明治大学学術成果リポジトリでも公開している。

（5）『資料館だより』

第 21 号（2021 年 9 月 30 日），第 22 号（2022 年 1 月 26 日）を発行した。既刊分を含め，資料館ホームページからのダウンロードも可能。

（6）取材

新聞社 5 件，テレビ局 4 件，ネットニュース社 1 件，地域コミュニティ紙 1 社，個人ジャー

ナリスト１件の取材があった。

６．来館者感想

【10 ～ 20 代】

・他の施設では見ることが出来ない展示が多くあった。（10 代男性，明大法学部在学生）

・今通っているこのキャンパスの土地の，戦時中の歴史を学べてとても良かったです。今の平和について考え直す機会になりました。（10 代女性，明大理工学部在学生）

・学校の授業では学ばなかったことについて知ることができました。（20 代女性）

【30 ～ 60 代】

・オレゴンの悲劇で亡くなったのが牧師婦[ママ]人と日曜学校の生徒であったことに同じクリスチャンとして，興味を持った。戦争とは何か考えさせてくれるよい展示であったと思います。（30 代男性）

・こういう施設があることで戦争の異常さがよく理解できる。大変かと思いますが今後もがんばって下さい。（40 代男性）

・とても面白く見入ってしまいました。貴重な資料をありがとうございます。（40 代女性）

・日本の紙幣技術は，今でも世界で上位水準です。日本人のまねをする技術力には頭が下がります。平和活動のため，周りをさそってまたお伺いしたいです。（40 代男性，明大 OB）

・人々の努力で戦後 60 年以上経って開館できたことに意義があります。（50 代男性）

・内容が濃かった。詳細な文章による展示の説得力。今回，とても興味をもって拝見しましたが，充分時間がとれず，帰宅後 web 公開資料を見ることができたのはとても助かりました。こちらの資料は，歴史・経緯・背景説明が欠かせない展示だと思います。中学校の参考書のような，分かりやすい文章中心の展示はふさわしいものですが，リアル展示だけでは追いきれません。オンラインにほぼ同内容が上がっているのはよいです。（60 代男性）

・埋もれてしまう現代史の発掘に大きな足跡となります。（60 代男性）

【70 代以上】

・登戸研究所職員が戦後罪に問われず，米国に協力した点，731 部隊同様，問題だと思います。（70 代女性）

・大変だと思いますが，戦争の非人間性をこれからも伝えて下さい。（70 代男性）

・ロシアのウクライナ侵こう[ママ]が日本の戦争と重なり，資料をもって一層反戦の気持ち強くした。

大変沢山の資料があり，充分見切れなかった。再度来館したい。（70 代女性）

・戦時には善悪が逆転してしまうことがよくわかった。（70 代女性）

・大変わかりやすく説明いただきよく理解することができました。今の時期，戦争と平和を考えるいい機会となりました。ありがとうございました。（80 代以上女性）

以　上

編集後記

『明治大学平和教育登戸研究所資料館 館報』第８号をお届けします。本号は，資料館の 2021 年度（2021 年４月～ 2022 年３月）における活動報告が主な内容です。2021 年度も，新型コロナウイルス感染症拡大防止のために，大学が一般来館者の入構制限を実施した関係で，年間来館者 1,247 人という，開館以来２番目の少なさとなりました。しかし，そのような中でも資料館スタッフは，企画展の開催やオンラインによる発信にこれまで以上に努力してきました。

本号は，第 12 回企画展「参謀本部と登戸研究所による対中国謀略―アジア太平洋戦争開戦 80 年―」の記録が中心になっています。

展示「参謀本部と登戸研究所による対中国謀略」（展示パネル解説）は，本企画展担当チーフの本資料館学芸員・椎名真帆が作成したものです。この企画展は，昨年がアジア太平洋戦争開戦 80 周年であったことから，対英米戦争の最中も対中国戦争が継続していたこと，とりわけそこでの政治･経済謀略に焦点を当てて戦争の実態を明らかにしようとしたものです。また，この企画展の内容と密接に連動した研究が，巻頭の特別寄稿・齋藤夏歩「日中戦争期における日本陸軍の謀略―影佐禎昭の対中思想を中心に―」です。この論文は，2022 年１月に明治大学文学部日本史学専攻に提出された卒業論文をベースに加筆・修正されたものです。

講演会②「資料館開館にむけての明治大学の取り組み」は，2021 年５月にオンラインで開催された第 11 回（2020 年度）企画展「極秘機関『陸軍登戸研究所』はこうして明らかになった―登戸研究所掘り起こし運動 30 年のあゆみ―」に関連した記録です。なお，第 11 回企画展の講演会①は，『資料館館報』第７号にすでに掲載しています。

オンライン講演会「帝銀事件と日本の秘密戦：捜査過程で判明した日本軍の実態」は 2021 年８月７日に開催されたもので，帝銀事件の捜査の段階で警察が明らかにした日本軍の秘密戦部隊の全容についての山田朗の報告と，帝銀事件再審請求弁護団の渡邉良平弁護士による再審請求の現段階についての報告から成っています。

資料館は，新型コロナウイルス感染症拡大防止のために，2021 年度も展示解説活動を縮小せざるを得ない状態でしたが，それでも，各種のオンライン企画などを通じて，情報発信をより強化しています。今後とも館員一同，オンラインを含め，展示の質の向上と見学者対応のさらなる改善を目指して精進いたしますので，忌憚のないご意見をいただきますようよろしくお願いいたします。

（文責・山田朗）

館報第７号に関し，訂正をいたします。

〔訂正〕
p.1　１行目　（誤）2010 年に開館 10 周年を迎え→（正）2020 年に開館 10 周年を迎え

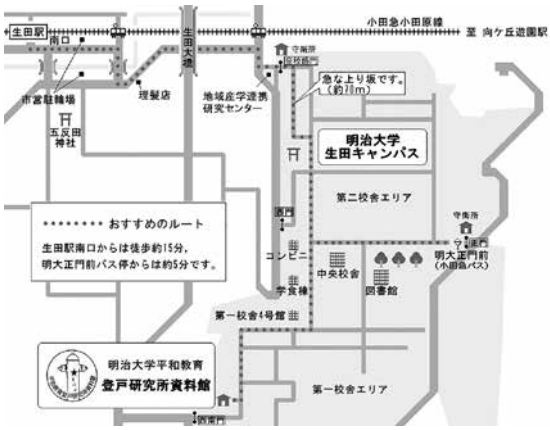
アクセス

小田急線「生田駅」から来館される場合
　南口より徒歩 15 分

※地域産学連携研究センターからエレベーター・エスカレーターをご利用いただけます。（日・祝除く午前 8 時～午後 6 時半。運転時間等については今後変更になる場合がございます）

小田急線「向ヶ丘遊園駅」から来館される場合
　北口から小田急バス「明大正門前」行きに乗車し，終点で下車

※外来者用の駐車スペースがありませんので，お車でのご来館はご遠慮ください。



利用案内

開館時間　水曜～土曜　午前 10 時～午後 4 時
入 館 料　無料
休 館 日　日曜～火曜，祝日，8 月 10・12 日，年末年始（12 月 26 日～1 月 7 日），入試実施日
※その他大学の都合により，臨時休館になる場合あり。
※ 2022 年 9 月現在，事前予約制です。
※最新情報は当館ホームページをご確認ください。

明治大学平和教育登戸研究所資料館
〒 214-8571　神奈川県川崎市多摩区東三田 1-1-1　明治大学生田キャンパス
TEL/FAX：044-934-7993
E-MAIL：noborito@mics.meiji.ac.jp
URL：https://www.meiji.ac.jp/noborito/
twitter：https://twitter.com/meiji_noborito
facebook：https://www.facebook.com/people/ 明治大学平和教育登戸研究所資料館 /100077822204861/
instagram：https://www.instagram.com/meiji_noborito/

明治大学平和教育登戸研究所資料館　館報　第８号　2022 年度
2022 年 9 月 30 日　発行

編集兼発行者　明治大学平和教育登戸研究所資料館
〒 214-8571 神奈川県川崎市多摩区東三田 1-1-1
明治大学生田キャンパス
電話　044 - 934 - 7993

印刷所　ヨシミ工産株式会社